

論文集 『『社会の安全と日本人の倫理』をいかに 考えるか』の発刊にあたって

財団法人 公共政策調査会

理事長 山田英雄

当財団は、社会的安定と安全の視点から広く内外の公共問題を研究し、関係諸情報の収集、整理、分析を行うとともに、これらの成果の普及、政策提言等の事業を行うことを目的として、昭和六一年一月五日に設立され、昨年二〇周年を迎えました。

設立以来、国際情勢、国内の政治、経済、社会情勢等が大きく変化する中であって、会員各企業をはじめ関係の方々からの終始変わらぬ暖かいご理解、ご協力の下に、当財団は着実にその事業活動を展開し、平成九年度には設立一〇周年記念事業の一環として、『二一世紀の社会の安全を考える』をテーマに、懸賞論文を募集しました。

この事業は、各方面から好評をもって迎えられたこともあり、その後も毎年継続して実施してきました。第一〇回目にあたる平成一八年度も警察庁、読売新聞社のご後援と財団法人社会安全研究財団のご協賛の下に、警察大学校警察政策研究センターとの共催で『社会の安全と日本人の

倫理』をいかに考えるか」をテーマに、懸賞論文を募集しました。日常生活においても他人の迷惑を顧みない行動が多く見られるように、倫理観や道徳観の乱れが治安を脅かしている現状を踏まえて、こういった「人の道」を外した行動に走る要因はどこにあるのか。モラル崩壊の原因はどこにあるのかなど「安全と倫理」をテーマに具体的な提言を募りましたところ、さまざまな視点から計一〇三編の応募がありました。そのなかで、子どもを狙った凶悪犯罪の多発など、治安の悪化を不安に感じる市民が増えている現状を踏まえ、幼児から小中学校における道徳教育の復活、武士道精神の涵養など、具体的な提言を含む論文が多数寄せられ、論文選考委員会でも、これらを巡って真剣な議論の上、厳正な審査が行われました。

その結果、最優秀賞には高松市在住の現職刑事が「『感動する心』が明るい社会を造る」をテーマに自らの体験をもとに、「他人への無関心」「家庭教育の低下」「急速な利便性の追求」が日本人のモラルを崩壊させたこと、そして、一人の青年を更生させたことやトイレ掃除の実践を通じて、「感動する心」を広め、明るい社会を造ることができると論じ、選考委員の高い評価を受けました。また、優秀賞には、規範意識の醸成には教育が重要であることや犯罪と倫理の関係を分析し、地域コミュニティと連携した犯罪抑止政策のあり方を検討すると訴えた作品が選ばれました。

この論文集は、紙数等の都合により受賞論文を含む二〇編に限定しておりますが、広く各方面でご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、この事業の実施にご協力いただいた関係各位と応募者の方々に改めて深く感謝を申し上げます、発行にあたってのご挨拶いたします。

平成一九年三月

目次

【最優秀賞 一編】

「感動する心」が明るい社会を造る…………… 國方 卓 1

【優秀賞 二編】

地域コミュニティによる犯罪抑止施策と警察活動…………… 斎藤 重政 17

倫理・道徳観を正し、犯罪を減らす方法…………… 鈴木富貴子 36

【佳作 四編】

非難の国から感謝の国へ…………… 栗山 隆治 53

「岐路に立つ日本社会とあるべき倫理」～二つの事案をめぐって～…………… 高山 秀幸 72

少年事件の背景と倫理観の変化について…………… 柘沢巳知夫 88

わが国の「かたち」をとりもどそう―武道のすすめ―	真砂 威	107
◇		
映画「ALWAYS三丁目の夕日」から昭和時代に学ぶ道徳観	織田 礼二	130
『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか	近藤 正隆	148
「人間復興を目指して」	鮫島 秀継	161
「安全な社会を構築するための日本人のモラル」	下山 二男	179
社会の安定と日本人の倫理	清宮 正人	192
モラルは子ども時代に身につける	布川 進	208
「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか」	野田 順也	220
ひとりひとりを大切に作る社会	細田 重剛	234
日本的ルネッサンスを目ざして	水上 正	247
「日本人の倫理観―心の豊かさはどこへ―」	向田 絵里	261
『社会の安全と日本人の倫理をいかに考えるか』	山田 一郎	274
「伝統的日本人の倫理観」を取り戻す	横倉 友裕	291
警察官としてできること	渡邊 一浩	307

懸賞論文「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか」の応募要項……………
懸賞論文「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか」応募者一覧……………

この論文集に掲載した原稿は、応募者各人の個人的なご意見を紹介したものであり、必ずしも当財団法人・公共政策調査会等の主催者及び、後援・協賛各団体の見解を示すものではありません。

【最優秀賞】

「感動する心」が明るい社会を造る

警察官（香川県高松南警察署）

國方 卓（39）

はじめに

最近、新聞に凶悪犯罪の記事が載るたびに、「日本はなぜ、こんな風になってしまったんだろう。その原因は何処にあるのか、どうすればこの社会を良くできるのだろうか」と考えさせられる。

刑事という仕事柄、「社会の安全」を考えると、日本人の持つ倫理観や道徳観を見直し、何がいけない

のか、どこが昔と変わったのかと真剣に考えてみる必要があると思った。

そして、自分なりにいろいろ考えた結果、社会のあらゆる人々が人に迷惑をかけない人生を送り、更には「感動する心」を持つことが大切なのではないかと思うようになった。

一 他人への無関心

日本人は、何時からこんなに、他人に無関心になってしまったのだろうか。

親身になって、他人の子どもにも注意している本当の意味での大人の姿を近年見ていないような気がする。昔、近所に居たようなガンコ親父達は、何処に行ってしまったのだろうか。

現在、他人の子どもや若者に注意すれば、オヤジ狩りにでも遭いかねない時代なのかもしれない。それにしても、昔に比べて国民一人一人が、他人に対して無関心すぎると思う。

「井戸端会議」という言葉も、核家族が進んだマンション暮らしの中では死語になりつつあるのではなからうか。

そんな他人への無関心さが、現在のよな社会に変えてしまったのではないかと思う。

フリーターやニートの問題にしても、大人になるまで人から叱られたことがない余り、社会人として上司や取引相手と関わることを極端に恐れる若者が急増したことによるものではないかと考えてしまう。

時には、嫌われることを覚悟で、他人に注意できる存在の人が近くにいると欲しいと思う若者はいないのだろうか。

私達の親父や祖父が、そうであったように近所の子どもの人生にまで口出しをする、おせっかいなガンコ親父に最近憧れる。

自分がオヤジと言われる年になってみて、自分だけでも、他人の人生にかかわっていくようなおせっかいな人間でありたいと思う。

二 家庭教育の低下

私が幼い頃は、田舎の旧家で育ったこともあり、夕食は家族全員が揃って食卓を囲んで食べ、家長である祖父の話を聞かされ、それから家族の話も聞かされた。

その中で、箸の使い方とか、食卓に肘をつかないとか、音をさせずに食べるというような食事マナーに始まって、外で歩きながら物を食べるのは恥ずかしい行為である等、「恥を知る教育」を受けた。

それ以外にも、家族が職場であった出来事とか、学校であった出来事を話し合い、それについてどう感じたか、その行為が他人に迷惑をかけていなかったかということ、時間をかけて話し合い教えてくれた。幼かった私は、そうした家族の対話を興味津々で聞いていたものだ。

かくいう私も、現在は、妻と長男の三人でマンション暮らしをしており、私の仕事柄、家族そろって夕食をすることはほとんどない。

食事マナーを始め「恥を知る教育」は妻任せであり、私は家庭で仕事の話をするこもなければ、子どもの幼稚園での出来事を聞いてやる余裕もないのが現状だ。

同じマンションに年寄りが同居する世帯は無く、どこの家も良く似た状況ではないかと思う。

こんな現状で、昔のように家庭教育をしろといっても無理なのかもしれないが、今も昔も子どもに社会のルールやマナーを教える一番の責任は家庭にあることに変わりはない。

家庭教育の低下を考える時、私自身、時代の流れや仕事のせいばかりにせず、幼かった頃を思い出し、少ないなりの時間を割いて、できる限り家族との会話の場を大切にしなければならぬと反省している。

三 急速な利便性の追求

なぜ、日本人のモラル崩壊現象が起こったのかということを考える時、パソコンやゲーム機を始め、子ども達を取り巻く環境が急速に変化したことも見逃せない。

国民総携帯電話の時代になり、自室でキーボードを操るだけで世界の情報が簡単に入手できるようになった。そのうえゲーム機器も急速に進化し、現実とゲームの世界の区別が付かず、命の大切さすら判断できなくなっている子どもが増えていると言われている。

また二四時間営業の店が全国至る所で立ち並び、昔のように、夜に寝て、朝早起きして行動を起こすという、ごくごく当たり前の生活習慣さえも崩壊しつつある。

今の子ども達から、携帯電話とゲーム機、インターネット（パソコン）、コンビニを取り上げるとパニックを起こすのではないかとすら思ってしまう。

最近ではゲームやパソコン等、自室で人と触れ合わずにできる遊びを好む子どもが多くなっていると聞い

た。

我々が急激に利便性を追求した結果、子ども達の心や趣味まで変えてしまったのではないだろうか。

四 尊敬する人物

私は現在、香川県高松南警察署の刑事課で勤務している。刑事として日々多忙な業務に追われる毎日だが、過去に機動隊の小隊長をしていた時期がある。その時「いかに部隊を強くするか」を考えていたとき、麻雀無敗伝説を持つ雀鬼流の桜井章一さんの存在を知った。桜井さんは麻雀において汚い手を使うことを嫌う。他の日常生活にしても同じだ。そして勝負に負けない。しかし、勝負に勝つことより強さを求める、そんな考え方に私は共鳴し尊敬した。

その尊敬する人物に会う機会を得た。実際に会って話し、その凄さを肌で感じた。

桜井さんは権力者を褒めない。そんな桜井さんが唯一尊敬する企業家がいると聞いた。

大手カー用品会社の創業者である鍵山秀三郎さんがその人で、初めて聞く名前であり、どんな人かと思っ
た。

その二人が講演会をすると知り、東京に行くこととした。そして鍵山さんが大企業のトップでありながら、四五年間もの長きにわたり自ら公衆トイレ等の掃除を続ける掃除の達人で、また、その掃除哲学に学ぶ「日本を美しくする会」の相談役と知ることとなる。

講演会を聞き感動し、深夜こっそりと職場のトイレ掃除を試みたが、その奥の深さに気付いた。そし

て鍵山さんの凄さに気付き尊敬することになる。

尊敬する桜井さんと鍵山さんの二人の共通点は「汚いこと、卑しいこと」を極端に嫌う点にある。

鍵山さんの人生も学んでみたくなり、著書を読んだ。こんな生き方が存在するのか。目からウロコがとれた気分になった。

そして、鍵山さんが相談役をする掃除に学ぶ会「日本を美しくする会」のトイレ掃除に、私は参加することとなったのである。

尊敬できる偉人を知り、その人に少しでも近づく努力も規範意識が欠如した子ども達には必要ではなからうか。

五 「あいさつ」の重要性

私は心や趣味まで変わった子ども達に、どうやって他人とのコミュニケーションをとるべきか教えるとき、本当にありきたりの事ではあるが「あいさつ」からはじめるべきだと思っている。

尊敬する雀鬼会（麻雀道場）会長桜井章一さんの著書である『雀鬼流』を読んだ時、その中で

雀鬼会では、麻雀そのものを教えることは少ない。あいさつをする、時間を守る、といった日常生活態度を仕込む方が多い。日常生活のだらしなさいいかげんさが、麻雀に出てくるからです。

との記述に驚いた。

桜井さんは、「麻雀二〇年間不敗の達人」として麻雀界では有名な方であり、麻雀をほとんど知らない私

にも、この本を読めばその偉業がどれほどすごいことかは容易に理解できた。

そんな達人が道を極めるうえで「あいさつ」の重要性を著書に明確に記載しているのだ。「あいさつをする」とが、いかに重要なのか考えさせられた。

先日ある刑事がマンションでの盗難について捜査し、こう言っていた。

「マンションの住民の質を知るとき、居住者同士がエレベーター等の共用部分で会った時にあいさつをしていくかどうかで判る」

その話を聞いて、プロの意見とうなずいた。

マンションという共同住宅に住む人の質をプロの刑事が判断のバロメーターにするほど「あいさつ」は重要なのかと。

また、私の通勤途中にある交番では、毎朝青年警察官が立番しているが、普通の通勤者一人一人にいつも、大げさなくらいしっかりと敬礼をして、「おはようございます」とあいさつをしている。あいさつをされている人は、皆恐縮しながらも、きちんと返答している。

同じあいさつでも、その目的や声をかける側の態度で相手の対応が変わることに気付いた。

本当に心を込めて、身近な近隣の方にあいさつをすることから始めれば、その地域の質が上がり、更には規範意識も上がるのではないだろうか。

六 他人の子どもに注意の声を

昔のガンコ親父とまでは言わないまでも、近所の子どもに、誰も見ていないところで私達は「あぶない」と声を掛けることができるだろうか。

相手が女の子だったりした場合、その時と場所で、不審者と思われないかという不安があるかもしれない。い。

しかし、自分の信念と正義感があれば、そんな不安など吹き飛ばすはずである。

通勤者全員に敬礼する青年警察官のような信念と正義感さえあれば、子ども自身も保護者も、その一言に感謝するはずではないか。

それでは、「ポイ捨て」をする若者が相手の時ならどうだろうか。

そんな若者に、私達は注意の声がかけられるだろうか。

オヤジ狩りのごとく、反撃されてはたまらないと見て見ぬふりになりはしないだろうか。

私は、せめて、その若者が捨てるゴミをそつと拾いたいと思う。

それもサラリと嫌味なくだ。

それが無言であっても「注意の声」になりはしないだろうか。

その態度が真摯であればあるほど、若者の心を打つのではなからうか。

私をそういう気持ちにさせてくれたのが、鍵山秀三郎さんだ。

鍵山さんの著書に『ひとつ拾えば、ひとつきれいになる』があるが、鍵山さんから掃除を学ぶと、その題名のような気持ちにさせられた。

他人の捨てたゴミを拾える勇気を持つ人は、当然「ポイ捨て」をすることも有り得ない。

そんな勇気のいる小さな行為で、若者の心を感動させられないだろうか。

他人の子どもに注意の声をかけたり、他人の捨てたゴミを拾う一人一人の勇気が世の中を良くしていくことに繋がらないだろうか。

七 他人に迷惑をかけない

近所の人とあいさつをする、他人の子どもに注意の声をかける、他人の捨てたゴミを拾う、そんなことが勇気を持つて我々一人一人にできるようになれば、自然と「恥を知る」という日本の文化に気付き、「他人に迷惑をかけない」人生を送ることができるようになる和思考える。

他人に迷惑をかけないということは、当然、法律や条例を守ることに繋がるし、マナーやモラル向上にも繋がる。

そして、日本人全体の倫理観や道徳観を改善することにもなるはずだ。

そういう倫理観や道徳観を持つことで「感動する心」を持つ人間になれると思う。

そういう人間が増えることで、明るい社会になり、ひいては社会の安全を取り戻せるのではないだろうか。

本当に小さなことだが、その些細なことを、国民一人一人が実践できれば、どれほど大きな力になるだろう。

皆が自分のことばかりを考えずに、「他人に迷惑をかけない生活」を送れば「感動する心」を持った人間に変わり、そういう心を持った人は、人を喜ばせることすらできる人生が送れるのではないかと思う。

八 心の荒んだ青年

私が刑事として、最近担当した被疑者との出会いが、私の刑事としての考え方を変える出来事となった。この青年は、二〇歳代前半で心が本当に荒んでいた。背中には刺青が入っており、過去にも罪を犯して、執行猶予中の身であった。

結婚はしていないものの、親身になって世話をしてくれる彼女がいるが、その彼女にも暴力を振うこともあり、最近の言葉で言えば、典型的なドメスティックバイオレンスだ。

そんな彼女に被害申告を勧めても「私が見放すと彼はもう立ち直れない」と拒否されたという状況で、当署では、この青年の対応に困っていた。

そしてある日その青年が事件の被疑者として逮捕され、私が取調べることとなった。

前述のように執行猶予中の身であり、今回の逮捕によって刑務所に行くことは確定的であったことから、青年は取調べでは「好きにしろ、俺は何もやっていない」と荒んだ心で喚き散らしていた。

否認する被疑者の取調べはいつものことであるが、私はこの青年の生い立ちを知るにつれて取調官とし

て何とか、心を開かせてやれないものかと考えた。

彼は幼少のころ両親と別れ、祖母に育てられるが、中学校すら満足に通っておらず、心の温かさを知らずに育っていた。私は彼の心を開かせる突破口を見つけるために、彼の言い分を聞くことに徹することとした。

彼は、仕事が長続きしない理由として、

「自己の刺青と少年院入所歴について職場の人が陰口を言ったことで喧嘩になった」

とか、

「自己の不勉強さを他人からバカにされ頭にきて喧嘩になった」

などとゆっくりと話し始めた。

今から考えれば、あれが荒んだ心を開こうとし始めた瞬間だったのかもしれない。

九 一冊の本がもたらした効果

私は、この青年に、尊敬する鍵山秀三郎さんの著書

『あとからくる君たちへ伝えたいこと』

を読むことを薦めた。

この本の内容は、

毎日少しでも、できるだけ、私が

という題で「これからどうやったら自分自身の人生がよくなるか」という話と、

心あるところに宝あり

という題で、当時七二歳の著者が「自分のあとに生まれてくる人のために、何をしていくことができるだろうか」と考える話の二話構成になっている。中学生に向け講演したもので、誰にでも読める簡単な本だ。

この本には私が鍵山さんから直接「心温かきは万能なり」と書き込みを頂いた。鍵山さんは書き込みながら、私が刑事と知ったうえで、

心の荒んだ人達に一回でいいから「人からありがとうと言われてみなさい」と言ってあげて下さい。と言って下さったという経緯があった。

私がそんな話をして本を手渡すと、彼は一時間位かけてじっくりと本を読んだ。そして読み終わると、ポツリとこう言った。

この本に書いてあること、何一つ俺にはできていない。

その目には、涙が浮かんでいた。そして、

ごめんなさい、私がやりました。

と、それまで否認していた彼が全面自供に転じたのである。それからは別人の様な穏やかな顔付きになった。

その一冊の本がもたらした効果は絶大だった。

一〇 更生に向けて

本を読み終わった彼に、私が「掃除に学ぶ会」に参加していることを話すと、

私も参加することができるようになりますか。

と真剣に聞いてきた。彼の背中には刺青が入っており、これから数年間刑期に服することは確定的だ。少し考えて、私は一言だけこう言った。

それは、君次第だよ。

彼の目には涙が滲んでいた。それまでの彼は、祖母に嘘ばかりついて迷惑をかけ、彼女には暴力を振るって悲しませ、取調べの刑事にも「もう、しない」と言うものの、すぐ舞い戻って来る状態だった。その彼が、「トイレ掃除」に参加してみたいと言いつ出したのである。彼が参加するためには、会自体も彼を受け入れる体制を作る必要があると思うし、私自身も彼が参加する時まで、この会への参加を続ける必要があると思った。

それからの彼は、すさまじく変わった。私自身も信じられないほどに。

あれほど心が荒んでいた彼が、刑事達にあいさつをするようになっていた。

そして、彼女と祖母に面会が出来た時、それまでの自分の行いを「ごめんなさい」と素直な気持ちで謝罪し、面会に来てくれたことを「ありがとう」と感謝の言葉で表したと聞いた。

面会した二人は、共に彼の顔付きが少年のように変わっていると驚きを見せた。間違いなく彼は更生に

向けての道を歩みつつあった。

一 感動する心

この彼との出会いを、私は観音寺市立粟井小学校での「香川掃除に学ぶ会」が終わったあとで、約六〇名の小学生を含む参加者の前で話すこととなる。

また、著者である鍵山さんに宛てて、その要旨を手紙に書いて送った。

すぐ、鍵山さんから返事が届いた。その手紙には、「感動しました。本当に感動させられました」との書き出しで心温まる彼への激励が綴られていた。

私は、鍵山さんから手紙が届いたことを彼だけでなく、彼の彼女にも知らせた。

そして、彼は、これまでの被疑者では見たことのない笑顔で拘置所へと巣立つて行った。

その後、しばらくして鍵山さんから私に二通の手紙のコピーが送られてきた。

そう、彼と、彼の彼女が鍵山さんに宛てた感謝の手紙のコピーだった。

私がこれまで読んだどんな手紙よりも心がこもっていた。読みながら私は涙が止まらなくなった。なぜ涙が出たのか、今もって私自身にもわからない。私自身にも「感動する心」が芽生えたに違いないと気付いた。

一二 明るい社会を造る

彼が当署から居なくなり、落ち着いた頃、私の職場に「香川掃除に学ぶ会」の会員が突然私を訪ねて現れた。数回一緒にトイレ掃除をしたので面識がある方だった。

用件を伺うと、こう言うのである。

先日、鍵山秀三郎さんの講演を聞きに九州に行って来ました。六〇分の講演を楽しみにして行つたのです。すると、その講演の中で、一通の刑事さんからの手紙を鍵山さんが読みました。百数十名の聴講者が感動していました。送り主については匿名で話されましたが私には、その手紙を送った人がすぐにわかりましたのでここに來たのです。

大変驚いた。一人の青年が立ち直る話が、他県で「感動する心」を広げたというのである。明るい社会を造ることに繋がったのではと思った。

おわりに

この青年が更生しようとする話は、私の仕事に関して本当にあつたものです。

実在の被疑者と現職刑事との取調べを通じてのやりとりですので、その表現方法に私自身、悩みに悩みながら書きました。

しかし、子ども達の規範意識が欠如した今、「人の道」を外した行動をとっていた青年が立ち直ろうとす

る実話を紹介することで日本人の道徳観が見直され、社会の安全に一役買えればと思つて書いたことを、最後に理解していただきたいと思ひます。

どうか、この青年の話のように「感動する心」が明るい社会を造つていくきっかけになれば、日本も良くなると思ひたいと思ひます。

引用著書

- 一 『雀鬼流。』 桜井章一 三五館
- 二 『ひとつ拾えば、ひとつだけきれいになる』 鍵山秀三郎（亀井民治編） P H P
- 三 『あとからくる君たちへ伝えたいこと』 鍵山秀三郎 致知出版社

【優秀賞】

地域コミュニティによる犯罪抑止施策と 警察活動

一 はじめに

最近、日本を取り巻く社会環境は大きく変化して来ており、緊迫した国際関係と犯罪の凶悪化など困難な問題を多く抱えている。殊に、日本人は効率主義的なものから国民が集団意識に埋没して国家が国民を支配してくれるという依存心がある。この統治客体主義から早期に脱却して、新しい時代に対応

警察官（岩手県盛岡東警察署）

斎藤 重政（51）

する価値観や道徳観、いわゆる「道しるべ」を国民一人ひとりが導き出していかなければならない。

治安面においても犯罪の多様化、凶悪化、低年齢化が進行し、犯罪の増加と重大事件の発生により、日本は世界に類を見ない安全な国であるという「安全神話」が崩壊する恐れがある。このような状況下において、犯罪発生原因とその抑止策の研究の必要性が高まっている。

本論文は、「地域コミュニティによる犯罪抑止施策と警察活動」をテーマとして、犯罪を誘発する地域内にある様々な要因を解消するために、地域コミュニティの重要性について考察する。

二 犯罪の現状と地域社会の変貌

(一) 犯罪の現状

わが国の平成一七年の犯罪認知件数は二二六万九、二九三件であり、この数字は五六人に一人の割合で犯罪の被害者になってしまふことを意味している。警察の検挙活動もこれに対応することが困難な状況にあり、検挙率は二〇%台を推移している。これらの原因として様々な分析がなされているが、数字でみる治安水準の低下はいうまでもなく、政府の世論調査(図1参照)によれば、ここ一〇年間で日本の治安が「悪くなったと思う」理由で、

- 青少年の教育が不十分だから 四七・〇%
- 地域社会の連帯意識が希薄となったから 四三・八%
- 国民の規範意識が低下したから 三一・九%

19 地域コミュニティによる犯罪抑止施策と警察活動

(ここ10年間で日本の治安は「悪くなったと思う」とする者に、複数回答)

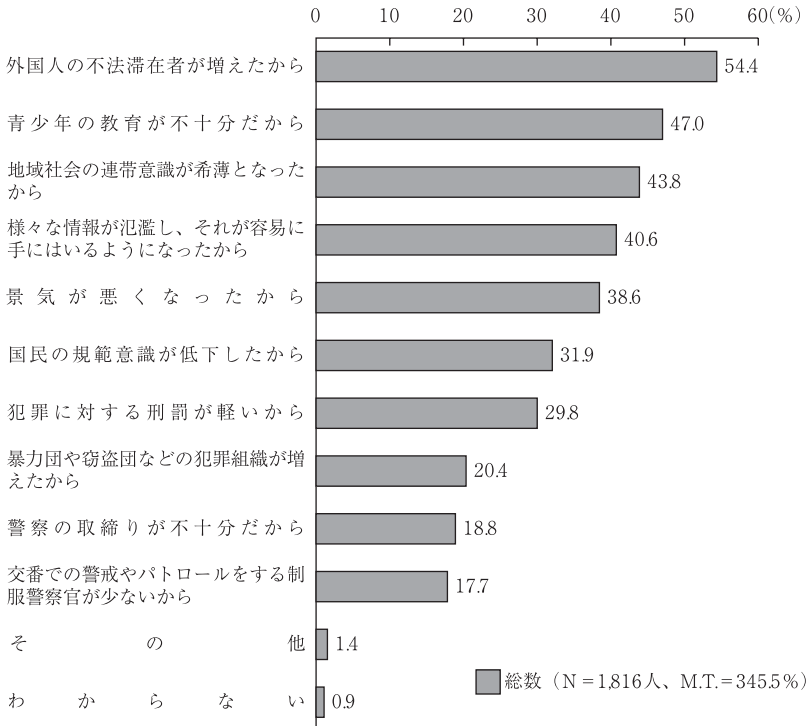


図1 治安が悪くなったと思う理由

出典：内閣府「治安に関する世論調査（平成16年7月調査）」

の要因を挙げた割合が高い。この調査結果から、「日本人の倫理観」の変貌が社会の安全と密接な関係となっており、市民が肌で感じる、いわゆる「体感治安の低下」にも大きな影響を及ぼしている。

(二) 地域社会の変貌と犯罪抑止力の弱体化

犯罪防止のために地域社会の役割は大きいですが、現代社会はその役割が十分に発揮されているとはいえない。その理由は様々なものがあるが、それは地域社会のあり方の変化と犯罪を誘発する刺激がますます増大している都市の状況

がある。

現代社会の便利さの追求はコンビニエンスストアやインターネット、宅配便に見られるように、表面的には一人で生活できると思わせる社会、つまり生活の個人化を進行させて来た。その結果、隣近所に依存しなくても生活ができる、隣近所との付き合いをする必要がない、隣近所と付き合うのが煩わしいといった関係を作り出した。

また村に限らず旧市街地や住宅地域においても、昔から住んでいる人の転出が増加している。一方で新しい住民が次々と転入して来て、地域にはその地域の居住者ではない知らない人が常に入出入りしている。しかし、以前の地域社会では当たり前であった知らない人の存在に対する不信感や警戒感がなくなってきた。このことは犯罪者という見知らぬ人の侵入にとっては好都合な環境となる。

そして知らない人（犯罪者）を警戒していて実際に犯罪が発生した場合でも、それに関わらないようになりそれぞれ個人的な対応にとどまり、近所の人として地域社会の一員として協働して対応することをしなくなる。政府の世論調査においても治安悪化の理由として、「地域社会の連帯意識の希薄化」が大きな要因に挙げられている（図1参照）。

三 犯罪抑止施策の基本

（一）「安全・安心（犯罪抑止）管理論」

二一世紀は確実に犯罪を中心とした日常生活の安全・安心の時代である。それを担うために、市民・自

治体・警察などの機関が、犯罪を中心とした抑止施策をどのような視点で取り組み、進めていくべきか。

その基本として、「安全・安心（犯罪抑止）管理論^①」という考え方がある。「安全・安心（犯罪抑止）管理論」は、

- ① 問題の管理⇨起こしてはならない犯罪は起こさせない。
- ② 空間の管理⇨起こってはならない場所では起こさせない。
- ③ 被害者の管理⇨被害に遭ってはならない人は絶対被害者化させない。
- ④ 被害補償の管理⇨①⇨③の問題が発生した時には、「合理・合法的に原因対応あるいは被害を修復する手段」を確立し、市民に装置化し制度化しておく。

の四つを命題としている。こうした犯罪抑止施策が成立するためには、犯罪者・被害者の関係を精査することが重要となる。

犯罪者・被害者の視点から犯罪を抑止するためには、

- 犯罪を企図する者を少なくする。
- 犯罪を発生させないように被害者側の力を強くする。

必要がある。もちろんこの片方だけでは不十分であり、二側面は相互に関連するものである。一つは、犯罪者側の対策であり、これは家庭のしつけや学校教育、倫理観といった問題であり、犯罪防止の基本的対策である。二つ目には、犯罪を発生させないようにコミュニティ（被害者側）の力を強くすることである。

(二) 地域コミュニティの連携

実際の犯行場面では犯行の準備をしている犯罪者に対して、被害者が単独で対抗することは困難であり、共同して対抗する人々の働きが重要となる。被害者を防衛しようとする人は本人であり、それと同様に家族でありコミュニティである。実際に、被害者は被害にあった後には先ず家族や友人に援助を求める。しかし、現代の家族関係の変化や都市での一人暮らしの増加により、こうした防衛手段があまり力を発揮しなくなっている。

そこで家族に代わる防衛手段が求められる。その最も強力なものが警察官などの公的機関の役割である。警察官の巡回やパトロール、さらには交番の配置は犯罪に対する基本的な抑止力である。しかしながら、警察官などがすべての犯罪発生に対応することは現実的に不可能である。そのために警察官や家族との対応を補完する隣近所、通行人さらには地域コミュニティのあり方が重要となる。地域社会の脆弱化による犯罪抑止機能が低下して来ている中で、地域コミュニティの連携を強化し、「悪いことのできない環境づくり」を形成することが急務となっている。

四 日本人の倫理観

(一) 最低線の倫理

現代社会はモラルハザード、モラルの喪失の時代といわれる。モラルといっても、社会規範（ルール）、倫理、道徳など様々な解釈がある。その内容は微妙に異なり、少年犯罪や軽微な犯罪などの社会秩序の維

持に絡めてモラルの再構築を求める声が多い。日本語の「倫理」という言葉が、「倫（仲間・関係者）」への「理（道筋）」という成り立ちである点で、基本的に、仲間との共同関係のあり方の道筋として、「共同体（コミュニティ）」を形成する意図を持って「倫理観」を規定して来た。地域社会の連携を支えている基本は、「倫理」である。

ベンサムは功利主義の立場から、最小限で十分な抑止効果を持つという意味で、重い量刑よりも軽い量刑を優れているとした。そうした「最低線の倫理」²⁾は、自由主義を支える原理のひとつであり、倫理水準が低ければ低いほど、より多くの人々に見守られる見込みが高いといえる。ただし、自由というものは他人の権利を尊重することを前提としてのみ存在する。環境や生命（社会安全）倫理の問題など、時空間を超えた関係性を有する問題については、自由主義のルールだけでは解決できないことが多い。今後、「最低線の倫理」を巡る議論が盛んになるであろう。

（二）道徳の基本（思いやり）

最近では少年の凶悪事件などが多発し世相はすさんで、あらためて教育の重要さが身に染みる。最近の子供たちは情報や知識が溢れているがもの考え方、いわゆる大切な幹の部分を理解していないような気がする。一昔前は、教育の基礎・基本は「読み・書き・そろばん」といわれて、毎日音読や漢字の書き取り・算数の計算を繰り返し学力が向上した。この基礎・基本ができることにより創造性が生まれる。

「幹の思想」の基本は道徳である。道徳とは相手を思いやる心、いたわる心である。昨今の教育には、それが欠落しており、今の子供たちには相手を思いやる気持ちに欠け、自分のことしか考えていない子供

が多い。家庭や学校では学力の向上には力を入れるが、思いやりの心、いたわりの心をはぐくむことを教えない。

相手を思いやる心も「読み・書き・そろばん」も、繰り返し訓練をすることによって身につく。他人を思いやる心が育てば、自然と正義感や勇氣、郷土を愛する心が育つ。いたわりの心を学ばなければならぬ。また、家庭生活においても、立派なしつけというものは無いと思う。ただし、幼少のころに「これだけはしてはいけない」という善悪の判断をきちっと教えることや「あいさつをする」、「玄関の靴を揃える」など基本的な生活習慣を身につけさせることが大事である。いろいろな遊びをするのも大事で、その中で子供たちは様々なことを学び・体験し、新たな感動を生み出す。

五 警察活動の現場における犯罪と日本人の倫理の関係

一線の警察活動に従事して感じることは、犯罪の発生と日本人の倫理が密接に関係しており、その具体的問題点を提示してみる。

(一) モノを大切にすることの欠如(自転車の盗難届を提出する被害者が少ない)

自転車が手軽な金額で買えることから消耗品になり、盗難被害にあっても警察に届けない。その結果、まちに犯人の乗り捨てた未届けの盗難被害の放置自転車が溢れて、まちは潜在的に犯罪を助長する。額に汗して働き買った(買ってもらった)モノを大切にしたい。

(二) 罪の意識の低下（警察の自転車盗検挙の多くは、占有離脱物横領である）

自転車盗検挙は、警察官の職務質問による検挙がほとんどである。その中で、占有離脱物横領（犯罪被害場所から窃取した犯人が放置した物件など）の占める割合が多い。被疑者の成人や少年に接すると「誰のモノかわからないので使ってもいいと思った。友達も同じことをやっている。放置自転車を野放しにするのが悪い」などと責任転嫁や罪の意識の低下が目立つ。不条理がまかり通る社会にしてはならない。

(三) 親の教育力の低下（非行少年を取り巻く家庭環境の問題）

少年非行の多くは、万引き、自転車盗などの初発型非行で検挙されている。少年が犯罪を起こす周辺事情は実に複雑である。犯罪少年の親を呼び出して聴取すると、「子供をかばい子供の言いなりになる。子供の行動を把握していない」ことが多く、子供から信頼されていない親の実情が浮き彫りになる。しついで大切なことは親が子に愛情を注いで周囲の大人が見守り、子供を社会に適合させていくことである。

現況では、警察の少年犯罪の抑制にあっても、飲酒、喫煙、深夜徘徊などの犯罪の前兆となる行為に力を入れていかなければならない。

(四) ポイ捨て社会の弊害（まちに散乱したゴミや放置自転車は、犯罪を誘発する）

まちをパトロールしていると、ゴミのポイ捨てやゴミ集積所からの資源ゴミの持ち去り行為に遭遇する。このような環境のまちは地域の監視性が低く犯罪の発生を助長し、やがて小悪を放置していれば時間の経過により治安は崩壊することになる。社会規範意識を高めて、地域コミュニティを形成していくことが犯罪抑止の効果に重要である。

このように、犯罪を減少させ予防するには、各領域に関わる多くの機関、施設、家庭、近隣コミュニティとの連携、パートナーシップが、必須である。とりわけ、健全な社会を築くために家庭と学校、それを取り巻くコミュニティを基礎とした警察活動が重要である。

六 地域コミュニティによる犯罪抑止施策と警察活動

(一) 地域コミュニティと防犯まちづくり

① 地域コミュニティ

犯罪や社会不安の増大の原因には様々なものがあり、それらは複雑に絡み合っていると思われるが、地域コミュニティの面から考察してみると、その一つとして個人主義の行き過ぎ（誤った解釈）とそれと密接に関連する人々の不安や怒りは大きなものになっている。他者を尊重してこそ自己を活かすことが出来るとの相互尊重の考え方の上に健全な社会が成り立っていることを忘れてはならない。もう一つは人々の連帯感の欠如であり、個々人が切り離され、人と人との結びつきが希薄になってきていることが懸念される。

日本人は基本的に互いを信頼できる環境に恵まれており、そこから地域社会のきずなを生み出している。人間の社交性・社会性は多くの人の交わりを通じて身につくものである。今こそ、地域社会におけるコミュニティの再生が急務と考えられる。

② 防犯まちづくりの基本的な考え方

誰しも犯罪のない社会を実現して安定した快適な生活を送りたいと願う。しかしながら、犯罪の不安は常に市民の生活につきまとうが、「安全・安心な社会」は市民の根源的な願望である。現在の大量に発生する犯罪など治安事象に対処し、社会の安全を確保するため警察としては今後一層捜査力を強化するとともに犯罪抑止力の強化を図らなければならない。しかしながら、警察の捜査活動や犯罪抑止活動だけで社会の安全を確保できる範囲は相対的に減少し、その役割も限定的にならざるを得ない。その結果として市民は、好むと好まざるに関わらず、自己防衛・自主防犯に当たらざるを得ない時代になっている。

防犯まちづくりの考え方として、「地方自治体における政策」＝「市民の要望に基づく公共政策への取り組み」の基本的な理解が肝要である。いわゆる、公共課題に対する住民提案の取り組みが行政行為の意義である。警察や自治体として対応していかなければならない問題は何か、応えていかなければならないニーズは何かを定め、それらに優先順位をつけなければならない。さらに具体的な対応策を策定するにあたっては、基本方針や理念を明確にしていくことが求められる。

(二) 地域の地域による地域のための防犯活動

① 「公共」の概念の転換

一九九〇年代を通じてのまちづくり活動が新しく開いた世界は、まち、つまりコミュニティの「小さな公」の世界であった。従来の行政が「公」とは認めなかった領域が「小さな公」を主張し始めている。このことが、今日の「行政による公共の独占」が終わりを告げる時代である。コミュニティ（人と人とのつながり）が地域の主体として「小さな公（新しい公共）」の培養基としての意味を主張し出している。

行政行為における政策領域の各論部分の政策転換が求められる。

「新しい公共」の概念を推進するために、市民の内発的な発展を促進させて市民連携の自治・分権型社会の形成を目指し、

○ 広い意味での自治作法を定着させ、市民自治の領域を拡充させること

○ 基礎自治体を中心にして市民参加を一層促進すること

○ NPOなどの公共的な事業者に対する市民のコントロールを強める手法を編み出すこと

の三つの課題を達成することが重要である。行政の役割としては、「新しい公共」のもとでの市民による自主活動等、即効性のある現実的施策の展開と有効な具体的行動計画の策定が求められる。地域社会の安全のための新しい秩序やルールをどう構築するか这个时代である。

② 防犯活動の展開過程

犯罪を取り巻く情勢が厳しさを増す中、安全・安心まちづくりを実現するためには、犯罪の総量そのものを抑制するための取り組みが必要となる。特に犯罪の多数を占める窃盗犯については、施錠の確認や近隣の環境への配慮など自主防犯活動により、一定数の犯罪を減少することが期待できる。犯罪抑止には、警察・市民・自治体などの協働が重要となる。そして、協働して活動することにより自主防犯意識の醸成と市民相互の連帯意識の強化に繋がり、地域社会の再生が期待される。

ところで、地域では実際に様々な防犯に関する活動が行われて来ている。このような防犯活動を時間的な流れで見ると、図2のように「対策検討型」↓「防犯広報型」↓「防犯講習型」↓「街頭活動型」へと

展開していくことが想定される。つまり、防犯活動の流れは、

- 警察内部で各種犯罪統計資料を用い犯罪実態分析や対策会議を実施する段階（対策検討）
- その結果を踏まえて様々なメディアを通じて住民に広く防犯を呼びかける段階（防犯広報）
- 特定の住民に対して防犯講習により具体的な啓発活動を行う段階（防犯講習）
- 街頭で防犯活動を実践する段階（街頭活動）

に分類することができる。究極的には、街頭において不特定多数の人々や周囲の環境に働きかける活動が望ましい形態と考えられる。

ただし、このような活動の防犯効果に新たな問題点が生じれば、当然、最初の対策検討型の段階に戻り、新たな対応策を講じなければならぬことになる。このような意味で防犯活動は、基本的に「対策検討型」→「防犯広報型」→「防犯講習型」→「街頭活動型」の流れの過程を循環しているとみることができる。政策過程から考察すれば、

犯罪発生の状態↓抑制力の機能点検と向上性↓計画（立案）↓実行↓評価（対策検討）の一連の流れを踏んで施策に生かされることになる。この流れにおいて、特に防犯の「評価（対策検討）」が重要なプロセスになる。犯罪情勢は日々刻々と変化しており、防犯活動もこれに対応したものでなければならぬ。

ところで政府の国民世論調査によれば、「参加したい防犯活動」は、防犯パトロールや通学路・地域の危険箇所など家族や周囲の人々の日常生活に密接した事象を捉えていることが分かる（図3参照）。

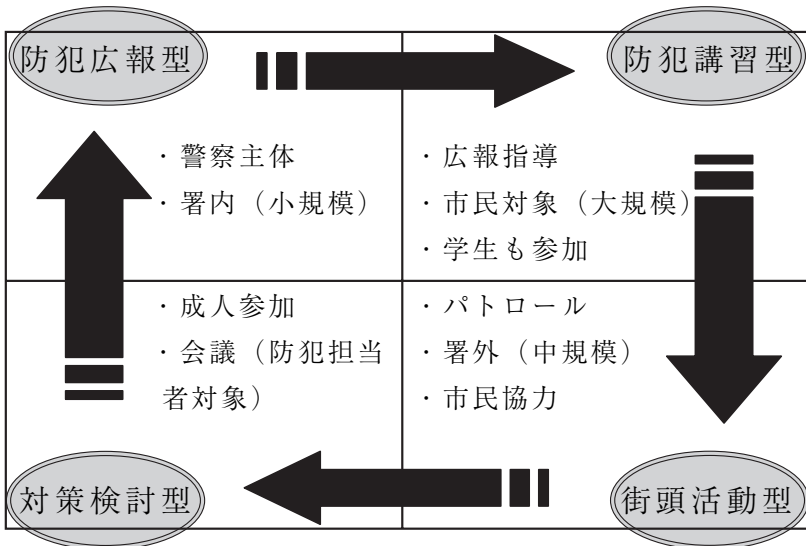


図2

警察官や防犯に携わる住民は、様々な制約がある中で夜間のパトロールや地域の環境整備活動をそれぞれの立場で役割に応じて活動をしている。そうした活動は、現に防犯上相互補完的に有効に機能している。犯罪抑止のために警察と住民、あるいは住民相互の協力関係の維持、いわゆる「地域コミュニティ」の形成が重要であることはいまでもない。

(三) 地域コミュニティによる犯罪抑止施策と警察活動

日本の治安の良さ、社会の安全さは、一昔前までは世界に誇れるものであったように思われるが、最近の犯罪の増加等によって、市民の間には、日本の社会の安全性に懐疑的な見方が生まれている。外出時の鍵掛けは、最近では鍵を二つ以上かけるように・・・というように、市民の側に求められるレベルも変化してきた。各人が自ら何の防護措置も講

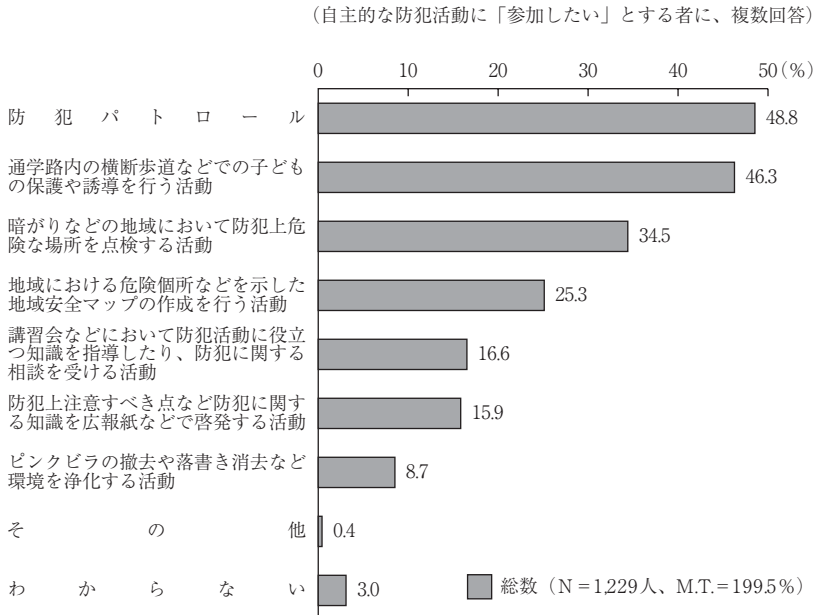


図3 参加したい防犯活動

出典：内閣府「治安に関する世論調査（平成16年7月調査）」

じないで安全な生活が確保されるという「牧歌的な時代（日本社会の均質性）」は終わったというべきかも知れないが、そのような中で、警察や市民はどのような使命と責任を果たすことになるであろうか。

従来から、交番の役割や「お巡りさん」への市民生活での親しみは、日本において独特な文化を形作ってきた。何かあったら警察に頼めばよいという考え方は、よい意味での警察が頼りがいのある存在であることを示している。他方で、日本の警察は民事不介入の原則の下に、余計なことに口を出さないという姿勢を堅持してきた面が見受けられる。しかしながら、最近の社会の変化の中で、ストーカー規制法やDV防止法に見られるように、警察がむしろ積極的に必要な介入を行うことが市民に期待され

ていることは明らかである。

さらに、別の風潮として最近見られるのは、「安全はお金で買うもの」という民間の警備業者に安全を委ねる動きである。ある程度治安が悪くなると、民間の警備会社が活躍するのも自然の流れであろうが、それが普通の家庭でも一般化するようになると、従来の均質的な社会の安全の像からはかなり乖離することになる。このように安全を自ら守るという市民の姿勢は今後重要性が増し、何も備えをせずにお手上げ状態で任せきりというのは、自己責任の精神にもとることになる。ただし、自分の身を自分で守れない弱者も数多いことを考えるならば、社会の中に必要最小限の安全性を確保するシステムを備えておくことは、日本の魅力の一つである安全で暮らしやすい国を崩壊させないためにも必須である。まちづくりに安全・安心システムを盛り込むことは重要な視点であるが、市民と警察の活躍もやはり必要である。

安全なまちづくりにおける警察、市民、自治体の役割を考えてみると、まちの安全を守るのは市民（企業やNPOなども含む）、自治体、警察など様々な主体が考えられるが、警察は専門的な立場から犯罪の捜査・検挙を行い、市民は被害者にならないための対策を立てる。そして、自治体は警察と市民の間に入り「まちの安全」を総合的にコーディネートする役割を担う。しかし、これは主な役割分担であって、警察、市民、自治体が協働で活動することが大切である。そして、「まちの安全」を守るには自治体と市民の協働が不可欠であるが、自治体はあくまで市民が主体となることを基本としつつ、きっかけ作り、リーダーの育成、ノウハウの提供などの役割を担うことが重要である。

「地域コミュニティによる犯罪抑止の進め方」を示せば、図4のようになるが、最終的にコミュニティー

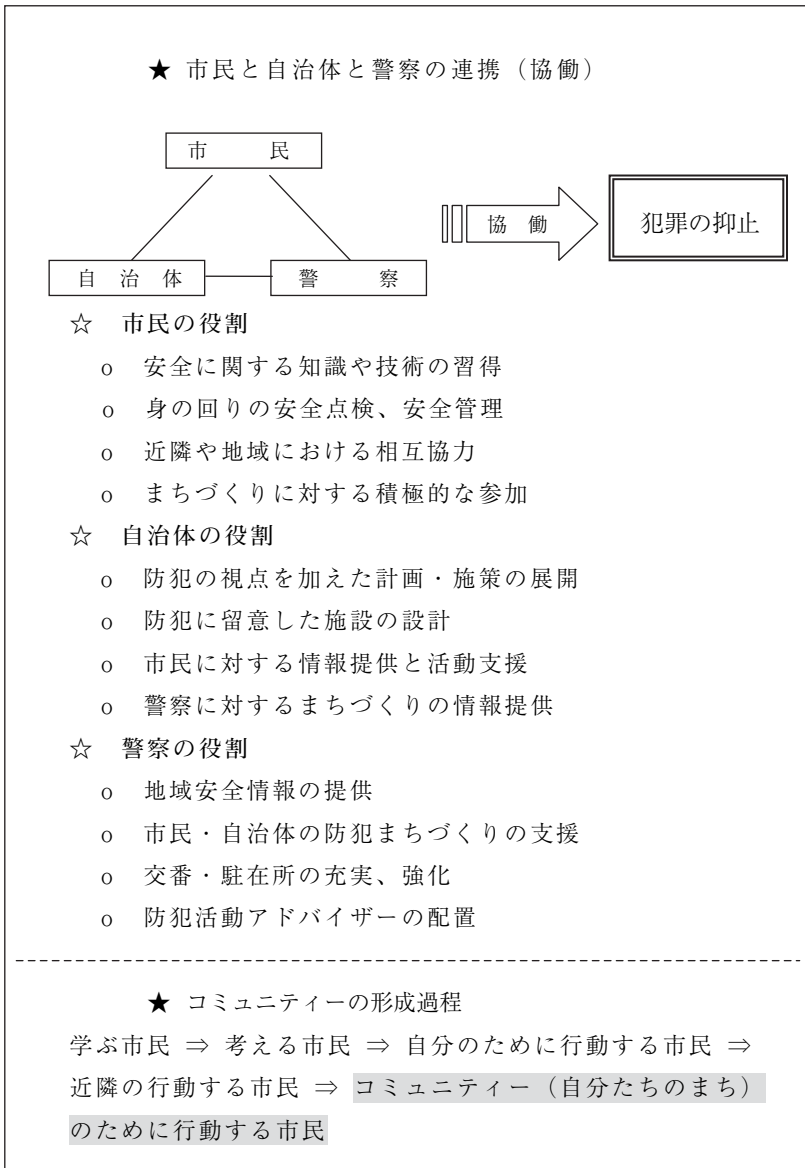


図4 地域コミュニティによる犯罪抑止の進め方

出典：斎藤重政『安全・安心まちづくり政策の理論と実践』、ツーワンライフ、2001年15頁

のために一人でも多くの市民が行動し、そして市民一人ひとりに安心を与え、安全が実感できるような社会が形成されることにある。

七 おわりに

最近、「社会の安全は守られるか」とか「治安は再生できるか」などの言葉をさまざまな場面でよく見かける。犯罪の増加と検挙率の低下という現実が社会不安を引き起こしているためであろう。日本の安全神話が崩れ、一度治安が悪くなるとその回復は容易ではないとの心配が現実となってしまう。犯罪統計等に表れている数字以上に人々の不安は大きいものである。

いうまでもなく一国の政治・経済・社会等が安定的に運営されるためには、治安が良好に維持されることが大前提であり、かつて日本はこの点において世界的に誇示することが出来た。一度揺らいだ治安水準を再びもとのレベルに引き上げるためには、きわめて困難を伴うことである。ひとり警察だけの責任とせず、行政機関・地域社会・学校などが力を合わせ、地域コミュニティを活性化させてかつてのような治安の良さを取り戻すことが喫緊の課題といえる。

犯罪とは、日常生活の一部として存在するもので、すべての犯罪がなくなることはない。また、地域によっては、犯罪の種類も対策も異なる。しかし、犯罪は人間が行うことなので、市民が問題意識を共有し知恵を絞る工夫することによって、犯罪の抑止に結びつけることが出来る。そして、市民の問題意識の共有でも、どんな取り組みをする場合にでも、最初の一步を踏み出すことがなければ、何もはじまらない。

「市民も、警察も、自治体も一緒に行動しよう」というのが、「地域コミュニティによる犯罪抑止」に向けた第一歩である。

最後に、「警察だけで社会の安全を確保できない」ことが現実的問題として再認識されている。今こそ、国民一人ひとりがモラルを高めて社会全体で犯罪を抑止することが肝要である。

【注】

1) 清永賢二「犯罪からの安全・安心確保のための施策と自治体の役割」、『警察学論集』第五七巻一―号、二〇〇四年、一〇五頁。

2) 電通総研・編『日本の潮流二〇〇一』、二〇〇〇年、二四頁。

〈参考文献〉

- 1) 渥美東洋『複雑社会で法をどう活かすか』、立花書房、一九九八年。
- 2) I. George Frederickson (中村陽一訳)『新しい行政学』、中央大学出版部、一九九二年。
- 3) 「警察庁の政策評価」<<http://www.npa.go.jp/seisaku/hyoka/seisakuhyoka-main.htm>>
- 4) 前田雅英『日本の治安は再生できるか』、筑摩書房、二〇〇三年。
- 5) 松下圭一『自治体は変わるか』、岩波新書、一九九九年。
- 6) 真山達志『政策形成の本質』、成文堂、二〇〇一年。

【優秀賞】

倫理・道徳観を正し、 犯罪を減らす方法

主婦

鈴木富貴子 (55)

【倫理・道徳観の乱れた原因】

倫理・道徳観の乱れが治安を脅かしていると言われていて、道徳教育の強化も以前から叫ばれてはいるが、いまだに効果は無い。倫理・道徳観は、幼児期から大人の背中を見て身につけるもので、言葉だけで道徳教育をしても、実行できないからである。最近の数々の凶悪犯罪や不可解な事件は、五〇年、六〇年

という長期間の不適切な教育のせいで、倫理・道徳観が乱れた結果である。その証拠に罪を犯すのは若者だけではない。老人の犯罪も増加している。

希薄な規範意識も、二〇年以上前からその兆候は散見された。幼稚園の送迎時、先生の話を聞かない親や、小・中学校の保護者会で私語をする親が多数いたのである。公営プールで、休憩時に監視員の指導を聞かず、なかなか水から上がらなかつたり、何時までも足をつけていたりといった現象が各地で見られた。それを、親たちもあまり注意しなかつたのである。指示に従わない子供を退場させたのが問題になるといふ、本末転倒の事件もあつた。

倫理・道徳観が乱れ、規範意識が低下した最大の原因は、「自由」や「人権」の誤った解釈が社会全体に蔓延して、正しい教育が行われなくなつたからである。特に社会全体で、「因果応報」が行われなくなつたことが大きい。親や教師をはじめとして世の大人は、子供が悪い事をして、あまり叱つたり注意したりしなくなつた。罪を犯しても、加害者の人権にばかり配慮して、相応の罰を受けることがない。大人たちは勇気を失い、責任を持つて叱つたり罰したりすることを避ける傾向にある。こうしたことが、教育環境や社会環境を悪化させ、悪い環境のもとで育つた次の世代がまた親になつて・・・という悪循環が出来あがつている。

したがつて、倫理・道徳観を正し、規範意識を高めるには、教育、社会環境を立て直さなければならぬ。しかし、教育・社会環境の正常化には長い期間が必要である。そこで、その間に起きる犯罪をできる限り減らすには、必要な法制度を整備し、罰則を強化することが現実的な対応といえる。性善説を捨て、

皆が少しづつ勇気を出し合い、正義が行われるようにしなければ、この問題は何時までたっても解決しない。本論文では、倫理・道徳観を正し犯罪を減少させるには、どのような教育を行い、社会はどのように対応すればよいかを提言する。

【因果応報を徹底させる】

倫理・道徳観や規範意識を望ましいものにするには、幼児期からの地道な教育が大切である。大人は模範となる行動をし、子供が悪い事をしたら叱る。こころした事を繰り返すうちに、「悪事には必ず報いがある」と望ましい潜在意識が形成される。ところが、小さいからと甘やかしたり、親が放任主義で叱らないでいたりすると、何をしてでも許されると思うようになる。学校生活にはいつてからも同様で、回りの大人が子供の手本になるように動き、悪い事したら叱ったり相応の罰を与えたりして、因果応報を体験させるべきである。何か問題が起きた時に、事なかれ主義でうやむやに終わらせず、自分のしたことは責任を持たせなければいけない。子供に怪我をさせるとか常軌を逸した罰を下すのは論外だが、不必要に人権を言い立て、子供に正しい道を教えないことが続くと、規範意識は希薄になる。親や教師は常日頃から子供たちとゆるぎない信頼関係を築いておき、叱るべき時には毅然とした態度で叱らなければいけない。

社会にあっても同様で、少年法や心神耗弱を理由に犯罪者に相応の刑罰を科さないでいると、社会正義は行われず悪人に安心感を与え、治安はますます乱れることになる。ジャーナリストの日垣隆氏によれば、ノルウェー・スウェーデン・フランス・ベルギーなどのヨーロッパ九カ国以上、ロシアなどの旧ソ連構成

各国、マレーシア・ペルー・アルゼンチン等の国には心神耗弱規定はないという。アメリカでも、カリフォルニア州は心神耗弱に基づく刑の減軽は廃止されており、モンタナ・アイダホ・ユタ等の州では、精神障害を理由とした不起訴や無罪の主張ができないよう刑法が定められているという。日本でも、「犯した罪に対して」公正な裁きが行われるよう、必要な法律を整備して、罰則を強化し、因果応報を徹底すべきである。

少年法や心神耗弱以外でも、刑罰が甘かったり、法の抜け道があつたりすると、悪質な犯罪は跡をたたない。例えば飲酒運転である。『週刊ポスト』二〇〇六年九月一日号の「四七都道府県と一五政令指定都市の飲酒運転処分者（地方公務員・四年間）」によれば、自治体により処分基準はバラバラで、事故がなければ懲戒処分がないところが多い。また、首長の裁量で同じ飲酒事故でも処罰に差が生じている。さらに違反の把握は、大半の自治体は自己申告である。福岡市を見ると、前年に飲酒で重傷者を出したにもかかわらず甘い処分で済ましている。この時、「飲酒運転は即懲戒免職」を実行していれば、飲酒に対して寛容な風潮も変わり、今年八月末の、幼児三人が殺された飲酒暴走事故は防げたのではないか。

織田信長の「一銭斬り」の考え方は、いつの時代でも有効である。その時には酷と見えても、長い目で見て社会の安全が確保できるなら、情に流されず、犯罪に対する罰則は厳しくすべきだ。性善説を捨て、因果応報を徹底させるのである。さらに、法の抜け道が無いか常に検討し、抜け道を見つけたら、直ちに追加の法を制定する心がけが必要である。また、殺人事件等、悪質な事件については、時効は廃止すべきである。恩赦などというものは必要ない。

【犯罪抑止力その一 問題解決能力】

犯罪を減らすには、成長の過程で、問題解決能力・思考力(想像力を含む)・欲望・感情を制御する力を養うことが必要である。報道される各種の犯罪を分析すると、大人も子供もこうした能力が大きく低下していることがわかる。

問題解決能力を高めるには、子供たちを過保護にせず、年齢に応じて適度に鍛えることが必要である。生活のいろいろな場面で起きてくる問題を、望ましい形で解決できるように、大人は適切な助言・指導をしなければならぬ。こうした機会に、別の角度から物事を見ること、相手の身になって考えること等、柔軟なものの方・考え方を子供に教えるのである。機会が多いほど、問題解決能力は高くなる。成長するにつれて解決すべき問題は難しくなるので、早くから問題解決の練習をしておかないと対応できない。大人の間違った配慮で、問題解決能力を身につける機会を奪ってはいけない。

親や教師の中には、いまだに「競争は悪い」と考える人が多い。子供が傷つくからと、勉強や運動で競争させないようにしている。運動会の徒競走で、走る距離を代えて皆が同時にゴールするようにするとか、順位をつけないとか変な工夫をする。親や教師が適切な助言をすればいいのであって、競争を無くすのは間違いである。子供たちは適切な助言を受けて、来年までに速く走れるように練習しようとか、練習しても遅いなら他の分野でがんばろうとか、その子なりに問題解決の試みをするものである。

高校受験や大学受験も、自分の生き方を探す機会と考えて取り組めば、絶好の人生修行の一部になる。

自分の興味、関心や適性を考えて真剣に勉強すれば、将来何をしたらいいかが見えてくる。いつまでも自分探しをしなくてすむのである。どの高校や大学に進学するかで、人生の価値が決まるような考え方をするから、失敗すると希望を失い無気力になる。子どもの能力不相応な期待をかけて勉強を強要するので、問題行動が起きる。高校や大学はひとつの通過点で、社会に出てからいかに生きるか、一生の間に何をやるかが大事なのだと、親や教師が子供たちに常に教えてやればいいのである。社会全体にもそうした共通の認識があるといい。

最近の喧嘩では、すぐ刃物を持ち出して、人を殺したり大怪我をさせたりする。倒れた人間を集団で死ぬまで殴る等、常軌を逸した行動が見られる。ゲームやアニメの影響もあろうが、喧嘩の仕方を知らないのも一因ではなからうか。家庭でも学校でも、幼い頃から争いを避けさせ、喧嘩をすぐに止め「皆仲良く」と言っている。昔は、「二対一で」「素手で」「相手が泣いたり降参したりしたら止める」という喧嘩のルールが存在した。禁じ手もあった。口論はもちろん、殴り合いもやったが、誰も怪我をすることはなかった。むやみに争いを禁じるのでなく、審判つきで、気のすむまで言い合いをさせたり、ルールを守らせて喧嘩を見守ったりすることも必要である。争いを止めてばかりいると、不平不満は解消されず、結果として憎悪を溜め込み、悲惨な事件が起きたりする。

【犯罪抑止方その二 思考力】

目先のことしか考えない、衝動的な犯罪がますます増加している。最近では、老若男女の区別なく短絡的

に、すぐ人を殺したり放火したりする。後で自分が苦しんだり、困ったりするのではないかとか、親が悲しむのではないかと等と想像することができないようだ。幼児虐待も、思考力の不足がその一因である。少し考えれば、どういう結果になるかわかりそうなものなのに、常軌を逸した体罰を与えたりする。いずれも、かなり時間が経過してから、「大変なことをしてしまった」等と言う。こうしたことが起きる理由は三つある。第一は、幼児期に適切な養育を受けなかったからである。第二は、世の中が便利になり、あまり物を考えなくなつて、脳が退化したからである。第三は、学校教育の場で○×思考や知識の詰め込みが多く、じっくり考える訓練をしていないからである。

井深大氏によれば、子供の能力の発達は、大人の対応によつて大きな影響を受けるといふ。乳幼児期に、親が楽をするためにずっと寝かせたままにしたり、動き回らないようにしたり、何かを尋ねた時に、いい加減なことを言つてはぐらかしたり無視したりすると思考力のない子に育つそうだ。このことから、思考力を高めるには、乳幼児期に、親は危険がないように環境に気を配りながら、好奇心旺盛な子に育つようにすればよいといえる。

便利な世の中では、子供たちに思考力がつくような働きかけが必要である。例えば、年齢に応じて、子どもに家事の手伝いをさせる。時には洗濯機を使わず、靴下を手洗いさせて電気器具のありがたさがわかるようにする。料理や扇風機の分解掃除なども教える。料理をしているうちに化学変化に気づくし、魚をさばけば解剖の実習をしているようなものだ。手伝いの中で思わぬ発見をしたり、電気製品の仕組みに興味を持つたりする。また、手伝いをすれば、責任感も育つし生活力もつく。

学校では、知識を表面的に暗記するのではなく、教養として身につくよう、考えながら習得していくよう指導すべきだ。特に理科や社会の授業について言えることである。教育内容も、図形の証明問題のように論理的な思考訓練やじっくり考える訓練ができるようなものを選ぶ。人間は言葉を使って思考するので、思考力を高めるには、読み・書き・話す訓練をもっと増やさなければいけない。学校教育についての他の提言は後述する。

【犯罪抑止力その三 欲望・感情の制御】

欲望や感情のままに行動する人間が増えて、幼児虐待をはじめ、さまざまな凶悪事件を起こしている。社会が豊かになって、欲しい物はなんでも与えられ、我慢する訓練をしないで育った人間や、親が無責任で完全に放任されて育った人間が増加したからである。感情優位の社会風潮にも、多分に影響を受けている。昔のように、感情の暴走は恥ずべき行為、といった共通の認識がなくなったからといえる。

欲望・感情を制御する力は、幼児期から我慢する訓練をして培う。日々の暮らしの中で、我慢をしなければならぬ場面は多い。おやつや食事を時間まで待つ、公園で、ブランコの順番が来るまで我慢するということのような事を、少しずつ時間を延ばしながら訓練する。いつも心がけていけば、幼稚園の年長の頃には、人の話をちゃんと聞けるようになる。小学校入学以後も、年齢に応じて不断の訓練が必要である。家庭でも学校でも、訓練の機会はいくらでもある。しばしば子供との争いになるが、決して面倒がらずに誠実に対応することが大切である。感情を抑えて議論し論理的思考力を伸ばす、絶好の機会となるから。

自分の考えを他に伝える能力が高いと感情の暴発が防げるので、言語能力を訓練することも必要である。幼児は大人とのかかわりの中で言葉を習得するので、いい加減な応対をしてはいけけない。家庭でも学校でも、年齢に応じて、自分の考えを的確に表せるような訓練を心がける。親や教師は面倒がらずに子どもの会話を楽しみながら、言語能力の向上に協力するべきだ。

【最も重要な幼児期の教育】

今まで述べたことから、安全な社会を作るには、幼児期の教育が非常に大切であることがわかる。幼児期の教育は、かつては、親が手本を示し、親子で悪戦苦闘しながら手間隙かけて行うものであった。例えば、人の話をしっかり聞けるようにするには、親がいい加減な受け答えをしたり無視したりせず、子供の話を真摯に聞いてやる、という具合に。現在、こうした地道な努力を軽視したツケが回って来たのである。二〇年以上前から、親が子育ての責任を負わず、人任せにする傾向があった。友達が必要という理由をつけて、早くから幼稚園や保育園に入れるようになった。だから、幼児期に一对一で教えて身につけるべきことができないのである。学級崩壊も非行も、根本原因は幼児期の不適切な教育である。不適切な環境で育った子供たちが成長すると犯罪者予備軍になる。あるいは突然ナイフを振り回して、殺人事件を起したりする。犯罪のない安全な社会を築くには幼児期の教育をもっと大切にするべきである。

精神科医の山田和夫氏によれば、友人との付き合い方は、小学校の頃までに親の人付き合いを見ながら覚えるのだという。あちこち一緒に連れて行かれ、店頭でのやり取り、路上での挨拶や立ち話を見ていて

蓄積しておき、何年後かにそれらを生かして自分の言葉として使い始めるのだという。また、『ネイチャー』の「ニューロサイエンス」によれば、ラットを使った実験で、親によく世話をしてもらった仔ラットは、脳がストレスに強くなることがわかったという。

対人関係がうまくいかない人や、ストレスに弱い人が増加したのは、早くから集団生活を送り、大人の日常の行動を見る機会が少なくなったこと、大人から十分世話をされていないことと関係がないだろうか。理想的な保育をしている保育園・幼稚園は少ない。幼児教育施設は、どこも人手不足で、荷物のような扱いを受けている幼児が多いように思われる。公共の機関で大掛かりな調査をして、幼児期の教育をどのような形態で行うか研究する必要がある。

【犯罪抑止力その四 金銭教育】

犯罪を減らすために、金銭教育をもっと重視すべきである。人はその稼ぎに応じて支出をするなら、金に困ることはない。身分不相応に金を使うからサラ金に手を出すようになる。小学生になったら、むやみに小遣いを与えたり贅沢させたりせず、堅実に生きることを教えなければいけない。まじめに働かなくては、いい生活は出来ないこと、仕事に就くには勉強しなければならぬことも小学生のうちからしっかり教えるべきだ。

家庭では、子供の前で家計簿をつけてどういう風にか家計を切り盛りするのか公開するのもいい。好き放題に物が買えないことがよくわかる。額の大きいものは少しずつ貯金して買う、ボーナスが出たときに買

う等、我慢しなければならぬこともわかる。不時の出費に備える、将来の学資を蓄えることも覚える。手伝いをしないと小遣いがもらえないようにすると、金を稼ぐのは大変なのだ実感できる。家事代行業の広告を参考にしながら親子で相談して相場を決めればよい。子供たちは、お手伝いで稼いだ小遣いは決して無駄にしない。親への感謝の念も持つようになる。

祖父母からのお年玉も、一定金額以上は使わせないで将来のために蓄えることを教えるべきだ。また、テレビ・パソコン等の高価な物は、親が買って子供に貸すという形式を取る。そして、親の許可がないと好き勝手に使えないように決める。高校を卒業するまではそれでいい。子供に「誰その家では云々」と言われても、「我が家はこうだ」と言えばすむ。ただし、親も子供の物を許可なしで使わないようにする。

【公立小中学校の教育について】

荒れる学校は、犯罪者予備軍を生産するので、治安の回復には、公立の小中学校の教育が特に重要である。公立小中学校の一番の問題点は、確かな学力を身につかせようという熱意が足りないことであった。意識の高い教師が集まって、熱心に取り組む学校は少数派であった。わかる授業をするために、指導法を研究するのでなく、教える内容を少なくする、といったことが行われた。そのため、用語の羅列を丸暗記するような事態になり、学力低下につながった。ゆとりと称して時間削減をしたので、図形の証明問題のような時間にかかるものはいい加減にすまされた。そうして必要な知的訓練がなされなくなった結果、思考力が減退したのであった。現在の脳科学によれば、人は大脳前頭葉を鍛えないと、短絡的な思考、衝動

的な行動をすることがわかっている。昨今の犯罪多発の一因は、大脳前頭葉の訓練不足である。

本当に必要な学力をつけ、わかる授業をするために、教師の質・教育技術を向上させ、児童・生徒の能力に応じた教育ができるようにすることが特に大切である。能力別の教育や、チームティーチングなどを進め、最終的には学校と塾・家庭教師の二重生活をしなくてもすむようにするといいい。また、学ぶことの楽しさを教えられるような人材を確保することも大切である。教師の評価を公正に行い、上手に教える人、社会に貢献する人材を育てた人には高給を払う等、民間並の優遇措置も必要である。教職が魅力的な仕事に思われるような対策を講じなければ人材は集まらない。

教育内容は、必要な知的訓練が充分に行えるもの、本当に必要な知識が身につくものを選ぶ。子供たちに真の学力がつく教育をして、将来能力に応じて適正な仕事を見つけて、生計を立てられるようにしなければならぬ。恒産なき者は恒心なし、である。

【国語教育をこう変える】

国語教育の大切さが言われるが、現状の教育内容で時間を増やしてもあまり効果はないと思う。理由は三つある、第一は、現在の小中学校の国語は、教育内容が情緒偏重で、思考力や感情の制御の訓練として、ふさわしいものではないからである。討論やディベート等を取り入れたり、教科書に載せる読み物を工夫したりして、もっと論理的思考の訓練をしなくてはいけない。

第二は、文章の書き方、話し方の訓練が不十分で、義務教育を終えても、社会に出て役立つ技術が身に

つかないからである。どこの書店にも、文章の書き方や話し方に関する本が無数にある。これは、学校での国語教育が実際には役に立っていないことを証明している。義務教育を終えたら、こうした本が必要ないように国語教育を改革するべきである。日常生活のいろいろな場面で、どのように話せば争いにならずにすむのかとか、自分の言いたいことを他人に理解してもらおう話し方・書き方とか、親や教師に自分の要求を伝える話し方・書き方など、実践的な内容で学習すればいい。思春期の不安定な心を日記に吐露して内省に役立てるのもいい。非行に走る子供は書く能力はもちろん、話す能力が低く、物事や自分の考えを相手にわかるように伝えられない。実践的な国語教育を行えば、非行に走る子供は減少するだろう。それは、犯罪者予備軍が減少することであり、社会の安全につながる。

第三は、日本人の倫理・道徳観や思想の形成に影響を与えてきた、中国古典の学習量が少なすぎるからである。現代詩等は教科書からはずし、論語、故事成語、戦国策、十八史略等を小学校から学習するとい。大器晩成、塞翁が馬等、語句として覚えるだけでなく物語として教科書に載せ、よりよく生きるための知恵として習得するのである。古典は知恵の宝庫であるだけでなく、人に勇気を与え、いかに生きるべきかを考えさせてくれる。近視眼的なものの見方・考え方を変えてもくれる。小説家や詩人を養成するような授業は止めて、人生に役に立つ国語教育をするべきである。

【素行点を入試に使うな】

学校での素行を点数化して高校入試に使うようになってから、陰湿ないじめや不可解な事件が増加した

と思う。この素行点は、指導力のない教師や教えるのが下手な教師の脅迫の道具となっている。彼らは「そんなことをすると内申書に響く」と言って、生徒に言うことを聞かせるのである。「高校入試に響く」等と、親から言われたり、自己規制したりして、子供たちは自由に物を言わなくなっている。したがって、ストレスがたまり不満の捌け口を求めていじめが起きたり、荒れたりする。

また、「よい子」を演じようと無理をする生徒が実に多い。毎日演技をやっているのは疲れ果てるだろう。親や教師が「無理しなくてもいい」と声をかけない限り、あるいは声をかけても、最近の子供は演技を続けるようだ。「こんなことやっぺいられるか」とは言わず、不健全な形でストレスを発散する。また、そうした演技は入学試験が終わっても続け、習性になってしまう。これは若い生命力を大いに蝕んでいるのではないか。

素行点をつけるのは、生徒のストレスを増やし、教師に余分な仕事をさせるだけである。教師の主観でどうにでもなるような事柄は評価すべきではない。生徒の人物を見たかったら、高校側が面接をするだけでいい。日常の行動が点数化されるとなれば、四六時中、教師に見張られているようなものである。いつも素行点を気にして過ごしているのはストレスがたまり、心が荒むだけでなく、将来大人物にはなれないだろう。茶坊主の大量生産をしているようで、日本の将来にとって好ましいことではない。学校でも家庭でも、自由に物を言える雰囲気を作ることが大切である。

【健全な社会環境を取り戻す】

儲かれば何をしてもいいという考え方が蔓延し、社会環境は悪化の一途をたどっている。拝金主義は、青少年の健全な成長を阻害し、犯罪を引き起こす元凶となっている。法律で禁止されても、未成年と知って酒やタバコを売る者が跡をたたない。酒やタバコの自動販売機の撤去もなかなか進まない。少女売春もまだ根絶できない。取締りの強化が望まれる。

特に現在問題なのは、表現の自由を盾に青少年に配慮せずに作られている映画・ビデオ・DVD・TV番組・ゲーム等である。本や雑誌も同様で、公序良俗に反する小説がもてはやされ、少年少女雑誌にポルノまがいの作品が載る。残虐な場面も年々増え続けている。精神的に成熟した大人が、青少年に悪影響を与えないよう陰でこっそり見るべき物が、誰でも手の届くところにある。映画のR指定は、基準が次第に甘くなり、守られてもいない。他は、ほぼ野放しである。製作者も販売者も、社会的影響を考えもしない。外国人はこのような日本を、性と暴力の氾濫した異常な国、と見ている。

こうした性に関するもの、残虐ものの氾濫は、気がつかないうちに青少年に悪影響を与え、レイプ、売春、幼女に対する猥褻、殺人を誘発している。もし、四〇年前の状態に戻すことができるなら、このような犯罪は激減するはずだ。ここまできたら、青少年の健全育成のため、犯罪を減らすため、法律や条例で厳重に取り締まるべきである。言論の自由とか、表現の自由と言っている場合ではない。ロリコンビデオ等は直ちに製作禁止にすべきだ。

また、モニターにアンケートを取ったり、視聴者・読者の意見を募集したり、出版物の検閲をしたりする公的機関が必要ではないか。こうした公的機関は、インターネットのホームページを自由に閲覧できるようにして、親や学校の参考にしてもらう。年齢指定をしたり、製作者に警告したり、注文をつけたりする。場合によっては、不買運動を呼びかけたり、青少年が入手できないようにしたりする。発禁処分もあつていい。製作者や販売者が打撃を被るような手段を考えるべき時である。最近では、精神年齢の低い大人が増えたことも考慮しなければならない。言論の自由も表現の自由も、「公序良俗に反しない限り」という限定がある。訴訟を起こされる事を恐れてはいけぬ。

【終わりに】

モラル向上の特効薬はない。これまで提言したような、教育・社会環境の改善と、法整備・刑罰の強化を辛抱強く続けるだけである。とりわけ、大人が子供とかかわる時は、逃げず、ごまかさず、誠実に対応して、行動の手本を示せるよう心がけたいものである。

参考文献

- 『そして殺人者は野に放たれる』日垣隆 新潮社
- 『幼稚園では遅すぎる』井深大 ごま書房
- 『文化なき家族の病理』山田和夫 大和出版

「ニューロサイエンス」『ネイチャー』 二〇〇四年八月号

【佳作】

非難の国から感謝の国へ

自営業

(喫茶KURIKURI経営)

栗山 隆治 (42)

序

我が家の近所にある中学校、今はにこやかな生徒達が通うごく普通の中学校ですが、数年前は「この学校にだけは行かせたくない」と多少無理してでも私立に通わせる親が続出するほど県下有数の「荒れた中学校」でした。

この学校を変えたのは、学校改革のために送り込まれた凄腕の校長先生でも元ヤンキーの熱血先生でもありません。生徒自身の手で変えたのです。たった一人の女の子がきっかけになって始めた「心（ハート）革命」が、全校生徒を巻き込み、わずか一年で荒んだ学校を明るく活気のある学校へと変えたのです。

荒れた中学校は現代社会の縮図です。積極的に規則を破る一部の生徒とそれに引きずられる生徒、規則を破るほどではなくてもマナーは守れない生徒、学校に出てこなくなる生徒、そしてそれを放置する大半の生徒と先生。何とか変えようとする生徒や先生がいても変わるのはいち部分だけ、しかも一時の効果しかなく全体の流れは変えられない。スケールの違いこそあれ、モラル崩壊と言われる現在の日本の状況は荒れた中学校のようなものです。

そして現在のモラル崩壊と同じように様々な理由で荒れた中学校を、たった一人の女の子が始めた革命で変える事が出来たのなら、凄腕校長のような辣腕政治家が現れなくても、私たちの手で日本を変える事くらいできるはずです。

モラル崩壊の分析

対策を考える前にまず、いつからこの国が変わり始めたのかを、モラルと反比例関係にあると考えられる国内の犯罪を、認知件数を元に考えてみましょう。

平成一七年の警察白書から刑法犯の認知・検挙状況の推移（図1）を見てみると、戦後遞減傾向にあった犯罪認知件数は昭和四〇年代末を底に増加に転じ、平成八年あたりから急増し一四年でピークを迎えて

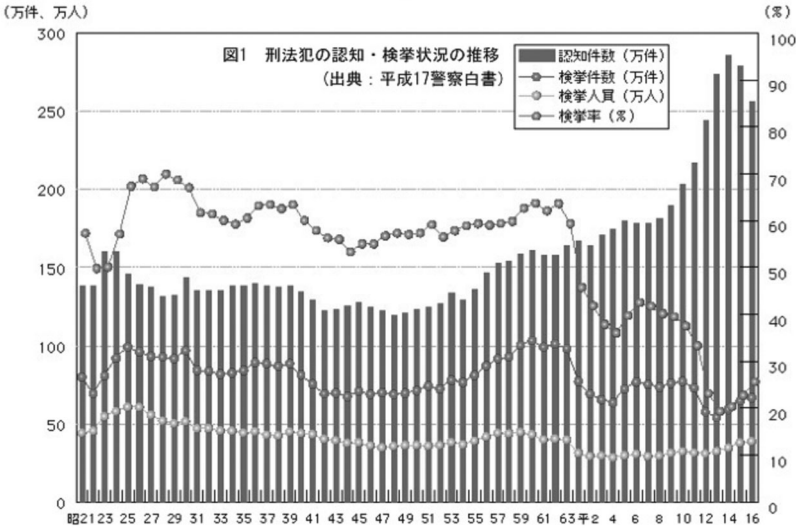


図1 刑法犯の認知・検挙状況の推移

(出典：平成17警察白書)

います。一方検挙率は昭和の内は六〇％前後の高さを誇っていたものが昭和末から急落し、現在は二〇～三〇％を推移しています。

ここで一つ奇妙な事は、検挙率の急落時期です。平成一〇年頃からの急落は犯罪総数の急増時期とあっていますが、最も激しい急落を見せた昭和末の犯罪増加は、検挙率をむしろ高めていた五〇年代後半の増加ペースよりも低いレベルに過ぎないのです。白書では外国人犯罪の急増、犯罪自体の巧妙化や広域化などがその理由としてあげられていますが、急落し始めた時期の外国人犯罪検挙数は全体の0・1％にも満たないですし、日進月歩の犯罪技術がこの時期に限って従来にない画期的な進歩を遂げた形跡はありません。従って、この急落時期にもモラル低下に関するヒントがある可能性は十分にあります。

また、このグラフを見る限りモラル崩壊のター

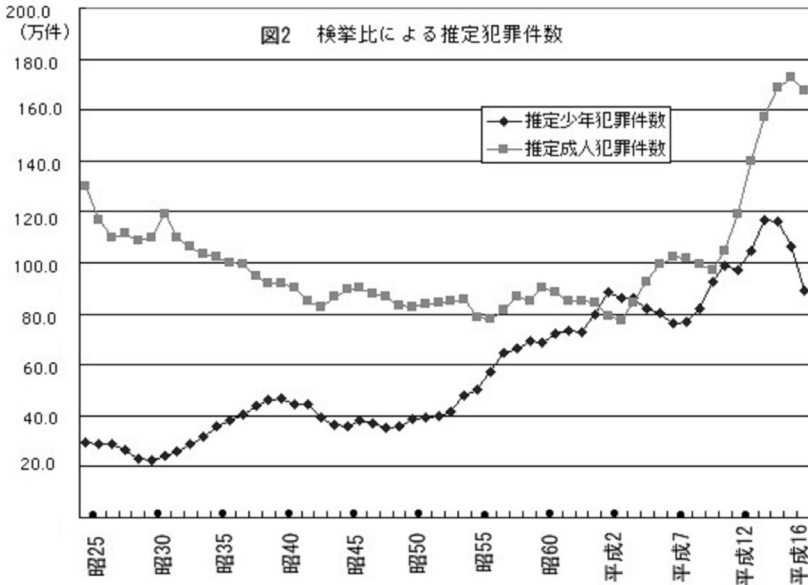


図2 検挙比による推定犯罪件数

ニングポイントは昭和五〇年あたりと平成七年前後にあります。私の生活感覚では昭和の頃は「荒れる十代」の突発的な犯罪が多く、平成に入ってからはピッキング犯や振り込め詐欺など大人の犯罪が多いような気がします。また大人と子どもでは生活する社会環境が異なるため犯罪動機も異なるでしょうから大人と子どもは分けて考えた方がより正確な分析ができるでしょう。そこでこの犯罪認知件数をその年に検挙された犯罪者に占める成人と未成年の比率で分割し、すなわち認知件数が二千件の年に未成年検挙者が三割を占めていたなら六百件が未成年の犯行であると推定する方法で認知された犯罪の実行者を分離してみました(図2)。

この図を見ると意外な事実が浮かび上がります。すなわち、昭和二〇年代から昭和末まで成人人口は二倍近く増えているにもかかわらず成

人犯罪件数は低下・横ばいであり、未成年人口は二割近く減少しているにもかかわらず増加し続けているのです。そして平成期に入るとややぶれはあるものの成人犯罪が先に増加し、その後を追うように未成年犯罪が増加し、先に低下しています。

一般に未成年の犯罪件数が増加すれば、その未成年者は数年後に成人するため、数年遅れて成人の犯罪も増加し、治安は悪化するものです。しかし日本においては少なくとも戦後期から昭和の間、青少年犯罪は増加の一途をたどっていながら、犯罪総数の増加は青少年犯罪の増加分程度に抑えられ、治安は維持されたのです。この事実から分かるのは、子ども社会の環境は年々悪化し続けたのに対し、大人社会は年々増加しながら流入してくる元不良少年達を軒並み更生させるほど住み良いものだったという事です。

そしてこれが平成期に入ると一転します。成人犯罪が先に増加し、未成年犯罪は一時増加を止めていたものが平成七年頃から成人犯罪を追うように増加に転じたのです。住み良かったはずの大人社会が崩れ、子ども社会にも悪影響を及ぼしたのでしょうか。これらの点から考えると、日本社会のモラル崩壊には三つのターニングポイントがあった事がわかります。昭和五〇年頃の子ども社会、昭和末の大人社会、そして平成七年頃に再び子ども社会が変わったのです。

ではまず昭和五〇年頃、子ども社会に何が起こったのでしょうか。このあたりの流行語を追っていくと「乱塾時代」という言葉が目につきました。この頃、ベビーブームも終わって少子化が進むと共に社会も豊かになり、生活に余裕を持った親の目が数少ない子どもに注がれると、過剰な教育熱が生まれたのです。そしてその結果、子ども達は「学力」に偏った価値観で判断されるようになりました。そして偏差値の高

いい子がいい子であり、偏差値の高い学校がいい学校であるというシンプルでわかりやすい価値観のもとでは、「頭は悪いけど人柄がいい子」は「人柄はいいけど頭が悪い子」と評価されるようになり、学力以外の面で子どもが自分を発揮する機会を奪ったのです。

また、過熱する教育熱についていけない子ども達がぐれ始めると学校は管理教育に走り、子ども達を規則で管理するようになりました。そして規則を守るのが当然であって、規則を破る子を監視する減点方式の管理教育は、規則を破る子が出るたびに強化され、子ども社会を随分と窮屈なものにしました。この窮屈は、多くの子をドロップアウトさせただけではありません。本来前向きな目標を持って生きるべき子ども達が「規則さえ守ってればいい」や「規則を破っても見つからなければいい」と後ろ向きに考えるモラル低下を引き起こし、結果として犯罪に走る子を増やしたのです。

そして次の昭和末、大人社会を襲ったのは「バブルの嵐」です。このバブルが従来の好景気と違う点は、「働けば働くほど金になる」から「働かなくても金になる」に変わった事です。当時は残業も増えたので従来通り働く程給料が増える構造も確かにあったのですが、土地やお金があれば生涯賃金を遥かに超える利益が得られるという世界を間近に見た経験は、日本人の価値観を変えるほどの大きなインパクトをもたらしました。「お金さえあれば何でも手に入る」、かつて時代の寵児が常々豪語していたこの価値観は、多かれ少なかれこのころ一般に認知されるようになったのです。

しかし、かつての日本には「お金」以外の価値がもっと重視されていました。

幕末に一万件以上を数えた寺子屋は、授業料などという概念さえもない時代ですから、都市部はともか

く地方では裕福な農家などが自腹を切って行うものでした。何故それだけ多くの人が自腹を切ってまで教育を行ったのか。そして学んだところで将来の収入が増える見込みのない農家の子弟までが、なぜ遠い道のりを通ったのか。教える人、学ぶ人にお金ではない何かの「価値」を見いだしていたからでしょう。それが近代化と共に徐々に崩れ、バブル崩壊とその後の経済政策により日本人の価値観が「お金」へと偏り、「お金持ちになれなければ幸せになれない」と絶望する若者が現れる一方、「お金さえあれば幸せになれる」と考え「法律」や「モラル」よりもお金を重視する人が増えたのです。そして、現在の治安悪化の原因は、お金目当ての犯罪が増えたからだけでなく、金銭的価値のない「警察への協力」を避ける人が増えた事もあるはずです。検挙率急落直後の平成元年に全国警察で「捜査活動に対する国民の理解と協力の確保月間」を実施したのは、急落の陰に国民の非協力があつた事を示唆しています。

そしてこの「お金」に価値が偏つた社会は、「営業成績は悪いけど後輩の面倒見のいい社員」という評価を「後輩の面倒見はいいけれど営業成績は悪い社員」に変え、「学力」に価値が偏つた子ども社会と同じような居心地の悪い社会に変わったのです。また、その後の不景気はリストラによって社員を減らす事が一般化し、「誰をやめさせるか」という視点で人を減点評価し、かつて居心地のよかつた大人社会は管理教育下の子どもの達のような閉塞感に覆われてしまったのです。

そして最後の平成七年の子どもの社会。平成に入った子ども社会は、昭和末に各種マスコミで広げられた「反管理教育キャンペーン」や、平成二年の「校門圧死事件」によって急速に規則が緩められ、ルーズソックス・ミニスカートの大流行に見られるような自由を得たため、犯罪が増えた大人社会とは対照的に犯罪

件数は減少していました。これが平成七年に壊れてしまったのは、「就職氷河期」という言葉が流行語大賞に選ばれたように、勉強したからといって就職できるとは限らない社会になったために、偏重された「学力」という価値を信じられなくなった事や、将来の希望や目標を失ってしまったためでしょう。親や教師はまだ「学力」という価値を信じる一方で、子ども達にはそれが信じられない。現在の価値観や未来の希望を失った事や、大人との認識のずれがストレスを生み、犯罪件数の増加へと結びついたのでしょうか。

ハート革命

さてここまで原因の分析を行ってきましたが、肝心なのは「何故こうなったか」よりも「どうすればよいか」です。冒頭にあげたハート革命を例に、どうすれば日本を変える事ができるのかを考えてみましょう。

改革を始めた彼女は二年生の時、他にも同じ不満を持つ仲間達と共にクラスの改革に乗り出し、クラス会などを通じてせめて授業中には席に着いている事や自分達がいるところぐらいは掃除しようとする事に呼びかけたそうです。しかし、いくら彼女達ががんばっても授業中に他のクラスの子が呼びに来る事や、学校全体が薄汚れているという現状が変えられないために、一時的にクラスが良くなってもすぐにまたもとに戻ってしまっていたそうです。

そこで彼女は三年生になった時、全体を変えるために「みんなの心を一つに」というスローガンを掲げ、改革を訴えて生徒会長に立候補しました。やはり生徒の多くもその現状に不満を持っていたのでしよう、

彼女は見事に当選し「ハート革命」と名付けた改革を実施したのでです。

彼女の行った革命はユニークなのですが、理にかなったものでした。

彼女が最初に手がけたのは、授業開始三分前の予鈴が鳴ったら席に着くという「ベル席運動」でした。通常このような運動を行う時にはクラスの対抗心を利用し、ベルが鳴ってから全員が着席するまでの時間をクラス委員などが計測し「今日は予鈴後三秒で全員が席に着いた二年三組が一番」といったような競争をとり入れるものです。しかしこの方法では競争に参加しないクラスが現れる可能性がある上に「学校全体を改革する」という目的からはズレています。

そこで彼女が行ったのは「ニコちゃん作戦」です。これは、各クラスが全員着席するのをクラス委員が確認するところまでは競争方式と同じですが、確認したらすぐに各フロアの階段脇にいる生徒会役員に合図するというところが異なります。役員はフロアの全クラスから合図が来るまでの時間を計測し、一分以内に全クラスから合図が来たら階段脇に直径三〇センチほどのニコちゃんマークを貼ります。そして一分を越え三分以内なら「おすましマーク」そして三分を越えたクラスが一つでもあれば「泣き顔マーク」を貼るのです。そして一階から四階までのこれらのマークを生徒会担当の先生が見回り、すべてが「ニコちゃんマーク」の時には職員室前に直径一メートルもある大きなニコちゃんマークを貼り、一つでもおすましがあればおすまし、そして一つでも泣き顔があれば泣き顔を貼るのです。この方法ならば、大きなニコちゃんマークを貼って貰うためには全校の生徒が心を一つにする必要があります。そして、この運動を始めて約一ヶ月後、大きなニコちゃんマークが貼り出された時には全校から喜びの声が上がった

そうです。

そしてこのニコちゃん作戦はその後掃除にも威力を發揮しました。ただ掃除の場合には、掃除後に点検してフロアや職員室前に掃除用のニコちゃんマークを貼り出すのは同じなのですが、テレビ番組で紹介された掃除の「裏技」を試してみる目を作ったり、生徒が考えた「裏技」を紹介して他のクラスで実施してみてもその使い勝手を評価するなどして、退屈になりがちな掃除そのものをもっと楽しめるように工夫を加えたそうです。

そしてこれらの実施に力を与えたのがITです。各クラスにおかれていたパソコンを使い、ネット上に掲示板をおき情報を共有したのです。具体的には、例えばベル席運動の時に三分以内に座れなかったクラスから「更衣室でのクラスの入替えがスムーズにいかなかったために着席が遅れた」という情報があれば、それを掲示板に書き込む事ですべての生徒と生徒会が共有し、どうすれば入れ替えがスムーズにいくかなどの対策を思いついた生徒がいればそれを掲示板に書き込むのです。このようにして情報を共有した結果、すべての生徒が学校全体を改革する事に参加でき、「自分の手で自分の学校をよくしている」という実感を持つ事が出来たのです。

こうして改革は成功したのですが、何故この改革が成功したのか分析してみましよう。まずは「みんなの心を一つに」というスローガンが、荒れた現状を「このままでいいのか」と思っていた多くの生徒達の心を掴み、目標を失っていた生徒達が行動する目標を得た事に始まります。しかし、遠くて漠然とした目標だけでは人は動けません。大学入試のために一年の頃から懸命にがんばれる人は稀です。模試のよう

な、目標達成に適した身近な目標がなければ人はなかなか努力できないものです。

全員が参加しなければ達成できず、しかしみんなが少しがんばれば達成できそうだという適切な目標を次々と打ち出した事が、みんなのやる気を引き出し、そして持続させる事が出来たのでしょう。しかも、それらの目標達成に対し、一人一人の意見を活かさせた事も大きかったでしょう。ベル席運動でも、早く席に着けるようにするアイデアが生徒会だけから出されていたなら、生徒達は「生徒会にやらされている」と思い積極的に参加する事は出来なかつたはずで、生徒一人一人が自分の持っている意見を出すという場を持った事が、例えばそれが活かされなかつたとしても「自分も参加している」という意識を持ち「やりがい」を感じる事が出来たのです。

学校という場所は塾と違い「勉強だけ」をする場所ではありません。たいていの人にとって「学校の想い出」といえば、「運動会」だったり「文化祭」や「クラスマッチ」など、みんな協力して盛り上がった行事のはずです。勉強で自分を発揮できなくても、色々な面で自分を発揮できれば学校も結構楽しめるものです。

こうして価値観が「学力」に偏った世界に、生徒一人一人が実感できる「価値」を生みだした事によって学校が生徒達にとって居心地のいい世界に生まれ変わり、改革が成功したのでしょうか。

企業内改革

このように、人が「価値」を実感できる事によって改革した例は他にもあります。例えば全日空の接客

担当である旅客課も新たな価値を発行する事によって社員のやる気を引き出し、職場を明るく活気のあるものに変えています。

旅客課は接客担当であるために、お客様へのお辞儀の角度から足の運び方に至るまでの細かなマニュアルがあり、課員すべてがそのマニュアルに従った行動を求められていました。ただ、どんなに細かなマニュアルであろうと慣れてしまえば普段は完璧にこなせるようなのですが、やはり時にはミスをしてしまう事もあるそうです。そしてミスをしてしまえば報告書を提出しなければならず、普段どんなにしっかりとしたサービスをしていてもミスをした事だけが目立ってしまうのです。この減点主義のため職場の雰囲気が悪くなるだけでなく、サービスを受ける側も機械的なサービスしか受けられないという状況に陥ってしまったのです。そしてその状況を打開するために作られたのが「Good Job カード」です。

この Good Job カードは旅客課全員が持ち、誰かがマニュアル以上の仕事 (Good Job) をしていると同僚が認めた時、その内容と褒め言葉を記入して手渡すカードなのです。そしてそのカードがどのような理由で誰に渡されたかというデータはパソコンで集計され、月ごとに受け取った枚数が多い人や、多くなくても事務局が内容的にすばらしいと評価した人にはバッジを贈って表彰し、リーフレットでその内容などを社内に発表するという制度が作られたのです。

ただし、旅客課のメンバーにとっては、マニュアル通りの仕事をして、それ以上の自発的なサービスを行っても金銭的には全く差がありません。

にもかかわらず、これだけの事で現場のモチベーションが上がって仕事の質が向上しただけでなく、職

場の雰囲気も明るく活気があるものになったのです。

非難社会

このように「学力」や「お金」以外にも「価値」を生み出す事は可能ですし、人が価値を認めれば活気も生まれるのです。従ってこのような「価値」を生み出す仕組みを作る事ができれば、犯罪発生件数も減るだけではなく、活気のある暮らしやすい社会が生まれる事でしょう。

しかし、これらの改革は価値を生み出したから成功したというわけではありません。成功するためにはもう一つの重要な要素があったのです。

それは「誰も非難しない事」です。

何かを変えようとする時、人はごく自然に誰かや何かを非難する事によって成し遂げようとしています。ベール席運動ならベルが鳴った時に席に着いていなかった生徒を、サービスの低下ならサービスが良くないと指摘された社員を、非難する事によって変えていこうとするものです。

これは今や空気のようになり前回の解決方法であり、当たり前になるほど即効性のある方法でもありません。しかしこの方法では、たとえ一〇〇パーセント非難される側に非があっても非難された側は反発するものですし、普通一〇〇パーセント悪いなどという事はありません。従って非難する力が弱ければ、反発する力に押されて解決出来なかつたり遅れたりする事もあります。また強い力で非難すれば即座に解決する事も多いのですが、相手の反発心は残るため別な方向に吹き出し、昨今のテロ事件のように終わりのな

い争いになってしまいう可能性もあります。それに悪いところを正す社会では、悪いところのない社会は作れるでしょうが、よりよい社会を作る事は出来ません。それどころか非難して相手を従わせることを正当化し過ぎる事は、論理的に相手を非難できない子ども社会に深刻な影響を与えます。家庭内暴力やいじめなどを始め、親やクラスメイトなど身近な人を自分自身の「問題解決」のために傷つけてしまう事件が増えた背景には、我々大人が安易に人を非難する姿を見ている事があると思います。非難して正すことは即効性もあり効果的なのですが、強い力を伴わなければ解決を遅らせるものですし、大きな副作用もあるのです。

それに対し、ハート革命も旅客課も人を非難する方法をとっていません。

「みんなの心を一つに」というスローガンで始めたハート革命はその言葉通り誰かをはじき出すような事はしていません。掲示板に寄せられた意見の中には「〇〇がさぼっているのが悪い」のようなものもあったようですが、常に「どうすればよくなる」という前向きな意見だけを採用し続けた結果、改革が終わるところには人を非難するような書き込みはなくなっていたそうです。そして、旅客課は大企業内ですから実施前の会議では「何が悪いか」という検討はしっかりやったと思いますが、実行した事は「人を褒める」事だけです。こうやって人を非難する事なしに「価値」を増やしたからこそ活気が生まれ、結果として改革が進んだのです。

昨今の運動会がつまらなくなってしまうように、「誰かが悪い」「何かのせいだ」と非難する社会では、人は非難される事を恐れて積極的に動けませんし、非難される事を予防するために制限事項が増えるもの

です。もしここがアメリカのように誰かが圧倒的な力を持った社会なら反発を押さえ込み、相手の方が間違っていると非難する事で改革を押し進める事はできるでしょうが、日本のように誰かが圧倒的な力を持つ事を嫌う社会では非難によって改革は進みません。明治維新は、「徳川慶喜を処罰する事」より「欧米先進国に認められる社会を作る事」を優先していたように、「誰が悪い」ではなく「どうすればよくなる」の争いだったからこそ比類ない速さで日本は先進国の仲間入りができたのです。そして戦後、日本の工業はミス責める事で発展したわけではありませんし、圧倒的な能力を持った社長の力で発展したわけでもありません。工員一人一人に至るまでがミスが起こらないようにするにはどうすればいいかという改善を繰り返し、焼け跡から世界一まで発展してきたのです。

開国後、特に戦後に欧米文化が浸透した事によって徐々に非難社会が広まってきましたが、今一度日本が持つこの前向きに解決する力を引き出せば、きっと世の中を変える事ができるはずです。

日本の改革

では、どうすれば学力やお金に代わる価値を生み出し、前向きな力を引き出せるか。個人ができる手段として私がとったのは小説です。「荒れた中学校に通う中学生達がハート革命の事を知り、Good Jobカードのような『トレビアンカード』をつくって学校改革を行い、その実績がテレビ放送される事で日本中が『トレビアンカード』ブームになる」というフィクションを作り、ネット小説として発表したのです。「これを読んだ中高生達が、自分達の学校でこの小説のように学校改革を行って欲しい」というのがホームページ

ジに書いた表向きの理由ですが、あわよくばどこかの学校で改革が成功し、その実績が小説のようにテレビで放送されてブームになればいいというねらいもあります。今のところ発表から半年で千人ほどが完読し、メールや掲示板で見る限りいくつかの学校で小さな改革が始まっているようですが、日本中でブームになる気配はまだありません。

小説という手段を選んだのは、このような論文をネットで発表したからといって読む人間がいるとは思えなかったからです。読む人がいなければどんなアイデアも、単なるハードディスク内の01信号に過ぎません。ただ、小説を数千人が読んでくれたとしても、奇跡のような偶然と夢のような幸運が山のように集まらない限り、いくつかの学校の居心地がよくなるだけで終わってしまう事でしょう。しかし、今回のように新聞社が協力している論文ならば世の中を変える事は可能です。

その方法は「感謝箱の設置」と「ありがとうキャンペーン」です。

先日埼玉県で起きた痛ましいプール事故は、その再発防止のため行政が全国のプールの再調査を行った結果多くのプールで不具合が発覚し、改めて通達の徹底と指導が行われました。そしてその直後に近所のプールに娘と行った時、吸水口の前には監視員が立ち、子ども達がそこで遊ばないように指導していました。しかし、設計通りに施工された吸水口は安全であり、そこにわざわざ監視員を専属でおくのは無駄である上、子ども達にとっても遊び場所が一つ減る事になります。これこそ非難社会の弊害なのですが、今のところ行政としてはやむを得ないのでしよう。これに対し私たちができる事は何でしょうか。

これに対する答えが「感謝箱」です。プールで泳いだ子ども達が、安全に遊べた事を感謝する気持ちを

書いて入れる箱です。この中に感謝の気持ちで詰まったら、プール管理者は、監視員は、どれだけやる気が出るでしょう。金具の点検は自ら進んで行うでしょうし、監視員はマニュアルを読むだけではなく自ら学んで安全向上に努めるでしょう。人は「お金」だけの価値しか認められない社会では「お金」の分だけしか働きません。しかし、自分の働きが認めてもらえるのなら、それ以上の働きを喜びと共にできます。

それならば別に感謝箱でなくても、帰りに「ありがとう」と言えばいいと思うかもしれません。しかし「ハート革命」はニコちゃんマークなしで達成できたでしょうか？ 旅客課は Good Job カードなしで改革できたでしょうか？ 形あるものの方が強く心に訴え、長く心に残るものです。沢山の人が書いた様々な「ありがとう」が壁に貼り出されれば、どれだけ多くの「やる気」が引き出され、そしてどれだけ多くの「誇り」が得られることでしょうか。

また、感謝箱の設置はプールだけではありません。常に父兄や監督官庁からの非難に晒されている教師のために学校にも是非おくべきでしょう。教師は暮らしているだけの給料を貰っている以上、よい教師は給料の上乗せではなく感謝で報われるべきです。そして親から感謝されているという姿を子どもに示す事は、子どもに「人から感謝される」という価値を示すいい機会になり、学力という価値に偏った学校に、より幅広い価値を生み出す事でしょう。ハート革命で子ども達が目標に向かって突き進めたように、人は近い目標があればそれに向かって努力できるものです。感謝される人が身近にいれば、それだけでも目標を失った子ども達には進むべき目標となる事でしょう。

また、治安を維持する交番や警察にもおくべきでしょう。検挙率の低下は市民の非協力という物理的な問題だけでなく、協力されない事によって自分の価値を感じられなくなったという警察官の心理的な問題もあると思います。警察官が治安を維持している自分の価値をしつかりと感じられるようにする事は、本人のやりがいのためだけでなく日本の治安維持のためにも重要です。

しかし感謝箱をおいたからといって、簡単に感謝の気持ちを書いてくれるほど今の日本人は積極的ではありません。

そこでキャンペーンが必要なのです。

「ありがとう」の一言がどれだけ人にやる気や喜びを与えるかという実例や、感謝の気持ちが普及すればどれだけ日本が豊かな国になれるのかという希望を様々な方法で発表し、「日本は武力でもお金でもなく、感謝によって改革された世界初の国になろう」と呼びかけるのです。

そして、感謝箱をきっかけに人が人を認める世の中になり、人がお金のためだけでなく人から認められるためにも働けるようになれば、人は生きていく分のお金だけでも幸せに生きていく事ができるようになるでしょう。

「ありがとうの国、日本」

この国は、きっと今よりも安全で活気にあふれ、そして幸せな国である事は間違いありません。

参考文献等

- 『SAPRO』二〇〇三年六月一日号小学館（全日空事例）
警察庁書 <http://www.npa.go.jp/hakusyo/index.htm>
流行語検索 http://www.dentsu.co.jp/trendbox/adnenpyo/thama_17.htm
小説の改革 <http://book.geocities.jp/mfpaauthor/index.html>

【佳作】

「岐路に立つ日本社会とあるべき倫理」 〜二つの事案をめぐる〜

千葉県警察本部
国際捜査課 通訳センター

高山 秀幸 (44)

序

日本社会の安全を脅かしたり、社会に不安を醸成した昨今の重大な事件や事故を俯瞰してみると、それらには共通した要因が通底しているように思われる。

ここ一年ほどの間に起き、社会に動揺をもたらした事件をいくつか列挙してみたい。登下校中の児童を

狙った誘拐拉致、そして殺人事件、庶民の生活とはかけ離れた場所で進行していたインサイダー取引、コストを抑えるために建物の構造を簡易化した耐震強度偽装問題、あるいはまだ記憶に新しいところでは、刑務所の刑務官がある特定の受刑者に便宜を図り、その見返りを受け取っていたという収賄事件、など枚挙に暇がなく、如何に卑劣な、かつ嘆かわしい事案が間断なく発生しているかが容易に指摘できる。これら最近の重大事件の間には別に相関性は認められないものの、それらの基底にはある種の共通因子が潜んでいると考えられないだろうか。これらの最近の一連の出来事から事件を起こした当事者たちのすさんだ心のあり方が感じられるのは私だけであろうか。つまり、人として守り行なうべき道、あるいは人間社会の根本規範が彼ら当事者の精神からは完全に脱落していると私には思えてならない。換言すれば、これらの事件の当事者たちにはその人間性を清廉かつ凜呼たるものにするだけの内面を律する厳しい倫理を欠いているのである。個人が社会に対峙する際に備えておかねばならない必要不可欠な倫理、この「倫理の欠如」こそが、このところ社会不安を呼び起こす一連の事件、事故の根底にある共通要因である、と私は見る。

ただし、この「倫理」を論じる際にはこの語句の理解と使用にはいささか注意が払われねばならない。ともすれば、「倫理」という語には厳めしいニュアンスがたゞよい、多くの場合、「倫理」が説かれるとき、体よくお説教にすりかえられている傾向がないとは言えない。また組織で「倫理教養」などがその職員たちに実施される場合、生活を節度あるものにせよとの、異性関係を慎めだのと多分に私生活に介入されていると錯覚しかねない不快感を伴うものとなることが多々あり、倫理とはあたかも口うるさい小言、ある

いは御法度、とほぼ同意語で理解されかねない場合が多くある。こういった理由で、多くの人は実はこの「倫理」という語を耳にすると顔をしかめてしまうのが現状ではないだろうか。

だが、この語をそのレベルだけで捉えて理解してはなるまい。モラルが崩壊しているとしたか思えない現象が続発する中、今一度ここで「倫理」という語を照射し、今日起きている事案と「倫理の欠如」という現象の関連性を真剣に考察せねばならない時期を迎えているのではないか。

本稿においては、まず今日、日本の社会の安全を脅かしている出来事の発生が実は「倫理の欠如」と密接な相関関係があることを論じ、「倫理の欠如」がいかに深刻な事態を社会にまねくかということに論及し、それを踏まえて、ではいかなる倫理の確立が今日必要であるのかを最後には考察することにした。

この「倫理の欠如」と社会の安全を攪乱させる事案の関係を論じるにあたり、拙稿において昨今起こった二つの重大な出来事を俎上に載せてみたいと思う。

一つは平成一七年四月二五日に起きた「JR福知山線脱線事故」、もう一つは同じく平成一七年暮れに発覚した「耐震強度偽装問題」である。

社会に大きな衝撃を与えたこれら二つの事案が「倫理の欠如」あるいはモラルの崩壊といった現象とどういう関係があるのかは追いついて追いついてゆくとして、近年のあまたある事件、事故の中でこの二つを選択したのは、ことによると私も何らかの形で巻き込まれた可能性がなかったとは言えなく、まったくの他人事とは思えなかったからである。そのためかこれら二つの出来事は今に至るまで執拗に私の脳裏から離れることなく、私に何事かを語り続けてきた。そこから私を感じないわけにはいかなかったのは、倫理の不

在が社会の安全を脅かす深刻な事故、事件を引き起こす可能性を常に秘めているという抜き差しならぬ危機感であった。

一 「JR福知山線脱線事故」から考察する

平成一七年四月二五日に起きた「JR福知山線脱線事故」は一〇〇人以上の死亡者と五〇〇人以上の負傷者を出した近年まれに見る鉄道史上に残る大惨事となった。

事故は月曜日、しかも午前の通学、通勤の時間と重なっており、そのため事故を起こした列車には学生、会社員などが多く、自然犠牲者も学生、会社員が多かったのが、この事故の特徴であった。つまりは若くて未来があり、また遺族たちにも将来を囑望されていたであろう人々や、家庭を支えていた人たちが家族を残して不本意にも突如この世を去らなくてはならなくなったわけである。犠牲者本人の無念と残された遺族の悲しみを思うとき、胸の痛むような思いとやり場のない怒りを感じるのには私だけではあるまい。

JR伊丹駅を出て、JR尼崎駅を目指して走っていた快速電車が途中、さしかかったカーブを曲がりきれず、脱線し、そのまま線路脇のマンションの一階の駐車場に突っ込んだというのがこの事故である。

なぜこの電車はカーブを曲がりきれなかったのかという理由は、すでに周知の通り、この電車の当時の速度と関係している。この電車に乗り合わせ、幸い無事であった乗客たちがこの事故の後に「電車は加速し、猛スピードで走りだし、恐怖を感じたほどであった」という意味のことを異口同音に語っている。

曲がりきれなかつたカーブは時速七〇キロを超えてはいけないうことになつていた。が、電車は一〇〇キロを超えて速度で走つていた。

ではなぜ運転手は規定の速度を遵守することなく、その速度をはるかに超えて暴走せねばならなかつたのか。

これも周知の通りだが、運転手は前の駅で、すなわちJR伊丹駅で実は四〇メートルのオーバーランを起こしていた。事故直後、すぐに明らかになつたことだが、この運転手はそれ以前にもオーバーランを起こし、会社規定の懲戒処分を受けている。つまり運転手はオーバーランという「不祥事」を再発させた場合、どのような処分を受けることになるかを知悉していたわけだ。私はこの事故を起こした運転手に同情はない。しかし、この時の運転手の気持ちや態度を付度してやれば、まことに痛々しいものを感じないわけにはいかない。以前のオーバーランですでに懲戒処分を経験していた彼は今度ばかりはなんとしてもそれを避けねばならないと、まさに叫ぶような思いで、ロスした時間のつじつまを合わせるべく、いわば死に物狂いで車両を走らせたにちがいない。ところが彼の藁をも掴まんとする思いから出た思惑に思わぬひずみが生じたのである。彼のこの思惑が結局、大惨事を引き起こす結果になつてしまつた。

だがそれだからといって、この事故の責任はこの運転手の無理な運転にある、などといって話を済ましてしまふわけにはいかない。

仮にそれでこの事故に決着をつけてしまおうものなら、何の事態の解決にもならず、むしろ今後このような事故をこの組織は起こし続けるであろう。

真の責任の所在はこの運転手の心理をここまで追い込む規則をつくった組織にある。つまりは懲戒処分という懲罰は重視しつつも、他方安全対策は軽視していたこの会社のあり方にこそこの事故の責任がある。懲罰重視で安全軽視は本末転倒というべきであろう。この組織は企業倫理を取り違えていた。あるいは真の意味での倫理が欠如していた。

日々激しく、かつ目まぐるしく動く列車の運行には日常気づくことのない大きな危険が常に潜んでいる。このきわどさの中で運営されている組織が最も重視すべきものは安全ではなく、利益だったのである。

オーバーランはなるほど結局、乗客たちに時間の遅れという不利益をもたらすことから、そういう事態が発生すれば、当然会社側としては喜ぶはずがない。しかし今回の事故をみるに、オーバーランの分を取り戻そうとした代償とは乗客一〇〇人以上の尊い命だった。

オーバーランしたうえに、かりに普通で次の駅まで進むと、当然到着時間は大幅に遅れる。乗客たちは憤慨するにちがいない。だが、乗客を怒らせるのと、乗客一〇〇人以上を死に追いやるとでは最終的にはどちらが会社に不利益をもたらすであろうか。

この運転手の行動からは、この会社における運転手への教育のあり方があぶりだされてくる。

「オーバーランした運転手は懲戒処分の対象です」

こういった項目が運転手たちの頭に日々、叩きいれられていたことは想像に難くない。

この会社においては安全を優先させるよりも効率を優先させることに汲々とした教育が行なわれてきたことは容易に想像できる。効率が安全に優先され、安全が軽視された政策がとられた時、どれほど取

り返しのつかない事態を招くことになるか、この点をこそ教育において職業倫理として日々、職員の意識に叩き込むべきではなかったか。

運輸という日々危険と隣り合わせにある組織は効率的に大輸送を行なうことによつて大きな利益を得ている。だが、その効率とは確固たる安全という裏打ちがない時、いかに危険な事態が待ち受けているかを組織を率いる者たちは知らねばなるまい。今あらためて指摘する必要もないほど単純な話ではないか。

一〇〇人以上の命とひきかえに得た教訓などというにはあまりにもむごすぎる。

運輸という使命にあつて最大の利益を引き出すには、可能な限りの安全を確保するという倫理を確立することなくしてはありえないということを組織の指導者たちは完全に忘却していたか、看過していた。

私事になるが、私は関西の出身で、以前関西で勤務していた。その当時、勤務地の一つがまさにこのJR福知山線の路線の近辺にあり、無論、私自身この路線を利用したこともある。が、言うまでもなく、当時、いつかこの路線で重大事故が起きる、などとは予言者でもない以上、私には想像もつかなかった。しかし、事故をはじめて知った時、今もそこでの勤務を続けていたと仮定するならば、あるいはその日、その列車に乗り込み、その大惨事に巻き込まれていたという可能性もないとは言えない、と慄然とする思いを抱いた。あの事故に巻き込まれて死亡した人、あるいは負傷した人、の一人というのは仮定の中での私であった。だが、その慄然たる思いは直ちに怒りに変じた。自分自身、その正体のわからぬ怒りの実体はなんだろうと、その感情の原因を解きほぐして考えたところ、利益に優先すべき可能な限りの安全の確立という最も基本的な倫理がすっぽりとあの組織には抜けていることに対する不快感、憤りであることに辿り着い

たのである。大きな組織にあって、「倫理の欠如」という状況が如何に凄惨な事態を招くかという現実を目の前に突きつけられた時、私はこの考察についての筆を執らないわけにはいかなかった。

二 「耐震強度偽装問題」から考察する

「耐震強度偽装問題」といういわば人々の建物に対する信頼を根底から崩し、突如、社会に不安をかきたてたこの事件が発覚したのは、平成一七年の暮れ、はからずも先に論及した「J R福知山線脱線事故」と同じ年だった。

周知の通り、「耐震強度偽装問題」とは、一級建築士が建設会社に乞われて、コストを安く上げられるよう、建物の構造を簡易化し、耐震強度のないマンションをいくつも設計し、それが現実に建物として完成し、販売されてしまったという問題である。

この問題が明るみに出たとき、当然なことに我々国民は驚愕したが、さらに我々を啞然とさせたのは、この一級建築士の責任回避ともとれる証言であった。「建設会社の社長に乞われ、生活のためにやらざるを得なかった」という意味の発言をこの一級建築士は行なったのである。

かりにも一級建築士というのはこと建築に関して、他の追隨を許さないうちはぬけた見識と技量、そして経験、さらにはそれに立脚した良い意味でのプライドを持っている人であることではあるまいか。無論、社会的にも揺るがぬ信頼と尊敬を抱かれています人であることはいまさら指摘するまでもない。ところが、それが一建築会社の社長に乞われるままに、耐震強度を偽装するとはどういうことであろう。仮に不正の実行

を乞われたのならば当然それに屈することなく、道理をもって逆に相手を説き伏せ、不正を行なうことによつて如何に大きなつけがまわつてくるかを相手に判らしめる、というのが一級建築士ほどの人の本来取るべき態度ではなかったか。ところがこの一級建築士はプライドも見識もどうでもよい、とばかりにそれらをかぎり捨てて、社長の言いなりになり、耐震強度を偽装し、マイホームを取得した人々の信頼と夢を裏切つたのである。

また一級建築士の発言である「生活のためにやらざるを得なかった」という生活とはどのような生活を指しているのだろうか。一般大衆の見るところ一級建築士ともなればその社会的地位の高さやその専門性から考えて、多額の収入を得ている、と考えるも無理からぬところではないだろうか。一級建築士ほどの人が不正を行なわなければ生活が立ち行かなくなつてしまうのなら、誰が生活を立ち行かせることが出来るのだろうか。一級建築士ともあろうものが、そのような言い逃れなど真に受ける者など誰一人いないことすらもはや判らなくなつていたのであろうか。

この「耐震強度偽装問題」の責任はこの一級建築士一人にあるのではない。一級建築士に耐震強度偽装を依頼した建築会社の社長も同様に糾弾されねばならないことは言うまでもないが、国民がさらに驚いたのはこの社長自身、自己の責任を認めず、逆に責任を他に回避する発言を行い、恬として恥じざる態度を示したことであった。

我々国民の驚きはこれだけでは終わらなかつた。本来建築の段階でその偽装を見破らねばならない指定確認検査機関がどうか偽装を見逃していた事実が発覚したのである。偽装が行なわれていたとし

たらそれを見抜き、指摘することが本分であるはずの検査機関がなんの役にも立たなかったことになる。たとえて言うならば、眼前で行なわれている窃盗を警察官がただ手をこまねいて傍観し、犯人にやすやすと逃げられてしまうようなものである。当然国民は怒るであろう。

さらに我々国民を一層驚かせたのは、一級建築士、建設会社、さらには指定確認検査機関の事件の渦中にある人々がこともあろうに、自己の責任を回避し、他人、他の組織への責任のなすりあいも外聞もなく行なわれたことである。その様子はもはや滑稽でしかなく、国民の怒りを通り越して失笑をすら買った。これら三者の中で、日本において建物が耐震強度を備えておくことがどれほど死活問題に関わるほど重要なことであるかを真に理解している者はまったくなかったと言つてよい。

周知の通り、日本は地震多発国であり、いつ激震が大都市を襲つてもおかしくはない。そのような地理的条件化にある国で、耐震強度の完備はマンシヨンのような密集型高層建築が備えるべき最低条件の一つと言えるであろう。このような国で耐震強度を偽装するのは「万一の時には建物の下敷きにでもなつて死んでください」とでも言うようなものだ。これは人々の信頼と社会の安全への不遜なる挑戦である。

一九八五年九月のメキシコ大地震では、震源地がメキシコの遙か沖合いであつたにも関わらず、最も甚大な被害を被つたのは沿岸部から四〇〇キロも内陸の首都メキシコシティであつた。多数の死者、被災者が出たこの大震災の後、専門家たちが崩壊した建物の調査を行なつたところ、構造上の欠陥が指摘された。この自然災害がもたらした被害はまた人災でもあつたのだ。安易な建物を造ることがどれほど社会に危険を孕はらませることになるか、メキシコ大地震はすでに我々に教えてくれているのである。

私事になるが、平成一七年の秋、私はマンションを購入し、家族と共に移り住んだ。まことにささやかな物件で、マンションとしてはとりわけ安く、決して人から羨望の目を注がれるような代物ではない。現に私のマンションを訪れた人でそれを羨ましがった人はまだ一人もいない。が、それですら私のわずかばかりの収入からローンを支払うのは家計に大きな負担を強いることになっている。この苦しみを経つつ、その建物の一室に居をかまえているのである。で、この「耐震強度偽装問題」が明るみに出たのはその後であった。名状しがたい驚きと不快感に襲われたこの時のことは忘れがたい。よりによって私たちがマンションに入居した直後、この問題が発覚したのである。

（あるいはこのマンションも・・・）そう疑うのは人情というものであろう。幸い、後日、マンションの掲示板に「このマンションは事件の渦中の建築士や建築会社とは何の関係もありませんのでご安心ください」と出され、ひとまず胸をなでおろした一幕もあったが、このようなタイミングでもあり、あるいは自分も耐震強度を偽装されたマンションを買わされていた可能性がないわけではない、そしてこの事件の被害者となっていたかもしれない、そう思うとこの「耐震強度偽装問題」をまったくの他人事たにんじとしては考えることができなくなったのである。

この事件ほど、渦中にある人々が「倫理の欠如」をあらさまに露呈した事案は近年なかったのではないか。

本来廉潔、かつ高潔なる倫理で行動を突き通さねばならない貴顕たちがあたかも倫理をゴミのように捨て、一顧きんだにせず、その代わりとして、驕きょう恣しなる利潤追求だけに燃え、自分たちの不正が露見した時、相

手に責任をなすりつけ合う泥仕合を繰り広げたのである。

社会に影響力を持つ人や組織が「倫理」を忘れ、身勝手な振る舞いを続けたとき、如何に社会の安全が脅かされ、人々が不安に震えなければならぬかをこの「耐震強度偽装問題」は雄弁に物語っている。

三 あるべき倫理の確立をめざして

ここまで「JR福知山線脱線事故」「耐震強度偽装問題」を考察し、本来社会においてまことに重い責任を担っている人々が凜然たる倫理を忘れ、利益追求第一の姿勢を取っている時、いかに深刻な事態を社会に招くことになりかねないか、という問題に論及した。

たとえば「JR福知山線脱線事故」においては、徹底した安全指導こそが本来この運輸を行なう組織にとつての倫理であったはずだ。即ち、この倫理がこの組織においての危険と破滅に猛進しないためのブレーキにほかならなかった。安全信仰を叩き込まれていなかったあの運転手の電車には倫理というブレーキは備わっていなかったのだ。

一方、「耐震強度偽装問題」においては、動く電車とは異なり、動かぬ建築物の陰で、渦中の人々が良心よりも利潤を選び、不正の道を爆走していた。彼らの疾駆にもやはり倫理というブレーキは落ちこぼれていたのである。

これでわかった。「倫理」とはある特定の人の側だけに都合よくできているお説教や御法度などではない、社会という乗り物に安全をもたらすためには決して欠かしてはならないブレーキなのである。アクセ

ル、に比してブレーキの存在とはまことに地味に見え、そこには魅力が感じられないかもしれない。しかし「倫理」というブレーキの存在の重要性を知覚したとき初めて社会に安全が確立する一步が踏み出されるのである。

ではその点を踏まえて考えるならば、今日、日本の社会にはどういふ倫理が求められ、必要とされているのであろう。

「耐震強度偽装問題」の聴聞会において、各自が自らの責任を逃れようとすることに汲々とする態度を目の当たりにして、多くの人はこれが我々と同じ日本人であろうか、と忸怩たる思いを抱くと共に、日本人とは昔からこうだったのだろうかと自分の民族の倫理史にまで思いを馳せざるを得なかったに違いない。モラル崩壊現象があらわれ、次々と社会に深刻な事態を引き起こしている今日、昔の人々の倫理はどうだったであろうと過去の記録を紐解くとき、ある時代の日本人たちは今日からみれば別の民族であったのではないかと疑われるほど、厳格たる倫理を持ち、私欲を払拭していたことに気づかされる。

とは言え、「昔はよかった、それにひきかえ今の若い者は・・・」などという、現在を託ち過去のみを黄金時代として偲ぶ爺むさい愚を犯してはなるまい。無論、昔にも倫理のあり方が問われるような汚職事件はある。

しかし、そのことを踏まえてすら、この国の歴史を振り返るとき、自己を抑制し、人格の廉直に裏付けられた気高い倫理を有した名士たちに多く出会うのはどういふことであろう。

たとえば幕末から明治初期にかけて活動した薩摩藩出身の西郷隆盛。

カトリックやプロテスタント、あるいはイスラムの国々では人々の倫理は宗教に求められ、宗教教育によって人々は倫理に目覚め、それを体得してゆく。この点、日本では事情が違っている。『聖書』や『コーラン』という倫理の教科書を持たぬ日本の場合、倫理のあり方を必ずしも宗教に求める必要はなく、それは歴史の人物の行動、言論に求めることが可能である。となればその人物とは私利私欲とは無縁で、あくまでも高潔な倫理に従って行動し、後世の人々に明るく清潔な印象を与えている者でなければならぬであろう。このように考えをめぐらせる時、どうしても私の脳裏から離れることがないのがほかならぬ西郷隆盛なのである。この人物が披瀝した思想が『西郷南洲遺訓』に残っている。そこに記された見解はいつでも真摯で気迫がこもり、時代を超えて倫理たるものこうあるべきではないかとうなずかせられる。その中に次のような節がある。

万民ばんみんの上に位する者、己おのれを慎み、品行を正しく、驕奢きょうしやを戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に思ふ様ならずは、政令は行はれ難し。1

己おのれを愛するは善からぬことの第一也。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過あやまちを改むることの出来ぬも、功に伐り驕謾きょうまんの生ずるも、皆みな自ら愛するが為なれば、決して己おのれを愛せぬもの也。2

ここに言う万民の上に位する者とは、当時はいわゆる施政者を指したのであるが、現在に生かす倫理

として我々がこの一節を玩味する場合、この語を社会、組織のリーダー的存在などと解釈してもよいだろう。西郷はリーダーたるものはいかに責任が重いかを端的に、力強く説く。西郷の言葉があたかも清冽に触れるように我々の心を打ち、思わず居住まいを正したくなるのは彼の言葉と行動が矛盾なく一致していたからにちがいない。つまりは嘘がないのである。指導者と呼ばれる人の中には美辞麗句を並べながらも、それとは正反対の行動を行なったり、自分だけはぬくぬくとした場所におさまり、人を使^{しそ}喚^わし、反社会的な行爲を行なわせるといった手合いがいる。

が、西郷はまったく違っている。幕府が倒れ、明治を迎えたとき、西郷はそれこそ明治政府そのものと言ってよいほど巨大な存在で、権勢を振るおうと思えば、意のままに振るうことも出来たであろう。ところが彼自身、汚職や豪奢な生活とはまったく無縁で、質素そのものの生活を送り、虚飾など寸毫もなく、自己愛をも払拭し、恬淡とした自己を確立していた。それだけに西郷の言葉は信頼に足り、また今日日本人に欠如している倫理が彼の言葉の中にある。

進歩と発展の美名の下に、利潤と効率をひたすらむさぼるように追求することが大前提となっている現在の時代、施政者や名士たちはあるいは西郷の言葉などまことに古めかしい、時代錯誤の遺物にすぎぬと一笑に付すかも知れないが、日本の近代のスタートラインにはこのような清廉そのもののような人物が社会の礎を築き、はじめてその後、国の発展が可能になったことを忘れてはなるまい。

人は自分がどういふ時代に生きているのかは、なかなか見えてこない。過去を振り返ってはじめてその時代が実は歴史的な分岐点であったと気がつくときもある。倫理の考察とはある意味ではあまりにも堅苦

しく思えるかも知れぬが、倫理のあり方という観点から見れば、我々の生きる日本社会は実は今、岐路に立っているという緊張感を私は抱いている。このまま倫理の欠如を見逃し、社会を衰退させてしまうのか、あるいは今一度ここで過去の至言から倫理を甦らせ、日本社会を芯のある筋肉質なものへと再生して行くのか。私はためらうことなく後者の選択を主張する。いずれかの選択と、これからの日本を担うのは現在の日本人にかかっているが、後世から見ても、あの時倫理の再生が図られたからこそ今日の日本があったと人々から感謝されるような社会をつくる機会は今をおいてはない、私はそう考える。

1 山田済斎編、『西郷南洲遺訓』、p. 6、岩波書店、二〇〇六年一月二五日、第五三版。

2 同、p. 14。

(注) 引用部分は現代仮名遣いに書き改め、仮名をふった。

文中の一級建築士はその資格を剥奪されたが、事件が明るみに出る以前に行なった耐震偽装について言及したため、本稿では元一級建築士とは記さなかった。

【佳作】

少年事件の背景と倫理観の変化について

無職 元福島県立高等学校教頭

栃沢巳知夫 (77)

一 今日少年事件の実態

さる七月一五日、読売新聞の朝刊は、秋田県藤里町の小一男児殺害事件の続報を伝えた。全国に大きな波紋を広げた事件である。だが私が注目したのは、この続報が、多くの読者を持つ中央紙の一面トップに掲載されたことである。折から、日本外交は緊迫した局面を迎えていたのである。

北朝鮮の国際世論を無視した弾道ミサイル発射に関する、国連安全保障理事会が開催されていたのである。この暴挙に対する非難決議案の採択はどうか。我が国の外交や防衛上の問題だけでなく、近隣諸国にも大きな影響を及ぼす問題で、国民はその動向に注目していたのである。だが新聞は地方の町の一事件を一面トップに掲載した。なぜだったのか。

編集者の並々ならぬ危機感を感じたのである。

今や犯罪は、時、所、年齢、性別を問わない。しかも間断なく発生している。犯罪はもはやある特別の地域だけではない。いつ、どこで発生してもおかしくない。対策は焦眉の急。私は編集者には、このような判断があつたと思つたのである。

報道の直前、滋賀県内では、わずか二歳の女児が、父母の虐待で死亡という事件が起こっている。理由はご飯を食べるのが遅い。イライラする。ただそれだけで、幼児の食を絶ち、棒で殴った。無抵抗の幼児は、声をあげて泣くだけだ。するとこの両親、まだ足りないかと、今度は浴室の熱湯を浴びせた。哀れな幼児は間もなく息絶えた。

想像もできない鬼畜の犯罪である。だがこの事件の一カ月半前、私が住んでいる福島県郡山市の近くでも、同様の事件が発生したのである。

この両親による三歳児の虐待は、七月三〇日の報道で明らかになり、県内はもとより、全国に大きな衝撃を与えた。

食物を与えず、暴行を加える。前記と同じである。幼児の死亡時の体重は、わずか七・九キログラム、

生後六カ月の乳児程度だったという。家庭という外界から閉ざされた空間で、しつけという名の虐待が、実の親の手で繰り返されていたのである。

法務省の犯罪白書によると、平成一六年の刑法犯検挙人員は一二八万九、四一六人。このうち少年は一九万三、〇七六人。戦後最高を記録した平成一四年よりは減少しているが、なお高水準を保っている。

少年犯罪で目立つのは次の点である。第一は、骨肉の相剋が絡んだ殺傷事件である。例えば、六月半ば奈良県内で発生した、高一男子の自宅への放火、母、弟、妹を殺害した事件。また一年前、東京の男子高校生による両親の殺害、住まいをガス爆発させた事件。最近では中一男子が自宅へ放火、小六の弟焼死の例や、母親を金槌で殴って殺害した大学生の例がある。

第二は、下校途中の幼い子供が凶悪犯罪の被害者になるケースである。

例えば、冒頭の秋田県の主婦の犯罪を初め、奈良市の下校途中の小一女兒が、性犯罪歴のある三六歳の男に誘拐されて殺害された事件。栃木県内の小一女兒が、下校途中に行方不明になり、三三時間後、茨城県内の山林で遺体となって発見された事件である。

第三は、犯罪とはまったく関係ない学校内での、児童生徒の加害、被害事件である。例えば、小六女兒の刃物による同級生の殺害。また中一男子の女性教諭の殺害。加えて、外部の不審者の侵入による殺傷事件である。

これらの事件で浮かんできるのは、犯罪の低年齢化である。また、子供を狙った凶悪な犯罪者が至る所に潜伏していることだ。このような実態だから、今は安全や安心は、空気のようにタダではない。最近の

内閣府の調査では、「子供の犯罪被害」について不安を抱いている人は、七四パーセントという高率である。犯罪は決して他人事ではない。

二 犯罪発生背景

(一) 戦後の犯罪の特色

犯罪は「だれ」が発生させるのか。また、「なぜ」起こるのか。

この基本的な観点に立てば、我々は人間そのものと、人間が生活している環境、すなわち人的（家族、友人、成育歴、価値観等）物的（資産、経済状態、時代の文化風俗等）すべての環境に目を向けなければならぬ。一連の犯罪は、今、突然の発生ではない。それはかなりの時間と、この間関わった人間と、その人間が形成した社会との相互作用によって発生しているのである。

以下、戦後の混乱期から現在までの犯罪と、人間の内面（倫理、道徳観）についてとらえてみたい。六〇年という長期的な目で眺めると、犯罪、倫理観、ともに変化の様態が鮮明になるからである。

一九四五年、昭和二〇年八月一五日は太平洋戦争終結の日である。

国家の崩壊。それは法の無力化と伝統の価値の消滅にほかならない。

国民の規範意識と罪の意識の低下は、敗戦後の混乱によって生じた深刻な食糧難とインフレの影響が大きい。食糧危機と経済危機、この二つが国民を襲い、法の存在を忘れさせ、罪悪感を放棄させたのである。今から六〇年前のことである。混乱の中を彷徨っていた私は、極限下の人間のなりふり構わぬ姿を目撃

した。いや、人のことなどとやかく言えない。この純粹アプレの自分もその一人であったのだ。終戦間もない頃の犯罪の実態は次の通りである。

昭和二十一年の少年成人刑法犯合計の検挙人員は、四四万五、四八四人、このうち少年（一〇歳以上二〇歳未満）は一一万一、七九〇人、全体の約二五パーセントである。五年後の昭和二十六年は、少年成人合計六一万九、〇三五人。このうち少年は一六万六、四三三人、全体の約二七パーセントで、少年、成人ともに増加、この年の前後が、犯罪発生第一の波である。

犯罪は「時代を映す鏡」とも言われているが、この時代は、混乱した世相を反映した、青少年の集団による凶悪犯罪が多い。

中学生の窃盗団、白米、衣類、酒、靴、おもちゃなどを盗む。

一七歳の三人組、金がないから強盗でもやろうと、宿直の社員を惨殺す。

一三名の若者、ピストル強盗団を結成、都内、近県を荒らして逮捕。

だが敗戦後の犯罪を最も鮮明に映していたのは、国民挙げての闇行為である。食糧を初めとする生活物資の不正な売買である。

明らかに法律違反である。まぎれもない犯罪行為である。

だが国民は、むしろ、これを生活の最重要課題と認識し、米、麦、イモなどを求めて、西へ東へと狂奔したのだ。この闇買いがなければ生きてゆけなかったからだ。それは一司法官（山口良忠判事）が、身を犠牲にして実証したことからも分かることである。

「飢餓賃金」と「草根木皮」の食の実態は悲惨である。

米が一粒もなくなり、ギシギシという不気味な雑草からツツジの花まで食べた。落ちて腐ったカキの実を食べた。沼のカエルを醤油で煮込んで食べた。ハエのびっしりたかった残飯を食べた。雨にぬれ、すっぱくなつたうどん粉と豆カスだけの日が続いていた。お菓子の絵を描いて空腹をまぎらした。みんなの前で歌ったり、踊ったりした。食べ物を貰うためだった。玄米のヌカ、小麦のフスマ、とうもろこしのカスも常食。拾い上げたらきりが無い。人には言えない恥の多い、屈辱にまみれた暮らしである。

イギリス経験論の先駆者、Tホッブズは、名著『リヴァイアサン』において、国家や合議体成立以前の人間、つまり自然状態の人間を凶暴なオオカミにたとえている。すなわち、それぞれは感覚的な欲望のままに行動し、ついには「万人の万人による鬭争の世界」を出現させるといふ。

国家が崩壊し、無法社会同然となった敗戦後は、まさに弱肉強食、利害と打算の渦巻く時代だった。この混乱に便乗し、苦境にあえぐ庶民をよそに、莫大な富を築いた、狡猾な闇のブローカー達も暗躍していたのである。

国民挙げての違法行為。かつて、このような時代があっただろうか。戦前よりもより、戦後六一年経った現在まで、ただの一度もなかったのである。

(二) 経済成長の歪み

衣食住、すべてが悪化していた混乱期の犯罪は、荒んだ人間性と劣悪な生活環境が深く関わっている。この飢餓の時代から、所得の上昇と豊富な物資に囲まれた経済成長期、そして今の飽食の時代の様子はど

うなのか。

日本経済の復興の端緒となったのは、一九五〇年に勃発した朝鮮戦争である。

この他国の戦争が、皮肉にも戦争で崩壊した日本経済を奇跡的な復活へ向かわせたのである。いわゆる特需ブームである。

アメリカ軍や進駐軍への物資やサービスの提供、また諸国の軍事拡張路線による貿易の拡大、これが我が国の工業生産の上昇をうながし、その驚異的な成長が、やがては世界第二の経済大国へ到達させる。

一九五六年の経済白書は「もはや戦後ではない」を宣言。以後の所得倍增計画の発表、神武景気、岩戸景気、オリンピック景気、いざなぎ景気、列島改造ブームによる成長は、個人所得を飛躍的に伸ばした。

白黒テレビ、自動洗濯機、電気冷蔵庫の「三種の神器」から、カラーテレビ、カー、クーラーの「3C」の時代へと進展、あれよ、あれよという間である。

この目を見張るような成長は、当然、国民の意識も大きく変えた。

あたかも戦中戦後のみじめな暮らしを挽回するかのようになり、豊かな暮らしを競う時代へと進んでいったのである。国民の衣食住は一変した。内面的変化も著しい。新しいライフスタイルへの脱皮である。

生きる価値を何に求めていたのか。これまでの国家主義、統制経済とは一変した、自由社会の自由経済である。個人の権利が尊重される社会で、国民に共通していた価値観は「感覚的な欲望の充足」である。

より豊かな暮らし、より便利で快適な暮らしの追求。それは、ベンタムやミルの功利主義に登場する「人間の幸福」とは、「快楽の最大量の獲得である」を彷彿させる暮らしであり生き方である。モータリゼーショ

ンの進展、爆発的なレジャーブーム、マイホーム主義などは、その典型とも言えよう。

ファミリーレストラン、ファストフードなど外食産業、二四時間営業のコンビニ、自販機などの普及、豪華なレジャーランド、さまざまな娯楽、遊技場の賑わい。各地の山々を縫う観光道路、広大なゴルフ場、林立する保養施設。

質素、節約、儉約、など、かつての日本人の価値観は、国内の隅々まで広がった「消費は美德」、「消費者は王様」の扇動で追放されたのである。

大量生産と大量消費。例えば猛烈な勢いで増え続けた車は、早くも国民皆免許の時代を予感させたが、車は一家に一台から家族それぞれへと向かう。

だが繁栄の歪みは同時並行で進んでいた。

企業の公害や大気汚染、自然環境の破壊とともに、六〇年代からの交通事故による犠牲者（最高昭和四五年・死者一万六、七六五人、負傷者九八万九六六人）である。それは同時にドライバーのモラルの低下と不安定な内面を語っている。おびただしい法規違反、悪質な飲酒やひき逃げ事故の多発である。

そして七〇年代から八〇年代にかけての、少年の問題行動の発生。

万引き、窃盗、自転車盗、喫煙、飲酒、夜間はいかい、暴走行為、シンナー、薬物、性非行など、いわゆる遊び型の非行犯罪が表面化する。

一方、所得の伸びは、国民の歪んだエリート意識を育てた。誤った職業観と高学歴志向の風潮は、高校、大学の進学率の上昇をうながした。

高校は義務制の小中学校と同様に、全入の時代へと向かう。だが大量の学習不適応と中途退学が、新たな問題として浮上した。児童生徒の学校に対する意識も、年を追うごとに変わっていった。集団の秩序を維持する校則は、自由の名のもとに形骸化し、乱れた服装や授業中の勝手な行動となって現れ、教師に対する反抗、校舎や器物の損壊へと進んでいった。学習塾の乱立、激しい受験競争は学力テストの点数や、偏差値の上下に一喜一憂し、誤った進路の選択や骨肉の確執から、親と子の悲劇へとエスカレートさせた。平成の今は、これらの問題が未解決のまま、陰湿ないじめ、家庭内暴力、刃物による殺傷や放火、さらに自殺事件である。

少年をめぐる非行や犯罪は、今日ではすべて出尽くした感がある。

特に注目すべきは、高度に発達した情報社会を反映した、犯罪の「広域化」である。テレビは部屋ごと、携帯電話は高校生のほぼ一〇〇パーセント、小学生の二〇パーセント以上が所有という現状である。インターネットのホームページや電子掲示板、各種メディアによる膨大な情報、さらに陸、海、空、交通網の整備と一人一台という車社会である。豊富な情報と車との合体は、かつては凶悪な犯罪とは無縁だった、静かな農山村をも一変させた。

純朴だった山村でも出会い系サイトで呼び出して、集団暴行、金銭強奪、あげくは殺害という少年犯罪である。成人式の代表に選ばれた大学生が、誓いの言葉とはうらはらはらな集団リンチに加わり、相手を殺害、山林に埋めるという現状である。非行や犯罪は時や所を問わないのだ。性別年齢なども関係ない。

三 時代の変遷と倫理道德の変化

国家の崩壊。それはとりもなおさず、国家の根幹をなす、伝統の価値の消滅である。日本軍国主義の精神（忠君愛国、国体護持、滅私奉公、一億玉砕）は、一九四五年の敗戦であとかたもなく消えた。荒廢の中に残ったのは、延々と続く生活苦と、しらじらしい虚無感だけだった。だがよく見ると、この廢墟の中にも、かすかに息づいていたものがあつた。それは名もない雑草のごとく、名もない庶民の心に残っていた至高の「愛」である。

残っていたのは配給のリングが一個だけ、栄養失調の母親は、これを赤ん坊に与えて、自分の死を早めた。

せめて子供にだけとは、イノシシやムジナのような野荒しに加わつた母親が、一個のイモ泥棒で捕まった。

長女の娘が、家族のためにと自分の食をけずり、仕事と闇買い出しで心身を消耗、ろくな医療もなしに二四歳の命を散らした。

子供の命、家族の命、この命だけは、たとえ我が身に代えても守るといふ、最も崇高な犠牲の精神である。この家族道德が堪え難い飢餓の中でも脈打つていたのである。それはむしろ、より強固に苦境にあえぐ家族の支えとして、日常のあらゆる場面で發揮されていたのである。

この貧しい暮らしは、五〇年代の半ばまで尾を引いていた。

だが子供達は復興に汗を流す父母の背中を見て育った。少年は荒地を耕して種を蒔いた。幼い子供は空腹に耐え、どんな粗末なものでも余さずに食べた。弁当がなくても学校へ向かった。遠い山道でも休まずに通い続けた。たまには小学校や道草もあった。だが後に続発する登校拒否などはなかった。理由のない欠席は恥であり、墮落であり、罪悪だと思っていたのである。

子供の世界である。トラブルやケンカも付きものだった。だが相手を怪我させたり、殺したりはしなかった。子供ながらも限度をわきまえ、抑制の意思が働いていたのだ。教師のビンタや拳骨もとんでいた。だが人権侵害などとわめく子供も親もいかなかった。自らの非を認める率直さがあったのだ。そして双方の信頼がそれを支えていた。放課後のさまざまな遊び、山登りや水遊び、夜の宿直室には子供達が集まって、教師と彼らの明るい声が響いていたのである。

狭い部屋で、きょうだい一緒に学習していた彼らの多くは、中学校を卒業すると故郷を後にした。「金の卵」の彼らは、集団就職列車に乗り込んで、見知らぬ都会へと向かったのである。一四、五歳の少年少女達。父母達は、この健気な我が子を涙で見送り、無事を祈った。子供達は、この愛に応えようと、未知の世界にめげずに、ひたすら自己実現に努めたのである。

すべての行動には、正、負、何らかの代償が付きまとう。

勤勉、忍耐、節約、儉約、奉仕、そして工夫、創造、これらは、すべて時空を超えた普遍的な価値である。にもかかわらず、この貴重な道標は、あたかも封建社会の遺物か、大日本帝国の残骸のように無視されて、繁栄の中へ埋もれていくのである。

終戦から一五年後の一九六〇年、政府は国民所得倍増計画を発表した。

戦後の復興を終えた我が国は、一九六四年の東京オリンピック開催を機に、高速道路や新幹線、大型公共工事、さらに貿易の拡大などで、長期の経済成長をめざしていく。

個人所得の上昇は、消費社会のさらなる拡大をうながした。

この中で戦中戦後の言語に絶する暮らしは、いつか架空の話のように遠ざかり、あの愛情に満ちた家族のモラルも、しだいに色あせていったのである。

四 問題解決への提言 腕(かい)より始めよ

このほど国際通貨基金（IMF）は、日本経済はデフレが終了し、力強い回復軌道に乗っていると評価した。企業の生き残りをかけた再編やリストラが、従業員の賃金や購買力の上昇につながったと見ているようだ。

だが一方では、例えば財政赤字で悩む自治体が増えている。絶対倒産しないと信じていた地方自治体が巨額の借金を抱えて、財政再建団体の申請を出している。景気回復の兆しは見られるものの、大きな消費ブームは期待できないのが、日本経済の現状ではないのか。

この中で凶悪な犯罪だけは、少年成人を問わず後を絶たない。

犯罪のない、平和で安全な社会をつくるには何が必要か。

乱れた生活環境の改善、警察官のパトロールの強化、自治会やボランティアの通学路の見回り、夜間街

頭補導の強化、学校の監視システムの強化、防犯教室の充実と社会道德の涵養、家庭や地域社会の防犯意識の高揚。犯罪の国際化に対応するための各国との連携強化。

いずれもゆるがせにできない対策だが、戦後の混乱期から、繁栄の絶頂期までを過ごした私は、特に人間形成の土台をなす「基本的生活習慣の確立」と、子供の未来に向けての「価値観の形成」を挙げたい。幼児期からのしつけや教育が、人間の生き方に深く関わっているからである。

(一) 基本的生活習慣の確立

授業中、勝手に席を離れる。大声をあげて走り回る。きちんとした挨拶ができない。整理整頓ができない。物を粗末にする。何かというときすぐお金。

忍耐力がなく、すぐキレる。集中力がなく作業が長続きしない。時間のけじめがない。親への依存が強い。

このまま育っていったら、彼らはどんな大人になるだろう。彼らが、もし、家庭を持って子供の親になったとき、どんな子育てをしていくだろう。

善悪のけじめ、公共の場でのマナー、周りの人との協調性、欠乏に対する忍耐力、他者をあてにしない独立心、発見のための工夫や創造。これらはすでに四〇年も前から指摘されてきた問題点なのだ。だが、それが身に付いていない。

今の親は「家庭教育の責任を果たしていない」

これも一〇年前の世論調査の結果である。七〇パーセントの人が、子育てに対して疑問を持っている。

今もおそらく同じだろう。厳しい指摘だが、少年をめぐる事件が相次いでいる今日では、これが人々の正直な気持ちだと思う。

親の過保護と無関心、また強引な価値観の押し付けが、子供の自立の心を奪い、問題解決能力を弱めている。体は普通に育っている。だが内面の幼児性がいつまでもぬけない。体と心、このアンバランスな状態が問題なのだ。

自分の行動の意味が分かっていない。結果についての見通しが甘い。回り道の思考が働かない。困難に挑戦する意欲が乏しい。内面は、すべて短絡的で、非行や犯罪に傾きやすい。

一見、普通の少年である。何の問題のなさそうな少年が多い。普通の家庭の普通の少年、だから、殺人や放火などが起こると世間は驚愕し「信じられない」の大合唱である。まさか、あの幸せそうな家庭の、あの子供が、と。

だが、何の理由もなしに非行や犯罪は起こっていない。

忙しくて余裕がない。暮らしが楽でない、しつけどころでない。いちいち構ってやる暇などない。子供は保育所に預けた。幼稚園に任せた。学校の先生が教えてくれる。こうした子育ての意欲の喪失と、他者への安易な依存、また親自身の奔放な生き方。少年達の不可解な行動は、これら問題と絡んでいる。

非行や犯罪は、少年だけの問題ではないのだ。我々の生きている、この社会風土からも発生しているのだ。少年個人の責任だけではない。この社会を形成した、我々大人にも大きな責任があるのだ。

子育てに自信が持てない。子供とどう接触していいのかわからない。公園のベンチで、途方に暮れてい

る若い母親が浮かんでくる。

今の母親のうち「子供の世話をしたことがない」は約六〇パーセントである。

昔は赤ん坊をおぶって登校した子供もいたのだ。中学や高校の教育に、子育てで体験学習などを考えてはどうか。しっかりとした子育てへの予備体験だ。安心して子育てのできる環境の整備と、不安を除くための対策が必要だ。

バランスのとれた子育ては容易ではない。

だが子供の基本的なしつけや教育は、厄介ではあるが、幼児期からの養育態度にかかっている。学級崩壊を起こすような小学生からでは遅いのだ。白紙のように純粋な幼児期からでなければ効果は薄いのだ。

希望と絶望、優越感と劣等感、優しさと残酷さ、反抗と妥協、この相反する気持ちと同時に抱え、たえず右へ左へと揺れている内面、この不安定で矛盾に満ちた心が中高校生の世代である。

心理的には最も危険な世代である。いつ、どこで、何が起こるのか。どういう結果をもたらすか。本人自身が分かっている。この危機を乗り越え、健全な成長をはかるには、幼児期からのしつけや教育が重要である。中高校生の段階で、いくら健全育成を叫んでも、しょせんは対症療法にすぎないのだ。

家庭のきまり、家族との約束ごと、食事や遊びのマナー、友人関係、興味の対象、公共の場でのマナー。これらを通して、何が問題なのか、親自身、自らの問題と受け止めながら、子供と接していく必要がある。同時にたっぷりと周りの自然に触れさせる。身近な動植物との触れ合いを体験させる。美しい絵や音楽、読書などで、豊かな情緒を育んでいく。この中で、人間の生命の価値や尊厳に気付かせるのだ。

すべては平凡なことだ。この普通のことを着実に積み重ねることである。

(二) 未来へ向けての価値観の形成

さる七月二日の滋賀県知事選で、無所属の女性候補者が、自民、公明、民主、三党の推す現職候補者を破って当選した。選挙は当初、現職優勢と報じられていたが、実際にふたを開けると、新人の女性候補の勝利である。

勝利につながったのは「もつたいない、もつたいない」の連呼のようだった。この極めてシンプルな訴えが、有権者の共感を呼んだのだ。

何を今さらと、少々白けた気もするが、有権者には新鮮に響いたようだ。

だがこれは、日本人の伝統のモラルの一つ、「節儉の徳」に結びついているのである。飽食の今、それが忽然とよみがえったのはなぜなのか。

それは贅沢に慣れた我々への反省の呼びかけだ。この平和で豊かな社会。戦争もなければ徴兵制度も飢餓もない。目もくらむような豪華な品々、溢れるほどの食品、パンや弁当などの残飯は一日約六千トン（東京都）、日本国内で捨てられる残飯は約七百万トン。不況もリストラも犯罪もどこ吹く風である。

もつたいないは、この空恐ろしいほどの社会で、何の違和感も持たずにいる我々への警告である。

この節儉の呼びかけは、単にケチや浪費を語っているのではない。古くから、我々日本人の精神形成に影響を及ぼしてきた、古代ギリシャの哲人、アリストテレスの「中庸の徳」や仏陀の「中道の実践」にほかならない。

極端な苦行主義（ケチ）でもなければ、極端な快樂主義（浪費）でもない。欲望の過多と過少の中間の最も安定した状態である。

基本は、まず何が真実なのか。何が偽りなのか。現実（社会と人間）を冷静に見つめ、正しい認識に基づいて行動することだ。家計も育児も同じである。常にバランスのとれた状態を保っていくことだ。

子供は欲しいが経済的な余裕がない。もう一人欲しいが、お金もなければ、安心して頼める施設もない。いい相談相手もない。こういう声も多いのだ。

切実な悩みである。国も自治体も、こうした不安や悩みを解消するための施策を最大の目標に掲げ、英知を結集し、全力で取り組むべきだ。この家に生まれて良かった。この国の人間で良かったと実感できる社会をめざすのだ。

少子化に歯止めが効かないのは、厄介な育児などしたくない。自由な独身生活を過ごしたい。仕事が生きがいだ、という理由もあるが、育児にともなう不安と経済的な負担が大きいためである。

まず「隗より初めよ」である。国や自治体の公費の無駄遣いが、次々と明るみに出ている昨今である。予算の厳正な見直しと健全財政の確立が急務である。間違っても、不正な談合や汚職、裏金づくりなどを許してはならない。

子育ての実態を把握した上での、きめ細かな対策が必要だ。出産費用、保育費用の軽減、子育て中の母親のケア、職場復帰への完全保証、税制面の優遇、保育施設の拡充と内容の充実、小児医療の完備、相談機関の充実。

いくら金を使っても、決して無駄な投資ではないのだ。非行や犯罪とは関係なく育った子供達は、やがては信頼できる人材として、この社会に貢献し、優れた後継者と、労働力の再生産を可能にしてくれるのだ。

この将来に目を向けるべきではないか。

国も地方も無駄を省き、バランスのとれた形をつくり、何者にも屈しない力をためる。子供達の健やかな未来のために尽くすのだ。指導者に求められるのは、高いモラルと先見性、それに旺盛な実行力である。誇りある日本の伝統文化を世界に示した、明治の先覚者、岡倉天心は、日本の未来を展望し、こう述べている。

巨大なだけでは、真の偉大とはならぬ。

豪華な享楽、必ずしも高雅の域に達するとはかぎらぬ、と。

参考文献

- 『犯罪白書』平成九年 平成一七年版 法務省
『交通白書』平成一七年版 警察庁
『経済危機と民衆の窮乏化 特需 他』『岩波講座二二 日本歴史 現代一』岩波書店
『特集 戦争中の暮しの記録』『暮しの手帳九六』暮しの手帳社
『日本の超国家主義・日本の実存主義』『現代日本の思想』久野收 鶴見俊輔 岩波書店
『昭和史』遠山茂樹 岩波書店

「戦後思想の出発」『戦後日本思想史体系 一』筑摩書房

「西洋の思想・近代思想の先覚者」『倫理・社会』齐藤弘 富士教育出版

「日本の目覚め」岡倉天心『明治文学全集 三八』筑摩書房

読売新聞 政治経済関係記事、少年犯罪関係記事、他

福島民報新聞・福島民友新聞 県内関係記事

【佳作】

わが国の〴〵かたち〴〵をとりもどそう
—武道のすすめ—

警察大学校 術科教養部長兼教授

真砂 威 (59)

はじめに

国民のモラル低下が憂慮されるようになって久しい。特に近年は、その度合いが急速となり、「崩壊」とまで言われた。

実の親子による虐待や殺人、動機不明な凶悪犯罪は言うに及ばず、自分さえよければといった詐欺、偽

造、データーの捏造・改ざん・盗用等の事案が頻発している。金融本来の機能を超えマネーゲームと化した利殖に狂奔する経営者、またそれを「時代の寵児」などともてはやす大衆。身近なところでは、NHKのテレビ番組でも取りあげられていたが、「高速道路の料金所を料金を払わずに突破する車」、「コンビニや道の駅のゴミ箱に捨てられる大量の家庭ゴミ」、「本の無断持ち出しや切り抜きが相次ぐ図書館」等々、見るに堪えないあさましい風潮が世の中を覆っている。

— 何かが大きく狂ってきた —

一 道徳の国、日本

かつてわが国は「道徳の国」と呼ばれていた。

わが国が近代国家の建設をめざす、幕末から明治維新にかけて数多くの外国人が来日したが、彼らが一様に称賛するのは、日本人の道徳心の高さであった。文明の遅れはあつたとしても、人心の洗練度は高みをきわめており、西欧人が一目置かざるを得ない威厳を示していた。

約百五十年前、わが国に対し強硬に開国を迫ったペリーも、日本の文化水準と能力の高さを十分認めたくて交渉にあつたという。最初の駐日総領事の米外交官ハリスも、日本人の質素さ、正直さ、態度の丁寧さについて、「他の国にはみられない」と日本人のモラリティーを誉めたたえている。また、明治維新を目前にした幕末、咸臨丸に乗って太平洋を渡航しアメリカに到着した武士たちに、詩人W・ホイットマンは感銘を受け、「ブロードウェイの行進」という詩を寄せた。ホイットマンは、この武士たちのことを二

つの語で表現した。ひとつは「courteous（礼儀正しく思いやりのある）」、もうひとつは「impassive（超然とした）」という語である。

このように日本人に接した外国人は、国内外を問わずみな同じような讃嘆のことばを述べている。やがて日本人は、これらの徳性と固有の勤勉性を生かして西欧列強に伍する近代国家建設への道をひた歩むのである。

—なぜ、わが国が比類なき「道德の国」であり得たのか—

二 わが国の道德教育

わが国の道德教育についての疑問を、自分自身に投げかけたのが新渡戸稲造であった。

新渡戸稲造は『武士道』の著者として名高いが、彼が『武士道』を著すきっかけとなった経緯を本書の中でこう述べている。ヨーロッパ留学中、某教授との会話である。

「『あなたのお国の学校には宗教教育はない、とおっしゃるのですか』と、この尊敬すべき教授が質問した。『ありません』と私が答えるや否や、彼は打ち驚いて突然歩を止め、『宗教教育なし！』どうして道德教育を授けるのですか』と、繰り返し言ったその声を私は容易に忘れえない。当時この質問は私をまごつかせた。私はこれに即答できなかった。というのは、私が少年時代に学んだ道德の教えは学校で教えられたものではなかったから。私は、私の正邪善悪の観念を形成している各種の要素の分析を始めてから、これらの観念を私の鼻腔に吹きこんだものは武士道であることをようやく見いだしたのである」

新渡戸は、「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である」と説きおこし、「武士がその職業においてまた日常生活において守るべき道を意味する。一言にすれば『武士の掟』、すなわち武人階級の身分ノイブレス・オブリージュに伴う義務である」と喝破する。

次に、「義」「勇・敢為堅忍の精神」「仁・惻隱の心」「礼」「誠」「名誉」「忠義」「克己」など武士道の中味について論述している。そうして武士の掟であった武士道が、やがて民衆への感化をもたらし、日本の精神的土壤に開花結実し、遍く国民の道徳教育となつていったかを説き明かした。

この著は、新渡戸稲造が三八歳の年、明治三二年（一八九九）に英文で書かれたものである。明治三二年といえば日清戦争と日露戦争の狭間にあり、日本に対する世界の認識が極めて薄い時代であった。当時のアメリカの大統領T・ルーズベルトは、この『武士道』を読み、すっかり日本びいきとなり、日露戦争の早期終結に力を注いでくれる緒となつたと言われている。またアメリカのみならずフランス語、ドイツ語などにも翻訳され世界のベストセラーとなつた。（註1）

—いまあらためて「武士道」を言問う必要がある—

三 道について

日本人は「道ミチ」ということばを好んで使う。柔道・剣道・弓道、そしてそれらを総称する「武道」はもとより、花道・書道・茶道など数多く使われている。またスポーツについても「野球道」と呼ぶなど、あらゆる分野に「道」をつけた言い表しかたをしている。

日本人は、とかくの事に「道」をつけて呼ぶことによって、精神性や道徳性について意味をもたせ、人間の形成や生き方と大きな関わりをもって考えてきたようである。生け花や手習いを「花道」「書道」と呼ぶことによって、習い事を人間形成の「道」に昇華させようとした。同じように、武士の心組み、生き方にかかるすべてを「武士道」と思想づけ、自らの道徳原理とし、また己を高めるすべとした。新渡戸が見いだしたように、わが国ではこの「道」が根底にあるゆえに、ことさら宗教の信仰がなくても国民はおしなべて道徳的であり得たのである。

この「道」という観念は、日本文化独特のものであり、日本人の意識構造や宗教観にも重要な位置を占めた。そしてこの「道」が、わが大和民族の道徳を大きく支えてきたのである。

武道や芸道における「道」は、「技術上達の道」イコール「人間上の道」というふうには、身体と心あるいは技と心の一つとしてとらえようとするものである。そしてその技をつくりあげる段階において極めて内省的に自分の心身をとらえ、わが身を自然の法則と一致させようとした。「稽古^{けいこ}」あるいは「修行」ということは、自己を向上させようとする営みとして表現された。武道や芸道を問わず、あらゆる「道」は、つまるところ「人間形成」という目的に集約されてしまうのである。

翻って考えてみると、「宗教教育がない」といわれるわが国に、「道」の観念が衰退したら国民の道徳心が地に落ちるのは当然のことである。そしていま、わが国はその状態に陥りつつある。

—モラル崩壊の原因はここにある—

四 節操に危うい国、日本

昔も今も日本人は、キリスト教やイスラム教などの一神教の国の人たちと比べると、きわめて宗教的に寛容である。神前で読経したり、神社に神宮寺をつくったり、寺院の境内に守護神を祭って鎮守としたりする。卑近な例をあげれば、年末にはクリスマススを祝い、お正月には神社で柏手を打つ——結婚式は教会、七五三は神社、葬式はお寺でということとはごくふつうに行われている。それは宗教としてではなく、それぞれ使い分けてイベント的にこなしている。そういう面では懐が広いというか、非常に大らかな国民である。

古代からわが国には「八百万の神」といって、森羅万象に神の発現を認めるならわしがある。いわゆる「多神教の神」である。またこの神は仏教とも習合し、それぞれ矛盾なく信仰されてきた。このことが他の宗教を大らかに受け入れられる素地となつてのだと考えられる。

しかし、このようなふるまいは一神教の人たちから見たら原理、原則のない「なんでもあり」の世界で、極めて節操のない所行としかうつらないのである。

そのとおり、日本人は一つまちがえば節操がまるでなくなる危うい国民なのである。自分さえよければ式の詐欺・偽造・捏造^{ねつぞう}は、いまに始まったものではない。数年前に起こった、大手業者が狂牛病対策事業の対象肉として輸入牛肉を国産と偽って業界団体に買い取らせるといふ事件。また、一流企業といわれる所が、鶏肉や豚肉を偽装するなど、消費者を欺く行為を平然と行う事案など、この種の組織ぐるみの事件

が類発してやまない。これは手違いとかミスなどというものではなく、明らかに故意に行われた犯罪である。そしてその組織のトップも、同僚も部下も、「みんなが黙っていれば大丈夫」という心算を共有して行われる類のものである。その昔には、外国から経済的な利益のみを追求する日本人を評して「エコノミック・アニマル」と揶揄されたが、その後汚名を返上した形跡は一向にない。

—われわれ日本人は、節操に危うい国民であることをしかと自覚すべし—

五 恥の文化、日本

武士は、武勇、信義、礼節、質素などとともに「廉恥」を重んじた。「廉恥を重んじ名利をはなれて義勇を励む」や「恥を知るものが義を守る」という武士道の教えがある。この「恥」の意識は、武士の心情に強力な自己コントロールの力としてはたらいた。

アメリカの女性文化人類学者ルース・ベネディクトによって出版された『菊と刀』は、日本人と日本文化についての特質を論じた著作である。

ベネディクトは、本書の中で日本文化の型を、欧米の「罪の文化」と対比して「恥の文化」と断定した。両者の違いは、行為に対する規範的規制の源泉が、内なる自己（良心）にあるか、それとも自己の外側（世評とか知人からの嘲笑）にあるかに基づいているとする。

要するに、西洋は、道徳の絶対的標準を説き、良心の啓発を頼みにする社会だから「罪の文化」をもち、他方、日本の社会は、外面的強制力に基づいて善行を行うような「恥の文化」に属していると分析する。

「罪の文化」では、悪い行いがたとえ人に知られなくてもみずから罪悪感にさいなまれる。しかし「恥の文化」では、人前で恥をかかないようにすることが道徳の原動力となる。モラルの根拠が内にあるか外にあるかの違いである。ことばを変えれば、「神との約束」と「世間様の目」の違いである。

ベネディクトはこのように評価したが、たしかに、日本人の節操の危うさはどうもこのへんにありそうだ。日本人は、世間様の目がなかつたら、あるいはみんなと一緒だつたら、何でもやってしまいかねない無節操な面を持ち合わせている国民なのである。こういった日本人の性向を最も端的に言い表しているのが、あの、「赤信号みんなで渡れば怖くない」である。「旅の恥はかき捨て」もしかり。見知らぬ土地、見知らぬ人の中では、つい放埒三昧に陥ってしまいがちなのが日本人なのである。

昔も今も変わらぬ同じ「恥の文化」の土壌にありながら、武士が意識していた恥と、現在のわれわれが感じる恥がどこでどう違うのか。

武士の場合も世間の目を意識するのは当然である。しかし、「恥」の感覚に直接はたらきかけるのは、その行為が「美しいか醜いか」という美学的基準が厳然として存在していたことである。この「恥を知る」という仕方は、武士たる者は斯くあらねばならないとする武士社会の倫理であり、わが国の「道」の思想を裏打ちするものであった。

ところが今いう「恥」の感覚は、恥知らずの世間に合わせるといって、非常にレベルの低い意識に陥った。それゆえ、みんなして恥知らずにふるまえるのである。

昔の武士のように「ぶれない」しかも「群れない」生き方をするにはどうすればよいのか。

—その手がかりが「武道」にある—

六 武道の受難

先に述べたように、日本人は「道」ということばを好んで使う。日本人は、武道に限らず、習い事あるいはスポーツを「稽古」あるいは「修行」と考えることによって、生き方の道しるべとしてきた。われわれは、この「○道」を稽古（修行）することが、他の国で行われている宗教的信仰の代替的行為となっていたのである。

逆に考えるならば、宗教教育のないわれわれは、なんらかの「道」の習いをしていなければ節操のない生き方となってしまうということかもしれない。それゆえ昔から日本人は、何ごとにもしゃかりきに「道」をつけることにより、精神性や道徳性を高くもたそうと努力してきた。

昭和二〇年（一九四五）、太平洋戦争における日本の敗戦は、日本古来の武道に壊滅的な打撃を与えた。武道はGHQ（総司令部）から、国家主義、軍国主義に加担していたという理由で禁止され、指導的立場にあった人たちは公職追放という憂き目に遭った。

また戦後の日本は、占領軍の指導のもと、戦前を完全に否定した教育改革が行われた。民主主義が強調され、他のスポーツはますます盛んになった一方で、武道は全く反対の道を辿らざるを得なかった。

その後、柔道、弓道、剣道という順に学校教育として復活を果たすが、それらはわが国伝来の「武道」の名を冠することは許されず、「格技」〔註2〕と呼び名され、スポーツの衣を着ての再出発であった。柔

道、剣道など、名称に「道」は付されていても、それは「道」の思想あるいは観念に根ざすものではなく、単なる競技種目名としての呼称にすぎないものであった。

当時の占領軍による弾圧ぶりを明確に伝えている例を一つあげてみる。戦後、剣道を復活させようとする動きの中で、関係者は再出発に際し「剣道」の呼び名を自ら憚^{はば}って、「撓^{しな}競技」という名称で新連盟を発足させた経緯がある。「しない」で打ち合う「競技」ということでの命名である。米軍が極端に日本刀を恐れたということから、「しない」(註3)という文字も、「刀」を使った「竹刀」の表現を避け、「撓^{しな}う」の字を使うという慎みぶりである。柔道は嘉納治五郎がIOC委員でもあり、世界に柔道を広めた功績があったため、占領軍の理解も得られ比較的早く復活を果たしたが、剣道が正式に復活するのは、昭和二十七年(一九五二)の講和条約が発効した後のことである。

この武道禁止の措置は、まさしくわが国の伝統の否定であり、日本弱体化政策の一環であった、ことに疑う余地はない。伝統を否定させ、「道」がないがしろにされれば、国民の道德の基盤が崩れるのは当然のことである。

――モラル崩壊の原因はここにあり――

七 戦後の教育

戦後、国民道德の基盤が崩れたと言われるが、それはもう少し年数を経てからのことである。

先述したように、「道」の観念は、きわめて内省的であり、自己教育的なものである。それゆえに、日本

人は昔から自己否定的にわが国を考える習性がある。それが終戦直後においてはよい方向に発揮された。

日本人の持ち前の内省力は、「一億総懺悔」というかたちで表れ、国民一丸、勤勉一色でいち早く復興を果たした。まさしく日本人「道」の力がなせるわざであった。

しかし、戦後の復興とその後の高度成長は、戦前の教育を受けた人たちが成し遂げたものである、ことをひとときも忘れてはならない。

昭和二二年（一九四七）に教育基本法が制定された。そしてその翌年、『教育勅語』が廃止となった。『教育勅語』は、明治二三年（一八九〇）制定されて以来、国民道徳の根源、国民教育の基本理念を明示したものである。この人倫の大綱であった『教育勅語』を、国家主義を唱導するものとして廃止されたものである。

この一連の教育改革といわれるものが、占領軍による日本弱体化政策であるところゆ知らず、民主主義、平和主義、自由の謳歌、個性の尊重という価値判断のもとに着々と行われてきた。そしてその中で、自分の国を批判する教育や、いわゆる「自虐的歴史観」の教育が長い間行われてきた。そして、それが真実であると思込んでしまっている世代が、何代も積み重ねられてきた。

このようにして数十年が経ち、ついに「モラル崩壊」の時代を迎えることとなったのである。

—日本人の「かたち」をとりもどそう—

八 わが国のゝかたち

日本の伝統文化は「型の文化」といってよいほど型によって伝承されてきた。そして日本の伝統文化は、「道」の色彩を色濃く帯び、花道・書道・茶道などに限らず、闘争の「術」から「道」に発展した「武道」も伝統文化としてその重要な位置を占めている。

「型」は、もとになるゝかたちで、手本、ひな形、一定のしぐさ、動作、しきたり、慣例、タイプなどの意味がある。また「型」には「鑄型」や「型木」などの語が示すように他のものに等質的に写される性格を持つ。そしてこれは時間的に過去のを現在にうつす時にも用いられ、それぞれの道の達人が残した「型」を後世の人が学んで、外型によってそれをとらえようとするものである。

そしてその「型」を学ぶことを「稽古」と言った。この何げなく使っている「稽古」という言葉であるが、稽古の「稽」は「考える、比べる」という意味であり、「古」は「いにしえ」であるから、稽古とは「古」を「稽」^{かんが}えることなのである。そういった言葉の来歴がわかれば、昔の達人が残したゝかたちを後世の人が学ぶという伝承の体系が「稽古」の意味として腑に落ちる。日本人は、この「型」という見事な文化継承のシステムを構築し発展させてきたのである。

また、武道や芸道に限らず、すべての身体表現は「型」によって受け継がれ、一つの共同体の人たちを類型化してきた。養老孟司は、その著書『日本人の身体観の歴史』の中で人間の類型化についてこのように述べている。

「社会における型、すなわち礼儀・作法とは、こうした身体の制度化の表現である。『型』が身体を制度的に統制したことはいうまでもない。武士には武士の農民には農民の、身体の型がある。それによって、相對する相手をいかなる人物か判断できる。すなわちそれは、江戸社会における社会的自己の表現となつていった。」

「氣質」と書き「かたぎ」と読むが、これは「形木」から転じたものである。「氣質」は、物事のやり方、慣習、ならわし、様子といった意味に使われるほか、「職人氣質」とか「江戸っ子氣質」また「記者氣質」というふうには、身分・職業・年齢などに相応した特有の類型的な氣風をいう。これも「型」による継承の一形態である。

「氣質」という自己表現をもった人たちの集まりが安定した社会を形成していた。このことは社会の安全を考えるうえでぜひ見逃せない視点である。

「型」によって継承されたのはそれらのものだけではない。思想的なものも「型」によって受け継がれているのである。

司馬遼太郎の最晩年の著『この国のかたち』（平成四年／八年刊行、全六巻）は、わが国が近代日本へ至る思想の道筋を随筆のスタイルで書きあらわしている。日本の各時代ごとの形質をあつかいつつも、時代を越えて変わらぬものはないかという、不易の、あるいは本質に近いものを突き詰めた。そして国家としての、また地域としての、あるいは社会としての日本の様相を、かたち〴〵というふうにとらえたものである。

司馬は、「この国のかたち」という題名を偶然つけたとして——本来は「この国の『思想』」とすべきところであったのかもしれない。しかし、わが国の思想的経路の基本線を描いているうちに、わが国には古来から固有の思想がないことに思いあたった。であるから「思想」とすることへの違和感から「かたち」と名づけたのであろうと推察される。固有の思想なきわが国の思想的な基本線に、連綿たる「かたち」の継承をイメージしたものと思われる。

司馬は本文で、「この国の習俗・慣習、あるいは思考や行動の基本的な型というものを大小となく煮詰め、もしエキスのようなものがとりだせるとすれば」と思い、『かたち』をとりだしては大釜に入れて……と、健全であったわが国の地域、社会のことわりを見つめている。(註4)

宗教あるいは思想による教化といった面が少ないわが国だけに、いかに「かたち」「型」を大切にしているのやすらぎを得、また自己をコントロールしてきたかがわかる。

—わが国の「かたち」をとりもどし治世の国を再現させよう—

九 「型」、その束縛と自由

現代人は「かたち」や「型」と言えば、堅苦しいものにとらえがちである。とくに戦後の教育で育った世代は古くさいと思ってしまう。ところが、わが国でも封建時代の昔から、あらゆる「道」には、自由とか個性というものが発揮されていたことを知るべきである——しかしそれは初めから解き放たれたような自由や個性ではなく、まず厳格な制約のもとに身を置くことからスタートするのである。まず諸芸能など

を習うとき弟子は、師匠の教える「型」の中に自己をたたき込んで、そしてその窮屈な型の中に入って実践することからはじまる。

小林信二は、その著書『武道のすすめ』の中で、日本的な技芸の特色として次のように述べている。

「型は定められた一定の形式であり、伝統的な意味を持つことによつて強い制約が加えられている。そしてその制約は厳格に守られなければならない。したがつて多くの武道伝書の修行論に、型の重要性が繰り返し述べられているが、素直に、忠実に、真剣に、工夫しながら、師の型をそのまま真似て自己のものとして実現することが強調される。

一方において諸芸の修行論は、型を離れることを強調する。型がいかに重要なもので尊ぶべきものであつても、型のみにとらわれていてはその芸は死んでしまう。大切なことは、その型を離れ、自己の個性的な技として自由に生き生きと表現されなければならない。

芸道の修行過程を表す言葉として、古来より守・破・離（註5）といわれるが、これは型より入り、型を自己のものとして活用し、最終的には型を離れ自由無礙な働きをすることを教えたものであろう。∴中略∴ 運動の定型化は、運動の個性や発展性の原理をすべて無視し、問題解決の方法を形式化するものであつて、技術本来の発展から反対の方向にあるという批判がよく聞かれる。武道をはじめ日本の伝統的な芸道の持つ、このような束縛・受動的・没個性的な型の反復が、自由・能動的・個性的な技の体得へを跳躍する ∴中略∴ 窮屈さの中で、ひとつのこと（事）を何度も繰り返し返してやる、その結果として内面的に精神化の方向へ鍛練してゆく。そして、その型の根本である原理というか、筋道のようなものを自

然に会得することになる」

反復・鍛練という稽古方法は不合理で、没個性的であるように見える。しかし実は、それにより学習する者の知識や技能を本当に自己のものとする習得能力が高まっていることを見直す必要がありそうだ。

—「型稽古」を見直そう—

十 教育のありかた

教育は社会の安全と密接に関係する。

戦後の教育は、子どもたちの自主性を尊重することを是として行われてきた。子どもたちの自主性を尊重するということは、親や教師がひとつのことを教え導こうとする場合には、納得させるための「論理」が必要となる。そして、子どもたちはそれに得心した場合にのみ教えに従うというのが構図となっている。そういうことから近年、型稽古のような「有無を言わず守らせる」という教育がなおざりにされてきた。現在の子どもたちは「なぜ人を殺してはいけないの」「また「なぜ援助交際がいけないの」などと、「なぜ」とうそぶいて親や教師たちを困惑させる。その「なぜ」、に満足な論理が展開できず大人たちは子どもの前にたじろいでしまうのである。戦後教育の弊害はここにも表れ、家庭崩壊や教育崩壊の一因にもなっている。

藤原正彦の近著『国家の品格』は、このような現在の教育問題の根幹について一石投じるものであった。ここにその主要な部分を抜粋する。

「論理だけでは物事は片付かない、論理的に正しいということはさほどのことはない。数学者のはしくれである私が、論理の力を疑うようになった。そして『情緒』とか『形』^{かたち}というものの意義を考えるようになりました」

「野に咲くスマレが美しいことは論理で説明できない。モーツアルトが美しいということも論理では説明できない。しかし、それは現実に美しい。卑怯がいけない、ということすら論理では説明できない。要するに重要なことは論理で説明できない。論理で説明できない部分をしっかりと教えるというのが日本の国柄であり、またそこに我が国民の高い道德の源泉があったのです」

藤原は、論理の限界を説き、「なぜ」とのうそぶきには、「『駄目だから駄目』ということに尽きる」ときっぱり言い切っている。

論理を専らとする数学者の言辞だけに、まさに得たり、目から鱗が落ちる思いで本書をおし頂いた。

この論理によらない教育は、最近各方面で見直されてきた。学習指導要領の見直しを進めている中央教育審議会の教育課程部会は、小学校の国語教育に古文や漢文の暗唱を導入する方向で検討に入ったという。古典の暗唱は精神活動の骨組みを作るのに大きな力を持っているということだが、この暗誦も「型」による習得と同じである。定められた一定の文型を繰り返しひたすら音読することにより暗記する。そして「型」の習得ともいえる暗記が、先人の魂を心の基層部に深く刻印するというものである。

—まず、型にはめることが肝心—

十一 武道と武士道

戦前、柔道、剣道は、体育の一種目としてではなく、独立教科として教育に採り入れられていた。それは明治期、文明開化を標榜する主知主義教育の偏向が、気力・体力の錬成をおろそかにしたことを認め、古来の武道がわが国の学校に最も適した体育法として重視したゆえである。それは言うまでもなく江戸時代の藩校にならったものである。また気力・体力の錬成のみならず、かつて武士のたしなみであった武道を修練することによって武士道的精神を培うというものである。古来武士道精神は、武道との関連で考えられ、武道と武士道を直結させてきた伝統がある。

警察では、明治のはじめ近代警察発足とほぼ同じ時期から柔道、剣道を正課として採り入れている。それは柔道、剣道が武術としても人格陶冶の面でも有益なものであることである。明治半ば期、警視総監で後に武徳会会長を務めた大浦兼武は、「警察官は武士であり武士道が警察官の精神を支配すべきだ」と主張し、武道の奨励を説いた。さらに大正時代はじめ、警視総監であった西久保弘道（後の武徳会副会長兼武道専門学校校長）は、警察官が武道の訓練をする目的は「体力を鍛え胆力を練ることである」と力説した。また現在でも、警察官に最も必要とされる、「正々堂々」「勇猛果敢」「潔さ」「廉恥」といった武士的な態度は、武道を鍛練することにより培われるとして、その振興が図られている。そして昔日の「主君に献身」というモラルの「主君」を、「国家及び国民」に置き換え、高い倫理観を保持しようと努力してきた。

このように警察で正課として行ってきた柔道、剣道が、やがて広く国民に波及し、武士の精神文化として、わが国古来の伝統に育まれ、精神と身体が一体化してきわめられた。

戦後、受難に遭った武道や武士道も、わが国ごとごとくに道徳の退潮した今日、失われつつある固有のアイデンティティの復活が叫ばれるなか、ようやく市民権を取りもどしつつある。書店においても、新渡戸稲造の著をはじめ、武士道に関する書物が数多く並べられるようになった。NHK大河ドラマも侍さむらいものが定番となっている。まさに世の中は、「さむらい」の出現を渴望しているかのようである。

— 武道の修行が「さむらい」をつくる —

おわりに

目下、新たな教育改革が進められており、「新しい時代を切り拓く心豊かでたくましい日本人」の育成が教育目標に掲げられた。また改革の方向を示すことばの中に、伝統的な美徳を強化しようとする文言が随所に盛り込まれている。「武士道」というものが見直されてきた背景にはそういった気風の醸成がある。今いう「武士道」は、封建制度のもとで暗い陰を落とした因循姑息な悪しき一面ではなく、古来より伝わる「大和魂」「大和心」を元とした日本人特有の心根を集大成したものをさしている。それはまさしく「日本人のアイデンティティ」を意味し、国民精神を育むはたらきをもつものである。英国には「英国人魂」があり、ドイツには「ドイツ人魂」があるように、どの国の国民にも、どの民族にも、国民精神というべきものがある。国民の精神は、一人ひとりの国民にとって生きる力の根源になるものであり、また、国民

の精神を共有する社会は、互いに尊敬し合い、無用の争いが少なく、共に同じ方向に向かって生きていくことができる力強い社会となるのである。今いかに戦後失われた公序良俗の美風を再生させるかが問われている。

わが国の伝統的な武道の修行には、「武士道」をあげるまでもなく、人間を形成する教育法として現代教育に欠けたさまざまな優れた要素をもつ。

少しでも多くの人が柔道、剣道をはじめとする各種武道をたしなむことによって、日本人らしい倫理観や道徳観が培われることを切に願うものである。

◇あしがき

筆者は現在、警察大学校で術科（主に剣道）指導の職にある。このたびのテーマである「社会の安全と日本人の倫理」を筆者の立場で考えるとき、全国各地に遍く存在する警察署の柔剣道場を効果的に活用するにしくはないとの思いを強く致すものである。

平成一四年に国家公安委員会規則として「少年警察活動規則」が制定された。そして同規則第九条（少年の規範意識の向上等に資する活動）に「柔道、剣道等のスポーツ活動その他の少年の規範意識向上」が掲げられた。また同規則の実効を図るため警察庁次長通達で「警察署の道場等における少年柔剣道教室、スポーツ大会はもとより、少年の居場所づくりに資する多種多様な活動を新たな発想に基づき推進することが期待されるものである」と述べられているところである。

周知のとおり警察では警察官必須の術科として柔道、剣道の訓練が義務づけられている。そして警察署には必ず柔剣道場が設置されており、また指導者となり得べき高段の警察官を多く擁している。もつとも同規則制定以前から多くの警察署では道場を開放して、柔道、剣道指導担当者や有志の警察官により、地元少年への指導が行なわれている。また警察署の道場による柔道、剣道の活動は少年指導だけに止まらず、広く地域住民や愛好家の武道交流の場となつているところもある。しかし同規則の趣旨を体しようとするならば、全国的に見てまだまだ不十分と言わざるを得ない。「仏作つて……」とならないためにも、なお一層の推進が図られてしかるべきだと考える。この小文の副題を「武道のすすめ」としたが、全国各警察署を拠点とした柔道、剣道普及発展のための一助となれば幸いである。

また筆者は同時に、現代武道の競技スポーツ化を懸念する者であることをつけ加えたい。武道のあり方についても言及すべきであったのかもしれないが、紙数の都合と本題の論点をぼやかせないためここでは控えた。武道の中味についての問いかけは、機会を改めて文を起こすこととしたい。

— 註記 —

〈註〉最近、新渡戸『武士道』の内容について、ある学究筋から間違いを指摘する向きもある。しかし、学問上の其れはそれとして、わが国の黎明期にあつて、日本人論を英文で斯くも堂々と世界に宣揚し、サムライ・スピリットを普遍せしめた歴史的功績は極めて大であると考ええる。

〈註2〉「格技」という語は、「combative sports」の訳語として誕生したものである。「武道」という言葉が「military arts」と訳されるものならば、GHQが許可しないであろうということとで、柔道、剣道などを総称して「格技」という名称を使うことにした。ゆえに、競技スポーツ性を前面に出しての出発とその推移であった点に憾みが残る。戦後四十数年を経てようやく、平成元年の学習指導要領改訂により、名称が「武道」にかわることとなった。

〈註3〉もともと「しない」の語源は、撓しなうからきており、「竹刀」とも当てられたのは後からのことであるが、当時において「撓」の字を使ったのはけっして復古的意味としてではなく、明らかに「刀」の字を使うことを憚ったものと解される。

〈註4〉司馬は「この国のかたち」の中で、日露戦争以降、太平洋戦争が終わるまでのことを負の歴史として描いている。これは司馬が学徒出陣したことに関係がある。本文中「国家が自分の人生を攫さらってしまった」ともあり、かなりの被害者意識がはいっている。それゆえ本来、題名を「わが国のかたち」とすべきところを、ちょっと突きはなして「この国」としたのではないかと思われる。負の歴史を語る主たる部分は、「統帥権」をはじめとする軍部や組織に対する辛辣な批判である。しかしそれらのことについては、時代的な経過年数からして、未だ歴史としての審判が下されていないと思われるので、ここではその部分を割愛して考察の対象とした。

〈註5〉修行段階における技術の深まりに応じた、それぞれの段階のあり方を示したことがばとして用いられている。「守」は、その流派の趣意を守り、それを確実に身につけること。「破」は、身につけた流儀に拘泥せず、他流とも交流し、自己の技術を拡張・真価させる段階。「離」は、自己の技術をさらに深め、独自の新しいものを確立していく段階のことである。

— 参考・引用文献 —

『武士道』新渡戸稲造（岩波文庫）

『菊と刀』ルース・ベネディクト（社会思想社、現代教養文庫）

『日本人の身体観の歴史』養老孟司（法蔵館）

『この国のかたち』司馬遼太郎（文藝春秋）

『国家の品格』藤原正彦（新潮社）

『いま、なぜ「武士道」か 美しい日本人の精神』岬龍一郎（致知出版社）

『剣道事典—技術と文化の歴史—』中村民雄（島津書房）

『日本人の精神再興』（第三回剣道文化講演会抄録）『月刊剣窓』平成一七年三月号・鳥居泰彦

映画「ALWAYS三丁目の夕日」から 昭和時代に学ぶ道徳観

警察官

(警視庁第七方面交通機動隊)

織田 礼二 (44)

はじめに

過日、映画「ALWAYS三丁目の夕日」を鑑賞する機会を得た。

映画は昭和三三年の東京を舞台に、もはや戦後ではないという合い言葉の下、市民が互いを思いやりながら協力して問題解決を図り、「戦後からの復興を経てよりよい未来を築いて行こう」とする姿を描いたも

のであり、洋画台頭といわれる映画業界において、中高年世代をその物語性と郷愁で虜にし、若年世代をレトロという響きで魅了し、観客動員数二九〇万人余を記録して、近年の邦画としては一頻りひとまきの評価を得た作品である。

戦後間もない昭和の懐かしい風景と情緒豊かな人々の機微にふれて一服の清涼感を味わった約二時間であったが、その直後に目にした平成のネオン煌めく街角には、黒髪を白髪に染め上げて顔を黒く塗り、娼婦の如き姿態で地面に座り込み、煙草を口にしながら携帯電話に意味不明な言葉を繰り返す若き女性達の異様な光景があった。

時代の変化、価値観の変化と言い慣れ、街の風景の一部と化して違和感を感じさせない彼女達の姿が、第一線で犯罪と対峙する目には、哀れで嘆かわしく写り、「昭和から平成に至った急激な生活様式の変化が、道徳観念の欠如を生み、こうした現実を呈して犯罪の温床となっているのではないか」と考えるに至った次第である。

以下、昭和時代の生活様式と現代のそれとを比較しながらモラル崩壊・治安悪化の要因を私的に数点とらえ、対策を論じていく事とする。

一 モラル崩壊・治安悪化の要因

① 氾濫する情報とその無審査

(パソコンの発達と放送出版表現の奔放)

映画「ALWAYS三丁目の夕日」にみる昭和時代、「テレビ・洗濯機・冷蔵庫」は三種の神器と謳われ国民の戦後生活様式を一変させた家電製品であるが、とりわけ国民を魅了したのは情報入手手段としてのテレビの存在である。

音声だけのラジオから映像付のテレビへの移り変わりは、国民の五感を刺激すると共に国民が手にする情報量を飛躍的に増加させた。

テレビが据え付けられた家庭や街頭では、映し出されるドラマやプロレスの画像に国民がこぞって一喜一憂する場面もあり、そうした経験のある私自身も言い知れぬ懐かしさを感じたほどであるが、ここで注目したいのは情報の在り方である。

昭和の時代においてテレビの画像が伝える情報には、一台のテレビ画面に対して数人の家族、あるいは数十人の市民が存在するという構図があり、受信者相互が放送内容を批評しあうという、「意見交換（大衆による情報の審査）」が行われ、人々は番組批評や時事問題へのよもやま話を通じて近隣のコミュニケーションを築きながら、共通した価値観を育てていた。

「価値ある情報」とは、情報提供者の正しい見識と社会秩序に対する責任によって取捨選択され、更に多数の市民の良識と道徳観念による意見交換という審査を経て淘汰されたものを指し、生活や文化の礎としてきたのである。

しかし平成の現代、情報の在り方において昭和時代のような過程は踏まれているであろうか。

昭和後期から平成の現代においては技術革新が著しく、ビジネスシーンを席巻したワープロが瞬く間に

パソコンに変わり、肩掛け式シヨルダホンに塾通いの小学生の殆どが所持するという掌大の携帯電話となり、様々なマイクロチップが複雑なコンピュータシステムを構成し、これらを取り入れた各種ハイテク機器が生活の中心に存在し、これら無くして生活が営めない状態となった。

昭和時代では入手に数日を要していた地球の裏側の情報が、平成の現代ではインターネット網の発達によりリアルタイムで入手できる環境が整備され、情報の合法性や正確性を問わず、情報提供者の意図を問わず、例えば国防の重要機密であろうが放送禁止の成人指定番組であろうが、キーボードやマウスの操作一つによって発信され、受信者は眼前のモニターを通じて、一切（氏名・住居・国籍・性別・年齢等）を特定されることなく、理解能力や利用目的を問わず、誰でも等しく情報を受信できるシステムが構築された。そしてモニターを通じてという点で、情報はモニター視聴者の視点・理解能力で判断され、複数人の相互による意見交換の機会が著しく減少し、社会の善良な見識や道徳観念による情報審査ができない状態となった。

本来、情報の受信利用者は、如何に適時適切な情報であっても、正しい見識や道徳観念の下に正しく理解され、合法（正義）的に利用されるものでなければ社会秩序を乱す場合もあるという事を知っておくべきだが、生まれた時から相互のコミュニケーションを取らずに育ち、モニターを通して情報を得ることを常態とする現代人達は、前記のような審査の目を経ずして着信する情報を既に審査が済んだ正しいもの、現実的なものとして受け入れ、コンピューターが作り出す仮想的な世界と現実の世界とが区別できなくなり、果ては「死んでもリセットすれば生き返ると思った」というような悲しい事件を生み、通常では信じ

られない「常識」を育てているのである。

様々な出版物を通じてあり余る情報を提供し、特別な知識や活動も必要なく、日常生活を通じて目のあたりにする「放送出版業界の自由（表現の自由）」等にも疑問を抱かざるを得ない点が多い。

例えば、公共の場である電車内に掲げられるポルノまがいの中吊り広告や悪戯に性的興味を煽る漫画・週刊誌、果ては二四時間中途切れることなく放映されるテレビ映像や子供を虜にするテレビゲームで繰り広げられる格闘や殺戮・流血の暴力表現等がそれである。

見るに堪えがたい性描写や暴力シーンを掲載する少年少女向けの雑誌や、張りあげた罵声で相手の意見をかき消し、相手の意見に耳を傾けず、「主張した者勝ち」「売れた者勝ち」「目立った者勝ち」を良しとするような一部のメディアの報道姿勢や番組の存在は、真実を報道し、世論による自立した判断の形成を経て道徳観・価値観の涵養に資するという本来の純粋な報道表現の使命の枠を超え、新しい芸術観や学術観、正しい道徳観や価値観で物事を審査し理解しようとする大衆感覚を鈍らせ、表現・報道の自由の名を借りて世論の混乱を招き、或いは世論を特定論理へ導こうとしているが如く感じさせるものである。

② 深夜営業店等の増加

映画「ALWAYS三丁目の夕日」には、戦後から昭和後期までの時代背景が映し出されているが、その時代はお世辞にも平成の現代と比べて裕福であるという姿はない。

映画「ALWAYS三丁目の夕日」が映し出す夕暮れの街並みは電柱に裸電球が点り、買い物かごを携えた主婦達の姿があふれ、夕闇迫る頃には子供達は夕餉ゆうげの支度をする我が家に帰る場面があり郷愁を誘う。

夜の食卓は丸テーブルに一家が集い、一日の出来事の語らいから近所の噂話までよまやま話が尽きない。こうした時代、家族が共に過ごす時間は自然と家族間の会話を生み、家族の意思を疎通させ、知恵を伝えながら正月やお盆といった生活に根ざした伝統や風習が伝承されてきた。

しかし、平成の現代ではどうか。

昭和時代後期から平成の現代にかけて、欧米先進国の経済・技術発展に追いつけ追い越せの号令の下、国民全体に経済中心・経済至上主義が徹底された結果、過日の新聞報道において、「国民は経済至上主義を掲げた首相が歴代首相の中で最も国政に貢献したと判断している」という記事が示すとおり、「経済的に恵まれた裕福な生活が、社会的な地位を築く」と言う新しく悲しい価値観が生まれ、事実、必要な物を一日中何時でも入手できる二四時間営業のコンビニエンスストアや、好きな物が好きなだけ何時でも食べるこゝとが出来るファミリーレストラン、特別な手続きなく、享樂的な時間と空間を提供するカラオケボックスや漫画喫茶等が街中にあふれるという事態になった。

街中にコンビニエンスストアやファミリーレストラン等がなかった昭和の時代、欲しい物を手に入れる為には、店が開く時間迄待たなければならず、そうした事態を防ぐため常日頃から物を大切にするという教えや我慢という精神的修養を尊び、或いは創意工夫するという知恵を培ってきたものだが、利便性と経済性を重視する社会傾向（国民）は、家族間の会話を消し去り、親から子供へ古き良き伝統や風習の美德を伝承する機会を自ら放棄してしまったのである。

③ 家庭教育（躾）の崩壊

映画「ALWAYS三丁目の夕日」には子供同士の眩まばゆいばかりの友情と、子供の不在を隣近所で親身に心配する場面が登場するが、平成の現代、こうした場面に遭遇することは少ない。

視点を映画の世界から実務経験へと替えることにする。

私は職務において犯罪者を直接処遇する業務に従事したが、ここで目の当たりにする犯罪者の生活態度は実に奇妙で特異なものが多い。

その中で特に注目したいのは、これからの日本を担うべき若年の犯罪者の多くが、「その生育過程において、不遇な時間（家庭での両親の不仲や離婚、暴言や体罰等の虐待、兄弟間の諍いさかい）を経験し、現実逃避から自暴自棄の過程を経て自己の未来を自ら放棄し、虚勢と快楽の中に自分の存在意義を見いだして犯罪に走る傾向に有る」という事である。

これは若年犯罪者達との会話や食事等の日常行動における所作、言葉使い、感情任せの自己中心的行動や身体への刺青行為等の行動観察からも窺い知ることができる。

前述したとおり、戦後復興を果たし一定の生活レベルを得た国民は、昭和期から平成期に至って、よりよい生活スタイルを更なる経済的な充実・満足であると信じて疑わなくなり、親は家庭における子供の躾や育児の在り方よりも、外で働き金銭を得ることに没頭してきた。

その結果、同種の家環境にある子供達は、自然と連帯感を強めていき、それぞれの親の不在や両親の不仲や家族の諍いから逃避して得る共通する空白の時間を「お互いの自由」と錯覚し、物事の善悪を始めとする社会のルールや道德等の基本（躾）を教えられる機会も学ぶ機会もないまま、雪だるまの如く、目

先の享楽に身を委ねて転落する成長過程を辿っているのである。

昭和時代には誰もが、額に汗して働く父母の姿をみて尊敬の念を抱き、疲れた父母の肩を揉み叩くことに感謝の意味を知り、「子は親の背中を見て育つ」という教えが理屈無しで受け継がれていたが、平成の現代では、親のエゴ的な価値観の所為^{せい}で、子供の近くに背中を見せるべき親の姿が存在しなくなり、更に悲しむべき事に、親自身が「何故我が子が罪を犯したのか」を知ろうとせず、我が子の生育過程の責任を子供自身や社会構造に転嫁した挙げ句、我が子の存在を疎ましく思い、子育てを拒否する姿さえ見られると言う現実もあり、時代が作り出した悲劇と言わざるをえない。

二 道徳観回復の方策

① インターネット関連や出版・放送等メディア業界への提言

情報の遣り取りにおいては、発信側と受信側が存在し、情報の価値や道徳判断を発信側に求めるべきか利用しようとする受信側に求めるべきかは難しいところであるが、現存するインターネットや各種メディア界における情報提供者数と利用者数との実態を鑑みて、私は情報発信者たる各種業界に、より高い道徳性とそれに基づく内容の適否判断を求めたい。

現在、報道機関や出版社等においては、独自の視点で表現や報道・出版内容について評議する機関・組織は存在する。しかしそれはあくまでも自社論理の域を越えておらず、又その存在自体不透明な現状にあるように見える。

本件は表現の自由、報道の自由、或いは事前検閲の禁止という憲法論議を前提とする等幾多の課題を避けられないのだが、インターネットにおける各種情報の発信管理者や報道や放送、各種出版、パソコンゲーム制作者等のメディア関係者に対し、より一層の公共性と社会秩序維持に対する責任を持たせるため、「より簡単な手続で国民の意見を求めることができる手続き」と「当該情報や表現が公序良俗に反するものか否かを、定期的に公の場で審査・評議」し、「その経緯を定期的に公表」し、報道や放送機関及び出版業者等各種情報発信機関（者）に対し自浄作用を促す、権力組織に委ねない市民の有識者らの手による各業界の垣根を越えた民間機関を設置し、併せて国民に対し道徳観を阻害する恐れのある表現や報道・放送、出版の在り方について意見を求める一層の広報・啓蒙活動を実施すべきである。

② 深夜営業店等の自主規制への提言

前述したとおり、コンピューターを始めとする科学技術の発達や経済発展は、享楽と利己主義を独自の価値観とする人々を生み育て、そうした同じ価値観を抱く者達の集う場所として、或いは時折体験する人間的な惑いや苦難からの現実逃避の場所として、コンビニエンスストアやファミリーレストラン・漫画喫茶・カラオケボックス等が利用され、一部では犯罪の温床となる空間になっていることは周知の事実である。

勿論、純粋なる利用者も数多くいることを考慮するべきであるが、利己主義や現実逃避の実態からは相互に思いやるという道徳心が生じるはずがないことを理解した上で、そうした者達に対する「利用時間制限の徹底」「利用者の厳格な確認」を始めとして、「店舗自体における営業時間の配慮」等を、それらを運

営する企業が利用のモラルとして明示する事を義務化し、厳守の徹底を求めるため自浄手続を公開させ、更に公的機関の監督作用を強化させるべきである。

③ 幼少期における道徳教育の提言

近年、公の場における犯罪を如何に防ぐか、発生した犯罪を如何に早期解決するかという「今ある危機」に対する施策は、「警察官の増員」「交番統廃合による空き交番対策の推進」「ボランティアによる防犯パトロール隊の結成」「防犯カメラや防犯灯の設置」等それなりに講じられており、成果を上げている。

ここで論じたいのは、幼児期から児童期にかけて「物事の善悪を判断する能力」「人や物を大切にし、相手（物）を思いやる心」を育てて、将来に渡って犯罪を起こさないような人間を育成するという教育を、家庭教育・学校教育で実施すべきであるという提言である。

太古の時代における人類、男性は野原での狩りに適するようにと筋骨隆々とした身体を授かり、狩り等によって発達進化させつつ家族への父性を磨き、女性は子孫を育むのに適したものととして丸みを帯びた身体を授かり、家庭において母性を磨いて来た。そして古の日本においては時に磨かれた知恵や伝統や風習、果ては「教育勅語」等に代表される様々な教育指針が加わり、一時期において世界諸国から「日本人は世界一道徳観念に優れた民族」、「日本は世界一安全な国」と賞賛される国となった。

核家族化が進み、経済至上主義が蔓延し、利己主義が規範意識を凌駕する平成の現代において、古の教育を全て再現できるものではないが、幼児期においては家庭教育をより充実したものとする為に、親が子供と共有できる時間をふやす施策（例えば、経済的理由のみが自宅における育児を阻害する場合、公的経

済支援により自宅で育児できる制度等）や増加傾向にある高齢者の知恵と力を借りた育児支援等の環境整備、企業における託児施設の更なる充実と親子の共有時間確保の義務付けを期待したい。

又、児童期においては「教師から生徒に対する一方的な詰め込み教育」と言われる現在の教育の在り方を改め、「対話体験型教育」を重んじ、「挨拶や作法」「正しい日本語や読書習慣」「動植物の飼育や栽培」「武道精神に根ざした道徳の教育」等を義務づけ、学科教育と平行して集団生活のあり方を体得し、自ら汗する事を美德とする教育をより重要な位置づけとすることを提言したい。

家庭の経済的充実を図るために、或いは親の人生設計のために兎角「外で働く両親の支援の為」という方向性で各種施策が検討され、一部では朝食の摂れない子供のために学校で朝食を準備するという報道も存在する時勢だが、「朝食を自宅で摂れない子供の為に」ではなく、「子供が自宅で朝食を摂れるような」対策を考えるなど、親が自分の子供を自分で責任もって育てるといふ基本への立ち返りを模索し、自身の子供の養育を他（機関・人）に任せっ放しにするという現在の子育ての在り方を、親が自らが加わる子育てへと変化させるよう、地域・行政の力を借りて将来の日本のために再考するべきである。

④ 情報共有制度への提言

個人情報保護法の施行により国民全体が個人情報の保護に興味を持つと同時に、他方では此が拡大解釈され、「町会名簿が作成できない」「学級名簿が作成できない」「国勢調査が実施できない」等の弊害が発生している。

国民が個人情報の保護に殊更神経質になるのは、一部の機関や組織、犯罪企図者がそれら情報の独占利

用や悪用する事を危惧するからであるが、秘密と捉えている国民相互の一定の情報を国民相互が公開すれば、秘密という概念を越えて秘密ではなくなり、共有財産となつて治安・防犯対策に活かせるはずである。

隣人の顔が見える環境であるからこそ、相互に相手を気遣う事ができた古の風習が、防犯対策や震災対策の礎であつたことを鑑み、昭和の時代を思い出し、最低限の情報共有を認めるシステムの構築を提言したい。

例えば、昔から警察組織には国家公安委員会規則を活動根拠として、国民の任意協力を根ざした巡回連絡という制度が存在し、この制度で得られた個人情報警察組織が責任を持って保有管理し、災害等非常時の連絡確認等の警察目的に使用されたり、警察官の連絡訪問によって防犯意識の啓蒙活動が促進されてきた経緯がある。

しかしながらこうした優れた制度さえ、国民の生活様式や権利意識・価値観の変化、犯罪捜査への転用危惧等の考え方から協力を得にくい実情にある。

もとより本提言はこの制度の充実強化を求めるものではなく、制度管理や実施機関の選定、取り扱う情報の種類や内容においても充分なる検討を要するものであるが、「住居における表札表示の徹底」等、国民に対し一定の情報提供を義務づけ、地域や自治体で最低限の情報を共有することができるシステムが存在し、隣近所の顔が常にわかりあえる社会が実現できれば、地区・地域で連帯感や防犯意識が生まれ、万が一発生する災害時などに相互扶助の協力体制が構築できるはずであり、そうするべきである。

⑤ 街頭犯罪の取締協力への提言

警察庁がホームページ上で公開している犯罪統計によれば、刑法犯の認知件数は、平成一四年まで七年連続して戦後最多を記録し、平成一四年では二八万三千余件を記録したが、以後、国民と捜査機関が主導して実施した警察改革の体現でもある種々の施策によって、平成一五年から徐々に減少し平成一七年には二二六万九千余件となった。

一方、検挙人員は平成一三年以降毎年増加していたが平成一七年では前年に比べ微減（〇・五％）している。犯罪捜査活動を評価する指針の「検挙率」という指標では、平成一七年の二八・六％は、認知件数の大幅減に対する検挙人員の微減が示すもので、決して治安回復の各種施策が功を奏して治安が回復傾向にあるものと誤解してはならない。

事実、時代の流れと共に新たな犯罪が出現し、国はその対策のため各種法令の見直しや立法を余儀なくされているのである。

街頭にて犯罪対策にあたる立場から見れば、現代の犯罪は「陰湿且つ自己中心的」であり「享乐的なものが大半であり且つ暴力的」である。

「衣食足りて、礼節を知る」という教えは遙か昔に消え去った感があり、現実にごく一部を除けば生活苦の為に他人の財物を盗む者や、弾みで他人を傷付ける者は殆どなく、逆に、発達した情報網によって犯罪態を明らかにし、犯罪予防・犯罪抑止の世論を喚起しようとする情報提供者（各種メディア等）の意図を逆手にとって、愉快犯・模倣犯として第二第三の類似犯罪を敢行する犯罪企図者は増加傾向にすらある。

又、世間全体が頻発する犯罪に善悪の感覚が麻痺し、「金払えば良いんだろ」「盗った物、返せば良いんだろ」「これ位のこと誰だってやっている」という犯罪者やその身元引受人の態度と言葉を目の当たりにする度に、規範意識・遵法意識そのものが希薄となつていゝる現実をまざまざと突きつけられている実態にある。

そうした中であるからこそ、私は敢えて、犯罪総検挙数の約五割を占める街頭警察官の職務行為（氏名の明示と所持品の提示）に公的な協力の検討を提言したい。

昔、警察官という職業はある種の敬意をもつて社会的に認められ、国民との間にも一定の信頼関係を有する職業であつた。

しかしながら一部不心得な職員のために国民における警察官に対するイメージは一変し、社会的な背景や国民の価値観の変化と相まって、街頭における警察官への国民的感情は、「法の厳正なる執行者」たる敬意の対象ではなくなり、職務質問に付随する所持品の提示要求の例一つを挙げて、「権利か義務か」の間答から始まり、「強制か任意か」「捜索令状はあるのか、ないのか」という論争に発展し、職務行為が遅々として進展せず、果ては犯罪を未然に防止しよう、或いは起きた犯罪に対峙しようとする純粋な正義感を萎えさせる事態も散見される。

又、社会同様、警察組織においても団塊の世代と称せられるベテラン警察官の大量退職時代を迎え、三〇年四〇年と培われて来た様々な捜査手法の継承に警察組織自体が危機感を募らせて様々な後継者育成方を展開中であるが、警察活動全てにおいて充足されているわけではなく、実質的な弱体化・機能低下が

懸念されている現状も認めざるを得ない。

職務質問など犯罪捜査技術に関し、それらを生業とする警察官に対してその職業のプロとして、それら技術の更なる研鑽の義務を課すことは当然であり、捜査機関が有する権限に新たな公的支援を与える様な考察は戦中戦後の暗いイメージに由来することが多く、これまでにタブー視してきた実情もあり熟慮する必要もあるが、警察活動を第三者の目で監視できる公安委員会の監察権強化策や公安委員会への広聴事案処理報告のシステムが立ち上がり、あるいは特定犯罪の被疑者における公的弁護制度や裁判員制度の導入など、開かれた司法制度が歩き出し、捜査機関と国民が公の場でそれぞれの主張を展開できる環境が整いつつある中で、法的な後押しに拘らず、遵法精神の喚起を啓発する公的な広報活動に着手し、その一方法として市民が警察官の街頭における職務行為に協力をして、共に治安を築いて行こうと呼びかける純粋な発想を実現すべきである。

⑥ 刑罰法令の更なる慎重な適用の提言

過日、刑法及び刑事訴訟法の一部が改正され、窃盗罪に罰金刑が新設されたり、業務上過失致死傷罪の罰金額が引き上げられた。

犯罪者の人権保護ばかりが重要視され、犯罪被害者の人権や処遇を軽んじてきたという経緯を反省に、犯罪被害者に対する支援の組織構築や犯罪被害からの立ち直りの相談業務等が軌道に乗り充実してきている事を踏まえ、現代の犯罪実態と世論を背景としたこうした諸法令の見直しは、被害者の寛大な仏心を礎えとし、犯した罪を真摯に反省して罪を償い、更生の道を歩もうとする犯罪者の将来を慮る国家の意志を

象徴するようで感慨深く歓迎したい。

しかしながら、犯罪者を第一線で取り扱い、その実態を間近で目にする一人としては、その法適用には充分な被害者感情への考慮・確実な身元引受と更生計画に根ざした当該法令の適用を求めたく、いやしく荷も被害者感情へ充分な思いを馳せる事なく、犯罪者の資質を正しく評価し得ないまま、被害者との安易な示談や或いは拘禁者収容施設の不備・不足等の理由からは適応すべきではないと考える。

例えば、現在は八八人もの未執行死刑囚の存在が有る。(平成一八年七月末現在)

死刑執行の是非が国家の刑罰権の行く末に波紋を投げかけ、世界一二八カ国の国が死刑の執行を廃止若しくは停止しているという実態の中では、再審の可能性等を考慮すると、その執行の可否は誰もが即断をできる問題ではないが、犯罪者の中には「○○人殺しても死刑にはならない」「金で直ぐ出られる」と豪語・吹聴する者も現実に存在し、国家の刑罰権を軽視する傾向も否定できない実情に來ている。

「一罰百戒」という古の諺を用いて死刑論議に結論付けようとする事は横暴であろうが、刑事罰(死刑・懲役・禁錮・罰金・拘留及び科料を主刑とする。【刑法第九条】)の存在が、国民の遵法精神を育み、犯罪の抑止に寄与するよう、例えば、加害者と被害者との関係修復のみにとらわれることなく、犯罪の社会的影響や反復性、模倣可能性等が充分考慮され、「慣例的な保釈を認めない」「安易な仮釈放を認めない」等、「金があれば留置されない(すぐ出られる)」「所詮、金が全てを解決する」等という誤った認識と誤解を国民に抱かせることのないよう、こうした処断には、「犯罪者における更生計画の提出」と「履行状況の定期的な報告」等を公的な機関にさせる等、真に社会的に更生していく実態にあると確認できるシステムを

構築すべきである。

おわりに

科学技術と経済発展によって世界に確固たる地位を築いた日本ではあるが、一方で「ズボンをはキチンと履けず、道端に座り込み、携帯電話がなければ、友人の名前すら言えない」実態の若者を取り扱うにつけ、科学技術と経済以外では世界に胸を張れない国となってしまうと感ずる今日この頃である。

新聞紙上を賑わす事件事故の類は氷山の一角でしかなく、日々発生する犯罪は複雑且つ巧妙・悪質化を辿り、種々の統計では計り知れない背景と実態にあり、その原因は正しく国民の道徳観の低下による規範意識の崩壊にある。

犯罪のない安全安心な街作りのためには、犯罪実態に見合った即効性のある様々な施策と、今後の犯罪を減少に導く将来的視野に立った良識ある人作りと社会作りが必要であり、今後、日本が経済や科学技術のみでなく、本来の伝統と格式、道徳心に満ちた国として世界に確固たる地位を築いて行くには、国家国民が「治安と教育の関係」を如何に重要と捉え、取り組んで行くかにかかっている。

※ 本論文の出典関係

一 巡回連絡制度

警察法施行令第一二三条より

地域警察運営規則第五条

二 未執行死刑囚人数

読売新聞平成一八年八月二八日朝刊

三 本文内の統計数値

警察庁ホームページにおける統計表

『社会の安全と日本人の倫理』をいかに 考えるか

警察官（大阪府堺東警察署）

近藤 正隆（27）

一 カミナリ親父と子供の保護者

最近、小中学校に対して不条理な要求をする生徒の保護者が増えているという新聞記事やテレビの報道をよく見かける。

例えば、悪いことをして先生に叱られた場合に、子供が家に帰り保護者にそのことを言うと言つて保護者から

「なぜ、うちの子を叱るのか」などという抗議の電話がかかってきたり、放課後に学校の外で子供が怪我をしたのが学校の責任だなどと言ってみたり、さらには学校の成績が悪いのは先生の責任だというような抗議まであるようだ。こういった記事や報道を見ると、保護者が自分の子供の教育をすべて学校に押しつけ、その責任を学校や先生に転嫁し責任を放棄しているのではないかとさえ思えてくる。

私は、以前ある町の自治会長と話をする機会があり、その自治会長は「私が若い頃には、よく近所の子供達が悪いことをすれば子供を捕まえて説教したものです。昔は、子供を叱ればその親が後で私のところまで来て謝り、礼を言って帰ったものですが、最近の子供は説教しても言うことを聞きません。それどころかその子の親が私のところまで来て、なぜ私の子供を叱るのかと抗議に来ることもあります。以前は私のように、悪いことをする子供達を見つけては怒鳴ったりするカミナリ親父のような存在が町内に一人か二人くらいはいたものですが、最近の子供達が凶暴になり、そんなことをする人もほとんどいなくなりました。もう今の時代には必要ないと思われるかもしれませんが、それでも私は体が動く限り、町内のカミナリ親父として子供達に説教していこうと思っています」と私に話してくれた。

学校の先生達も一生懸命子供たちに教育しているのであるが、少ない人数でたくさん生徒を見るのにも限度がある。なによりも子供達に社会の常識やモラルを教えるのはもちろん保護者の責任であるが、自分の子供に対する教育が出来ない保護者が増えてきているように思われる。カミナリ親父の存在さえ社会が拒否してしまっている今、保護者から社会の常識やモラルについて教育されていない子供達が、日本人のモラル崩壊の一因となっているのではないだろうか。

二 モラルの段階的崩壊

ただ単にモラル、倫理観の崩壊といっても具体的に言えば大小さまざまある。例えば、電車の中で座り込み、大きな声で携帯電話を使用して話をするといった、最近日常で当たり前のように見られるようになってしまった行動から、ひったくりのような犯罪行為までいろいろある。今挙げた例えは、若者達から始まったと言われる行動であるが、特に最近は少年達のモラルを問題視する意見が多く聞かれる。ひったくりのような犯罪行為はただ単にモラルという言葉で片づけられる問題ではないが、このような犯罪行為も電車内での携帯電話の使用のような迷惑行為と決して無関係ではないだろう。

以前は携帯電話がなく電車で使用することも当然なかつたのであるが、電車で床上に座っている者がいれば、それを注意する者がいただろう。しかし、カミナリ親父が社会から拒否されて今、このような行動を注意する者はおらず、若者は当たり前のように電車の床上に座ることになる。そして、それを見た他の若者がまた電車で床上に座るようになり、これが多くの若者に広がっていき、みんながするのならば、またそれを真似する者が増えていくのである。このように、一つの行動が迷惑がられながらも誰にも注意されることなく、世間に広まっていけば、また若者達はこれくらいならいいだろうという感覚で、次の迷惑行動を行うようになるのである。

三 モラル崩壊に関わる集団意識

迷惑駐車を例にとってみる。迷惑駐車は一台も車が止まっていない道路では車を駐車することに罪悪感を感じ、なかなか車を駐車できないだろう。しかし、そこに少しだけならいいだろうと路上に車を駐車し、一台の迷惑駐車車両が路上におかれる。そこへ次の車が来るとこの路上には車が駐車しているので、自分だけではない。自分も駐車してもいいだろうと路上に駐車し、また一台迷惑駐車車両が増える。そして、その二台の車を見た次の運転手が路上に駐車するといったように、車が増え続けてその道路は迷惑駐車車両でいっぱいになっていくのである。そしてその道路で違法駐車を取り締まりを受けると、運転手は「他のところでも車が駐車しているのに何故こだけ取り締まりをするのだ」「自分が駐車したときに取り締まりをされて、運が悪かった」と言うばかりで、違法駐車をして悪かったと反省する運転手ははっきり言って少ないのである。

このように「赤信号、みんなで渡れば怖くない」というような感覚で、みんながやっているのだから自分もやっていいだろうとみんなが思っている行動するようになり、一つの行為が当たり前のように行われるようになり、そしてまた一つ倫理観が崩壊していくのである。

四 深夜徘徊する少年達と何も言わない保護者達

最近少年らが深夜に当たり前のように町中を徘徊しているが、これに対しても少年らに注意する者は

ほとんどおらず、コンビニの前にたむろしているような少年らに話を聞くと、保護者は少年らに対し「何も言わない」そうだ。しかし、深夜に少年が徘徊し、たむろしているのはやはり社会安全上いいことであるとは決して言えない。深夜帯というのはやはり数多くの犯罪が発生する時間であり、少年が犯罪に巻き込まれる可能性があるのはもちろんのこと、場合によっては少年が犯罪行為を行う側に引き込まれる可能性がある。少年らの保護者は、こういった深夜の危険性をわかっていないのではないだろうか。

深夜に少年が徘徊することも、モラルの崩壊の入り口の一つと言っているだろう。深夜に少年が外出をするということにより、少年は「自分が深夜に外出する程度のことであれば、自分の親は何も言わないのだ」と感じるようになり、また深夜に活動することにより、保護者にばれないように悪いことが出来るようになる。そして、悪いことをしてもばれなければいいのだと、少しずつ一人の少年の中のモラルが崩壊していき、少年は非行に走るといった一つの例である。

深夜に外出し、遊びに行く子供を持つ親は、子供が深夜に外出し何をしているかを知っておく必要があるだろう。そして、子供の様子がおかしいと感じれば、深夜に外出することが当たり前になる前に止めなければならぬ。毎日深夜に出かけることが当たり前になれば、悪友と一緒にいることが当たり前のような状態になっている可能性が高く、また、今まで何も言わなかったことに対してなぜ今更そんなことをいうのだという気持ちから、保護者の一言だけでそこから抜け出すことは、難しいだろう。そうなる前に子供が何らかの信号を出した早い段階で保護者が気付いてやり、子供とのコミュニケーションをとってそういった世界から助け出してやらなければならない。「うちの子供に限って」という思いの方

も多くおられるかもしれないが、現代の社会においてそういった考えは、通用しないということを年頃の子供を持つ親は、理解しておかなければならないだろう。

五 非行少年とひったくり

ここで少し視点を変えて、少年問題の大きな問題の一つであるひったくりという犯罪行為に注目してみることにする。ひったくりとは一般の感覚であれば被害者と直接会うことにより、顔を見られる可能性が高く、また場合によっては被害者に大けがを負わせる可能性がある、危険極まりない卑劣な行為である。しかし、ひったくりをする非行少年達にとってひったくりとは、手軽にお金が入る非行の入り口にあるような行為としてとらえられているのである。

もちろん大半の少年にとってはひったくりをするなんてとんでもないことだと考えているし、ひったくりをする少年も最初はひったくりなんてとんでもないことだと思っていたであろう。ではなぜ非行少年らはひったくりという危険で卑劣極まりない行為を行うのだろうか。ひったくりを行う非行少年らにとってひったくりとは先に述べたように、手軽に出来る行為であるにとらえられている。ひったくりは最初に実行するまでは被害者と直接顔を合わせることもあり、とんでもない行為だと考えられていても、今までにひったくりをしたことがある者に誘われるなどして一度やってみると、被害者と顔を合わせるのはほんの一瞬のことでそれも顔を見られることはほとんどない。また被害者が転倒するなどして怪我をしても、それはひったくり少年がすでに犯行を終え走り去った後のことであり、被害者がもしその後に車椅子で生活

しなければならぬような大怪我をしたとしても、それは自分は見えていないことであり、知らないことなのである。このようにひったくりとは被害者と直接会う行為であっても、加害者は被害者の痛みというものにはわからないのである。そして、ひったくりは実行するために特別な技術が必要な行為ではなく、ミニバイクが運転でき、一度実行するための度胸があれば出来る行為であり、ミニバイクが運転できなくても場合によっては自転車に乗って犯行が出来る簡単な行為としてとらえられているのである。このように一度ひったくりを知ってしまった非行少年は簡単にお金が手に入る行為として、ひったくりを繰り返すようになり、また気軽に出来る行為として他の者にひったくりを勧め、またひったくりが増えていくのである。このようにして、非行の入り口に位置するひったくりという行為を繰り返して、少年らの中ではひったくりはもはや遊び感覚、ゲーム感覚で行われるようになる。そして、その罪悪感が麻痺してくれば、非行少年らはまた次の段階の非行行為を行うのである。

六 ひったくりの広がり

しかし、ひったくりは元々は大阪から多発し始めたものであり、大阪府がワースト一の地位をずっと続けてきたものであるが、現在ではさらに被害が全国規模へと広がってきている。それではなぜ、これほどまでに被害が広がり始めたのだろうか。

その理由の一つとして、メディアの報道によるものがあるだろう。メディアが社会問題としていろいろな問題を取り上げ、例えばひったくりを取り上げて報道した際に多くの人はひったくりの被害が増えてい

ることを知り、自分も気をつけなければならぬと防犯意識を高めるであろうが、中にはこの報道を見てひたたくりという簡単に行える犯罪をみんながやっていると思いその犯罪に興味を持って自分もやってみようとする者がいるのである。テレビによって報道された事件は連鎖反応のように同じような事件が続くことがあるが、テレビの報道を見たものがそれを真似して行うことも十分に考えられることである。

コンビニ文化の普及も理由の一つだろう。コンビニは二四時間の営業時間を大きな売りの一つとしており、約二〇年前には町中にほとんど見られなかったものであるが、その後急速な増加と広がりを見せ、現在では主要道路を走れば数百メートルくらい走れば必ずコンビニがある、さらに場所によってはコンビニが道路を隔てた向かい側に建っているというくらい当たり前のようになっているものである。そして、最近ではコンビニに限らずカラオケボックスやゲームセンターなどの娯楽施設やファミリーストランなどが当たり前のように深夜に営業している。このように深夜に営業する店舗が増えたことから、深夜帯に少年が徘徊する姿が当たり前のような光景になり、コンビニやカラオケボックス、ゲームセンター等少年らが蝟集し、そこでまた新たな悪友達と出会って、それぞれ情報の交換を行うのである。

そして、特に最近ひたたくりが全国規模に急速に広がりを見せた理由は携帯電話の普及だろう。携帯電話の普及により、これまでよりも簡単に情報交換が出来るようになったことはもちろんであるが、これまでは話すこともなかったあまり親しくないもの、例えば友人の友人等のように今までに一度も顔を合わせたこともないような者や、一回か二回顔を合わせたことがあるだけというような者とも簡単に情報交換が出来るようになったのである。

このように社会が便利になる一方で、これらの技術が悪用され犯罪の広がりや犯罪行為そのものに利用されるようになるのである。

七 モラルの崩壊を止める為に

このようにして世間において一つのモラルが崩壊し、その行為に対する罪悪感が麻痺すれば、またこれが出て来るのなら次はこれくらいなら大丈夫だろうと言った感覚で、また次のモラルが崩壊していき、段階ごとに進んでいくのである。

それでは、どうすればモラルの崩壊を止められるのだろうか。

モラルの崩壊を止めるためには、まずは些細なことでも迷惑行為を見つければそれを止めることが必要だろう。私が以前テレビで見たことであるが、アメリカである町の町中の落書きをみんな協力して全て消したところ、その町では犯罪が減ったそうである。町の中に落書きがあれば、その町の中では落書きという行為が黙認されているような印象を受け、落書きがいいのなら他の行為も少しくらいならいいだろうという気持ちになり、迷惑行為や犯罪が行われやすくなるのである。落書きがなければその町では落書きも許さない厳しい町であるという印象を受け、迷惑行為や犯罪行為が行いにくいのではないだろうか。そこで必要になるのが、カミナリ親父だろう。カミナリ親父のような存在がいれば、わるいことや迷惑な行為をしている子供を見つけては捕まえて叱るのである。しかし、冒頭で述べたとおり世間はカミナリ親父の存在を拒否してしまっているのである。

よく少年が蝟集し、喫煙したり騒いだりバイクで走り回ったりするようなマンションがあるとす。そのマンションの住人は、少年が集まり騒ぐことが迷惑なので警察に通報するが、住人はそれ以降は警察にまかせつきりになり、自分では注意しようとしてもしない。それどころか通報の際に自分の氏名を明かすこともせず、警察に通報してしまえば、後は我関せずといった人が多くいるそう。もちろん喫煙したり騒いだりする少年達を注意し補導することは、警察の仕事である。しかし、警察に通報してしまえばそれでいいというのはいかがなものだろうか。警察にしても一つのマンションにずっと張り付いて警戒し続けるわけにはいかず、他にも少年が蝟集する場所を回ったり、犯罪が発生しないようにパトロールしなければならぬのである。最近の少年は何をするかわからないので一人少年達に注意し叱るカミナリ親父のような行為は危険かもしれないが、本当にそのマンション、その地域を安心して安全な場所にしたいと思うのであれば、その地域の自治会等がみんなで協力してパトロールするなどして、地域の大人みんなでカミナリ親父の役割をし、その上で警察と協力して蝟集する少年達に注意し、蝟集させないようにする必要があるのではないだろうか。

このようにして、自治会のような団体みんなで活動し、みんなで細かい迷惑行為に対してでも注意しあえる関係になれば、モラルの崩壊が先の段階へ進むことを止められるはずである。

しかし、それだけではなく家庭内での保護者の役割もモラルの崩壊を止めるためには必要になるだろう。冒頭に述べたように保護者がカミナリ親父を拒否してしまっているのは自治会での活動が無駄になってしまふ。子供を叱るのがカミナリ親父一人ではなく自治体であれば保護者も受け入れられるかもしれないが、

カミナリ親父一人に子供が叱られたとなれば受け入れがたいものかもしれない。しかし、本当に自分の子供のことを思うのであれば、自分の子供が悪いことをしたという事実を受け入れて、自分も子供と一緒にあって謝りに行くくらいの方がいいのではないかと私は思う。また、全ての保護者ではないが、子供を持つ親としてもっと自分の子供のことに対して関心を持ち、子供とコミュニケーションをとって、自分の子供のモラルが崩壊しようとする信号を感じ取り、それを止めてやらなければならぬ。子供が出す信号を最も身近に感じるものが出来るのは、学校の先生よりも一緒に生活している保護者であるということをも再認識してもらいたい。

八 大人社会のモラルの見直し

これまで、少年達のモラルの崩壊について述べてきたが、少年達が人の道を外した行動をとらないようにするためには、まずは大人達がその手本とならなければならぬ。少年達に対しいくら説教したところで、大人達が人の道を外した行動をとっていれば当然説教を聞くはずもなく、大人の悪い行動を真似するようになる。このような大人達のモラルを改善するためにも、現代社会では拒否されてしまっているカミナリ親父の復活が必要になるのである。カミナリ親父は先にも述べたとおり一人である必要はない。地域においてみんなで協力し、地域の安全は自分たちが守るといふ強い気持ちで活動すれば、地域の安全も保たれるであろうし、またそういった活動を通じて地域で個人それぞれが悪いことは悪いとお互いに言い合えるような関係を作っていければ、個人のモラルも保たれるようになるだろう。

九 おわりに

これまで、少年問題からモラルの崩壊について述べ、モラルの改善方法を考えてきたが、少年問題を解決し、先に述べたモラルの改善方法を実践するためにも、それぞれみんなが人間関係をもっと大切にしなければならぬだろう。

家庭内において親達はいつも子供が何をしているのかを知らず、子供が深夜に外出しても何も言わない。家庭内においてももっと人間関係を大切に、挨拶から始め、親達はもっと自分の子供のことを人任せにすることなく、子供とコミュニケーションをとるように努め、子供に何か異変があれば気付いてやれなければならぬし、悪いことをすれば注意し、叱ってやれる関係を作っておかなければならない。

また、過去において日本の地域ごとにおける人間関係は地域ごとに非常に結束力が強く、みんなが協力しあってお互いを助け合うことの出来る社会であったはずである。しかし、現代においては個人主義になりすぎていて、みんなが周囲の人間に対して無関心になってしまっている。例えば、最近の子供達は近所の人たちに出会っても挨拶の出来ない子供が増えてきているが、これは大人達が近所の人たちとのつきあいが少なく、出会う機会が少なくなっているせいではないだろうか。また、最近では老人の孤死などが増えており、隣の家で何が起きているのかを全く知らない状態である。これでは近所の人付き合いがないと言わざるを得ないだろう。地域内でそれぞれがもっと近所に対して関心を持ち、まずはみんなが協力してカミナリ親父の役割を演じる。その後、みんながそれぞれカミナリ親父になることが出来

れば、日本人の倫理観は保たれ、安全な社会を作っていくことが出来るだろう。

〔参考文献〕

- 『現代ひつたくり事情』産経新聞大阪社会部 藤掛明 著
『病める関係性 ミク〇社会の病理』高原正興ほか 編著

「人間復興を目指して」

○ルールとマナーを守ることから

城山は六百種以上の樹木に覆われ、鹿児島市の中心地にあつて、市民の心を和ませる貴重な森である。高台には、市街地と桜島を一望する展望台があり、そこから眺める美しい景観は格別である。そこを通り下の照国神社へ通じる遊歩道は、散歩コースとして古くから市民に愛され利用されてきた。

無職
鮫島 秀継 (51)

新緑の芽吹く四月、私は心地よい気分になりながら初めて森の中の散策を楽しんだ。ところが数日間歩いてみて残念なことに気付く。犬の糞が放置されたままで、日によっては一日に数回にわたり排泄されたばかりのものもある。

そのことを行き交う方に尋ねると、糞をよけるために下ばかり見て歩くのではなく、顔を上げ森林浴に浸り、木立の景色を楽しみながら歩きたいのにね、とため息をつかれる。以前、県外の観光客にこのことを非難され、「せっかくの遊歩道が台無しである。市民のマナー向上を望む」と新聞に投稿されたことがある。

犬を放して歩いている人に放すのは条例で禁止されていると協力を求めても短い距離だから大丈夫だという言葉が返ってくる。

糞の放置が不快だと言われる方々に改善に向けて一緒に運動をしましょうかと呼びかけてみたものの期待した返事が得られなかった。

早速、遊歩道の管理者である市の緑地公園課に改善策を問い掛けてみるが、一部の人が違反しているだけだからと別に問題視していない。一部の飼い主が犬の放しや糞の放置についてマナーを守らないために、やむを得ず条例の制定に踏み切った経緯があることを市が忘れるはずがない。そう思いながら前向きに対応策を考えてほしいと再度お願いするが無駄だった。その後、保健所にも尋ねてみるがやはり反応が思わしくない。

市の中心に市営の大きな健康スポーツ施設がある。その前庭に隣接する市立公園には犬の放しと糞の放

置を禁止する立て札が数箇所ある。その公園では幼児から高校生に至る多くの子供が遊びに興じている。一方では多くの大人が公園から施設の前庭にかけて犬を放し楽しんでいる。

ほほえましく心込む光景に、近くの住民も施設の市職員も別に何事もないかのよう眺めて過ごしている。しかし、そこを初めて目にする方があることに気付かされる。立て札に書かれたルールを無視するかのよう犬を放して喜ぶ大人の行為が立て札の近くで遊ぶ子供たちを将来ルールやマナーを守らなくてもよいとする大人にしてしまうのではないか。決まりは守るために在るのに、どうして目を向けようとしな

いのか考えさせられるのである。

以上のことを健康スポーツ施設の所長に長々と話し、公園から施設の前庭にかけて犬を放すのを止めるように飼い主へ呼び掛けてもらえないかお願いした。だが、理解を示してくれたかは正直のところ自信がない。

私たちは大人も子供も含めルールやマナーを守れない、あるいは守ろうとしない人間に知らず知らずのうちに変わってきていることに気付く。一見平和的なこの光景はよく見れば犯罪が多発する現代社会の縮図を思い起こさせる。私たちの日常生活の一こま一こまのなかには、何事もないかのように見えて、将来犯罪の方向へ子供を導きかねない出来事がよくあるのだ。

買い物どき店の前で順番待ちのため並んでいる列に平気で子供と共に割り込んでくる親。団地内の道路で車の通行妨害になるのに平気でバレーやキャッチボールをする親子。食べかすや空き缶を通りすがりの他人の庭に子供が投げ入れても平気で見過ごす親。周囲を顧みない自己中心の振る舞いは、今や当たり前

で珍しくない。この延長線上に、他人に迷惑を掛けて何が悪いとする非常識が生まれ、その先に良心の微塵もない凶悪な事件が発生する。

近所の人がする自己中心的な振る舞いに、私たちは黙認をして何も言わない。自分に火の粉が飛ばなければ良いとする考えが定着し、また隣人関係をこじらせないために、こうした事に触れないでおこうとするのである。そのため、善悪の区別が不透明な世の中に知らない間になっっている。

住みやすく安らぎのある町にするためには、お互いにルールやマナーを守る人にならなければならない。そのことを、堅苦しく面倒なこととして脇へ追い遣り無視すれば、将来、どういう社会になり、どのような問題が発生するかは容易に分かる。他人事ではなく、自分のこととして、地域のため社会のために貢献する気持ちを取り戻したい。昔は、住民の一人ひとりが地域社会に尽くすことを責務と考え、何より喜びと感じていたのである。

今は、社会全体的なことより自己中心的な考えが優先する。それでも、子供は親の背中を見て育つ。日頃より、大人が子供に良きお手本を見せることを心がけなければ、子供も自己中心的な大人になる。市役所においても、せっかく立て札を掲げ条例を制定したのであるから、これらのことが守れるように工夫を凝らしたい。そうすることで、子供はルールやマナーを守る大人になれる。

決して難しい基本的なことに、私たち大人は目を向けないばかりか、それ自体を周りから指摘されると、嫌悪感を顕わにすることさえある。だからルールやマナーについては互いに何も言わないで、見て見ぬふりをする。子供の教育上、建設的で大事なことであっても、角の立つことは出来るだけ言わずに黙っ

ておくことがベストであるとする風潮が、世間一般に浸透している。そのためルールやマナーより、自己中心的で事勿れ主義が先行する世の中になっているのである。

このことは子供を健全に育てる上で、支障をきたすことになるので、大きな問題点として地域ぐるみの集会、あるいは子供の育て方教室、講演会、PTAなどで地道に取り上げ、共通理解をしていく必要がある。昔は地域社会のなかで守られていたルールやマナーが、今では守らなくても咎める人もなく、それが元で道徳や倫理も崩れ、子供として人間として振舞う上で大切な行動基準も、確固としたものがなくなつた。

こうした流れを反省し、改めてルールやマナーの大切さについて考え、互いに声を掛け合うことにより、それらが守られる社会にする必要がある。

○歴史に学べ

壁にぶつかり進むべき方向を見失ったとき、歴史に学べという諺がある。今は、まさにそのときである。現在は昔に比べ、人と人との触れ合う機会、住民同士の交流の場が少なくなりつつある。それは経済成長の流れと重なる。

経済の右肩上がりには、地方の若者を都会へと押しやり、核家族化を招いた。農村部は高齢者が残り、過疎化現象を起こし活気をなくした。都市部は生活の利便性に加え、食料や生活必需品であふれ、命の次に大事なものは金だ、とする言葉は流行語だけに留まらず、実感できるものとして人々の内面に深く浸透す

るようになった。その代わりとして、誠実、情愛、慈悲、忍耐など、人間社会の核として重んじられ大事にされたものが、次々と人々の心から消し去られていくことになった。

この時分、東京に居た私は急に様変わりしていく周囲に、驚きと違和感を抱いたことを覚えている。ともかくにも、周りから聞こえてくる話は、旅行や宴会、株価に馬券、グルメに温泉などなど、お金がなければ出来ない話題ばかりである。そのとき、ふと私はどことなく物寂しさを感じ、そのうち人間がロボットのようになり、人間的な感情や思考を持たなくなるのではと思ったほどである。思想や道徳、モラルや信仰などは、面倒なものとして眼中に入らずに、ひたすら楽しいこと面白いことを求める先に、何かしら人間が内面から崩れていく予感を抱いたのは、私だけではなかったはずである。経済発展がもたらした収入の増加と物の豊かさは、本当に私たちを幸せにしてくれたのだろうか。

経済が成長するにつれ、若者を表す言葉に「新人類」「超新人類」が生まれ、それまでの常識では理解できない若者像が、当時の話題を誘った。

学校内においても、いじめや体罰が多発し、根暗や弱者を嫌う思いやりの欠けた行動が表面化した。また、登校拒否や引きこもりのように学校や社会に適応できない児童・生徒が出てきた。そして、学校の荒廃が進み、児童・生徒間の残酷な殺傷行為は、切断了した頭部を正門の上に置くというショッキングな事件にまで発展した。学級崩壊を引き起こす児童、学級経営に悩み心身症を患う教師など、かつてない学校現場の混乱に、解決の糸口すら見出せない時期もあった。

社会においても、確執から殺し合いに至る親子や、わが子を虐待することに抵抗を感じない親、通り魔、

集団による大量殺害に暴走する若者、一人暮らして自殺に追い込まれる老人、挙げれば際限なく続く凶悪さと悲惨さに、どうかすると私たちの心は慣れっこになり、マスコミからの報道に驚かない場合さえある。こうした悪しき流れに、歯止めを掛けなければならぬのだが、その気持ちはあっても、こうした現実を前にして、なぜか私たちは無力感だけが先行し、新たな対応策が出てこない。

この大きな課題の前に立つとき、私の脳裏に浮かぶものは、まだ貧しき時代の郷里である。経済成長が心と心の交流の場を人々から奪い、モラル崩壊をもたらしたのであるなら、逆に私たちは昔を振り返り、経済発展前の先人たちの思いやりに満ちた和やかな生活を、取り戻さなければならぬ。

時間の流れを、現在から過去へ遡らせることは不可能であるが、現代人の心を、昔の人々の心に近づけることは可能である。

近隣の地域住民と共に、衣・食・住を分かち合い、固いきずなで結ばれた時代こそ、私にとっては忘れられない至福のひとつである。

私の郷里は、全国的に見ても特に貧しい小さな田舎で、多くの住民が農作業に従事し生計を立て、ほそぼそと暮らしていた。労働の多くが手作業のため、小学の高学年から田畑に駆り出され、稲作や作物の収穫に汗を流したものである。

特に稲作は田植えから稲こきまで一貫して行うので、育てて収穫するまでの苦労や喜びを体験し、生きることの充実を肌で感じさせてくれる。夕暮れどき、稲を刈り取った後の広い田んぼに、夕日を浴びながら赤とんぼが群れで飛び交う美しい風景は、今でも忘れられない貴重な思い出である。

浅い田んぼの水は生温かく、アメンボや蛙、ゲンゴロウにタガメ、ミズスマシなどが愛らしい動きを見せ、また近くの小川にはウナギやナマズに亀が生息し、どれだけ子供らの心をときめかせ和ませてくれたことだろうか。

自然は無言のうちに人間の内面に働きかけ、心を浄化させ、そして無意識のうちに道徳・倫理に目を向けさせてくれる。これらは、自然の中で生活してみないことには分からない。

それだけに、汚染され失われた自然を取り戻す努力をすることは、私たちに課せられた重要な務めである。

当時、農家の収入といっても、自給自足が主で金銭的に余裕がなかったため、近隣の人々と互いに力を出し合い支え合って暮らした。農機は耕運機程度だったので、田植えや米の収穫期には、一家総出はもろんのこと近所の手も借り、農作業をこなしたのである。

取り入れの終わった夜は、自宅に近所の方々を招き労をねぎらい、煮しめや炊き込みご飯、酒などで出る限りのもてなしをした。そうすることで住民同士の信頼関係が深まり、結束が強まったのである。

自然界のなかで人間が力の弱いことを知り抜いていた人々は、常に自然を敬い、自然と共生することを忘れなかった。また森の中に建てられた神社を、地域ぐるみで補修を施し清掃に努め大事にした。神社は四季折々の行事や祭ごとに活用され、皆で神に御供物を献上した。

そして米の収穫が終わると、一年分の食糧を恵んでもらったことを、自然と神に感謝し、謙虚な気持ちで動物や植物に接したのである。こうした生活の営みが、穏やかな日常生活を人々にもたらし、他人への

思いやりと氣遣いに満ちた和やかな心を育んだのである。

自然界に溶け込み、神仏を崇拜し、欲望に惑わされず、周囲に感謝しながら謙虚に暮らす。そうした生活の積み重ねが、生き物への思いやりや慈悲を培うのである。

したがって、親の子供への教えも現在とは違っていた。現在といつても、今始まったことではないが、子供においしいものを食べさせ、欲しいものを買いつえ、ねだられるたびに小遣いをあげるでは、まるでペットの飼い方と同じである。いや、最近では、ペットでも飼い主に反抗するようになるということ、甘やかさない育て方をするそうだ。

子供が大きくなるにつれ親に反発し、円満な親子関係が築けない末に、どちらかがどちらかを殺害するという悲惨な事件は、現在では珍しくない。親子の情愛は石よりも強く海よりも深いと言われたのは、過去のことだったのだろうか。親子間の殺害は、今の殺伐とした時代を象徴していて、本当に悲しくなる。

昔の親は愛情で子供を包みながらも、育て方は厳しかった。人を思いやり、他人に迷惑を掛けるな。人の物を盗んだり、嘘をついたりするな。親に恥をかかせるな。自堕落な生活をするな。物を大事にしろ。世のため、人のために尽くせ。弱い者いじめをするな。女や年寄りを大事にしろ。我慢強い子になれ。

多くのことを両親や祖父父母から叩き込まれた当時の子供は、それでいて純粹で素朴で健気な表情をしていた。親族のみならず、近所のおじさん、おばさんからも、やさしい言葉を掛けられ温かく見守られた代わりに、どの子も目上の人には会釈とあいさつを忘れなかった。

親が子供に情愛を注ぎながらも厳しく育てたのは、自然と神仏を敬うと共に、人間を大事にしたいとい

う気持ちがあったからだ、私は思う。人間が弱者であることを悟り、自然と神仏を心の拠りどころとして崇拜し、子供が周囲に迷惑を掛けずに、この世に生き延びていくことを願う親の謙虚さが、子供の育て方に滲み出ているように思えてならない。

かつて、日本には日本特有の文化と美しい精神が根付き構築されていた。それが、現在、音を立てて脆くも崩れ落ちようとしていることは、誠に悲しむべきことで残念である。

その要因は、人間が弱者であるという本質を、今日の人々が認識できなくなった点にある。経済発展の末に裕福な生活を送れるようになった私たちは、誰の力を借りなくても経済的には独りで暮らしていける。収入の増加は、核家族化や晩婚化、少子化といった現象を生み、金銭をめぐる様々な犯罪が後を絶たない。経済の強みは、そのまま人間の強みである。どうして、自然に感謝し神仏を崇拜する必要があるだろうか。お金こそは心の拠りどころであり、唯一自分を守ってくれるものである。近所の人とあいさつを交わし、結びつきを深めるといった煩わしいことをするより、金を稼ぐことに時間を当てた方が合理的で自分のためになる。子供の教育にしても同じで、金さえ払えば塾が学力を付けさせてくれるし、学校が食事の作法から掃除の仕方、道徳まで教えてくれる。

お金が全てを支配するといった金銭至上主義は、今や社会の隅々まで浸透している。こうして、かつて古き良き時代の日本文化と美しい精神は崩壊した。そして欲望と利己主義が渦巻き、道徳・倫理は地に墮ちたも同然の時代を迎えている。今日の人々に道徳・倫理を核とした行動基準を授けるためには、具体的にどうすればいいのだろうか。

○「あいまい」さを改めよ

日本の国民性として、あいまいさが挙げられる。身分の上下の差がはっきりしていた時代、身分の低い者が高い貴族等へ用件を話す際、明確に述べるより、遠まわしにそれとなく伝える方が失礼に当たらないとされ、婉曲な言いまわしが用いられた。それは考え方の上でも日本人のあいまいさを助長し、そのあいまいさは現在でも随所に見られる。

例えば、日本人が外国に出かけ、ある会合や社交の場で、相手に失礼のないようにと考え控えめにしていると、外国の方から日本人は何を考えているか分からないと、逆に非難される。

また、ある団地で知人が宅地を購入する際、販売業者から道路沿いの塀を所有地側へ十五センチメートル下げて設置してほしいと言われた。理由は、皆がそうすることで道幅が広くなり、将来へ向けて資産価値が高まる。そして、十五センチメートル幅のところを花を植えれば、住みやすく美しい街並みになることだった。知人はそれを信じ購入したのであるが、いつの頃からか、住民のなかに花ではなく苗木を植える者が出てきた。次第にそれを真似る者が増え、団地に波及している。

年月が経ち苗木が生長し、道路に枝葉が伸びれば、いずれは車の通行の妨げになることは明確である。しかし、販売業者を含め住民の誰もが口を挟まないで黙認している。先に口を開いた者が、逆に周りから非難され団地内の人間関係を悪くしてしまうと考え、黙っているのである。つまり、自分に火の粉が飛ぶことを恐れるあまり、皆一様に口を閉ざすのである。こうなると、我慢比べの様相を帯びてくる。知人は、

これでは業者が口頭で説明したように道幅が広くなるどころか、却って狭くなり、団地の景観も悪くなる
と憤慨し、業者から渡された「住みやすく美しい街並み造り」の規約書を開いてみた。

そこには「草花等を植栽する」とある。「等」を用いあいまいな表現にしたことが、責任の所在を不明確
にしている。

年月を重ねるごとに、苗木は大きくなり枝葉が伸びていく。それにつれ団地内の新たな問題に発展する
のではと、知人は懸念する。

このように解決すべき問題点が目前にあるのに、日本人はそれを明確にし解決することを避け、互いに
あいまいにしておくことを選択する。そうすることで、対人関係をこじらせないように保ち、間違っても
自分の立場が不利な状況に置かれることがないように神経を注ぐのである。

これは、事を荒立てない点では功を奏する。しかし、責任や問題点をあいまいにすることが、善悪の区
別をあいまいにすることにつながり、それが行動基準をもたない自己中心的な行動に、人々を駆り立てな
いとも限らない。

住民が次々に苗木を植え出した時点で、「住みやすく美しい街並み造り」の規約を制定した販売業者と、
道路を管理する立場にある市役所と、団地内の住民全員で論議をすべきである。そして何が良く何が悪い
のか、明確にすべきである。そうすることで、却って住民同士の連帯感も深まり、お互いを守るべきマナー
や道徳的なことも、身に付いてくる。マイナス面だけを恐れ、そのことにこだわると、肝心なことが何も
出来なくなる。

ところが、住民同士の繋がりの希薄さのため、問題を解決しないで放置したままあいまいにしておくという現代人の傾向に、誰もが流されてしまうのが現状である。そのため、さらに地域住民の結束が弱まり、道徳・倫理の意義が薄れ、行動に責任を持たない、身勝手な言動が横行するのである。

今後、モラル崩壊を阻止するためには、物が豊かになる前にそうであったように、地域住民の信頼関係を取り戻すことが、何より大事ではないかと考える。道徳・倫理は、住民がバラバラであったり、自分さえよければいいとする風潮からは生まれにくい。それは住民同士の思いやりに根ざした温かい交流と、問題は全員で解決するという共通の自覚から、自然に培われてくるものである。

○真実を愛し、正義を貫く勇気を

数年前、民営化を巡って、道路公団が大きく揺れていたときである。体質腐敗をつかれ、当時の総裁が窮地に陥りながらも、弁解と主張を繰り返していた。すると、突然、公団の職員が内部汚職を告発したのである。勇気ある行動に、私は感動し、胸がすく思いがした。今の世に欠けている点を、敢えて彼は国民の前に提示してくれたのである。

この方のように、国のため社会のために正しいと信じることを貫く勇気が、私たちにもてたなら、道徳・倫理はこの社会にしっかり根を下ろしていたであろう。

今年の六月、光市母子殺人事件の最高裁の判決が出た。最高裁は高裁への再審を命じたのである。どの角度から見ても非情極まりない犯罪に対して、これまでの裁判は命の尊厳と被告の更生を説いて、

死刑を避けてきた。被害者より加害者の人権を優先してきた司法のあり方に、疑問を投げかける向きはあっても、その流れに正面から毅然と挑むことはなかった。

今回も一審、二審とも無期懲役にした判決は、これまでの繰り返しであり、見方によっては、真相を深く追究しようとしないうる無難な判決と受け取られても仕方ない。

この判決に納得しない夫であり父である本村さんは、少年被告への死刑を求め、審議のやり直しを請求してきた。性欲を満たすために妻を殺害し、泣きじゃくる幼い娘を床に叩きつけ首を絞め、殺した被告の極悪非道さは、決して許されるべきものではない。

本村さんの受けた苦痛と絶望は計り知れないものがあり、それを他人事として済ますには余りにも忍びない。

ましてや七年もの法廷での争いは、遺族にとっては悪夢から解放されない日々の連続であったことだろう。

本村さんは彼自身も含め、これから先の遺族が、司法への正当なる要求を諦めざるを得ない絶望から、少しでも解き放たれるようにと願った。そして、敢然と司法に立ち向かったのである。その勇氣ある行為に、心から拍手を送りたい。自分を犠牲にしてまでも、亡き家族のため社会のためという周囲を思いやる志こそは、現代人が学ばなければならない家族愛、社会愛である。

真実を愛し正義を貫く心情が、社会の隅々に波及していけば、私たちは眠りかけていた良心を目覚めさせ、失いかけた道徳・倫理を、この社会に構築していくことが出来るのである。

ところで内部告発した公団職員が、職場において不当な取り扱いを受けないようにするための法律が、この後に制定された。しかし、それは抜け道のある策法で、有名無実の法律に過ぎない。

また司法の場で長い年月にわたり争い、自分の要求どおりに最高裁で判決が下ることを願っていた本村さんに、最高裁は高裁での再審を命じた。国のため社会のため国民のために正義を貫き、献身的に努力する方々に、どうして国や行政は後押しをしてあげられないのか、残念でならない。

道徳・倫理が社会に定着し、犯罪の起こらない国にするために、国や行政、政治家が真剣に国民と力を合わせ、前向きに取り組まれることを祈りたい。

○官から民へ

郵便局と道路公団の民営化が決まり、裁判制度においても、裁判員の民間からの起用が近いうちに実施される予定である。役所の力に限界を感じると共に、民間の活力を取り入れようとする政府の方針が伺われる。

学校においても、だいぶ前から管理職を民間から登用する動きがあったのだが、最近は話題にも上がらなくなったのが気になる。

とかく教師は世間を知らないと批判されるが、これは学校を取り巻く塀が依然として高く、世の中が見えにくいためであろうか。仮にそうであるなら、学校においても各界で活躍されている民間人を招いて、活性化を図ることが望まれる。

神聖の場として、体質を温存しがちの教育機関や学校現場に外の風を送ることは、むしろ体質改善に役立ち、生き生きとした雰囲気为学校にもたらすことになる。教師においても外の息吹に触れ、視野を広めることにつながる。

児童・生徒は、この時期に、ある秀でた能力や芸をもつ大人と触れ合うことが、目を輝かせ楽しく学ぶことに結びつく。また、将来へ向けて夢と希望を抱く礎となる。

これまでの学校のしがらみから脱して、可能な限り学校の門戸を開くことにより、魅力ある学校づくりが出来るものと期待する。様々な出会いと体験が、児童・生徒の自主性・判断力・創造性などを培うことになり、内面を豊かにしていく手掛かりになると思われる。

そして、そのことが自ら物事を考える力を養い、正しく善悪の判断が付けられる子に成長させるのではないだろうか。

○高齢社会に期待する

道徳・倫理の乱れは、今や社会の安全を脅かす状況をつくり出している。反対に人と人との信頼関係を深め、平和な社会にするために、どうすればいいのか、為す術が見つからないのが現実である。

それを打開するために、法律の強化で社会を規制し、国家の都合のよいように人々を動かすことには疑問が残る。法の力で強く規制された社会は、たとえ犯罪が減少したとしても、人間らしい生活の営みが出来なくなり、精神的な充足感がなくなるのではと懸念される。また法の規制により自由を奪われていくな

かで、人々の内面には次第に不平不満が鬱積していかないとも限らない。いつの日か、それが爆発して大きな社会不安を呼び起こすかもしれない。

人間が人間らしい生活を送るためには、法の力のみには頼るのではなく、集団社会のなかで自然発生的に道徳、倫理、思いやり、助け合いなどを築いていく必要がある。

平均寿命が延び少子化傾向が続く日本は、高齢社会を迎えている。また、社会の第一線から身を引き、現役を退かれた方々が増えている。社会全体が活気をなくし沈滞化していく雰囲気さえ感じられるが、逆に私は失われたものを取り戻すチャンスと捉えたい。都会を中心に好景気を支えた方々に、今度は地方で人間復興に向けて一肌脱いでもらえれば、日本が直面している課題の打開に向け、大きな力になるのではなからうか、と期待する。

社会の荒波にもまれた人生経験と、広い視野と深い洞察を兼ね備えた力を、田舎暮らしに生かし發揮してくださると、かつての地域社会の再現も夢ではない。

子供時分に過ごした古里の人々の思いやりや、仲睦まじく和気あいあいとした雰囲気は心の底に残っていて、今でも支えになっているに違いない。どうすれば互いに心を通わせ、どうすれば信頼関係を深めていけるか、十分心得ている。同時に、そのことが人間として生きていくために、いかに大事であるかも分かっていると思う。

農作業を通じての連帯感や、行事や祭りを通じての触れ合い、集会や食事会を通しての親交、朝夕の心のこもったあいさつなど、清らかな心と美しい精神文化が、昔のように地方の町に蘇ることだろう。森や

山麓の神社や寺院も息を吹き返し、人々は信仰に安らぎを覚えることだろう。

共存共生という意識が、人々のみずなを強めたとき、善悪の判断、道徳・倫理の確立、神仏への尊敬の念は自ずと地域社会に根付く。利己主義とぜいたくの愚かさに距離を置き、自然のなかで心を癒すことが出来たなら、犯罪件数は確実に減少していく。

かつて、日本人は、そうした生活を通して、相手を認め思いやる人情豊かな生き方を繰り広げてきたのである。だから治安の維持においても、世界有数の国に挙げられていた。

経済成長に現つを抜かしてきた数十年間、水面下で私たちは人間として最も尊いものを失ってきたのである。その結果として、人間崩壊とも言える様々な事態が起こっている。

経済発展が人々を地方から大都市へと向かわせたように、今度は人間復興の波が、地方から大都市へ向かう時代であつてほしい。そのことがモラル崩壊に歯止めを掛け、住みやすく安らぎのある社会へとつながる。

日本における経済停滞、高齢化社会は、現代の憂慮すべき悲しい出来事に歯止めを掛ける機会を、神様が私たちに与えて下さった天の恵みとも言える。

そのことに、感謝と謙虚の念を抱きつつ、思いやりと人情のあふれる町づくりの再現を目指そうではないか。

「安全な社会を構築するための 日本人のモラル」

一 はじめに

かつて日本は安全な社会といわれてきた。ところが、今日では決して安全な社会とはいわれなくなった。どうしてなのか。

このことと関連して「最近の日本人は劣化した」という言葉を耳にすることがある。日常のあいさつが

無職（元教師 小・中学校校長）

下山 二男（73）

できないし、あまり教養も持ち合わせていない、さらにプロの意識もない、などという意味あいらしい。劣化した人間が集まる社会は安全とはいえない。何をしでかすかわからないからである。

してみると、安全な社会を維持し発展させるためには、人間がふみ行なうべき道しるべが求められてくる。それは人間であるかぎりだれでも身につけるべきものである。道徳と呼ばれるものだ。安全な社会の構築には、道徳が必要になってくる。これに加えて法律も必要だが、これは強制をとまなう。けれども、道徳とよばれるものは、そうありたいと願う民族共同体の心のモラルなのだ。

以下、社会の安全のために日本人のモラルの劣化にふれ、その対応について考えたい。

二 地域社会の安全とモラルの現状及びその対応

日々の新聞を見たりテレビのニュースを耳にすると、「またか」と叫びたくなる。交通事故、殺傷事件、詐欺事件、あるいは強奪事件、プール事故、ときに首都圏の大停電事故、と心配事が絶えないのだ。まして、小中学校の教師を長いことやってきた者としては、幼児や児童・生徒の殺人事件には特に強い関心を寄せざるをえない。なかでも、親が自分の幼い娘を殺害したり、中学生がこれとは逆に自分の親の殺人を同級生の友人に依頼するなどという事件は人間のなせるわざではない。親であれ子であっても人間を殺すことは許されない。どうしてそんな気持ちになり、その行為に及んでしまうのか、わからない。法律や人間のモラルからいっても許される行為ではないのだ。

地域社会に殺傷事件が発生すると、校長は児童・生徒に必ず生命の大切さを説く。関心があるからそれ

らの映像を見ることが多い。そして思うことは、何と迫力のない説得なのだという感じがする。わたしは幼少のころから「火付け 強盗 殺人」、「地震 雷 火事 親父」という言い伝えを教えられてきた。中でも「人殺し」は取り返しがつかないことだからやつてはいけなさとたたき込まれてきた。

幼児殺しの犯人が母親である場合はどうにもならないが、せめて隣近所の仲間とは言葉を交わしたい。仮に協力が得られないときには民生委員や児童委員なりに相談すればよい。さらに、幼児を一人の状態にしておかないことだ。そこで思い出すのが、今年の夏埼玉県で起きたプール事故である。七歳の女兒が吸水口に吸い込まれてしまったのだ。母親がすぐ近くにいたという。母親の嚴重な注意や機転で事故は防げなかったものか、と悔やまれる。

母親は育児について悩むことも多いに違いない。一人で悩んでいてもどうにもならない。夫はもとより、実家におじいさんやおばあさんがいれば相談することも必要だと思う。わたしは大いにそれを勧める。年寄りから貴重な経験を学びとることができるからである。密室の中の子育ては苦勞が多い。若い母親がノイローゼになりがちなのだ。

三 金融機関に対する不安とわれらのモラル及びその対応

わたしなど銀行の預金は少ないけれども、それを失うとたちまち生活は破綻してしまう。それだけに、現在の銀行に対する関心はことのほか強い。何者かに引き出されてはいないか、心配なのである。その気持ちは多くの人が持っていると思われる。

そこで月に二回は通帳に記帳をしたり現在高を確認したりする。もとより引き出しもする。そのとき、順番待ちをすることが多い。あるいは、その逆に後に待つ人がいる場合もある。そのとき、待ち人の停止ラインを平気で無視し近付く不審者があつて気になる。ひどいときは、そのラインに下がるよう注文をつける。

どうして、こうも人の気持ちが変わらないのか不思議である。そこにモラルの劣化を感じてしまう。わたしがよく利用する銀行は、田舎の小さいものであるが、入り口のドアを先に開けて後の人に先へ進むよう促しても挨拶がない。だまつて通り過ぎてゆく。どうしてあいさつができないのか、わたしは悲しくなってしまう。

今年の春、アメリカで同じような場面に遭遇した。ただ、違うのはドアを持っていたのはアメリカの青年で、その前をだまつて通り過ぎて行つたのは若い日本女性であつた。「サンキュウ」の一言が出ないのである。情けなくなつてしまった。

郵便局も金融機関の役割を担っている。外国でも自分の預金がおろせるようにシティブانクのカードを持つている。これを利用するために少しばかりの手続きが必要だ。その手続きをお願いに行つたら、その手続きはできないから中央の郵便局へ行つてほしい、というのである。私はいわれるままにそこへ廻つた。ところが、それでも四人の職員が三〇分も相談していたが手続きができないので、私は業を煮やしてその局を出た。最後に、それこそ片田舎の局へ行つたら五分もかけずに手続きをしてくれた。これはまさに中央の局と職員の不勉強でありモラルの劣化を示すものだと思われた。

四 会社の作業現場の弛みと職員のモラル低下の現状

今日、突然に停電したら各方面に与える打撃は甚大である。まして首都圏での大停電事故は危機的な事態となる。八月一四日、それが現実に発生したのである。その日の朝、東京と千葉の都県境を流れる旧江戸川でクレーン船のアームが送電線に接触し、大規模な停電事故を起こしたのである。これにより首都圏の一三九万世帯が三時間に及ぶ停電に見舞われてしまった。

お盆休みの首都圏は混乱した。都内の地下鉄や私鉄は各地でストップし、通勤や行楽客など三〇万人以上の足が乱れたのである。エレベーター、信号機、とその被害は計り知れない。

ここで問題なのは、クレーン船及び先導するタグボートに合計三人の社員がおりながら地上一六メートルの高圧送電線に気付かなかったことである。しかも、事故現場のすぐ下流の両岸には送電線があることを知らせる看板が設置されていたというのだ。晴天の早朝、送電線の存在に気付かなかったことがおかしい。そこに、きわめて不注意な社員の姿が浮かんでくる。劣化もはなはだしいと言わざるをえない。

作業現場における職員の弛みで思い出すのは、茨城県東海村の臨界事故である。平成一一年九月末の出来事である。ここは原子力産業発祥の地で、そこにある核燃料加工会社（JCO）の東海事業所で、精製中のウラン溶液が突如青い光を放ち始めたのだ。こうして始まった臨界事故は、一八時間にわたって続き、周辺住民を避難させるなど国内最悪の原子力事故に発展したのだった。ここでは、作業効率を高めるためバケツでウラン溶液を扱うなどの違法な作業が日常化し、事故当日も本来の手順からはずれた作業が続け

られていた。初めてその作業現場の映像を見たとき、紛れもなくバケツが使われているのを知り驚きかたあきれてしまった。職場での慣れ、気の弛みなどがあつたからに違いない。そこに日本人の劣化を強く感じてしまう。あわせて会社幹部の管理責任や技術者のモラルなどが問われねばならない。

作業現場の弛みの実例は枚挙にいとまがない。

昨年四月の福知山線の脱線事故で一〇七人の死者を出している。兵庫県尼崎市の福知山線で、快速電車が脱線してマンションに激突したのだ。これは戦後四番目の大惨事といわれる。制限速度七〇キロのカーブに一一〇キロ以上で進入したことが事故の原因である。いかに過密ダイヤだったとはいえ、場所とスピードを考えない運転だったことは間違いない。同時にそのような過密ダイヤを放置してきた管理者の責任も問われなければならない。

さらに、地元埼玉県のふじみ野市にプール事故があつた。七月末の出来事である。これについては前の部分で少し触れたが、問題なのは吸水口のふたが外れていたことである。ふたはボルトで固定する設計となつているが、外れたふたは四隅すべてが針金で留められていたらしい。消毒用塩素で腐食してちぎれる可能性があつたのだ。いずれにしても、女性監視員が口頭で注意を呼びかけていたが、ふたなしでプールの営業は続けられていたのである。関係者の安全意識の希薄さは明らかである。

五 教育機関における安全とモラル向上のために

今日の小学校や中学校ほど荒れがひどく安全が脅かされている時代はない。荒れは学級崩壊につなが

る。その事例は全国至る所に見ることができる。

平成九年神戸で発生した小六男児殺害事件は、その残酷さにおいて比類がなくいつまでも記憶にとどまっている。

五月二四日、神戸市の小学校六年生男児（一一歳）が家を出てから行方不明となった。捜索中の二七日には須磨区の友が丘中学校正面前に、子供の頭部が置かれていたのである。さらにこの日の午後には近くのタンク山から胴体部が発見された。六月二八日に至って凶悪犯は逮捕された。しかも、凶悪犯は一四歳の地元の中学三年生だった。加えて、凶悪犯は新聞社に挑戦状を送りつけていたのである。その中で、凶悪犯は「殺人ゲームを開始した。三つの野菜を壊します」と次ぎの犯行を予告していたのだ。凶悪犯逮捕により新たな犯行は阻止できたが、現場周辺の住民が受けたショックはあまりにも大きい。ゲーム感覚で殺人を犯す動機はどこにあったのか、なぞは深まるばかりである。仮想現実の中で、現実と空想との区別がつかなくなっていたに違いない。

それにしてもなぜ両親が気付かなかったのか不思議である。父親の存在がうすいように思われるし、密室の中で生活する少年の姿が想像されてくる。さらに校長の姿勢にも冷たさを感じられてならない。

神戸の殺害事件は、上級生が下級生を殺害した例であるが、ここで、生徒が女教師を殺害した事件に触れる。かつてこういう例は見当らない。まちがってもそういうことはなかった。しかも授業が終わって廊下へ出たところの出来事である。

殺害の現場は栃木県黒磯北中学校で、二六歳になる英語担当の女教師が教え子の一年男子生徒に刺され

て死亡したのである。

「どうして授業に遅れたの。先生の授業は嫌いなのか」と、先生が男子生徒に話しかけたところ、生徒がナイフを取り出したという。彼は農家の三人兄弟の末っ子で、一家六人家族。時として突然「キレる」とが再三あったという。少年の心につせきした何かがあったのに違いない。けれども、教師を突き刺す行為は尋常でない。今の少年は殺害という行為をすることにためらいなどないのかも知れない。

埼玉県東松山市の東中学校に同級生同士の殺傷事件があった。平成一〇年のことである。三階にある一年生の教室で、別のクラスのK君（一三）が「ふざけるな」といいながら、男子生徒（一三）の机に足を乗せたところ、その生徒に折りたたみ式ナイフで胸を刺され、死亡した事件である。事件があったのは一時間目終了後の休み時間だった。男子生徒は二週間前からK君ら六人に髪の毛のことをからかわれるなど嫌がらせを受けていたらしい。もう少し前の時期の生徒だったら校庭で何も持たずに解決したであろうと思われたが、今はその見境がなくなっているのだ。

六 安全を維持し日本人のモラルを向上させるために

これまで、自分にかかわる地域や作業現場の安全やモラルについて述べてきた。例えばプールや学校の安全及びモラルである。しかし、ただ安全やモラルを考えるといても、すでに危険であったり至らないモラルの実態の中から逆にどうすれば安全か、いかにしてモラルを向上させることができるのかをさらに考えてきた。そこで気付くことはすべて人間の生き方に大きくかかわることである。その人間が

しつかりしていれば危険は避けられたに違いないし、温かい気持ちで人と接すれば地域社会はよくなるに違いない。してみると安全やモラルは立派な人間の育成にかかわってくる。わたしはそこまで思い至った。そこで、どうしたら、どこで、だれが立派な人間の育成に寄与できるのかささやかな考えを述べる。

(一) 人間を人間たらしめる場は家庭であり、その教師は両親である

世に赤ちゃんほどかわいいいものはない。天真爛漫、無邪気だからだ。頭脳は真つ白でいやな書き込みもまだない。この頭脳に見る・聴く・触れるなど五つの感覚を柔らかく覚えさせるのは母親である。赤ちゃんは母親の腕のなかでそれらを全身で受けとめる。まさに、母親は人間最初の教師なのだ。ママさん教師は授乳しながら赤ちゃんの頬をなで、ようすを見ながら話しかける。赤ちゃん至福のときである。

赤ちゃんは成長して一歳前後で歩くことを覚える。独立歩行の始まりだ。両親はもとより祖父母たちにとつてもこんなうれしいことはない。親は子供の成長の節々に子供の成長を周囲のものと共に祝つてきたのである。子供も嬉しかったにちがいない。そのことはしっかりと子供の中に刻まれているはずだ。やがて、ママ教師は絵本を一緒に見るようになるだろう。子供は保育所や幼稚園に入れば新しい先生と触れ合うことになる。友だちもできてくる。子供の世界はだんだんと広がってゆく。ママさん先生はいるけれど、新しい先生に教えてもらうことも楽しい。ママさん先生もよいが、幼稚園の先生にお話をきいたり、いっしょにお歌をうたうのも楽しい。子供の頭脳は飛躍的に発達しそれらを受け入れることができようになるからだ。友だちと仲良くしないとやっていけないこともわかってくる。自分勝手もいけないことがしだいにわかってくる。ママ教師はどうしても子供のわがままを許してしまう。そこは幼稚園の先

生の方が遠慮がないから具合がいい。その一例がある。

入園式で一人の男の子がさわいだり前の子にいたずらをして困っていた。親が注意したり制止したりしないのだ。そのときである。主任の先生が注意しながらその子を会場外に引きずり出したのだ。その子はその園を止めずに一年が過ぎ卒業園式となった。教室でのお別れ会でその先生が話した。

「K君はこの一年間、だれよりもよく勉強をしました。よく頑張りました」クラスメートの孫娘がそんなことを話してくれたのである。

(二) 父親は子供と触れる機会をつくる努力をしてほしい

父親は勤務の関係で子供と接する時間が少なくなってしまう。どうしても子育てを母親まかせにする傾向が強いのだ。せめて、日曜日ぐらいは子供と遊んで欲しいものだと思う。ゴルフだ、カラオケだと遊ぶ時間はあるが、子供と遊ばないから、わが子を知らないのだ。家にいてもごろごろしていてテレビが相手だ。子供を塾に通わせているからそれでよい、と考えているらしい。口では「勉強しているか。勉強しろよ」というが、父親の読書姿を見たことがない。子供は親をよく見ているのだ。

最近母親も勤めるようになってきた。父親の育児分担は必然的なものになっている。父親はパパ先生になってほしいのだ。パパ先生が課長になり、部長になるころはとうに子供は親から離れているから何も心配することはない。

親が子供の実態を知らない一例。

六年男子でいたずらがよくクラスの平穩を乱し勉強を妨害している。親に話しても、家では静かにやっ

ている、というばかり。

担任の女教諭が相談にきた。わたしは父親に電話して「二、三日学校へきて勉強のようすを見てほしい。休み時間は校長室で休みいろいろ話しましょう」と要望した。父親はやってきた。三日間、校長室に顔を出し子供の教室に通ったのである。最後の日、わたしは子供と担任と親を呼び話し合ってもらった。その子の卒業式にその父親が出てきた。わざわざ校長室までやってきて「その節は大変お世話になりました」と深々と頭をさげあいさつして別れていった。

(三) 子供の心にふるさとのよき思いを残したい

子供が成長してからふと思いつくのは、ふるさとの山や川であるにちがいない。わたしがそうだから。一緒に学んだ友垣もなつかしい。人生に挫折を感じたとき、心を慰めてくれるのはこぶなを釣った川の流れている。親は子供の心にふるさとのよき思いを残してやってほしい。もし、子育てに疲れたらふるさとを生家を訪ねてほしい。また、年寄りをよんであげてほしい。少なくともそういう関係を保持してほしい。年寄りには孫がかわいいし孫もおじいさんやおばあさんには何でも話すことができるのだ。

(四) よき教師を国家の手で養成してほしい

幼児期の教師は母であり父である。しかし、今では地域の結びつきも薄れてしまったが、なお地域の人々に世話になるし教えていただくことが多い。それでも人間教育全般について九年間にわたって教えていただくのは小中学校の先生方である。その時期も満六歳から満一五歳までである。人間の成長期の教育を担っていたのだ。われわれとしては、より立派な先生方を迎えたい。

それにしても先生方は多忙であることをわたしは知っている。研修を受ける時間すらないほどである。クラスの人数が多すぎるのだ。それでは教師の目がすべての子供にとどかないのだ。是非とも三〇人学級を実現してほしい。

それから、子供も先生も活用できる図書館を拡充してほしい。本を読む習慣を身につけさせたいのだ。さらに図書案内ができる図書館司書も是非配置してほしい。読書によって日本人の知性が研かれそのモラルも向上すると考えるからである。残念なことに、僻地や離島にはまだ図書館も書店すらない村もある。テレビでなく本を読んで育った児童や生徒に、殺人などできるはずはないと信じたい。

(五) 終わりに

安全な社会を構築するためのモラルは、助け合い・やさしさ・寛容の心・情けなどの、道徳を自分の生き方と関連させて具象化した態度であって、その有無は社会の明暗を左右する。例えば寛容の心や情けがあれば東松山東中学校の殺害事件はなかったかも知れないのである。あるいは首都圏の大停電事故で、クレーンの操作することが作業員の業務であれば、彼はそのプロとして安全を確認して操作すべきだったし、安全こそ人間のモラルでもあったはず。

モラルの低下は日本人の劣化につながる。それはまた安全な社会の危機でもある。あいさつをするなど小さなモラルは家庭のママさん先生から、ありがとうやお世話になりましたの少し大きなモラルは幼稚園の先生から教えられる。さらに大きなモラル、なかでも人間の生命の大切さなどは小中学校の先生から教えられる。つまり、人間教育が日本人のすべてにゆきわたれば、モラルも向上し安全な社会が構築される

と思われ
る。

社会の安定と日本人の倫理

地方公務員（茨城県庁）

清宮 正人（50）

治安の悪化と倫理観

日本の治安が悪化している。平成一七年度版警察白書によると、平成一六年（二〇〇四年）の刑法犯認知件数は約二五六万人。前年から比べると八パーセントの減ということではあるが、依然として高水準だ。一方、検挙率は刑法犯全体で約二六パーセント、やや回復傾向にあるというが、まだまだ低い数字だ。

これまでの推移を見てみると、犯罪認知件数は平成二年（一九九〇年）ごろから急激に伸びており、平成七年（一九九五年）には日本中を震撼させた地下鉄サリン事件が起こり、日本の安全神話の崩壊を象徴した。さらに、平成一五年（二〇〇三年）ごろからの伸びは著しい。

急激な治安の悪化にはいろいろな原因が考えられる。核家族化などによる家庭や地域社会の変質、IT化の推進による匿名社会の進展、犯罪の広域化・多様化と警察の捜査能力の低下などである。特に、近年日本人のモラルや倫理観の低下が犯罪の増加に拍車をかけているのではないかと言われている。

加害者が外国人や青少年の場合、日本人としての倫理観が欠如しているのは、ある程度やむを得ない面もあるが、それらを除いても今や日本人全体の倫理観の変質・崩壊が進んでいるように思われる。

平成一八年（二〇〇六年）八月にNHKのテレビで「崩壊？日本人のモラル」と題した番組が放映されたが、図書館の本への書き込みや切り取り、ルール無視のゴミ出し・不法投棄、支払い能力があるながら学校の給食費を払わない保護者などの姿を通じて、現代日本のモラルの欠如が取り上げられていた。

筆者の身の周りでも税金、国民健康保険税、上下水道料金や各種会費などで、支払い能力があるながら支払いを拒む者や、生活保護費や補助金などを受給するために、虚偽の申告を行う者などの事例が見られ、一般の人の身近な生活の部分にまでモラルの崩壊がきていると感じている。

本稿では、治安を中心とした「安全」と日本人のモラル、道徳観、倫理観（以下「倫理観」と総称）などとの関わりを考察していきたい。

格差の広がり

最近「希望格差社会」（山田昌弘著）とか「下流社会」（三浦展著）などが話題になっており、希望のない格差社会の進行を象徴しているようだ。

一方、目を覆うような陰惨、残虐な事件が連日新聞やテレビを賑わせており、かつて「温和な性格で安定した社会のもと治安がいい」と言われていた日本社会や日本人が大きく変質してしまったように感じる。

日本の景気は「回復している」と言われて久しいが、インターネットを使った株取引などで信じられない高額な金銭を手にする人がいる一方、地道に努力をしながらも報われず、苦境の中で日々の生活を送っている人も増えている。

努力が報われない人については、七月下旬、NHKテレビ番組で「ワーキングプア」として紹介されていたが、一家の大黒柱である労働者がリストラにあいアルバイトを複数こなしながらその日暮らしの生活を送る姿や、仕立て職人が斜陽になってしまった家業から業種転換もできず貧困に悩む姿など深く考えさせられるものがあった。

「経済大国」と言われながら、多くの若者が現状や未来に絶望し、また、八年連続で年三万人を超える自殺者が出ている（警察庁調べ）ような国が正常な国と言えるだろうか。

かつて、日本人の美德とされた「努力」や「勤勉」が急速にその価値を失い、努力しても報われず、努力を放棄し下層生活に甘んじる人が増え、これらが底辺からはい上がる、あるいははい上がるとする意

思を持つことさえ困難な社会が現出している。さまざまな分野で日本の社会は格差が拡大していると言われている。

社会の変化と倫理観の変質

また、核家族化の進展や離婚の増加など、家族のあり方の変化、個人主義の広まりによる共助意識の低下と地域社会の衰退、外国人労働者や外国人世帯の増加などに伴う外国人の社会参加など社会の構成要素が複雑になることによって、いろいろな部分でストレスが強くなり、日本人の倫理観を変質させている。そして、この倫理観の変質が社会の安全の低下につながっている例が多いのではないか。

この日本人の倫理観の変質と日本の安全低下の一つの背景には、経済状況の変化とそれに伴う社会の変化がある。

いわゆるバブル経済により地価が異常な高騰を続け人々の生活水準が向上したが、その崩壊により日本経済は大きな打撃を受けた。中小零細企業の倒産の増加はもとより、金融機関や大企業の破綻も起り、「リストラ」という言葉が流行語となるほど、企業主体の雇用調整が進み、失業や賃金の引下げが起きた。しかしながら、一度上がった生活水準を引き下げるとは困難であり、生活水準を維持するために安易に金が手に入る方法を求めるようになった人たちも多い。

こうした経済・社会情勢を背景に、消費者金融が大きく伸び、返済が困難になった人たちの自己破産が急増するとともに、警備が手薄なコンビニエンスストアを狙った強盗事件や高齢者をターゲットとした詐

欺事件が多発することとなった。

また、不況はバブル期に安価な労働力として日本に流入した外国人労働者の雇用環境を直撃し、仕事に就けず生活に困窮した外国人の犯罪が増えることとなった。さらに、入国しやすいことや、罪を犯しても日本では罰が比較的軽いことから、中国人や韓国人の密入国支援の組織化や犯罪ネットワークの構築が進んだ。

テレビを初めとするマスコミでは、人の死が実感を伴わないままドラマで日常的に扱われ、ワイドショーには実際の事件が興味本位で取り上げられることも多く、こうしたことは、犯罪を非日常から日常に変え、一般の人の犯罪に対する抵抗感を減少させている。

さらに、簡単な操作で世界中の情報収集でき、不特定多数の人たちとの交流を可能にしたインターネットや携帯電話には、出会い系サイトや自殺サイトなどともない利用方法が生まれ、特に青少年の犯罪被害や加害の温床となっている。

このように社会の変化は、人との関わりのある方を今までとは全く違った形に変え、日本人の倫理観にも大きな影響を与え、犯罪に対する意識にも変化を与えている。

犯罪に対する意識の変化

犯罪に対する意識の低下を如実に表している一つの例が自転車の盗難だ。駅前自転車を置いていく人が鍵をかけていてさえ盗難にあうのは珍しくないし、警察に届けても戻ってくることは少ない。その結果、

盗まれた人が今度は他人の自転車を持ってきてしまったりする。こうして罪を犯しているという意識が薄れ、犯罪の連鎖が起こっていく。

万引きについても、罪の意識が希薄な者が多く、経済的な理由よりも一種の愉快犯やストレス解消、常習的性癖などによるものが多い。

社会全体がこうした比較的軽微な犯罪に寛容あるいは無関心になっている。警察もこうした犯罪に対応する十分な体制がとれず、本格的な捜査に至らない例も多い。

さらに、「命」に対する意識が希薄になり、他人の命だけでなく、自分の命さえも軽視する傾向が増えており、社会不安と相まって自殺者が高水準で推移している。強盗や殺人事件などの重大な事件も頻発しているが、近年、青少年が被害者や加害者になる事件や、学校内の事件、児童虐待や肉親への暴力など家族関係の崩壊を象徴するような事件が頻発している。

少子化、教育と倫理観

深刻な少子化の進行や教育問題も日本人の倫理観の変質に大きな影響を与えている。

一人の女性が一生の間に産む子どもの数である合計特殊出生率は一・二五にまで落ち込み、日本は「超少子化時代」を迎えた。このような状況のもと、大切に扱われなければならない子どもたちであるが、育児放棄や児童虐待など子どもに対する無関心、反対に過保護や過干渉による子どもの精神の崩壊による事件などが頻繁に発生している。

核家族化の進展に加え、離婚による保護者が欠ける家庭の急激な増大など、従来の家族関係が失われていくなかで、現代の日本社会が子どもを大切にしていないことを強く感じる。

特に、いわゆる「ゆとり教育」の提唱によって、競争のない「平等な学校教育」が進められた結果、現実には社会の上位を目指し過酷な競争に追い込まれている少数の子どもたちと、「ゆとり」というゆるみのなかで努力を放棄し、向上心を失ってしまった多くの子どもにも二極分化しているように見える。

平等を目指した教育においては、下位にいる子どもにも学習や生活指導の照準を合わせることになりがちであり、学力においても生活においても全体的なレベルの低下につながりやすい。

特に公立学校には、多種多様な家庭環境の子どもたちが存在し、これらに対する学校や教師の対応は限界に近い状況にある。かつては「多種多様な子どもたちと接することで子どもたち自身が成長していく」とも言われていたが、「学級崩壊」と言われるように授業さえも成り立たないような現状でははやそんな悠長なこと言っていられない。

わが子のレベルの低下に危機感をもった親たちは、学力や親の財力が一定以上のレベルに保たれている私立学校に関心を示す傾向にある。教育が最も効果的に行えるのは、「共通の目標を持った一定レベルの集団」に対してであり、特に中学校では無選別に「誰にでも」門戸が開かれている公立学校と、試験や親の財力などで基準を設け、一定レベルを確保している私立学校との差は拡大している。少子化が進むなかで、私立学校は高い学力を持ち、親の財力もある生徒や学生を確保する必要から、一層進学や進路指導に力を入れ、私立学校間の競争は激化している。

公立学校の多くは文部科学省の指導に則ってゆとりや平等を重視した教育を行ってきたが、結果として私立学校を中心としたエリート養成競争の少数精鋭化を進め、公立学校のレベルの低下や低人気につながってしまったことは皮肉である。公立学校のなかには指導方法を予備校に学ぶところも出てきたというが、本末転倒ではないかと感じる。

国では国際的競争力のある人材を育てることを政策の目標に掲げているが、文部科学省の指導に従った公立学校のなかには、人材育成の取り組みに参加さえできない子どもたちの受け皿になってしまっているものもあるのではないだろうか。

しかしながら、社会の上流に行く可能性を得た子どもたちの前途も厳しい。上位集団は熾烈な競争にさらされ、たとえ受験競争に勝ち抜いたとしても、就職した企業が倒産したり、業績悪化などによるリストラにあたりすることも普通になってしまっている。大手企業への入社が安全な社会生活を保障しない時代となったのである。

「悪貨は良貨を駆逐する」というグレシャムの法則や、「朱に交われば赤くなる」などということわざにもあるように、「悪しき平等」は、全体のレベルを低下させ、社会の底辺にいる人を増やし、生徒・学生の学力ばかりか未来に対する不安や絶望、子どもたちの刹那的の生活につながっている。

教育とともに、現在進められている少子化対策も再考する必要があるだろう。福地誠著『教育格差絶望社会』によると、「教育費について深刻に考えない夫婦ほど子ども数は多くなる」とされており、「負け組同士のペアが出生率が高い」という。

今、少子化対策の必要性が叫ばれているが、少子化対策は、ただ子どもの数を増やせばいいというものではない。家庭や周囲にある程度の育児や教育が可能な環境が整っていることが必要である。たとえば、両親そろって仕事も持たずバチンコでやつと生計を維持しているような家庭で、本当に社会が求めるような子どもが育つのか疑問である。このような家庭では、倫理観などには目の向けようもないのが現実であろう。

少子化対策にとって大切なのは、特に少子化の大きな原因になっている高学歴、高収入、なかでもキャリアウーマンに、結婚し子どもを産み育てる意識を持ってもらうことが重要ではないだろうか。こういう意味で、これらの人々の意識にまで踏み込んだ対策でないと少子化には歯止めがかからないと考える。

「育児に費用がかかるから少子化が進む」という視点からの金銭の交付に頼った少子化対策は問題解決の本質には迫っていないのではないか。今までの児童手当など金銭の交付による少子化対策の効果を検証することが必要である。

子育て環境の充実を

子育てには環境が重要である。子育てに適していない環境や親としての自覚が希薄な家庭で育った子どもは幸福になることは少ないのではないか。子どもの数は増えたものの、ネグレクトや児童虐待が引きこもりにつながり、フリーター、ニート、ホームレスが増加し、さらにそれらの高齢化に伴い生活保護費が増大するという流れでは困る。財務省の財政総合政策研究所では、三五歳以降もフリーターにとどまる人

が一五年後には一五〇万人に達すると予測しているが、きわめて憂慮すべき事態である。

B R I C s 諸国の発展などによってより資源獲得競争が激化すると予想されるなかで、資源小国である日本が今後も世界のトップであり続けるためには高い倫理観を持った人材の育成・確保がきわめて大事であり、生まれてきた子どもたちを安全に、幸せに、そして大事に育てていく社会が必要である。国では今後「人財立国」づくりを進めていくことであるが、実効性のある施策を期待したい。

高い倫理観を持った人を育てるうえで教育、特に学校教育の果たすべき役割はきわめて重要だ。とりわけ公立学校における改革は急務である。学習時間の確保のために学校行事を削減するなどの工夫を余儀なくされている教育現場の苦労は察するに余りあるが、どうも授業時間の確保という数あわせに終始しているように思えてならない。完全週休二日制を見直し、土曜日の学習時間を復活し、学習内容のゆとりよりも、ゆとりあるスケジュールのなかで学習を進めることが必要ではないか。学習時間の増加に必要な教員は団塊世代の退職者の再雇用などで対応ができるのではないか。

倫理観の荒廃を防ぐためには、まず、個人の意識まで踏み込んだ抜本的な少子化対策と、家庭での教育には多くを期待できないという前提のもとでゆとり路線を見直す教育改革により、未来を負託できる青少年を育成していくことが必要であると考える。

日本人の倫理観とは

藤原正彦著の『国家の品格』が大ベストセラーとなっている。日本人の倫理観の変質に危機感を持つ人

が多いということの一つの表れではないだろうか。

藤原氏は、日本がアメリカの「論理」を重視した社会に近づいていくことに疑問を持ち、論理よりも日本が古くから持つ「情緒」や「形」を重視すべきだと言う。そして、これらを総合した「武士道」精神こそが日本の国家の品格を保つ鍵だと述べている。

また、同書で紹介されている新渡戸稲造著『武士道』では、その武士道を構成するものとして、義、勇、仁、礼、誠、名誉、忠義などを挙げて、それらが日本人の倫理観を形づくっていると言う。そして、その根本精神は「個人よりも国を重んじる」というところにあるとしている。

また、日本人や日本社会に対する鋭い分析で知られるルース・ベネディクト著の『菊と刀』では、日本のさまざまな伝統や風習の分析を通じて、「日本人は恥を最も嫌う」とし、社会との関わりが非常に深い日本人の倫理観を示唆している。また、同書では、日本人が普通とと思っている倫理観などが外国人の目から見れば非常に奇異に見える面があることにも触れている。

これらの書物で触れられている日本人の倫理観は、「精神を重視し、世間やプライド・見栄を重んじる価値観」であるということではないだろうか。

「武士は食わねど高楊枝」などと言われるように江戸時代の武士のプライドの高さはよく知られているが、庶民でも「江戸っ子は宵越しの金は持たない」と見栄を張り、人に笑われることや後ろ指を差されることを最も恥ずべきこととしていた。これらをひとまとめにして「武士道」と呼ぶことには若干疑問があるが、日本人を貫く「精神を重視し、世間やプライド・見栄を重んじる」倫理観があったことは確かなよ

うだ。

しかし、反面、世間の目を気にし過ぎ、極端に体面や義理が重んじられることによって、人々が生活をする上でしばしば窮屈な思いをしていたことも事実である。

特に、近隣を中心とした地域社会は、江戸時代には五人組として連帯責任の役割を与えられ、明治以降には戦争遂行への協力組織として、時の為政者に利用されるなど一種の相互監視社会を形成することとなった面もある。

そして太平洋戦争の敗戦によってアメリカ社会の情報が入ってきたとき、多くの国民は圧倒的な物量の差に啞然とし、物質文明に対する精神文化の限界を感じ、今まで日本社会を支えてきた、精神を重んじる倫理観に疑問を持ったのではないか。

その後、モータリゼーションの発達による活動範囲の広域化や職業選択の自由化により社会の流動化が急速に進んだ。固定された社会のなかでは規律は維持しやすいが、流動的な社会になるほど共通の倫理観を持つことが難しくなり、倫理観の変質が進んだ。

これに経済の好調による外国人の流入が拍車をかけた。日本経済が成長を続けているうちには倫理観の変質による社会のほころびは余り目立っていなかったが、バブルの崩壊に伴って一気に表面化していったのではないか。

そして、現在、自由や権利への意識が高まり個人主義が急速に広まるなかで、近隣社会のわずらわしさから脱却したいという願望や職業の流動化・匿名社会の進展などにより、共助を目的とした自治会や子ど

も会などが機能不全に陥り、近隣社会そのものが崩壊の危機にある。

また、自分の周囲がほとんど関わりのない「他人」ばかりで「人の目」を意識する必要がなくなったとき、倫理に対する抵抗感も薄くなってしまう。これは、比較的高い倫理教育を受けたと思われる高齢者層にさえ当てはまり、ルールを無視したゴミ捨てや、交通法規の無視は高齢者にも普通に見られ、高齢者による犯罪もふえていくという。

倫理観は非常にもろいものだと思う。失われるきっかけさえあれば容易に崩れてしまうものである。倫理観を維持するためには、教育で高めるとともに、低下につながる機会をなるべく減らすことも必要だ。

簡単に犯罪の社会に入り込めるインターネットや携帯電話。盗撮につながる余りに性能のいいコンパクトなカメラ。町にあふれる性関係の情報誌や書籍、ビデオ。周囲の目に無頓着な若い女性の扇情的な服装。鍵のかけていない自転車など、われわれの周りには倫理観の崩壊そして犯罪につながる事象や情報が余りにも多すぎる。

立正大学の小宮信夫教授が「犯罪原因論よりも犯罪機会論を重視し、犯罪につながる機会を減らすことが大事である」と提唱されているが、倫理観の維持による安全の確保にも同じことが言えるのではないだろうか。倫理崩壊につながる機会をなるべく少なくする努力が必要なのである。身の周りの環境を浄化することが倫理観回復の第一歩である。

これまで見てきたように、現在の倫理観低下の原因は一つには、余りにも窮屈すぎた倫理観からの解放による反動と、いろいろな分野での流動化・自由化の相乗作用ではないかと考えている。また、世界経済

のトップに達した時に、今までの「働け」から「ゆとり」路線に切り替えたが、バブルが崩壊し競争社会に社会が転換した後も、教育を中心に「競争」社会への切り替えをせず、ゆとり拡大路線をさらに進めていったミスマッチも原因の一つであると考ええる。

経済面では、中国の成長力を過小評価して日本の経済戦略に齟齬をきたしたことも誤りの一つであったように思われる。中国の経済発展に伴って、国内企業はコスト削減から争って中国に進出、結果として中国への技術移転と国内産業の空洞化を招いた。国内産業の衰退は企業のコスト意識をより高め、人件費の削減からパート、アルバイト、派遣職員など非正規職員の増大や外国人労働者の増加につながり、雇用環境を悪化させた。

これらによる雇用不安は格差を一層進行させ、他人を省みる余裕を奪ってしまい、人々の倫理観の荒廃につながってしまった。その結果、倫理よりも金銭感覚を優先し、「世間を気にしない」「自分さえよければ」という風潮が増えてしまった。

倫理観の回復のために

これまで述べてきたように、日本人の倫理観を取り戻し、社会の安全を回復するためには、まず、「少子化対策」と「人材育成」、「雇用確保」を三位一体で進め、社会を安定させ、良好な社会環境の維持に努めることが必要だ。

倫理観はもろいものであり、メンテナンスをうまく行わなければすぐに低下してしまうものであること

をあらためて認識する必要がある。倫理観を維持するためには、その低下や崩壊につながる機会をなるべく少なくすることが大切である。

かつては「人の目」や「世間」「家族・近所」が倫理観を維持するお目付け役を果たしていた。かつてのような監視的役割を地域社会に求めることは必ずしも的確でないと思うが、倫理観を確保し社会の安全を維持するために、うまく「目としての」地域社会を活用することも必要である。地域社会の役割を再認識し、良好な近隣社会の構築に努めるべきではないだろうか。

また、日本の優れた倫理観として、儒教の五徳と言われる仁・義・礼・智・信等を重んじる教育を子どもたちに施すことが大事であると思うが、それを実施できるだけの学校の体制も必要である。

また、倫理に関する教育が、過度に行き過ぎることに注意が必要である。倫理観が弛緩し安全が脅かされる「自由な社会」と、高い倫理観と治安を確保するために規律を重んじる「窮屈な社会」、どちらも望ましい姿ではないと思われる。この二者の間でどの辺で折り合いをつけるのかも検討が必要であろう。

また、かつて日本の倫理観が維持されてきた要因には、日本が島国でありほぼ単一の民族や言語で統一されていたこともある。しかし、現在では国際化が進み、今までの日本人の倫理観が変質を余儀なくされている。日本的倫理観は他国では通用しない場合も多いことに注目すべきだ。こうした意味で、今後の一層の国際化が避けられない課題であるなら、新たな国際化時代のなかで日本人の倫理観がどうあるべきかを再考することも必要ではないだろうか。

おわりに

国際化による日本の倫理の変質は避けられないとしても、日本の旧来の倫理観には学ぶべきことも多く、今後も伝えていかなければならないものも多い。これらを守っていくのは、信頼感に裏付けられた家族関係と、協力そして適度な干渉と不干渉を持つ地域社会であろう。倫理観を維持し、社会の安全を確保するために現在崩壊しつつある家族や地域を再生させる必要があるのではないだろうか。

モラルは子ども時代に身につける

警察官（群馬県高崎警察署）

布川 進（27）

一 はじめに

私の妻は小さい頃から祖父の戦争体験を聞いてきた。飛行機に乗り、上空から写真を撮っていた祖父は敵の銃撃にあい、足を撃たれた。今も傷跡が生々しく残っている。戦時中、もちろん妻は生まれていないが、祖父の言葉から命の尊さを感じていたようだ。近い将来、戦争体験者から直接話を聞くことはなくな

る。

「何で人殺しじゃないの？」

私が社会人になる前、ある小学生からうけた質問だ。私は返す言葉が見つからず、ただほうぜんと立ちすくむことしかできなかった。そういうことを聞くこと自体驚いた。小学生は素直な反面残酷である。しかし、このような質問は人にするのではなく、いくら小学生とはいえ生活していく中で答えを身につけるものであると思っていた。ここ数年、命の尊さを訴える子どもを見ていない。

戦後六一年の今、戦争体験者と同じ気持ちで戦争を語り継がれることはなくなり、同時に命を大切にす
る気持ちが薄れてきている。

警察官となって五年、様々な人とふれあった中で、現在の日本はモラルを子ども達にきちんと教えなければならぬことに気がついた。現在、小学生はどういった教育を学校、家庭から受けているのか。学校、家庭、地域の面から私たち大人が何をすべきかを論じた。

二 家庭でモラルの基礎を知る

(一) 現状

私が仕事をしていて思うことは、子どもが何か悪いことをして警察に来たとき、自らの非を決して認めようとせず、他人に責任を押しつける親が多い。学校が悪いだの行政が悪いだのと言う。たといそれらが至らなかつたとしても、自分の子が警察沙汰になったのだから、少なくとも子を叱り、被害者がいたら謝

罪するのが親の役目ではないか。親は子を育てる義務がある。子の顔色をうかがい、子の罪を責任転嫁しては「育てる」とは言えない。まず子のために、良いことをしたら褒め、悪いことをしたら叱ることが大切である。

人々は家族とのコミュニケーションが欠けるようになった。父親、母親は子どもに対してそれぞれの役割を果たすことなく、形だけの家族を演じ、子どもを自分たちの所有物としてしか見ない親が多い。子どもにとって両親の存在は重大で、「子どもは親の背中を見て育つ」というが、両親の育て方が子どもの今後の人間形成に影響を及ぼす。そんな中、一概には言えないが、多くの犯罪者は子どもの頃の悪い家庭環境により、犯罪者としての人格が形成され、犯行に及んでしまうのではないか。現在、どんな人がいつ犯罪を起こしてもおかしくない時代である。いくら近所の評判が良くても、誰もその人の本性を知らない。たとい身近な家族であっても…。

そんな人間をこの社会に送り込まないためにも、両親は子どもが小さい頃から「愛情」を与え、そして「生きていく意味」を教えなければいけない。現在の一般家庭では、家族全員が自分のことしか考えていないように思われる。それぞれが無関心で、家族が毎日何をし、何を考えているのかわからない。家族とのコミュニケーションを何よりも大切にすることが家族を守り、社会を守ることに繋がる。

生まれて初めて接する社会が家族なのである。子どもにとって特に両親からの影響は最大で、最も大切な存在だ。子どもの頃からの愛情不足はそのまま消えることなくトラウマとなって大人になるまで引きずるケースが多い。動物、人を傷つけても何も違和感のない人間に。

子どもには一人ひとり個性があり、家庭環境もさまざま。ただ、どの家庭にも共通して言えることは、親子の「コミュニケーション」を十分に持つことが重要である。その中で随所にモラルを教えていく。現代の日本人は家族皆が仕事、勉強、友達を何よりも大切にしている傾向にある。

例えば、父親は忙しいと言って子どものかかわりを持たず、そのくせ要求ばかりを押しつけ、子どもを気持ち悪く理解していないことである。朝早くに出勤して、夜遅くに帰宅することで一緒に食事をするのとすらく、そこで得られる感情の交流に欠けている。子どもを母親にまかせているつもりは父親は、母親の指示を待って、子どもにも接しているようなところがある。母親が「叱って」と言えば叱り、「たまには遊んでやってよ」と言えば、遊びに付き合う。最低限の父親をこなし、妻に協力している気になっているかもしれないが、子どもにとっては、都合の良いときだけ母親が不足しがちな「力」の代行をしているようにしか見えない。

母親は母親で、「早くしなさい」「勉強をしなさい」「宿題をしなさい」と追い立てる。すなわち大局的に見ず、目先のことにこだわる傾向にある。少子化のせいで子どもの行動が見えすぎてしまい、親が子どもの動向を気にしてしまう。しかし、これが昔のように何人か兄弟がいると一人ひとりがよく見えない。子どもにとっては親から見えない穴蔵を家族空間の中に作らなければならないが、悲しいかな、今のマンション暮らしではそういう場所は持ちにくいのだ。

父親、母親はそれぞれの役割を果たせておらず、「愛情」を取り違えている傾向にある。

また、自分が両親に受け入れてもらえなかったことが、高校での不良グループへの追従、髪染め、ピア

ス、喫煙などの動作に見られるような存在感の誇示、ホラービデオへのめり込み、動物虐待、殺人などとなって噴出している。地域社会のなかで自分の居場所がなくなると感じる自己防衛的な構えは、家庭内での居場所のなさ、愛情不足に起因しているところが大きいそうだ。子ども達（元子どもを含めて）が引き起こす多くの事件は、実は、長い間、親たちがその子を歪めて、歪めて、歪め抜いた結末の、最後の出来事に過ぎない。「人の人格は、親子関係に多大な影響を受ける。そしてそれは、親も気付かないうちに形成されていく」。子どもは成長の過程で、父親、母親からそれぞれ、別々のケアや学習を引き出すことができるし、そもそも子ども達は、自分の行動に指針を与える「社会的父性・母性」を必要とし、求めている。前述から、「人々の人格の歪みは、親子関係を解明することで問題点の多くを理解できる」ことに繋がる。親として望まれることは、家庭で子どもが落ち着ける場所にあること、家族間の精神的なつながりと一体感を高めるための配慮と努力をすることが必要である。それが、家族を守り、さらに社会を守ることに繋がる。親は子どもが心身ともに安心できる環境づくりをこころがけることが重要である。

親子関係が今後の子どもの人格に影響する最もわかりやすい例に「虐待」がある。群れの中で母親に育てられたサルは母親との接触がどういふものかを実感し、他のサルの母子関係も見ながら育つ。だから親になっても大丈夫だが、母親から隔離飼育されると子育ての方法がわからないという。人間も同じことが言えるのではないか。虐待を受けた人のほとんどが自分の子どもにも虐待をする。それは「愛し方がわからないからだ」と言う人がほとんどだ。

(二) 親子関係が今後の人格形成に影響する例・虐待

虐待をしてしまう親の中には、その人自身が親に対して恨みや憎しみなど、マイナスの感情を抱いている場合が多いと言われている。その人たちは、親の攻撃的な面ばかりを見て育ってきたので、自分が親からされてきたことと同じことを無意識に子どもに繰り返してしまう。親から信用されないために性格が屈折し、非行に走るケースもある。

虐待された経験を持った人間が、やがて親となったときに子どもを虐待してしまうのは、自分が虐待によって受けたストレスを本来であれば加害者である自分の親に反抗する形で発散できればよいものが、親に対する恐れなどから加害者そのものに向けることができず、自分の子どもという、虐待しやすい弱い相手に向けてしまう。つまり、ストレスの発散を一〇年、二〇年経った後に、自分を虐待した親に対してではなく、かわいはずの自分の子どもに対して行う。子どもの頃のトラウマが、将来の人格形成や人生に大きな影響を与える。どこかで鎖を断ち切らない限り、「虐待」の悲劇は繰り返される。

(三) 親子関係が今後の人格形成に影響する例・両親の離婚

現在、二分間に一組、一日で七七七組もの夫婦が離婚をしているという。子どもがいるにもかかわらず自分たちの都合で簡単に離婚をする。子どもにとってお父さん、お母さんが仲良くいて欲しいと思うことは当然だ。やむを得ない事情もあるが、離婚は子どもに良い影響を与えるはずがない。

離婚の原因として、社会での女性の立場が強くなったことが一つにある。それは良いことだが、社会の中途半端な受け入れが問題だ。なんだかんだと言っても、結局まだ日本は男性主義。政治や会社などで女

性が活躍してきていると言ってもまだまだ男性は強い立場にある。家庭内でも同じだ。女性は中途半端に社会の男女平等にもまれ、男性は依然として波に乗れない。その矛盾がぶつかって離婚へと繋がるケースが多いのではないか。二人のエゴで子どもを泥沼に巻き込むことはしてほしくない。両親の離婚は子どもの今後の人格形成に影響がないはずがない。

結婚の何十倍ものエネルギーを要すると言われる離婚は、親たちにとっては大変なストレスで、子どもの気持ちを考えるところではないというのが本音である。しかし、子どもにとって、自分の誕生の原点である両親が離別することは、自分の存在が根底から揺さぶられるほどの一大事。このようなトラウマを乗り越えてすばらしい業績を残す人がいることは確かだが、若くしてトラウマに支配される苦しみを背負わせたことに幸せはないだろう。

もし、やむを得ず離婚しなければならない場合は、子どもへのダメージを最小限にする努力を惜しまないことが大人の最低限の義務ではないのか。離婚できないことを子どものせいに行ったり、子どもの前で親権の取り合いをしたり、まだ判断力のない幼い子に、父か母かのどちらかを選ばせたりすることは、子どもの心を深く傷つけ、人格形成にゆがみをもたらすことにもなりかねない。「子どもを大人の戦いの巻き添えにしないこと」、これが鉄則である。

子どもを産み育てることはどこか義務的だ。学生が、「やることがなく、学歴のために良い大学を目指す」といういい加減な考えと同じようにステイタスの考えている人が多いのではないか。

(四) 会話の中でモラルを習得させる具体例

親子のコミュニケーションをとった後は、その中で、子どもに常に問題意識を持ってもらうようにすることが良いのではないか。「○○はこれに対してどう思う?」と常に質問をする。具体的な例として、「今日会社で朝ご飯を食べている人がいて、隣の人に怒られていたんだ。○○はどう思う?」と質問すると○○は自分の意見を言う。その答えが少し変だと思えば、「お父さんならこう思うんだけどな」と付け加え、状況に応じた対応をする。

三 学校でモラルを具体的に再確認

(一) 現状

私が小学、中学、高校生だった頃、学校では「道徳」という時間はあるようではなかった教科である。授業が後れている教科にあてられたり、自習になって嬉しかった覚えがある。たまに担任教師のきまぐれで道徳の教科書を読み、終了。本読みの授業であり、意見など交換することは決してなかった。教科書の内容すら一つも覚えていない。

道徳の時間をこんなにも無下に扱い、学校の教師たちはモラルを生徒に教えているのか。

近年、ゆとり教育と言われ続け、授業数が減少したとはいえ、まだまだ受験を目的とした授業を行っている学校が多い。勉強はもちろん大切だが、受験勉強中心の学校教育を見直すべきである。学力向上だけで、将来身につけているはずのモラルが欠けていては、頭でっかちになり、学生時代の大切な時間を無駄

にしてしまうのではないか。

(二) モラルを身につけさせる具体的方法

せっかく一時間設けられている「道徳」の時間を有意義に使ったほうが良い。大学では道徳担当の教師を育て、中学、高校だけでなく小学校でもプロフェッショナルな教師を配置すべきである。大学に道徳学部を設置する。

中学、高校の授業では、教科書の内容や生徒たちの身近な問題、さらに、昨今取りだされている凶悪事件などを教材として取り上げる。デイビートやレポートなどで積極的に生徒の意見を聞き、生徒一人ひとりの考えを把握する。

小学生では絵などを交えながら、良いことと悪いことの区別を教える。例えば、自分のお菓子を勝手に友達に食べられたとき、自分はどういう行動にでるか、絵で表現させる。その絵を発表させ、それぞれの意見を交換する。小学生にとって身近な絵を使うことにより、その行動に対する現実味が増し、同時に、表現力もつく。

また、現在話題となっている幼稚園の義務教育化。「三つ子の魂百まで」と言われているように、三歳までとは言わないが、幼児期の教育こそが大切なのではないかと思う。ゲームなどを取り入れながら大切な人、物などを守る心を養わせる。「ドラエもん」などの漫画を紹介することも一つの方法だ。「ドラエもん」は物語の中に環境問題や人間関係が隠されている。理屈を押し通そうとしても子どもは反発するばかりである。無理強いをせず、身近なものを利用し、自然にモラルを身につけるようにする。

話は飛ぶが、ボスニアでは内戦の傷跡として、国内に地雷が数多く埋められている。地雷を踏み、足を失う子ども達が多かった。しかし、学校で地雷専門の授業を設けたことにより、事故がほとんどなくなったという。地雷は生命に関わることであり、道徳とは重要性が違うかもしれないが、教え方次第で生徒たちには何らかの影響があるのではないか。

四 地域から教わるモラル

(一) 疎遠となる地域

少し前のテレビコマーシャルで興味深いものがあつた。電車の中で母子がいて、子どもは行儀悪く外を見ていた。それをおじさんが注意するが、母親がおじさんを睨むという内容だ。おじさんのような人が昔はよくいたそうだが、今は全くと言っていいほどいない。本来この場合、母親はおじさんに感謝すべき立場にある。子育ては家族だけがするものではない。地域ぐるみで子どもを育てあげる必要がある。

しかし、今の時代、大人が気軽に子ども達に声をかけにくい状況にある。というのも、登下校の子ども達を狙った犯罪があまりにも多い。実際私にも一人の息子がいるが、きつと「知らない人に声をかけられても対応しちやいけないよ」と言うだろう。

子どもに声を掛ければ不審者扱いされる、知らない人に声をかけられても対応しない等が社会の風潮である。例えば、知らない人に「おはよう」又は「暗くなってきたから早く帰りなさい」などと声を掛けられた場合、今の子ども達は、警戒心をいだき何も返答することなくその場を立ち去る。このことが、今の

日本を悪くしているのではないか。我々の祖先が築き上げてきた地域の輪というものが失われている。それによって地域の目が届かなくなり、子どもはそれが当たり前前に感じる。「俺は俺」というように。そういう環境で育ち、そのような考えを持った子どもにも人の痛みや悲しみがわかるはずがない。自分の思いどおりにならなければ、他人には何をしてもいい。それが、今の日本の治安の悪化にあると思う。地域住民が地域の子どもにも感心を持ち、挨拶等を掛け合い、時には叱責し、また褒めてやることで子どもは自然とモラルを覚え、また、それは犯罪の起りにくい町にも繋がっていくのではないか。

(二) 信じられる地域に

現在、犯罪防止のために、集団登下校や保護者によるパトロール、また、私の地域には「子ども達を守る家」という看板を家の前に掲げ、子ども達の「駆け込み家」がいたるところにある。このように子どもを守る工夫が強化し、登下校の犯罪が減ったという。今後も防犯対策は必要であろう。しかし、本来第三の親である地域の人に警戒心を抱いては、地域の人とのコミュニケーションから学ぶモラルも学べなくなり、日本人特有の協調性をなくしてしまう。今後、もう少し心をオープンにし、地域の人を信じたいものだ。

五 おわりに

個人の人権意識の高揚が叫ばれる中で、他人に迷惑を掛けないという大前提すら理解出来ない者がいる。自分の権利のみを主張し、他人の事はお構いなしだ。「俺は、一人でここまで大きくなりました」と態度を

現す子どももいる。そういう子どもに成長させたのは、家庭だけでなく、地域、学校そして、我々大人である。

私の学生時代は野球部に所属し、クラブ活動の後よくコーチの家に行き、ジュースやお菓子をいただきながら、コーチからいろいろな話を聞き、そしてそこでいろいろなことを学んだ。今の私は自分一人で育つたのではなく、家族をはじめ、近所の人たち、学校の先生など様々な人からの助けがあったからこそである。

大人から知らずに学んだモラルを最終的には子どもがどう活かすかである。最大限の道を作ってやることが大人の務めである。

「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに 考えるか」

警察官（群馬県高崎警察署）

野田 順也（26）

一 はじめに

（一）現在の犯罪実態について

全国の刑法犯認知件数は、平成一四年の約二八五万件をピークにここ数年は減少がみられるものの、犯罪認知件数が約一二〇～一四〇万件の間を推移していた高度成長期の昭和四〇年代と比べ約二倍という非

常に高い数字となっている。

「水と安全はタダ」、日本にはこの有名な台詞に代表される、安全神話があった。

この神話は、平成に入り、犯罪件数増加とともに過去のもと言われていたが、さらに、ここ数年における、一般市民が平穩に日々をおくる場所で犯罪に巻き込まれる事件報道等を耳にするたびに、国民の体感治安は著しく悪化し、「日本は治安の良い国ではない」との認識を持つようになってしまった。

殺人等の凶悪事件だけでなく、法律の抜け穴を利用した企業拡大の為のなりふりかまわぬ活動、人の心の弱みにつけ込む、悪質商法や振り込め詐欺、情報技術の進展を逆手にとった、パソコンを利用したインターネット詐欺、精密な通貨偽造が横行している。

その他にも、出会い系サイト等による少女買春、薬物使用、また、社会的に地位のある人間が、己の功績欲しさのために研究データの改ざん、捏造等をおこなったりしている。

また、一方で犯罪行為だけでなく、普段の生活においても以前では考えられないような非常識な行為、他人の迷惑を顧みない行動が多くみられるようになってきている。

そして、このような行動が頻発し、さらに悪質化しているということが、犯罪総量の増加に繋がっているとみられる。

(二) 犯罪と日本人の倫理観との関係

犯罪の急増には、我々日本人の倫理観に変化があったためといわれるが、旧来、日本人独自の倫理観として、長い歴史の中で培われた「清明心」「和」「正直」「誠」をはじめとする、日本の倫理思想の中から日

本人独自の「倫理観」を築きあげてきた。

「日本人の倫理観」を表すものとして、さまざまな言葉が当てはまるといえるが、その中でも、私は「誠実さ」という言葉に注目する。

「誠実さ」とは「私利私欲をまじえず、真心をもって人や物事に対すること」である。

例えば、江戸時代において火事で親を亡くした子供は、その村全体で責任をもって育てられた。

「生きていくため」、「自分たちも他人事では無い」として、子供を引き取って育て、助け合って生きていくことが、人として当然の考え方とされていた。

さらに、日本という国が古来から築き上げた「誠実さ」は、開国後の日本に來日した外国人の記録に、「日本人は庶民レベルでも人を騙すような行動を慎み、極めて洗練された民族である」と賛辞されて記されている。

つまり、「誠実さ」とは、日本人が古来から現代までの非常に長い期間にわたり持ち続けた倫理観であり、この「誠実さ」に基づいた行動が、日本社会の安全に大きく貢献していたといえる。

一方で、近年の「誠実さ」を逸した行為が、現代にみられる非常識、自己中心的な行動を誘発し、その中で「犯罪」が生まれていくのである。

二 日本人の倫理観とは

(一) 古代の倫理

古代において人々は神をめぐり、その倫理観を形成している。

仏教や儒教が伝来する以前、神とは「なにものか」であり、「あらゆるもの」であった。

これは、アニミズムと言われ、自然界のさまざまな事物はすなわち超自然的な力を持った霊的存在であるとして、そうした霊を畏れ敬う信仰であり、日本では祖先信仰のならいである。

その思想の中で、日本人は「清明心（きよきあかきこころ）」をその倫理観の基礎としていた。

清明心とは「人との融和を求め、全体のために尽くそうとする、かくしだてのない心」であり、道徳的価値と美意識の融合、ヨキ心はキヨキ心であり、アシキ心はカタナキ心である。

心情の純粹さ、表裏のない透き通った心が善き心であり、逆に隠しごとをする心を汚き心として忌嫌った。

集団への帰属、自己中心的な私利私欲を排し、集団組織に対して私心を滅して服従することを美德とした。

(二) 中古から中世の倫理

飛鳥期に仏教が伝来し、鎌倉、室町期にかけ、仏法をめぐる思想が生まれ、聖徳太子の制定した、一七条の憲法第一条には「和をもって貴しとし、よから忤うことなきを宗とせよ」とあり、「和」こそが共同体が存

在していくための原理として「和」とはそれぞれ違った思いをもつ人にお互いの協力を求めている。

日本において仏教はさまざまな宗派に別れるが、宗派ごとに思想の差異はあるものの、仏教にある「五戒」「四無量心」等から、倫理観を形成した。

その内容は、「生き物を殺してはいけない」「他人のものを盗んではいけない」等、人として生きていくうえで大切なことは善良な心とその行いであり、少欲で簡素であり対立や争いを求めず他者を尊重すること、社会の規律や慣習を守り目上の人を尊ぶこととしている。

また、「嘘をつく」と地獄に墮ちる」との仏法の思想が、当時の日本人に仏教への畏敬の念を抱かせ、倫理観を規範的にあらわした「正直」という意識が生まれた。

(三) 近世の倫理

近世において、武士とは死を覚悟し、戦では一人で死ぬものだが、それは家族である妻子のみならず、祖先、子孫、従者等の所領を保有する、親族共同体のために名を残すべく「己を排し」戦いに臨む。

近世においては、朱子学をはじめとする儒学が盛んであり、特に古学にある、孔子や孟子によって説かれた道は、五倫五常として日常の中に実を結んでおり、五倫五常に生命を吹き込むものとして『誠』の存在を説き、『誠』を実現する方法として、「忠（自分を偽らない）」と「信（他人をあざむかない）」を強調した思想が生まれた。

また、戦闘のなくなった幕藩体制下における武士の存在意義を儒学の立場から意味づけ、武士を儒学における士・君子と重ね合わせて、新しい武士道としての士道を説いた。

身分の違いは天命によるが、それを後盾におごることは、かえって「天により責められる」とした。古学の強い影響もあり、国学として、あらためて日本の古典を見直そうという動きも生まれた。

古代の人々は天地自然のままに、素朴でおおらかに生き、しかも必要な道徳をおのずから備えており、道はその精神で実現されていたとしている。

その他にも庶民の思想として、商人達が力をつけ、儒学を基調とした「商人の道」や「万人直耕」、「報恩の思想」が生まれた。

また、幕末には蘭学の思想から、「和魂洋才」「東洋道徳、西洋芸術」等の思想が生まれた。

これらの思想においても「清明心」「正直」に通じるものが日本人の倫理観に多大な影響を与え、近世においての倫理観を形成したのである。

(四) 近代の倫理

開国により、人々は文明という新たな外部に直面し、財貨と武力による力として欧米諸国が体现した。明治政府は体制の再編成を図り、武士の親族共同体の崩壊、市民平等さまざまな政策を実施し、自らも文明を体现する存在となった。

洋学、キリスト教が受容されるなか、国粋主義として、天皇を国家の核とする思想が生まれ、その流れの中で、国民道徳を説く教育勅語が生まれた。

一方で、近代化の中で「個」としての自己を内面において支える近代的自我の思想が移入され、また、明治中期には、国家主義的傾向が強くなり、その反発として、近代的自我の確立を目指して自己を内面的

に掘り下げていると見る傾向が出てきた。

自我の確立という点、現代の「個人主義」に通じるものがあると思われるが、当時は個人主義の立場から、自我を追求する「自己本位」と呼ばれる個人主義の生き方の中に、現代の「利己主義」とは異なる、個性を発揮して自我を確立していく生き方に、他人の個性の尊重、義務や責任の重視という倫理性を強くともなうものとしている。

つまり当時の個人主義とは「誠実さ」を強く伴うものとしているのである。

(五) 現代の倫理

戦後における日本にも「誠実さ」の形は存在し続け、その最たるものが「職業倫理」といえる。

戦後の復興から、高度成長期、いや、バブル経済崩壊の前まで、会社の従業員は、会社のために、自己を排し、会社の利益に貢献することが当然という考え方であった。

一方、会社側は従業員に対し、会社へ勤務する従業員の年功序列の形で終身雇用を保障した。

バブル経済が破綻し、企業はコストダウンを迫られたため、リストラがおこなわれ、また、ここ数年の「利益優先主義」「能力主義」の風潮から、この制度は一部の企業を除いて完全に破綻してしまった。

有能な従業員は、個人で持つ能力で支給される役職、賃金を二の次として、「会社のため」に、「私を排し」ていた。

それは、自分を雇ってくれた会社にたいする恩義、感謝の念を持ち続け、また、会社だけでなく組織という集団の中で、畏敬の念を維持していた。

日本人は「誠実さ」をつい最近まで持っていたのである。

日本独特の雇用制度が破綻し、現在の企業はコストダウンのためリストラをおこない、利益を求めるために手段を選ばない利己主義に徹する起業家が生まれ、メディアでは、これらの人間を「カリスマ」と褒め称える風潮が生まれた。

その他にも、企業間では、有能な人材をヘッドハンティングの名の下に人材の引き抜き、情報スパイ行為がおこなわれ、従業員個人も自分の能力に見合った、賃金、役職を与えられるのが当然であると信じるようになっていく。

(六) 総括

日本人は「自然」及び人の「集団」を畏敬の対象として、倫理観を培い、時代の流れに沿って変化しながらも、日本人の倫理観の根底には「誠実さ」が存在していたのである。

現代になり、バブル崩壊後、能力主義、利益優先主義等の考えから「利己主義」が思想の中心となる風潮が強くなり、他者に対する畏敬の念が乏しくなり、日本人のもつ「誠実さ」が失われていった。

時を同じくするように、犯罪認知件数の上昇率が増加しはじめていく。これは、単なる偶然ではなく、日本人の倫理観の変化、「誠実さ」の喪失が関係していると考ええる。

三 日本人の倫理観「誠実さ」の再構築

日本人が失った「誠実さ」の心は、どのようにしたら取り戻せるのであろうか。

(一) 規範をもって「誠実さ」を取り戻せるか

まず、社会規範＝法として定めることにより、倫理観を法律で規定する方法が考えられる。

日本は、当然ながら法治国家であるが、東洋国家の特徴である倫理的に当然なものとは法律にならないというものがある。

例えば、近年各県で「ポイ捨て条例」なるものが制定されているが、これは以前の日本では倫理的に考えられなかったことを、法律を制定して規制する必要が生じたからで、これも日本人の倫理観の変化を表しているといえる。

また、倫理的に反するすべての事象に対し、法律、条例等で規制するのは実質的には不可能であるし、法律（規範）を守ろうとしないものに対しては意味をなさない。

これでは、倫理観を取り戻すということにならない。

(二) 「誠実さ」を取り戻すには

そもそも、「誠実さ」の倫理観が大切だという、倫理観重視の考え方が現代の日本人に浸透していれば、法律、教育やその他さまざまな方法で知らせる必要はない。

しかし、現状では犯罪総量の増加、凶悪化、低年齢化等、挙げれば悪い方向にきりがなくない状況では、何らかの対策を持って倫理観を浸透させる必要性が生じる。

四 倫理観育成

「倫理観とは〇〇である」と押しつけるのではなく、「倫理」、「道德」というものに触れる機会を増やすことで、自分から「倫理観」というものを形成させることが、倫理観を養う第一歩と考える。

一方で、気をつけなければならないのは、「倫理観」そのものを教えるのは思想の強制であり行つてはならない。

これまで述べてきたような、日本の倫理思想や世界の倫理思想等を学ぶことで「自分なりに倫理観」を形成する手助けを行う方式でなければならない。

(一) 義務教育等への積極的な倫理教育の導入

私自身も、小、中学校時代に、道德の時間が週に一度程度受けた記憶があるが、その内容は思い出せないばかりか、よく他の科目に授業変更されていた記憶がある。

小学生から英語教育の導入等、専門科目のような教育の必要性が重要視されているが、知識の前にまず人を育てる教育を行う必要性を感じる。

ここ数年、戦後教育の中でもゆとり教育等、さらに自主性を重んじた教育が試行錯誤しながらおこなわれている。

物事の善悪を社会の中で自然と学んでいた時代と違い、核家族化が進み、子供は学校で知育だけでなく德育についても学ぶ必要のある時代となっている。

生徒、児童に対する「倫理観」「道徳」教育に、通常授業の時間確保の観点から、夏休み等に徳性を育てる教育を専門に行う合宿等、短期集中の形で倫理、道徳に触れさせる。

また、進学等の試験重視を逆手にとり、道徳を重要試験科目の一つにし、今の国語、数学、英語のように、試験に「必要なもの」としての認識を与えることで、試験＝人生に「必要なもの」として認識が深まり、倫理、道徳に触れる機会を増やす。

(二) 生涯教育としての倫理観の醸成

「子は親の背中を見て育つ」と言われることがあるが、子供の教育を充実させても、両親をはじめ大人達が非常識な行動をしていたのでは、社会全体の倫理観を取り戻すことは出来ない。

現在、生涯教育ということで、教育、学習の必要性は各人が自覚しているが、実際のところ時間の確保等が厳しく、名前だけのものとなっているのが現状である。

そこで、先に述べた合宿ではないが、大人の義務教育という形で、実用性だけでなく倫理、道徳を学ぶ場に積極的に参加できるようにし、仕事以外のところで余裕が持て、社会人になった後も、倫理、道徳に触れることができる社会作りを行う。

(三) 情報社会へ倫理観の対応

新聞、雑誌、テレビをはじめ、戦後日本の情報化社会は急速に進化を遂げてきたわけであるが、近年ではインターネットの普及により、情報量はさらに飛躍的な高度情報化社会を形成するに至っている。

当然、情報に触れる機会は多く、その影響は極めて大きい。現在のメディアの中には、視聴率、購買

率を重視するために、倫理的に疑問視されるような情報発信を行うものが多々みられる。

報道倫理については、自主規制が行われているが、倫理教育に配慮した情報の発信を行う等、メディアの影響力の大きさを自覚した規制レベルの策定を求める。

(四) 行動確認制度の導入

現代の日本人が倫理観がおかしくなったといっているが、私は大多数の日本人は社会に恥じない倫理観を有していると考えている。

そこで私が考えているのは、「行動確認制度」の導入である。一年、或いは半年に一度程度の期間において、自分の行動の中に倫理に反する行動がなかったかを自己採点するのである。

項目等には、個人的なもののほか、家族、社会、会社における行動についてである。

採点することが目的でなく、自己の行動や、倫理、道徳について触れ、考えさせる効果がある。

(五) 倫理、道徳検定の導入

現在行われている「英語検定」や「漢字検定」等のように倫理にも検定を作り、社会的に認知度を与えることにより、倫理、道徳に触れる機会の一つとする。

英語検定等のように、試験、就職に考慮されるような状況になれば、先に述べた試験科目導入と同じく、触れる機会の増加だけでなく、積極的に学ぶという効果もある。

(六) 教育倫理の導入

過去の日本において、倫理観には「神」「仏法」「天」「文明」等、倫理の柱となる「もの」があった。

現在の日本では、宗教等は存在しているが、国民の大多数がもつ倫理の柱が存在していないと考える。これは異論が多いだろうが、戦前の「教育勅語」に変わるものとして、人間の徳を育む、新しい国民教育の中心を「教育倫理」として文章を策定する。

暗記を強制するのではなく、全学年の国語の教科書に載せ、日本には長い歴史の中で培われた考え方があり、文章の意味を理解させ、自己の倫理観を学ぶ手助けをしていくのである。

学校では何を学び、また学ぶべきことは何か、その基本方針を文章として策定し、倫理、道德教育の道標として用いてはどうかと考える。

五 おわりに

日本人は古代の「清明心」をはじめとして、さまざまな倫理思想のなかにその根底にあるものとして「誠実さ」をもっていた。

日本文化の中には、慎ましやかであり、他人を思いやり、真心をもって人や物事に対して接することが、美徳とされるものが多数有るが、近年なくなってしまったものが多い。

日本人が「誠実さ」を失った影響の大きさは、近年の犯罪認知件数の高止まり、「倫理観」「道德」教育が社会問題として取り上げられ、重要課題として現代の日本に問われていることからわかる。

その中で日本人の倫理観「誠実さ」の再構築Ⅱ犯罪抑止、すなわち社会の安全といった観点から、私見を述べさせていだいた。

本文には、わずか一部しか記載できなかったが、日本には倫理、道德の模範となる「もの」が非常に多い。

それは島国日本に生まれた独特の文化の賜であり、過去、現在、そして未来にかけて普遍性を備えている。

国民全体の倫理観の改革が実を結び、「誠実さ」をもつ日本人として誇りを持ちはじめたとき、社会の安全は自然と保たれるだろう。

確かに困難なことであるが、「道は爾^{ちか}きにあり」と私は信じている。

参考文献

- 『日本倫理思想史』 佐藤正英 著
『日本古代の精神世界』 湯浅泰雄 著
『日本倫理思想史 上・下』 和辻哲郎 著

ひとりひとりを大切に する社会

元 高校教師

細田 重剛 (72)

一 第二次世界大戦後の解放感と旧道徳の否定

多くの人命を失った第二次世界大戦の終結は、人々に解放感と平和の喜びをもたらしたのは素晴らしいことであったが、よい意味の緊張感がなくなり、社会生活の根幹である旧道徳もほとんど否定されてしまった。

やがて新憲法が制定されて、戦後の社会生活の規範が示されることになった。それは、平和主義・基本的人権の尊重など優れた内容であった。

しかし、個人の自由や権利について、多くの条文で認め保障しているが、自由・権利が強調されすぎて、それぞれを支えている責任や義務が忘れられてしまった。

戦争中、戦争遂行のために国民一人一人に重く課せられた責任感・義務感の反動で、戦後それらが軽視されてしまったような気がする。

人間の個人としての生活には、自由や権利が基本と考えられるが、人間の社会生活では、「人間は、どうしなければならぬか」「人間は、どうしてはいけぬか」という責任や義務が絶対に必要なのである。

この社会生活に必要な不可欠な責任感・義務感の希薄化が、社会不安の大きな原因となっていると確信する。

更に、敗戦のショックから、戦争中までの道徳をすべて否定するような風潮の中から、道徳不要のような雰囲気、社会不安を一層あおりたててしまった。

二 社会主義諸国の誕生と崩壊

二十世紀初めの社会主義国の誕生と二十世紀終りのその崩壊は、世界の人々の倫理観に極めて大きな影響を与えている。

社会主義的な考え方は、社会連帯意識の高揚という素晴らしい面があったが、その実現のためには、暴

力・闘争・独裁などを手段として認めるといふ問題をかかえていた。

多くの社会主義諸国の崩壊は、独裁の否定により統制力が崩れて民族紛争が多発した。また、反動から市場経済は善とされ拝金主義が蔓延した。その結果、金を目的とした凶悪犯罪や経済犯罪が多発するようになってしまった。

三 リーダーの責務

社会の安全確保には、リーダーの果す役割は極めて大きい。政治家の第一の仕事は、社会の安全といつても過言ではないと思う。

莫大な犠牲者を出した第二次世界大戦の責任者は、政治家・軍人のリーダーと多くの人々が認めている。「心・技・体」というように、あらゆる分野のリーダーも、第一に心Ⅱ倫理観に恵まれた人がその任務を果すことである。絶えずリーダーは、倫理観を高め磨きながら、人々に呼びかけて社会の風潮を良くする責任と義務があると断言したい。

国連の事務総長、各国の大統領・首相は、絶えず何よりも人命尊重を訴えてもらいたい。国会で首相が多くのこと答弁する必要はない。絶えず国の倫理観を高めるために率先垂範し、国民は、それ以外をほとんど要求してはいけないと思う。倫理観を高めることに専念してもらいたい。

日本では、首相を筆頭に、大臣・国会議員、役所・会社の長、地方の知事などが代表的リーダーであるが、マスコミの社会の雰囲気づくりの影響の大きさから、そのリーダーの責任は極めて大きいし、大いに

奮起してもらいたい。

修身斉家といわれているように、日常生活の基本である家族の果す役割も、当然大きい。両親の毎日の地道な努力が、社会の安全確保の第一の鍵といっても過言ではない。

四 学力・進学よりも道徳力

第二次世界大戦まで、「修身」による強力な道徳教育が実施されてきた。私は小学校六年間「修身」を学んだが、マイナス面は全くなく、すべてプラスになった。確かに天皇・戦争賛美の問題はあったかもしれないが、私には悪影響は全くなかった。

強く印象に残っているのは、「広瀬中佐」「木口小兵」など戦争関連のものばかりであったが、それらから決して戦争に行きたい気持ちにならなかつただけでなく、強い責任感・義務感が残っている。むしろ、戦争に批判的になってしまったのは、不思議でならない。

現在、小学校では漸く道徳の時間が復活したが、戦前のように重視されていない。戦前のような強力な「道徳」を復活してもらいたいが、国語の時間を一時間増加して、道徳の内容の国語の時間とすれば、抵抗なく受け入れられそうであるし、強力な「道徳」の教科書を作ることも可能である。一週間一時間が道徳の時間ではなく、毎日毎時間が道徳の時間であることも、忘れてはならない。

強力な「道徳」の教科書の根底は、平和主義であるが、野口英世・二宮金次郎・ヘレンケラーなど普遍的価値がある人物伝を中核にするのがよいと思う。どのような人物が望ましいかについては、国民に問い

かけたりすればより一層普遍的になり、国民の倫理観高揚にもなるであろう。

更に、「ただ単に生きるのではなく、より良く生きることが大切である」とか、「毎日の生活で何が肝心なことであるかを知って行動する」と教えているギリシア哲学、「自分を愛するように、隣人を愛する」をくり返し強調しているキリスト教、「すべての生きものを大切にする」「苦しみを乗り越える」としている仏教、「人々に対する愛情」が最も大切と説いている儒学など、二千年以上も世界の人々に支持されている大思想を、わかりやすく教えて熟慮させたい。

このような「道徳」の教科書を作ることによって、生涯貫いて実践できる強い信念をもった人間を育てることができる。

道徳の軽視が、暴力・いじめ・学級崩壊の一因であるが、この問題を長く取りあげたマスコミの功績は大きかった。

小学校では、分数や小数の計算が始まると消化不良の子どもが増えるようであるが、それらができなくても普通の社会生活にほとんど支障がないから、無理に教えこまないようにしたい。このような無理強いが、いじめなどの遠因にもなっていると思われる。

近代の自由・平等の概念は、人類を大きく前進させたが、人間には能力差のあることをしばしば忘れてしまつて、多くの不幸を生んでしまつた。

子ども全員を走らせるのは、健康のため、運動能力を向上させるためによいことであるが、全員百メートルを十秒で走らせるのは、絶対不可能である。分数・小数の割り算を、全員にできるようにするのは困

難であるので、文科省も漸く、学習指導要領で円周率を三で計算してもよい、計算は計算器を使ってもよいとしたのである。

最近、学力向上・授業時間の増加などが叫ばれたただけでなく、小学校での英語必修も議論されだした。これらを強行すれば、暴力やいじめだけでなく、自殺なども増加するかもしれない。

小学校は、学力・単語などの知識つめこみの苦しい学校でなく、道徳を核とした国語や、健康増進を目的とした体育、情操教育のための音楽などを、楽しく学ぶ学校にしなければならないと思う。

中学校になると、やや高度な数学の他に英語などの学習が始まるので、普通の学習が困難な生徒は、ますます苦しくなってしまう。最近の全国の不登校者は、小学校で約二万人、中学校で約十万人である。不登校の原因はさまざまであるが、学業不振が大きいと考えられる。私は、数学などの不得意な子どもたちのために、義務教育六年制を提案したい。

歌舞伎役者とか囲碁将棋棋士など、三・四歳のころからプロの道を目指す家庭なども、多数あることから、義務教育六年制は是非実現してもらいたい。

現代の日本は、英語・数学などの能力に優れた者が、倫理観が低くても一流大学に進んで高い収入を得ている例が多く、しかも金権病になっての逮捕者が続出している。

オウム真理教事件で、学力の高い一流大学出身者が中心になって多くの殺人事件をおこし、多数の者が死刑判決を受けているのは、常識では考えられない。教祖などの巧みな誘惑にだまされた面もあると思うが、小学生のころからの基本的倫理観の欠如が、このような結果を招いてしまったと思う。

英語・数学などの学力の低い者が、質素堅実で倫理観が高いのに、適職が少なく貧しい例が多いと思われるので、このような人々を大切にしないと、社会の不安は解消されず犯罪は減らないと思う。

義務教育六年制が実現した場合、家庭で面倒をみることでできる一部の人々以外は、社会に投げ出されてしまうので、文部科学省や厚生労働省などが中心になって、進学者以上に対策を講じなければならない。

子どもの興味・関心に従って、職業訓練・文化体育活動などを三年間義務化すれば、子どもに適した指導内容になり、今までとくらべてより良くなることになる。

「道徳」教育は小学校で完結し、卒業後の三〜六年は、「職業」教育に重点を移し、それ以後は定年まで職場を確保できるように、法制を完備することである。

親鸞ではないが、学歴の低い人ほど他力を望んでいると考えられるからこそ、国や社会の力によって救われなければならない。学歴の高い好運の人は、自力で生活できる場合が多い。現代社会に適応しにくい不運な人々を、好運な人々が救うことこそ、現代から将来にむかっつての安全な日本にする根幹であると断言したい。

五 個性から社会性へ

個性的な人々の中から、ノーベル賞受賞者が生まれているのは事実と思う。受賞者の発言からも、個性の大切さは理解できる。アメリカなどの影響もあって、個性絶賛となってしまった。

このような社会風潮が歪められて、自分の欲望を満たすために、勝手な言動に走る反社会的なわがまま

な自己中心的な人々が氾濫してしまった。このような雰囲気犯罪の誘因になっている。

社会生活に絶対に欠かせない、他人に迷惑をかけない、周囲の人々に危害を加えない、という個性の土台である社会性を個性に代わって声高く叫びたい。

二五〇〇年も前に古代ギリシア哲学者が示した社会生活の「倫理」が、なぜ生かされていないのか不思議でならない。

六 経済的に安定した社会へ

社会の安全のためには、一に道徳、二に経済、三・四も五もないほど、経済生活の安定は人間の生活の根幹である。戦争中に戦地で飢餓生活をした兵士が、「理性も何もない」と言っていたし、「衣食足りて礼節を知る」は、古来からの永遠の真理である。このごろは「物より心」と言われているが、憲法に明記している「健康で文化的最低限度の生活」は、何としてでも確保しなければ、安全な社会は実現しない。

第二次世界大戦直後のどん底生活から抜け出すため、経済生活の安定のため、国民全体が一線に並んで必死に働いた昭和三〇年前後が、生活に対する緊張感もあって、日本の治安状態は非常に良かったと思う。「衣食足りて礼節を知る」を実感した時代であった。

ところが高度成長時代になって、衣食住の生活がかなり満たされるようになったのに、次々と信じられないような現象がおこりだした。

「所得倍増」のような急激な変化で、物質的に豊かになり、適度の緊張感が失われたためか、人々の心

に狂いが生じたようである。古来のギリシア哲学・仏教・儒学に共通する教え「中庸」を守らなかつたためか、「過ぎたるは及ばざるがごとし」になってしまった。

暴力・いじめ・学級崩壊・不登校・万引・暴走族など、青少年から始まりその風潮は大人まで広まってしまった。

経済優先に目を奪われての倫理観の欠如、生活のゆとりからの激しい進学競争、平和状態に酔って目標の喪失などが原因として考えられるが、目上の人に対する尊敬の念が失われ、周囲の人々を人とも思わない振舞いには、戦慄をおぼえる。

高度経済成長は、青少年が働かなくても、親のスネをかじって生活できるため、ニートとかフリーターとかいわれる若者を増加させてしまった。無理して働かなくても何とか生活できるために、危険な職場や汚い職場などを嫌う3Kといわれる若者も増加させた。これには、子どもを甘やかした親の責任も問われなければならぬ。このような怠惰な青少年の一部が犯罪に走っていると思う。

また高度経済成長は、人手不足を補いながら、低賃金労働者を多く求めたため、外国人労働者が大量に流入するようになってしまった。ほとんどの外国人は、善良で勤勉のようであるが、治安の悪い国や大きく変質した国からの流入があり、旅の恥はかき捨てることなども加わって、大胆で凶悪な犯罪が多発した。このことが、模倣犯など犯罪予備軍を刺激して、戦後最悪の無法国家になってしまったような気がする。

さらに、高度経済成長は、長期に繁栄が続くような幻想を抱かせ、土地への投機・放漫経営・リゾート

開発などで、バブル崩壊となってしまった。高度成長は、多くの公害も発生し極めて大きな副作用を生んでしまった。

エンジンがなければ車は動かないが、動きだしたならば、絶えずブレーキを忘れてはならない。戦争中の暴走も忘れられない。経済成長は、国民の生活にとって必要不可欠なものであったが、適切にブレーキをかけられなかった。

バブル崩壊は、第二次世界大戦の敗戦のようなショックを日本国民に与えた。相次ぐ銀行の倒産、倒産を回避するための大型合併、長期のゼロ金利政策など金融界に与えた影響は、はかりしれなかった。財政面からの対策は、相次ぐ減税と赤字国債の大量発行であったが、この安易な方法が莫大な財政赤字を招いてしまった。

昭和初期の日本が世界恐慌から脱出するため、安易に満州から中国全土に進出して、資源を確保しようとしたことと状況が似ているのである。犯罪は安易な思慮を欠いた問題解決法といってよいが、安易な方法は大きな災害をもたらすことを、歴史が証明している。

バブル崩壊の時の日本人の経済生活は中流の状態で、減税をする必要はなく、減税をしても急速に消費性向が高まることはなかっただけに、賃金を一〇二割下げても辛抱するしかなかったのである。

減税によってもたらされたものは、景気の回復というより、財政赤字の拡大であり、減税の恩恵を大きく受けたのは高額所得者であっただけに、所得格差の拡大であった。

バブル崩壊から約一五年で漸く景気は回復したが、その原因は減税というより景気循環であり、中国の

好景気のおかげといっても過言ではないと思う。

犯罪防止のためには、警察官の増強など、かなりの財政支出が必要であるのに、どこから捻出したらよいのであろうか。莫大な財政赤字をもたらした政治への不信感が、無党派層の激増、国民年金の未納、モラルの低下、犯罪増加の一因となっているだろう。

規制緩和の結果か、年収一〇〇億円の人々が登場してきた。年収一〇〇万円以下の人々は、国民の二割を越えている。一万倍の差である。通信費などを含めた国会議員の年収は、約三〇〇〇万円であるので、一〇〇万円の人々の三〇倍である。古代ギリシアの哲学者が格差の拡大を警告しているだけでなく、歴史が暴動・革命を実証しているだけに、早急に適切な対策が必要である。

資産や所得に対して、適切な累進課税をすることによって財政赤字を解消し、格差是正のため緊急に全力投球することが、庶民の願いであり、社会の安全への近道と信じて疑わない。

最近、能力のある者が能力を発揮して大きな報酬を得るのは当然だということが、よく言われている。確かに能力のある人々による発明・発見などが、社会に大きく貢献しているのは疑いのない事実である。報酬が本人の努力の成果であることは認めるが、能力の発揮が多くの先祖や両親、今まで育ててくれた多くの人々のおかげであることを、忘れないでもらいたい。

逆に生まれつき能力に恵まれてない不運な人々も多数いる。そのような人々が、幼ないころから生涯、学力・体力・職業などで不遇な生活を送るとしたら、あまりにも気の毒なことではないだろうか。恵まれない生活環境から、犯罪に向かう可能性はかなりあると思う。一般にこのような人々は謙虚で倫理観の高

い人も多数いると思われるので、物心両面で暖かい手をさしのべて横道にそれないようにしたい。

現代のソフィストが、競争原理という言葉を昔からの真理のように使っているが、古代からの大思想には全くないソフィストたちの隠語・造語である。古代ギリシア時代から二五〇〇年過ぎても、ソフィストは減るどころか増えるばかりである。しかも社会に影響を与える人々に多いだけに、始末に負えない。

このごろ、「小さな政府」が望ましいと言われているが、これもソフィストの造語のような気がする。つまり国としては所得税を多く取って「大きな政府」にしません、地方の県＝「小さな政府」は県・市民税を十二分に取って今まで国で行っていたような行政をして下さい、ということのようである。数年前からさかんに地方分権と言っている意味が、最近少し理解できるようになった。

政治・社会のトップは、言動が極端で、堅実な庶民の生活感覚からあまりにかけ離れている。ルソーは、子どもは田舎の生活がよいと言っているが、貧しくても健康・堅実な家庭、年収二〇〇万〜三〇〇万円の質素・堅実な地域社会＝「小さな社会」が、安全な社会への近道と信ずる。

七 警察力・検察力の強化

敗戦直後より警察の機構改革や警察官の増員などで、警察力が強化され、治安状況が各国に比べて非常に良いのは、誠に嬉しい。文明が進んでいる欧米を旅行して、郵便物の迅速・安全なこと、誘拐・盗難の少ないことなどを実感した。日本の電車時刻の正確さ、日本人の几帳面さやきめの細かさなども、治安の良さに一役買っていると思う。

最近、凶悪犯罪が多発しているため、加害者の人権よりも被害者の人権を重視して、裁判の刑が厳しくなったようでありがたい。また、裁判所の判決で死刑が目立つようになった。凶悪犯増加のためかもしれないが、殺人事件がなくならないかぎり、死刑制度を存続してもらいたい。一時期、死刑執行がなかったが、このごろ増えてきたようで、犯罪抑止のため続行してもらいたい。

一獲千金の経済犯に対して、最近検察当局が積極的に動き出したようで、感謝したい。万引・窃盗・強盗など一獲千金的なところがあるだけに、悪い風潮を断ち切るため効果絶大である。

アメリカニューヨーク市では、市長がリーダーとなり犯罪防止に力を注いだ結果、またたく間に殺人犯が四分の一に激減したそうである。リーダー・警察の熱意の勝利である。落書きをなくすなど小さな事から初めて成功したようである。

東京池袋での落書消しには、かなりの費用がかかったようであるが、犯罪防止のため、官民一体となつてよく頑張ってくれたと感謝したい。

日本のルネッサンスを目ざして

「モノ」より「ココロ」の時代へ

道徳といえは堅苦しく聞こえるが、要は世の中、他人との団体生活、共同生活を営む暮らしの知恵や常識が、世の中の進歩や、複雑化する中で、それについていつているかどうかが問われている。

それは、こと更むずかしいものではなく、ごく普通の、自然に湧き出る他人に対する思いやりであり、

無職
水上 正 (73)

他人の痛みが自分のものとしてわかる「こころ」である。

このごく当り前の、良いことは良い、悪いことは悪い、と判断できることを「分別」という。この分別という道理は、昔は良く使われ、成長するにつれ、大人の分別という形で完成していった。完成という言葉が正確かどうかは別にして、事の良し悪しを峻別して理解できるようになっていった。

現在この「分別」という言葉自体、半ば死語となっているが、大人としての社会人として自己完結して行く過程で、精神的に大変重要な要素として生きてきた。

このごく普通の、心の中に芽生え、育んでいかなければならない、平穏な心の景色が成長の過程で粗野になり、壊れ易くなって来ている。

本来、安全と倫理は相互補完の関係にあり人々に対するやさしい思いやりのある心を普段から養うことを、幼い頃から行うことが、むしろかしい言葉でいう「倫理」すなわち、自然と在るべき心の規範を形成していくのである。

昔は、それを幼い頃より教え、養っていく為に、初等教育より専門課程を設けて、こと細かく、しかも具体的に平易な例をあげて、子供の頃より道徳心と公共心が身に付くよう教えていた。しかし、この教育が戦時下においては、偏った教育として悪用されたとして現在は無視されたり、或いは軽く扱われている。しかし、これは政治問題であり、教育問題として今後の取り扱いが注目される。

それはそれとして、それらの知識は、いわば教養として身体の奥深く蓄積され、そして常識となっていく。子供の頃に蓄積された考え方の土台となる常識は、このようにして自然と「善と悪」「正と邪」を見分

ける素養いわゆる分別を身に付けた。これは或る意味家庭も学校もそして社会が連携し合つて身に付けさせたといつてもよい。

「権利より義務を守る時代へ」

戦後の風潮として、個人の権利や自由が尊重され、それと同時に守らなければならぬ義務は、自由のはき違えから蔑ろにされ勝ちである。個とか権利とかは、昔はどちらかといえば「自我」や「わがまま」として窘められる立場にあつたといつてよい。人の迷惑や不利益なことをすることは、恥ずかしいこととして、社会全体から指弾され軽蔑された。翻つて現在はどうであろうか。個が尊重され、権利の主張が人の迷惑も省りみない、自己中心の自由主義が自由と履き違えられ、社会全体が混乱している。不幸なことに戦後の民主主義として他の何よりも優先して法律の裏付けを持ち教育としても自由主義、民主主義として叩き込まれたことが、本来の意味での自由と自我を履き違え、また、権利が、自分の権利を乗り越えて、他人の権利を侵害する迄になつても気が付かないか、或いは気が付いてもこれが自由だとか、民主主義とかと錯覚してしまふ迄になつている。自由とは都合の良いものであり便利なものだと思つてしまつた。

都合よく解釈すれば、戦前の指導者の間違つた判断が、政治と教育の反動を招き、アメリカから押付けられ、或いは自主的に押し頂いて受け入れた間違つた、或いは偏つた教育が戦後の今日迄延々と続いて来た。

その戦後の教育を受けた子供達が現在親となり教師となつて、これに輪をかけたような方向で子供を育て、教育したならば、その規格の枠に嵌つてしまった子供達は、ごく自然に、当然のように、その規範の中で振る舞うであらう。

それは間違つた自由であり、方向を見失つた権利となつて今日の社会を乱し、或いは犯罪となつて社会と人々を苦しめ、恐怖を撒き散らしているのである。

「犯罪の知能化時代」

世の中が進み多様化してくると、犯罪も昔ながらの古典的な「盗む」「犯す」「殺す」という犯罪から進んで、頭悩みな「振り込め詐欺」や高齢者を狙つた住宅の「リフォーム詐欺」或いは巧妙に仕組んだ「利殖に絡む詐欺」等々枚挙にいとまがない。

また悲しいことに、家庭内暴力、これが進んで家庭内殺人に及び、親の子供に対する暴力、子の親に対する暴力、親の子供に対する殺人、子供の子供に対する殺人等目を覆うばかりの日常である。一日も早くこの蟻地獄から抜け出さない限り、明るい未来は見えてこない。

「教育の三大要素」

教育には「知育」「食育」「徳育」がありそれぞれが大切であることは論を待たない。「知育」「徳育」は学校で「食育」は家庭でとの区別すべきものではない。「知育」は何も学校だけと限つたものではない。家

家庭教師を付けての家庭でも、「塾」通いの或る意味での社会の中で行なわれているし、「徳育」は学校の教育も大事だが、社会の大人達の目で見た社会的躰も、より大切になってくる。家庭内での生活、子供なりに家の外で社会と接する社会生活、そして昼間の大部分を過す学校生活があり、その子供の活動する範囲の中で接触する親であり、隣近所のおじさんおばさん達であり、広い意味での社会全体の大人達が、そして教育に携る教師達が、その場面場面において家の子供であると同時に社会の子供、そしてもっと広く、将来の国を背負って立つ子供として、その場面の大人達が責任と愛情を以って育てていくことが大きな要素となってくるということを大人の皆が自覚する必要がある。

つまり、子供に対して、それぞれの大人達が責任を感じて生きていくことであり子供の見本となるような生活を送るようにすることである。そのことが子供達にとって、「良い事は良い」「悪い事は悪い」という、単純で当り前のことが、当り前と感じ、思わせるような習慣が身に付いていくのではないだろうか、子供の目から見て、何か少しおかしいぞと思わせることがあってはいけない。

子供は「親の背を見て育つ」と昔から云われているが、「大人の背を見て育つ」ものである。昔のように子だくさんで、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に生活していた時は兄弟げんかをしながらも、上の子は下の子の面倒見ながら助け合って成長していった。おじいちゃん、おばあちゃんからは愛情と昔ながらの「物の道理」を教わった。

ところが、最近の少年犯罪の多発化、悪質化は目を覆うばかりである。

「モラルハザードより立ち直れ」

現在の少子化が、風紀の乱れや少年犯罪の増加に関係がないのだろうか。少ない子供を大切にすまわり、過保護となり、躰を怠り育児の手抜きとなる一方、親の「エゴ」が愛情過多や、その裏返しの子供虐待となつて社会の混乱を来しているのである。

正にモラルの崩壊であり、モラルハザード社会の登場となつた。昔はモラルハザードという言葉すらなかった。世の中が進み、世の中が便利で、或る意味住み良くなつた反面、精神の空洞化を生み「モノ」の価値判断に安易な満足感を求めるようになった。つまり苦勞や苦痛を伴わないで、手近な達成感を求めるようになった。現在の多発する少年犯罪に共通している悪質で猟奇的なものは、子供の精神構造に迄立ち入つて考えてみる必要があるのではなからうか。

漫画やテレビの影響で、人の死や殺人が目の前で起こり、その死んだ人が画面の中でまた登場してくるという現実を経験すると、現実起こる死が、次の瞬間にはまた生き帰るといふ錯覚を持ち、その錯覚が錯覚だけにとどまらず、現実として自覚してしまつと、人の死の重大性を自覚できず、作られた世界と現実の世界とを混同して、文字通り精神が浮遊してしまつている状態になつていのではないだろうか。極端な話だと思つが、中学生の中でも、人の死が再び生き帰つてくると本気で考えている子供がいるというデータがあるということを聞くと、改めて、深刻に考えてみる必要がある。

昔は、家庭における兄弟姉妹の子供同士の生活の中で、喧嘩をしながら、親に叱られながら、子供達自

身の経験と反省の中から、何かしら生きていく上での、自分以外の存在に対する迷惑や、不都合なルール違反を敏感に感じ取って成長していった。従って、生きていく上での最低限の「知識」と「マナー」は、常識となつて、無意識に子供の中に蓄積され大人になるにつれて、ごく自然に、当り前の事として、事の「良し悪し」の判断材料となつて積み重なつていった。現在の少子化時代は、親が子供の顔色を伺いながら、機嫌良く居心地の良いように育てるものだから、一旦甘い環境の中から、人と共生していかなければならない社会の中に入ると、自分の「エゴ」から他人の存在が邪魔になつて、それが苦痛になつていくのである。自分にとつて都合の悪いことや不愉快なことは、これを排除したり、抹殺することによつて自分の精神を満足させ安定させることだけを優先して考えるようになる。それが犯罪心理学となつて結実し、具現化する。これが犯罪である。

「ゲーム感覚の時代」

このなんとも恐ろしい事も、「なんとかゴッコ」と同じ感覚で進行し、それが終れば、パソコンやゲーム機を「リセット」すればまた元に戻るといふ感覚に支配されているのである。いわばゲーム感覚で犯罪が行なわれるということは、現実を離れた「バーチャル」の世界の出来事として結着する。文字通り麻薬が何かに侵され、心も身体も空中を浮遊しているかのようなものである。従つて、自分のとつた行動がいかに社会的で注目を集めようと、反省する心がいつまで経つても芽生えて来ない。自分の心の中では「リセット」したつもりで、自分なりの「ピリオド」を打つて、「ゲームセット」を宣告したつもりで、一旦は整理を付

けたつもりでいるのであろう。

従って、ゲームをやりたいくなれば、またプレーが再会され、恐ろしいゲームが形を代えた別のフォーメーションで攻撃してくる。

ゲームの中での死んだり殺したりの非日常的なものが、毎日毎日反復することにより日常化され、そして現実化されて行くのである。

死は一時的なものであり、時間が経てばまた生き帰ってくるという笑えない喜劇がある。

この現実を家庭の親も学校の教師もしっかりと受けとめる所から始めなければならない。

漫画やテレビを通して簡単に殺し合うのも良くないが、自分の手で簡単に殺してしまうことができるのはゲームの中での遊びとはいえず子供の心理に及ぼす影響は大きい。現実の世界の是非善悪の判断がしっかりとできるような罪悪感を皮膚感覚として区別できるように、子供の頃より叩き込んでおくよう心掛けるべきである。ゲームと日常、現実と非現実の相違を、厳しく認識させておく必要がある。

「希望の持てる明日への出発」

さて、モラル崩壊の原因と歯止めについて、これ迄にこまごま申し述べてきたが、この問題は根が深く、複雑に絡み合っていて、堆積されているような気がしてならない。早い話、昔は政治家、役人、教師というところ所謂「エリート」といわれ、社会的地位も信用も高く、人間としても尊敬を集め信頼されて来た。

従って、生きていく上で、手本とするよう良くいわれたものである。また偉人伝として本となって数々

のエピソードを混えて語り継がれて来た。文字通り、ヒーローであり、その時代のリーダーとして引つ張って来た。つまり世の中の改革者として、カリスマ性と共に世の中を前進させて来たのである。振り返って見ると、時代の節目節目には必ず現れて世の中を変えて来た。

一方現在とはというと、政治家、役人、教師、警察官という指導的立場にあり、尊敬されなければならぬ指導者が、ごく一部とは言え、自分の為だけ、或いは自分のグループだけの為の利益のために、犯罪者となり、法の網にかかり、世間の目に晒される羽目になっている人を多く見るにつけ、情けない限りといわざるを得ない。

この「エリート」による犯罪は、運悪く法の網にかかった人で、問題は、法の網を潜って所謂「甘い汁」を吸い「甘い生活」を送っているエリートが多数いるという現実を見せつけられると、いかに要領よく生きて行くかという「テクニク」が目立ち、「額に汗して働く」という律儀な精神という日本古来の美しい姿が、また一つ消えていく淋しい思いをしている。

その上、悪いことに、サンプルとしての出世路線は、「学歴の差」「有名校の差」という、親達、大人達の誤解を生み、子供達の尻を叩いて、幼児教育より将来の出世路線に乗せるべく、金と労力を費しているという情けない現実を見せられると、哀れというほかはあるまい。昔と違って、頭の良い子が良い学校へ行くという事よりも、金のある家庭の子が良い学校へ行く、という弊害も生んでいることは、重ねて社会の不幸といわざるを得ない。政治家や役人がその地位を利用して、少しでも甘い汁を吸っている、などと市民の目に映ったならば、その国の「モラル」や「品格」はどうなっていくのだろうか。

マックスウェバーは、政治家は政治を自分の職業にするのには二つの道がある。政治の「ために」生きるか、あるいは、政治に「よって」生きるかである。もっぱら政治のために生き、政治によって生きていない人達が国家や政党を指導すると、どうしても、政治的指導層が、金権政治的に構成されることを意味する。と喝破している。

「ノブレスオブレッヂ」は洋の東西を問わず人の上に立つ者の心得としての金言である。

昔からの日本古来の言葉でいう「矜持」である。この矜持を持って生きるということは人間としての最低限の誇りというべきものである。この「きょうじ」という言葉も余り使われなくなり、殆んど「死語」となって通用しなくなっている。

昔の人が云う「上かみご一人から下しもご一人」迄字義通り、全体が一つに纏まって、清潔で誠実な社会を構築していく必要がある。

戦国時代の昔、他国から来た宣教師が本国に送った報告に、武士の時代で、国は乱れているが、日本人の国民性と勤勉性は稀に見るものがあると率直に書き送っている。

ことほど左様に、古来、日本人の持つ国民性は世界に誇るものとして受け継いで来た。ところが、経済は戦後の国土の荒廃からいち早く立ち直り、現在では世界第二位といわれる迄になった。一方、昔からあった日本古来の心の美しさと魂を忘れており、ある意味失ってしまった。今正に心の問題を問われているのである。

「昔のココロを取り戻そう」

経済は立ち直ったが、精神の墮落から立ち直っていない。経済社会が発達し、大きくなって「ココロ」より「カネ」が大事とした道徳心が欠落し、他人よりも自分が第一と考えることによって公共心の欠如への道を拡げていった。「モノ」への物欲の世界と「ココロ」の精神の世界の乖離が大きくなり、物欲に負けた。

戦後の精神的支柱は新憲法である。そしてその基本となっている「自由」「民主」「主権在民」は、戦時中の束縛から解放され、今迄に味わったことのない、伸々とした解放感で籠たががいつぱんに外れ、これが自由奔放、無責任となって、その風潮が社会に蔓延していった。この原因となつておもうのは、戦後の飢餓状態は、単に物質的飢餓と云うより、精神的モラルの退廃を生み、己が生きたために「他」を傷けるというサバイバルとなり、その精神状態を引きずって今日迄来てしまった。

同情的に見ても、先ず生きるために、食べるために何をするか、から始まって、物欲を満足させることを優先させた。このことにはある意味止むを得なかったと認めよう。それが戦後一二年経って、「もはや戦後ではない」といわれた昭和三〇年代、四〇年代の経済一筋の邁進は「経済大国」の称号と引き換えに、日本古来の精神的伝統文化を忘れ、喪失していった。

それ「葉隠れ」の武士道精神も、新渡戸稲造の犠牲と奉仕のキリスト教の精神も、忘れ物として置き去りにされている。もちろん仏教のもつ「慈悲」のことも、もはやない。

心の奥底に秘めた「惻隱の情」も「思いやりのこころ」も、人間らしい「情」や「ものとあわれ」の心象世界はどこへ行ってしまったのだろうか。金銭や経済的価値で計れる、目に見える「モノ」の量で、その人の挙げた功績として、その「果実」だけが、その人の成功の証しとしての「名声」として評価され成功者として祝福されている世の中である。

「一億総懺悔」という言葉があるが、国民一人ひとりが総反省する時に来ていると思う。

この根本的精神の側面に立ち入って、真正面から「精神構造改革」に取り組んでいかなければならない。最近、憲法改正と教育基本法の改正の問題が政治課題として取上げられている。いずれにしても精神論を強調してもらいたい。

要は世の中「金だけ」「モノだけ」が大事なのではない。人間として一番大事な「ココロ」の重要性を教えて、平和の尊さを教えるべきである。

経済の成長や進歩を図るのに数字を当てて計り、昔との比較や、他国との優劣を測っている。心の問題、「幸福」の問題はどのように計って比較しているのだろうか、幸福尺度をきめてもらい「しあわせ」の数値を出してもらいたい。

人間として生まれて来て、しあわせをどのように感じて生きているのか、精神的満足感充足感を図る「幸福感」の大小が人間の最大の「満足指数」ではないだろうか。これはなかなかむずかしい問題を含んでいる。順序は別として

① 健康の良否

② 政治の良否

③ 犯罪を反映した社会環境の安心感、不安感

④ 自然環境、地球環境の良否

⑤ 世界各地で起っている戦争と平和の良否

等々、これ等を全部シャッフルしたそれこそ「グローバルスタンダード」の数値を作成して算出し、理想の数値を出して、その目標に向って最大限の努力をする。日本も他の国々も同じ目標に向って競争することを考えただけでもなんと楽しい事ではないだろうか。

前章で、モラルハザードについて述べたが最近、これに対して「ガバナンス」とか「コンプライアンス」という一連の企業万能主義に対する反省が生まれ、新しい企業秩序が生まれようとしていることは、新しい社会への構造改革としての第一歩として希望の持てる「証し」として理解している。

今回のテーマで問われている「社会の安全と日本人の倫理」という大きな問題は、小手先の改革では決できない種々の問題を抱えている。

いふなれば、これから一〇〇年先、二〇〇年先の日本の明るい進路を示す羅針盤とならなければならぬ。それだけに、教育的、宗教的、哲学的なすべてを網羅したものでなければならず、しかし、それらを平易に噛み砕いて、子供から大人までのすべての人が理解できるように教えていくという、根気のいる作業を続けていかなければならない。

日本人が、何百年の昔から伝統として受け継ぎ、遺伝子として埋め込まれていた精神文化や精神風土が、

戦後のたった六〇年の間にはき違えた民主主義や自由の為に蹂躪されて来た。

この、忘れてきたものを思い出し、取り戻すために、これから、長い時間をかけて、努力、精進を続けなければならぬ。

その為に、利己的で、自由な身勝手な考え方を捨て、誰れからも侵されない「個人の尊厳」と「矜持」の確立、その為に克己、克苦の修養を積み、人に対して、愛情と慈悲の心を持った宗教心を養い、そして名誉を重んじ誇りとする精神、涵養の心、等々の研鑽を積みなければならぬ。

古風だがストイックな考え方と生活も取り入れて、日本人として、二一世紀の生活様式を構築していったほしい。

「グローバルスタンダード」という言葉は最近どうも気になる。それよりも気にくわないといった方が
良い。

この際、日本独自の、世界をリードするスタイルを編み出していきたいものである。

それも、明日からではなく今日から、家庭において、学校において、地域社会において、それぞれが、目ざめ、自覚するところから始めようではないか。

それが、明るい明日の社会へ向っての挑戦だから！！。

「日本人の倫理観 ～心の豊かさはどこへ～」

広島修道大学
人間環境学部人間環境学科3回生

向田 絵里 (20)

はじめに

「礼儀正しくて真面目、控えめでおとなしい…」これが、かつての日本人であり、また今でも海外の人で、日本人に対しこのようなイメージを持っている人は多い。

しかし、現在の日本では、まるでこの日本人像を覆すかのような痛ましい事件や社会問題が多発してお

り、街や学校、公共機関でのマナーの悪さも目立っている。

日本人の倫理観が乱れ始めたのは、戦後からだといわれている。戦後、人々は物質的な豊かさこそが幸せなのだと信じるようになった。それから、日本は物質主義的価値観になってしまい、人々の心も世間も乱れ始めたのだ。

しかし、なぜここまで、時代と共に人々の倫理観・道徳観はこれほどに変わってしまったのか。そうさせる環境やモノがあるのならば一体それは何なのか。

そして、変わってしまった日本をより良くするための策はどのようなことが挙げられるのだろうか。

私は、まず日本の現況を見ていき、そして現代の日本の家族関係、日本文化を見つめ直すことなどを心に考察していきたい。

一 日本人がなくしたもの／目に見えないものを信じる心

かつての日本人は、自然の力、神秘など目に見えないものを信じる心を持っていた。それが、戦争により、人々は愛する人や信じてきた風習など多くのものを失ってしまった。人間というのは、大切なものを失った時、これから何を信じてゆけばいいのか、信じられるのか、わからなくなってしまう。

戦後を生き抜くためには、とりあえず目に見える物質を追い求めなければならなくなった。やがて、高度経済成長期を経て、日本はアメリカに続く経済大国へと成長を遂げた。このころから、幸せとは、物質的な豊かさにあるのだという考えが人々の心に刻み込まれ、確信されていくこととなった。

目に見えないものを信じる心が風化されるということは、やさしさを失ってしまうことに値しないだろうか。やさしさを失うことは、他者への配慮が欠けるということ、つまり、現代の日本の社会問題の要因はそこにあるのだろう。

二 変わってゆく社会環境

(一) 日本人のモラル低下による事件の多発

現代の痛ましい事件や、ごみのポイ捨て、不法投棄など、若者に限らず日本人のマナーの悪さの背景には、あまりにも身勝手な動機や、思いやり・やさしさを失った精神から起きているものが多い。

モラル低下による事件には次のようなものが挙げられる。

① 子どもをねらう犯罪

自分のストレス発散や欲望を満たすために弱い者を標的にする。いわゆる、自己中心的な考えからくる犯罪。

② 子どもが子どもを殺す事件

怒りのコントロールが出来なくなり、怒りと殺意がイコールになってしまう。また、ゲーム感覚によるものも多く見られる。他人の気持ちになって考えること、思いやりをもつことの喪失からきている。

③ お金欲しさのためには他者も自分も傷つける

モノやお金へのこだわりからくる犯罪には、振り込め詐欺や援助交際などが挙げられる。物質として、

自分の手に入るものに愛着を覚え満足するようになったのは、現代の日本にモノが溢れかえっているからなのだろうか。

ここでは③に着目し、考察していきたい。

出会い系サイトから生まれる犯罪が後を絶たない。なぜ、これほどまでに「出会い系サイトは危険である」と社会が叫んでいるにも関わらず、少女たちは平然とサイトにつながるのだろうか。彼女たちは、自らがサイトにつなぎ、犯罪に巻き込まれてもあくまで「被害者」なのである。もちろん、加害者となった大人側に責任が課されるのは当然であるが、お金欲しさに自分を売り、手に入ったお金で好きなものを買うなどして欲求を満たす。そして、そのことがバレた時、彼女たちは被害者となり、保護されるのである。これこそが、出会い系サイトが絡んだ事件が一向に減らない要因のひとつではないだろうか。

私は、自らが犯罪に向かって歩く彼女たちも、ある意味、加害者に思えてならない。

売春を繰り返す彼女たちは、自分をモノとして見ているのだろうか。出会い系サイトと、言葉はロマチックに聞こえるかも知れないが、ようは立派な犯罪なのだ、児童売春だ。自分がすり減るようなことはするものじゃないよ。そう言える親や大人が必要不可欠だと感じる。

(二) ひとりで生きてゆける時代なのか

他者を理由もなく、または些細なことで傷つける事件が多発している。これは思いやる心を失い、感謝することを忘れてることから起きている。では、他者と関わることを避け、自分ひとりで生きてゆけるのだろうか。

インターネットで、仕事も買い物もゲームもメールも何でも出来る。ネットで遊ぶ中でストレスが溜まれば、掲示板の書き込みでストレス発散をする。または、ネットゲームでストレス発散することも可能だ。ここまで来れば、「今の世の中、社会と関わりなくともインターネットさえあればひとりで生きられる時代になった」と感じる人が出てくると思う。

しかし、物理的にはひとりで生きてゆくことは可能でも、精神的にはどうだろうか。人は誰でも、心を許すことの出来る相手を求める。これは人間が生まれながらに持つ心理なのだ。チャットのような架空の人ではなく、現実に信頼出来る人がいることが大切なのである。チャットでは、自分の都合で切ることがいつでも可能なのである。相手に切られた時の、喪失感は計り知れないものであろう。画面と向き合いながら生きるには限界がありそうだ。

それに、今着ている服も、食べている食物も、使っているペンも、自分の知らないところで知らない誰かが一生懸命作ってくれているのだ。だから、人間は決してひとりでは生きてゆけないのだ。何気なく着る服、そこにあるペン、どれも人が一生懸命に作り上げたものなのだ。そのことに、感謝して生きていくことが人間として大切なのだと思う。

(三) おかしな平等

最近、教師への成績表を生徒がつけるというシステムを導入した学校が目立ってきた。

学力低下の問題や、よりよい学級・授業の構築を目指しているのだろう。生徒につけられた成績表を目にする教師も、成績表をプラスにとらえ、課題となったところは改善するよう努め、良いところはさらに

伸ばそうと努力するのも知れない。

こうして、教師と生徒が互いに良い影響を与え合うのなら、教師への成績表というのも有りなのだろう。もし、生徒も教師から成績をつけられるのだから、生徒からも教師に成績をとというのなら話しは変わってくると思う。なぜなら、教師と生徒という上下関係を横の関係にしようという考えは無理があると考えられているからだ。世の中には、親と子、教師と生徒、などという縦の関係は必ず存在するし、なくてはならないものである。養育―被養育の縦の関係、仲間同士の横の関係、おじ・おばや近所のおじさん・おばさんとの斜めの関係、この3つの関係が揃って人間関係が成り立つのだ。

こうした関係があるからこそ、目上の人には敬語を使うこと、人生の先輩に物事を教えて頂いたら感謝すること、などを自然と身に付けていくのだ。これこそ、日本人の倫理観ではないだろうか。

(四) 責任のなすりあい

登下校中に子どもの命が奪われる事件が多発している。

文部科学省は、登下校時に地域の防犯ボランティア団体などの協力を得て、学校内外のパトロールを強化するように都道府県教委に通知をした。このような国からの指導もあり、地域の人々は子どもを守るためにボランティア活動を積極的に行き、幼い子どもをもつ家庭からは頼りにされている。

しかし、ボランティア活動だけでは限界がある、との報告も少しずつ耳にするようになった。確かに、心優しい地域の人々に保護者は頼りすぎている気がする。「子どもは地域で守る」と強く言われ過ぎて、家庭や保護者は甘えているのではないかと感じる。仕事と子ども、どちらを優先するべきなのか、今一度考

え直すことが必要なのかも知れない。

地域も社会も積極的に動き始めている。そこに家庭が入れば、より心強い日本社会に変わってゆくのではないだろうか。

今日の日本は、何か事件や事故が起こるたび、学校の責任だ、政府は何をしている、などと責任転嫁をする風潮が高まっている。学校も政府も所属しているところは皆同じ、社会である。そして、そこに生きているのは私たち。社会に責任を押しつけていても、その社会は私たち人間で成り立っているのだから、結局、自分にも責任は少なからずあるということを、しっかりと心に留めておかなければならない。

責任のなすりあいをしていても、何も変わらないし、家で大人が責任はどこにあるのかを延々と話している姿は、子どもの目にどう映るのだろうか。

三 倫理観、道徳観の原型となる家族の在り方

生まれてきた人間は、まず最初に家庭というひとつの空間のなかで人格が形成される。後に、地域に触れ、学校に入り、社会と関わる。社会と関わる中で個人が受ける影響は大きいが、その基盤となっているものは、やはり自分の家庭環境ではないかと感じる。

より良い社会を実現するためには、家庭環境、家庭での教育が今の日本には一番大切であり、現代の社会問題の解決策のひとつであると考ええる。

社会規範・道徳・マナーを子ども達に伝えることの出来る家庭環境は守られているのだろうか。

(一) 母親からの愛情

最近の家庭環境においては、個人の生活を重視し、家族という集団意識が薄れてきている。

その意識変化のひとつとして、女性の社会進出が挙げられると思う。現代の日本は、女性の社会進出により、社会がより活気に溢れている。しかしその一方で、母親と共に過ごす時間が減少し、家庭で孤立している子どもたちが多くいることを忘れてはならない。私自身、この現実は大きな問題だと受け止める。

なぜなら、生まれてきた子どもが一番最初に人間関係を持つのは、母親との二者関係である。その二者関係が始まる瞬間に、母と子が離れて生活している家庭が多いからだ。

テレビやニュースでよく耳にする言葉がある。「子どもが一歳になれば保育園へ」「子どもがいるから働けない」：子どもを抱きながら、こういった言葉を簡単にカメラに向かい発する女性の姿を目にするが、とてもさみしい光景に思えてならない。今ではごく普通に耳にする言葉となり、すんなりと頭に入ってきてしまう。

しかし、それはとても虚しいことである。子どもは愛されるためにこの世に生まれてきたはずである。「いつも子どもと一緒にいることだけが愛情の形ではない。愛情の形は様々である」と言われればそれまでだが、小さな子どもに目に見えない愛情を受け止めて欲しい、と言う方が無茶な話である。

母親との安心感・一体感の体験が十分に得られなければ、人格の核がもろくなってしまふといわれている。だから、私は母子関係こそが、子どもの心を豊かなものにする第一歩だと思っている。

(二) 団欒が与えてくれるもの

両親の共働き、子どもの夜遅くまである塾…など理由は様々だが、家庭の団欒が次第になくなり始めている。

親も子どもも、日中、外では多くのストレスにさらされている。そのストレスを直接言葉にして家族に話さなくても、団欒という時間が少しでも持てるのであれば、そこで張りつめた気持ちを和らげることができるのではないだろうか。

しかし、今の世の中についていくためには、今の生活をがらりと変え、昔のように戻すのは大変困難なことと思われる。生活を変えることに意識を集中させなくても、出来るだけ夕食は家族全員で食べよう、週に何回かは家族の団欒の時間を作ろう、と心がけ、短い時間でもその時間を充実させていくことが家族間でゆとりを生むことにつながるのだと思う。

特別なことをするわけではないが、団欒には人の心を和らげる、そんな力があると私は信じている。

(三) 食事と子ども

二〇〇四年五月一三日(木)の中国新聞で、とても関心深い記事を目にした。

一九八〇年代に米国カリフォルニア州立大学スタニスラウス校の社会学者ステファン・シヨーエントラー博士が少年犯罪と食生活との関連について調査・実験を行い、驚くべき結果報告を行ったというものであった。

バージニア州の少年院に収容されている三〇〇人余の少年の食事を調べ、その内容を変えたという。砂

糖や添加物の多い炭酸飲料水を果汁一〇〇%に変え、デザートも砂糖や脂肪、添加物の多いものを、新鮮な果物、ナッツ、チーズなどとした。

その結果、少年院内の暴力、けんか、いじめ、看守に反抗などの発生が四八%余も減少したというのだ。朝食の欠食や食事のスナック化などにより、いらいらしたり、授業に集中できなかったりと食事内容により心も身体も乱れている子どもが多い。このようなことが、日本の子どもの食事状況でも、頻繁にいわれている。

食事というのは、単に空腹を満たし、おいしいもの好きなものを食べることで満足させる役目だけではない事を改めて考えさせられた。

母親が作る食事には子どもを思う愛情がしっかりと入っている。それを直接口にする子どもは、無意識に近いかも知れないがしっかりと母親の愛情を受け取っている。食事という親子のコミュニケーションも美しい。

四 癒しを求める日本人

ここ数年間、癒しという言葉が街やテレビ、雑誌などいろいろな場所で飛び交っている。それも、絵画、音楽、アロマセラピー、森林浴など、人間の五感を使ってやすらぎを求める傾向が見られる。これほどに、癒しグッズや空間が人気なのは、現代の日本人が心身共に疲れている証拠である。

「最近の子どもは変わった」「最近の若者は何をするかわからない」などと言われるが、そう言われてい

る人も言っている人も同じように癒しを求めていることがわかる。

おわりに　　く昔の日本から教わることく

日本人の道徳観は人間関係に対する見方が大部分を占めている。かつての日本人は「義理」や「人情」深く、誠実な人柄だった。特に、集団や組織の一員であるという自覚が強く、集団の規律は守らなければならぬという意識が強かったという。

それが、終戦を迎えたころから物質主義になってしまった。人々は、戦争でかけがえのないものを、たくさん失ってきた。その虚しさを抱えながらも、復興を目標に一生懸命働いた。戦後の約一〇年で日本は見事に経済的復興を遂げ、高度経済成長期を迎えた。

焼け野原を目の当たりにした人々は、その直後に高度経済成長期に入ったことにより、幸せは物質的な豊かさにあるのだと信じた。その考えは、今日に至るまで続いている。

私たちは、物質的な豊かさの幸せはもう十分に実感している。現代は、モノやお金にこだわるがゆえに、かつての日本人の道徳観である「思いやり精神」を忘れて他者を傷つけたり、社会の秩序を乱すようなことを繰り返している。

今、ここで必要なのは、戦前の日本人の感性ではないだろうか。目に見えないものを信じてきた時代から学ぶべきものは多いであろう。

日本独自の風習や教訓、しきたりや言葉遣いなどかつての日本文化を今一度振り返り、大切にすること

は、ゆとりある生活に結びつくのではないだろうか。ゆとりが持てるということは、自分を見つめ、他者を見つめることにつながる。他者を見つめるということは、その人の気持ちを理解しようとする姿勢である。

今、日本で起きている身勝手な行動や、モラル低下に歯止めをかけるための解決策のひとつにはこうした姿勢で生活することが求められる。そして、思いやりの心や人を敬う心、反省の心などは、まず家庭から子どもたちに伝えていくべきだと改めて感じた。

私は、さまざまな事件や事故、問題が起きている今日を振り返ると、かつての日本を見つめ直しなさいというメッセージが込められているように思えてならない。

日本の教育機関では、アメリカをはじめ、諸外国の文化や歴史を取り入れようとする動きがよく見られるが、もっと日本文化を大切にすべきである。とはいえ、社会の波に流されそうになっても、日本人である限り、誰でも心の片隅には日本人の心を持っているであろう。日本特有の文化には、美しいものがあるから、日本人として生まれてきたことに誇りをもって生きていきたい。

最後に、二〇〇六年九月六日（水）に秋篠宮家に男のお子様が生誕された。日本中の国民がひとつの命の誕生に心から喜び、祝福の気持ちでひとつとなった。命の誕生とは、人々に喜びと希望を与えてくれるとても神秘的なことなのだ、改めて教えて頂いた。

参考文献

『子どもが危ない！』江原啓之、集英社、二〇〇四。
『いま、なぜ、道徳なのか』小野健知、大明堂、一九九五。

『社会の安全と日本人の倫理をいかに考えるか』

一 社会の現状『何に不安を感じるか』

(一) 凶悪犯罪は増えたのか

テレビでは、今年度に入り捜査本部をおく凶悪犯罪の発生はあまりないとの報道です。しかし親子関係の崩壊とでも言うような、秋田県の母親による娘殺害と隣の幼児殺害事件、奈良県の高校生による母と弟

無職

山田 一郎 (58)

妹放火殺害事件、稚内の母親を友人に依頼しての殺害事件、その他親子間の傷害事件は数がありません。多くが少年による犯罪である事も恐ろしい時代がきたと暗澹とさせられます。

(二) 頭から腐ってきた社会

殺人については、誰もがそのような事はすべきではないと判断します。犯人の多くも、とんでもない事をしたと発言いたします。しかし、次に列挙する事件は殺人事件とは別の意味で世間の耳目を集め、毎日毎日の報道から恐ろしい悪影響をまき散らします。

時代の寵児として「違法でなければ何でもできる」と豪語した勝ち組の象徴から、自分が経営するライブドアの粉飾決算により証券取引法違反の罪に問われ、被告の座に転落した堀江貴文被告。大型経済事件として初めて公判前整理手続きが適用される裁判の行方を追うこれからの半年、テレビ視聴者は裁判に勝てるか勝てないかというゲーム感覚を刺激され、検察と対決する英雄と若者が錯覚しかねない悪影響は計り知れません。

立教大学が今年、学生七〇〇人に尊敬する起業家を書かせたところ、松下幸之助、孫正義、ビル・ゲイツに次いで四位に堀江被告が入っています。「時代に風穴をあけてすごい」「インサイダー取引が問題というが、早く情報を仕入れるのも能力のうち」という意見も聞かれます。若者の正義感は何処に行ったのでしょうか。

もう一人の寵児は旧通産省の元官僚であり、インサイダー取引事件で証券取引法違反罪で起訴された村上世彰被告。こちらにも具体的な裁判開始となれば、堀江被告の裁判と同様な報道合戦が繰り広げられる事

でしょう。

これに関わって日本銀行の福井俊彦総裁が村上ファンドに資金を拠出して多額の利益を得ていた事が判明しました。通貨の番人としての、その発言は庶民感覚から外れ、道義的責任を回避し、誇りも矜持もなくその地位に居続ける見識のなさを残念に思います。

ずるい方法や見つからなければ何でもするというような商売は絶対しない。自分よし、相手よし、世間よしの三方よしの精神で頑張るのが、近江商人だけでなく、日本の商人「あきんど」の道だったのではないのでしょうか。拝金主義が蔓延しています。

平成八年に初めて摘発され、平成九年全国市民オンブズマン連絡会議の調査では二五都道府県が認めた裏金作り問題。その後一二年間に渡り総額一七億円の裏金を作り、処分に困ればその公金の一部をも焼却した岐阜県。前知事や前副知事から多くの県幹部職員が関与し、前副知事の一人は現職の参議院議員です。県職員の組織ぐるみの事件です。しかも、OBの中には時効により摘発追及されない人もいます。事件としてはこの他、詐欺事件に発展した耐震強度偽装事件。金融庁が監査法人に対し監査業務の一部停止処分を出したカネボウの粉飾決算事件、大学教授が国の研究費を不正受給していた事件。

国の安全を脅かすような事件としては、精密測定機器メーカーのミットヨによる外為法違反事件、ヤマハ発動機の無人ヘリコプター不正輸出事件等。

関係者の多くは高学歴であり、公認会計士、大学教授という社会的にも大変高い評価の方達もおります。日本の社会は頭から腐ってきているのではないかと思えます。

(三) 脅かされる安全と権利

神戸近郊の須磨海岸、御前浜、甲子園浜海岸では毎年五月から年末にかけて「花火族」が深夜零時過ぎでもロケット花火などを打ち上げています。家族連れもあり、ひどい時には海ではなく、建物を標的に打ちはじめのです。地域住民にとって迷惑を通り越して、危険の上もあります。須磨海岸では既に二〇年との事。東京の多摩川では電車に向けて花火を打つ光景がテレビに出ました。条例はまったく機能していません。

今年五月、平成一二年に起きた東京都世田谷区の一家四人殺害事件の捜査担当官が事件当時、周辺住民からの聞き取りについて四三人分の捜査報告書をでっち上げ虚偽有印公文書作成容疑で書類送検されました。他でも捜査の捏造や手抜きがあるのでと心配です。

飲酒運転に甘い社会体質は、未だに改善されず、福岡市職員が飲酒運転で追突し、幼児三人を死亡させる事件が発生しました。交通事故ではありません。これは殺人事件です。飲酒運転したら懲戒免職するという罰則規定の見直しだけでなく、飲酒しての死亡事故の場合は殺人事件としなければ、摘発件数一四万件にのぼる飲酒運転は減少しません。

この夏、京都市の下水道に、もしも成獣なら二メートルにもなる、今回は五〇センチ程のミズオオトカゲが発見され、三日間の捕物騒動が報道されました。下水道に捨てられ、成長した大ワニが人間を襲うアメリカ映画を思い出します。

困った事に、日本の在来種ではないカミツキガメが増殖しています。現在この種は許可がなければ飼育

出来ず、譲渡禁止です。過去に捨てられた数は全国で数万匹、今年は既に、上野公園の不忍池、町田市内の公園でもカミツキガメと見られる大型カメの産卵や姿が見つかっています。印旛沼では、今年環境省の出先機関が既に一、〇〇〇匹を超すと予想されるこのカメの駆除に乗り出しました。天敵なく、完全駆除には数年かかるそうです。

ペットを捨てる飼主は明らかに事故や事件につながる（姿なき）加害者です。

日本は海に囲まれ、海水浴だけでなく、四季いろいろな楽しみを求め海浜に集います。そこで釣糸をたれる限りは問題ないのですが、水中眼鏡をかけ、専用のスーツを身につけたレジャーと実益を兼ねての密漁者が後を絶ちません。「一般人による漁は禁止と掲示されていますが」と向けたマイクとのやりとりから、採る事はまずい事を知っていました。軽い気持で、しかし毎年数回は採り（盗り）に来るとの事です。仲間とくるだけではなく、子供連れでやってくる人達もいます。

全国の海浜と海上、河川、湖沼には必ず漁業権が設定されており、地元漁師は海浜を清掃し、稚貝や稚魚を放流し、更に一定サイズに達しない獲物は放して、その資源の確保に努力しています。レジャーという軽い気持ちでの違法行為は例年一、四〇〇件前後摘発され、一か所で年間三〜四千万円の損害が出ているとの報道でした。漁業権は所有権と同じ物権であり、他人の生活基盤をおびやかす、その権利を侵害する犯罪行為に変わりありません。

二 モラル崩壊の原因

(一) 見えない社会

種々の事件を報じるテレビの画面、インタビュールされてるモザイク模様の顔、首から下だけを写し出し、音声も変え、いかにも個人の安全と保護を図っているように見えます。確かに北朝鮮からの脱北者の場合ならば、顔を隠して身の安全を保つ事も必要でしょうが、一般的な報道ではグロテスクな感じを拭きません。

五〇年前には東京都内でも向う三軒両隣はしっかり存在していました。町々に銭湯もありました。家庭でおかずを沢山作った時などは、おすそわけに子供が大皿に盛ったお菜を届けに行ったものです。塀に囲まれたお屋敷はありましたが、多くの家庭は外から容易に見る事が出来ました。親に怒られている子供の姿も当然見たり見られたりでした。そこかしこに家庭と世間が存在していたのです。現在はどうでしょうか、以前のように向う三軒両隣の風景を見付けるのは困難になりました。世間というものがなくなりました。

平成一六年三月末の住民基本台帳人口要覧から、人口が二〇万人以上居住する一〇四の都市と、人口一〇万人以上(二〇万人未満)の一二〇の都市人口の合計は約七、六八四万人となり、実に六〇・六%の人口が集中しています。その他の都市からの通勤通学人口を勘案すれば、日本人口のほとんどが都会生活者であり、農村山村漁村の人口は僅かです。都会の華やかさに対する田舎の素朴というような区別はもはや

出来ません。

玄関のガラス戸一枚が世間と家庭を隔ててるものではなかった時代から、頑丈なマンションの戸一枚で完全に遮断されてしまう社会構造となりました。壁と塀に囲まれた都会のマンションや住宅の中を伺う事は出来ません。何をしても何をされても密室の世界となりました。車社会とメディアが更に拍車を加え、顔も見えない、声も聞こえない、排他的な社会、隣は何をする人なのかまったく分かりません。「世間」に対し「世間が立たない」「世間体が悪い」等々、日本人の生活を律してきた「世間」という枠組みはなくなりました。

意識と環境の点で五〇年前とは完全に世の中は変わり、倫理観というものも大きく変化したと考えられます。

(二) 日本を崩すもの、それは親

① 児童虐待する親

警察庁のまとめでは、今年上半年期の児童虐待事件の摘発件数は過去最多の二二〇件、死亡事件も二年連続増加。内訳は身体的な虐待八六件、性的虐待二三件、育児拒否一一件。罪種別に見ると傷害五九件、殺人二二件、保護責任者遺棄一〇件、児童福祉法違反九件。

加害者が実父母八四人、養継父、内縁の父合計で四一人。死亡事件は平成一六年の一九件から二年連続増加、今年は二六件死亡は二八人。表に出ない悲惨状況は何倍でしょう。

② 学校を荒らす親

ある日、次の新聞記事を読み愕然としました。

- ・担任の言動に不信感を抱いた末に教室に盗聴器を仕掛けた親。
- ・担任を数人の親が取り囲み、数時間責め続けた後「この場ですぐに辞表を書け」とすごんだ親。
- ・子が叱られた事を根に持ち、「あの先生は嘘つきだから言う事をきかなくていいわよ」と吹き込んで子供を煽り、学級崩壊させた親。

・授業参観中、隣の親と大声で話し続けたうえに、みかねた教師に指摘されると逆ギレ、授業を中断させて教師に喧嘩を売った親。

「担任を変えろ、辞めさせろ」といった親のクレームはもはやどの地域でも珍しくないと続いています。親を再教育する学校が必要です。

食育基本法が制定され、食事の大切さが強調される一方、意図的な給食費滞納者が急増するという宇都宮市での調査記事がありました。高額とはいえない金額を金融機関の指定口座に入金しないそうです。支払いを督促すると「支払わなくても給食を止められたことがない」「学校が勝手に給食を提供している」との答えです。同様な事は各地に起きており、一部の親の規範意識の希薄さのために、重要な教育の場面が歪められ、さらに子供達が「払わなくて食べる事ができるのなら得してる」という誤った考えを持つ事を止める事は出来ません。

ある日の朝刊。九月一日防災の日、その子の小学校は、親達が子供を引取り下校する「引取り訓練」を

実施しました。待機する親達のおしゃべりの話し声が教室にまで響き、担任の説明がまったく聞こえなかったそうです。「本日の災害が起きた時、一体どうなるのでしょうか。親達は訓練をなめていると思います」と一歳の投書は終わっていました。

親が、子供と社会の将来を悪くする大きな原因であると言って過言ではありません。

(三) 価値観の変化

電通総研の「価値観国際比較調査」や、米国ミシガン大学が中心に実施した「世界価値観調査」から、なお日本における中流意識は八割に近いものの、貧富の差が少ない社会が望ましいとする割合は年々減少し、成果に応じて分配される社会が望ましいとする割合が上昇している事が伺えます。

又、日本はアジアの儒教文化圏にありながら、「子は常に親を愛し、敬わなければならない」とする孝行息子(娘)比率は、七三カ国中六二位と出ております。高い社会福祉制度で守られるものの、下の世代から厳しい評価をされる社会に変化しています。長生きは幸福なのかどうか、働き盛りや若い世代の目には、高齢化社会必ずしも幸福には映っていないのが現実なのでしょう。

国土の狭い日本では、初等中等教育が徹底され、社会資本の整備や物資の流通も、国の端々まで行き渡るようになり、単に生命をつなぐ生活ならば可能です。その結果、世代間それぞれが持つ価値観に変化が生じ、格差社会の到来ではなく、新しい社会への変化の胎動が始まっているものと考えます。

三 何処から取組むか

(一) 法務大臣はきちんと仕事をして下さい

法務省の統計によると、未執行の死刑確定者が平成一八年七月現在八八人となり、更に上告中の五四人の裁判結果次第では、未執行の死刑確定者は近い将来一〇〇人を突破するのが確実な情勢です。刑事訴訟法では「死刑は確定後六カ月以内に執行しなければならない」と定められています。被害者家族の加害者への報復、死刑を禁止している以上、検察官が死刑を求刑し、裁判所が判決を出したならば、国家が法律どおりに淡々と代理執行しなければ、その禁止を担保した事にはなりません。法務行政の怠慢であり、このような姿勢では凶悪犯罪を抑えていきません。

死刑判決は出ておりませんが、山口県光市で七年前に起きた母子殺害事件の遺族である夫は、被告が社会復帰した場合には、自ら報復すると語っています。

(二) 教育の重要性

① 家庭教育

戦後の「自由」「個性」という言葉が、ややもすると、思いやりのない、他人との距離を図る事の出来ない自分勝手な人間を作ってしまった。

自分の方からあいさつをする事ひとつ取ってみても、子は親の行動から学びます。家庭で親自身が意識して躱ける事が必要です。着飾っていても食事の箸使いすら教える事が出来ない親が現実におり、家庭で

何をどこから何処まで教えておくのかを考えている親は多くはおりませんが、「あいさつ」「我慢」「他人のものを盗らない」「嘘をつかない」「他人に迷惑をかけない」等、世間と本人との関係を教える家庭教育は何時の時代でも親の責任です。

②教師の成果主義の再検討

ここ数年全国で導入され始めた教員の人事考課制度があります。この制度には疑問を感じます。公教育は国家社会形成の基礎部分です。企業でも、導入したものの必ずしも成功しているとは言い難い成果主義を、教育の世界に持込むのは大変危険に思います。

文部科学省の平成一七年度のまとめで、全国の公立小学校の児童が教師にふるった暴力は、一七年度は前年度比四六四件（三八％）増にのぼり、三年前から急激な増加傾向となっています。器物損壊を含めた校内暴力の件数二、〇一八件も三年連続で増加し、最悪を更新中です。（我慢できない）感情を抑えられない児童が増えていると出ています。

学校とは教育の場であって、サービス提供の場ではありません。日常の努力もせずに一定基準を超える事の出来ない生徒には、小中学生といえども落第させる制度の導入、観察の結果、受講態度に問題のある生徒は、教育委員会が親に対して、本人に問題ありと勧告する制度、意欲ある教師と良識ある親にとっての教育環境を取り戻す体制を改編整備した上で、教職員の人事考課制度を検討するのが順序ではないかと思えます。

③小中学校の校長先生にお願い

小中学校には独自の校歌があります。その歌には子供達への期待や生活態度の在り方等が込められています。

小学校なら一〇歳となる四年生程度に、校長先生みずから平易な言葉で校歌の歌詞一節一節を利用してお話をして下さい。明るく元気に頑張ろうとか、互いに助け合うというような字句の説明だけではなく、必要な行動を教えていただきたいのです。教師の代表である校長先生みずから担当している学校への熱意を子供達に伝えて下さい。

中学校ならば一年生に校長先生から校歌の一節一節をお話し下さい。講義をノートに取らせる必要はありません。趣旨は小学校と同じです。

④高校での倫理教育、近現代史教育の徹底

西洋近代文明社会の発展を顧みると、教会の圧力とキリスト教のくびきから開放され、観察・実験・研究による学問と発表の自由を勝ち取ったのはせいぜい一五〇年前です。

そして現代においてすら、欧米のキリスト教、中近東のイスラム教等、世界各国のそれぞれの社会には宗教がなお生活の中に浸透しています。きっと日本だけが、宗教により生活を律する事のない社会と思いません。それであればこそ、日本人は「倫理」をもって自らを律していかなければ、この日本社会は成立致しません。

高校の倫理教育は必修とし、偉人伝や英雄伝を採用して下さい。又さらに加えて、大東亜戦争における

一〇代の特攻隊兵士が出撃前夜に親へ書き残した手紙も、一つの立派な教材になります。特攻隊の兵士も、手紙を読む高校生も一〇代です。現在の私どもが命の大切さを口酸っぱく語るより、生死の境に直面したこの教材の方が十二分に語ってくれると信じます。日本にとってあの戦争は既に歴史の範疇に入っており、何か思想的偏向教育や悪しきナシヨナリズムに加担する危険はありません。

なぜなら、テレビでは、九月一日が近付くと、アメリカ同時多発テロの犠牲者が現場から助けを呼びながら死んでいく電話での肉声の放送や、逆にテロリストの訓練の肉声まで放送するのですから、特攻隊の話から、悪影響が発生するとは考えられません。

偉人伝や英雄伝を読むという事は、その疑似体験を通じて、人としての生き方や人生の岐路に立たされた時に自分ならばどのような道を選択するかを考えさせるものです。

P T A の授業参観日には、校長先生から参加の父兄に対して、進学状況だけではなく、その時々の倫理教育の内容と学校の現状について、しっかり時間を取って説明して下さい。

自国の歴史を選択制にする国が、何処にあるのでしょうか。しかも、小中学校での社会科の日本史では、近現代の部分は学年末の時間切れのために、まったく不十分と思います。高校生には近現代史を必須として教育して下さい。

⑤倫理観は定着するか

「なぜ人を殺してはいけないのか」、この問題は大変難しく、単に人の命は大切だと言うだけでは埒は開きません。言葉で説明するにはなかなか難しい問題です。今は「ダメな事はダメ」としか説明出来ません。

人間は過剰な生命力や物欲をもって活動し、そして、その過剰な生命力によって道を誤る動物かもしれない。

金銭や財物のように形あるものや、その作り方の技術を、親から子に、子から孫へと誰でも、一定の手続きを経て相続する事は可能です。しかし、倫理観や思想という形なきものを人から人へ相続する事は出来ません。子供も大人も倫理観や道徳観を始めから持ち合わせて生まれてくるわけではありません。倫理観は自然の中に存在するものでもありません。

幼少時からの教（おしえ）育（はぐくむ）という課程を通して、その心の中に、正邪を峻別する「倫理観」と「自発の意志」を薄皮を重ねるように地道に積み重ねていくしかありません。すぐ結果や効果が出てくるわけではありませんが、日本人の心を正すという点から、悪い事は悪い、ずるい事はずるいと明言していかねばならないと思います。

全国の児童・生徒八万七、四四七人を対象にした、金融広報中央委員会の調査結果では、高校生の三〇%、中学生の二六%、小学校低学年で二五%が「お金が一番大切」と回答しました。高校生の九〇%、中学生の八八%、小学校低学年で七四%が「お金を沢山貯めたい」とも答えております。もちろん、多くの小中高生が「お金より大事なものがある」と答えてはいます。しかし、この結果と今まで述べてきた事を比較考量いたしますと、倫理の心を植え付ける事が日本の社会の再構築にとって最重要と思えてなりません。

(三) 小さな芽を摘むⅡPTAと警察、そしてNPO活動の連携

かつて世界一危険な街と言われたニューヨークでは、特に軽微な違反を厳しく取り締まる方針が重大な犯罪の芽を摘む効果があつたと言われ、犯罪が劇的に減少したというニュースや記事を見ます。

非行の芽を早期に摘む事が重要であるとして、東京都内・都下の各警察署は管轄の中学校を中心に、生徒には犯罪の被害防止、保護者には非行防止の観点で恒常的に講習会を開催しています。私も一度参加しました。万引きと自転車を盗む事が、初めに手を染める犯罪への入り口であるという事が繰り返し話されました。

続いてNPO法人日本ガーディアン・エンジェルズから、都内繁華街で実際に活動している説明を拝聴しました。何の権限もないのに、四人一組となり、深夜たむろする青少年に「(あいさつ) 言葉をかける」事から始めて、帰宅を促していく、全国二四支部で二五〇人が実際の活動をしているとの事です。各地でも多くの団体・個人が具体的な取り組みをしていると思います。国や地方行政が上から号令を掛けたからといって、成功するものではありません。教育現場、活動中の団体、志を持つ個人が地道に、街頭活動とPTAなどへの広報といった活動を継続する事が大変重要な事だと教えていただきました。

ただ、父親の姿が見えません。日本の社会では、家庭とか学校に、まだまだ父親が関わる時間・割合は少ないのかと本当に心配になりました。

(四) 自発の意志

欧米では今でもキリスト教の教会に礼拝に行くとか、中近東ではイスラム教の寺院に直接出向くだけで

はなく、時間がくると聖地の方向にひざまずいて祈り始めるといふ光景を、テレビ報道や写真でよく目にいたします。懺悔にまで至らずとも、神に祈る行為によって、人々は生きていくために（心ならずも）日常生活や仕事で汚した、自分の心のハンカチを洗っているのかもしれない。残念ながら現在の日本には、自分を見つめる、見つめ直すという仕組が生活の中ありません。倫理教育を通して自発の意志を醸成し、一人から出発して、実際の集団行動にまで昇華させていく方法しか残されていないと思います。

① だれでも出来る地域住民としての協力

女子大生身の代金要求誘拐事件や、岩手県母娘殺害事件の犯人逮捕の手掛かりは、いずれも通行人や近所の人が目撃したナンバーを控え、記憶していた結果です。警察も匿名情報を受け付ける方針に変更しています。「もしかしたら」「ひょっとしたら」の気持を持って地元住民が自発的に警察に協力する事が、公的懸賞金の導入以上に重要だと思えます。

② 個人の活動

私は自転車での外出時に、空き缶やミニボトルを拾う事に行っています。自分の家の前で放る人はいませんが、人の目がなければ、小中学校の前でも平気で投げ捨てていきます。二日に一回平均九個拾っており、ある日の早朝ビールの空き缶二個とミルクコーヒの紙パックを発見しました。残りがあるので逆様にしたところ、夏の炎天下に一昼夜放置されていたので、凄まじい悪臭がたち嘔吐しそうになりました。本当に腹の立つ気分で、なぜ私がこんな事をしているのだと八つ当たりしたくなりました。その時私の目の前を、散歩の途中と思われる初老の方が道具を持ち、黙々と吸い殻や投げ捨てられたゴミを拾いながら

向こうに歩いて行かれました。私はその姿を見て（自分を）笑ってしまいました。私は偽善の心で拾っていたのです。それ以来、自然な気持ちで拾うようになりました。

その後、住宅街を、同じように長い道具と袋を持ち、吸い殻やゴミを拾いながら散歩しておられる、還暦を過ぎた別の方を発見しました。自発の意志をもって行動する人が現におられる事を確信いたしました。

「伝統的日本人の倫理観」を取り戻す

警察官（山形県酒田警察署）

横倉 友裕（36）

序「おかしく」なってきた日本

最近「日本がおかしくなってきた」ということを良く耳にする。国益や公益を考えない無責任な政治家や役人、「名より実」儲け主義の企業、権利は声高に主張するが義務を果たすことは嫌がる労働者、自己中心的ですぐにキレル若者など、日本の至るところで見受けられる。公の喪失、道徳心や規範意識の崩壊と

欠如、利己主義の蔓延・・・、「おかしい」を具体的に挙げれば斯くの如く、きりが無い。

しかし日本が「おかしくなった」のは、マスコミや一部識者がコメントするように果たして最近のことであろうか。いや、決して今（最近）に始まったことではないと私は考える。

伝統的日本人の倫理観や道徳観（以下「伝統的日本人の倫理観等」とする）といえ、（「忠」を尊ぶ）「礼儀正しさを重んずる」「信義を重んずる」など、五世紀ころ日本に伝来した儒学思想と見事に融和した、人が人として守るべき基本的道徳心を中心としたものである。「忠孝」「礼儀」「信義」等といえ、江戸時代に朱子学によって理論化され確立した「武士道」を連想する趣が強いが、これらの倫理観は決して武家社会特有のものではない。「士」を中心にしていたとはいえ「農工商」全ての身分の人々に教え説かれ、広く日本人の心に根ざしたものであった。やがて日本は明治維新により武家政治の終焉を迎え、天皇中心による近代国家として成長していくことになるが、その過程において様々な西洋文化や思想、例えば英米仏における革命の原動力となった自由主義や功利を道徳の基礎とする功利主義、後の自由民権運動の基となった天賦人權論などが次々と日本に流入してきた。しかしそれらの「文明開化」の過程においても、伝統的日本人の倫理観等というものは廃れることはなかったのである。

それではいつから伝統的日本人の倫理観等が崩れ始めたのであろうか。このように歴史を辿ってみると、日本がおかしくなったのはどう考えてもあの日、つまり「昭和二〇年八月一五日」において他はないのである。もっともこの日を境に日本が「急に」おかしくなったわけではない。この日を境に「じわりじわり」とおかしくなり始めたのである。昭和四〇年代の大学紛争や昭和五〇年代から頻発した校内暴力な

どいわゆる「教育の荒廢」がその一例である。伝統的日本人の倫理観等からすれば「師に手を上げる」等ということはとうてい考えられないことである。

ここでは伝統的日本人の倫理観等がどの様なものであったかを「教育ニ関スル勅語」（いわゆる「教育勅語」）を元に考察し、これを現行の教育基本法との比較検討を通じて、その結果日本人の倫理観等が戦後如何に変わったのか考察する。そしてそのような倫理観の変化と、またその変化に密接に関係する「日の丸・君が代問題」に社会の安全を脅かす要因を探り、社会の安全を回復するための方策を考えていくこととする。

第一章 教育勅語に見る伝統的日本人の倫理観

第一節 教育勅語のイメージ

「教育勅語」と聞くと、条件反射的に「皇国史観」「軍国主義」の産物として拒否する人がいる。また拒否するほどではなくとも「戦前の思想や教育＝全て悪」という一種の洗脳教育に犯されどちらかと言えばマイナスのイメージしか抱かない者も少なからず存在することは事実である。教育勅語について、例えば『有斐閣法律学小辞典』では「忠孝を中心とする『国体ノ精華』『皇運扶翼』『遺訓遺風』の遵守などを主な内容とする」と解説されており、また自分が高校生の時使用した日本史の教科書には「忠君愛国が教育の基本であることが強調された」（山川出版社『詳説日本史改訂版』）と解説されている。確かにこのような解説も誤りではないだろうが、教育勅語を一読すれば、このような解説が教育勅語と皇国史観の結びつ

きのみ焦点を当てた不完全な解説であることは容易に理解できる。

それでは、教育勅語とは一体どういう内容のものであったのであろうか。次にその成立過程を含め主な内容を説明する。

第二節 教育勅語の成立過程とその内容

明治維新により、自由主義や功利主義、天賦人權思想などの西洋の文化や思想が流入したことは序論で述べたとおりであるが、それに伴いそれまでの儒教や神道による日本古来の思想や習慣が軽視されるようになった。その結果儒教思想に基づく伝統的道德教育が軽視され、西洋の文化や知識の修得を重視する風潮が学校教育の現場で広まりつつあった。そのような風潮に危機感を感じ、道德教育の根本方針として、明治天皇の名において明治二三年一〇月三〇日に公布されたものが教育勅語である。

その内容を見るに、

- (一) 「父母ニ孝ニ」(父母に孝行をせよ)
- (二) 「兄弟ニ友ニ」(兄弟仲良くせよ)
- (三) 「夫婦相和シ」(夫婦仲良くせよ)
- (四) 「朋友相信ジ」(友人は互いに信頼しあい)
- (五) 「恭儉己ヲ持シ」(自分自身はつつましく)
- (六) 「博愛衆ニ及ボシ」(全ての人に差別なく愛情を注ぎ)
- (七) 「学ヲ修メ業ヲ習ヒ」(学問を修め技術を習い)

(八) 「智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ」(知識や能力を高め人格を磨き)

(九) 「進テ公益ヲ広メ世務ヲ開キ」(自ら進んで社会や公共のために働き)

(一〇) 「常ニ国憲ヲ重ジ国法ニ遵ヒ」(常に憲法を重んじ法律を遵守し)

(一一) 「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ・皇運ヲ扶翼スベシ」(もし国家に一大事が発生した場合は身命を賭して国家の平和と安全のため尽くせ)

という内容が示されている。

このように(一)～(六)までは儒教思想等を中心とした道徳心の涵養を目指し、(七)～(八)は知識や人格の形成、(九)は公共心、(一〇)は遵法精神の大切さを示したものである。この内容を見る限り、その精神は全く非難されるいわれはない。

さて(一一)を見ると、これこそ「忠君愛国」そのものだと非難する声が聞こえてきそうである。確かに当時の日本は天皇を中心とする立憲君主制国家であったことから「天皇＝国家」であること、そしてこれが忠君愛国を謳った文言であることは間違いない。しかし、国民主権となった現在において、国の存立が脅かされるような一大事が発生した場合、身命を賭して国家の平和と安全のため尽くすことが果たして「誤った考え」なのであるか。これについては後の第三章において併せて考察したい。

第二章 教育基本法に見る戦後教育の重点とその「産物」・治安悪化の一要因を探る

第一節 教育基本法の施行とその内容

昭和二二年三月三十一日に現行の「教育基本法」が公布、同日施行され、昭和二三年六月一七日の第二国会における衆議院の「排除」決議と参議院の「失効確認」決議によって明治以来日本の教育の根本方針であった教育勅語が「完全に」排斥されることとなった。そして日本国の教育理念は現行の教育基本法にとつて変えられることになった。

それでは、教育基本法により教育理念はどの様に変わったのであろうか。

一言で言えば「個人」を重んじる内容となったのである。具体的には前文で

(一)「個人の尊厳を重んじ」

そして第一条(教育の目的)では

(二)「人格の完成を目指す」

「真理と正義を愛し」

「個人の価値をたつとび」

「自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して」

と規定されている。一目してわかることは「個人の尊重」が重視されていることである。日本国憲法第一三条において「すべて国民は、個人として尊重される」と規定されている以上、当然の内容であろう。

しかし、それ以外については、例えば「人格の完成」など抽象的表現に終始しておりよくわからない。教育勅語に見られたような具体的な道徳心の涵養や公共心、遵法精神などに関する文言が一切排除されているからである。

第二節 教育基本法に基づく戦後教育の「産物」

それでは「個人の価値と尊厳」を最重要視する教育の結果、日本人はどの様になったのだろうか。最初に断っておくが、私は「個人の価値と尊厳」を尊重することが間違った考え方であると言っているのではない。ただその「行き過ぎ」を問題視しているのである。

戦後教育において「個人の価値と尊厳」「自主性」を尊重するあまり、それまで重視されてきた伝統的な道徳教育がおざなりにされたことは否定できない。「個人の尊重」のもと、また「自由主義」の美名に酔いしれて、常識的な道徳心や公共心、遵法精神を子供のうちからすっかりと植え付けることなく個人を「尊重」した結果、如何に利己的な人間が増えたことか。万引きや自転車泥棒をしても罪悪感のかけらも感じない少年、校則で禁止されているパーマをかけたたり決められた制服を着用しない等の校則違反行為を平然と行い、教師から注意を受ければ「個人の尊重」「自己決定権の侵害だ」等主張し、挙げ句の果ては「禁止する校則が間違っている」とのたまう少年がその見本であろう。そしてこれらの人間に共通する点は「規則を守る」「法律を守る」という基本的な遵法精神が欠如していることである。はたしてこのような少年がそのまま大人になったらどうなるであろうか。そして彼らは自分の子供にどの様な教育をするであろうか。ここに日本の社会治安悪化の一つの要因があると考えられないだろうか。

また戦後教育で「排斥」されたものとして、「愛国心」に関する問題がある。本年四月二八日に政府は教育基本法改正法案を閣議決定し国会に上程し、また本年五月二三日には、民主党が「日本国教育基本法案」を提出したが、その際に「愛国心」の表現や取扱いについて大きな議論を醸したことは記憶に新しいであろう。そもそも「愛国心が是か非かなどということが議論の対象になる国など、世界中、どこにあらうか」（平成一七年一月一日読売新聞社説より引用）という意見の通り、愛国心の是非について議論になるなどという自体おかしな話であるが、戦後の行き過ぎた反戦・平和教育の結果、現在の「日の丸・君が代問題」が生じたのであり、またそこにも社会治安悪化の一要因が存在するのではないだろうかと考える。

それでは次章で日の丸・君が代問題の底に潜む社会治安悪化の要因を検討する。

第三章 「日の丸・君が代問題」に見る社会治安悪化の要因

第一節 教育現場における日の丸・君が代問題

春の卒業式や入学式のシーズンとなると必ず騒がれるのが式典における「日の丸掲揚」と「君が代斉唱」に絡んだ問題である。例えば「国歌斉唱時に起立しない」「国歌斉唱しない、教師がピアノ伴奏を拒否する」「特定イデオロギーに基づく日の丸・君が代反対の授業を行う」等がその一例である。この類の問題については、古くは昭和四〇年二月九日大阪府立阿倍野高等学校で発生した日の丸掲揚の是非を巡る公務執行妨害事件など（それ以前については資料がないため不明）を始め、全国各地の学校教育現場で発生している。

本題に入る前に、ここで「日の丸・君が代」の位置づけについて確認しておきたい。

現在、「日の丸・君が代」は「国旗及び国歌に関する法律」（平成十一年八月一三日施行）により紛れもなく日本国の国旗であり、国歌である。この法律制定以前に「日の丸・君が代は法的根拠を欠くから国旗・国歌ではない」という主張がいわゆる反対派からなされていた。しかし日の丸については明治三年太政官布告第五七号の商船旗の規格に従い、「国家」を象徴する標識として慣習的に用いてきたこと、そして国際的にも「日の丸＝日本の国旗」という認識がされてきたことは間違いない。また君が代についても明治二十一年に「大日本礼式」として各国にその楽譜が送付されており、世界各国も「君が代＝日本の国歌」と認識していたことは間違いない。つまり慣習的にそして国際的にも、日の丸・君が代は日本の国旗であり国歌であった訳であり、法的根拠を欠くから即国旗・国歌でないという非難は妥当でない。

それでは次に一つの事例を基にして、日の丸・君が代問題に潜む社会治安悪化の要因を考察する。

第二節 事例に見る問題点の考察

平成一六年四月に東京都教育委員会は、卒業式において国家斉唱時に起立しなかった等の理由により、一七六人（朝日新聞では一九六人）の教職員に対し、戒告等の懲戒処分を行った。これは、平成一五年一〇月に東京都教育委員会が通達と指針により入学式や卒業式における「国旗の掲揚」「国歌の斉唱、斉唱時の起立」を指示し、またそれに基づく校長の「職務命令」があったにも関わらず、一部の教職員がそれに従わなかったために行われた懲戒処分であった。

この事例を見るに、社会治安悪化の要因に結びつく重要な問題点が二つある。

一つ目の問題点は「国旗や国歌を尊重しない」という点についてである。「国旗・国歌」とはその国を象徴するものである。したがって自国の国旗や国歌を尊重しないということは、言い換えれば、自分の国を尊重しない、大切にしないということとイコールである。これは、ある特定の政治的イデオロギーに基づき、「愛国心」を軍国主義の復権につながるるとして否定し、教育の場から排除した当然の帰結である。何年か前のことであるが、「もし日本が他国から武力攻撃を受けた場合どうするつもりか」という質問を受けた際に「すぐに降参すればいい」と答えた某女性国会議員や、同様の質問に「外国に逃げます」などとなんの恥じらいもなく平然と答えた若者などがいたが、これこそが愛国心否定教育の産物である。自分の国を愛するという気概がなければ、世のため人のためという気持ちを抱くであろうか。自分の国を尊重しない、大切にしない人間に、相手のことを思いやり公共のため尽くす等という公共心が育つはずがないのである。その結果、他人への迷惑を顧みず、自分さえよければいいと考える自己中心的な人間が増えることにつながったのである。

もう一つの問題点は、「法律やルールは守らなければならない」「権利を主張する前に義務を果たさなければならぬ」ことを児童生徒に教える立場にある教師が、自ら法律やルールを守らずにそして義務を果たさずに平然としていることである。

そもそも通達とは「上級の行政機関がその監督権の一環として下級機関の権限行使を指図するために発する命令」であり、通達や職務命令の拘束力について通説では「行政組織内の秩序の保持と行政の一体性確保の見地から、通達等に公定力に類した力を認めるべきであるとし、下級機関の職員は、通達等が違法

であっても、それが重大明白でないかぎり、これに拘束され、服従すべき義務を負うと解している」（原田尚彦『行政法要論 全訂第三版』三九～四〇頁）ものであるから、学校教職員は当然、東京都教育委員会が発した通達に従う義務がある。また地方公務員法により、公務員は「全体の奉仕者として公共の利益のために勤務」（地方公務員法第三〇条）し、法令及び上司の職務上の命令に従う義務（同法第三二条）があり、信用失墜行為の禁止（同法第三三条）が規定されていることから、教職員が校長の職務命令に従う義務があるのは当然である。したがって、これに従わなければ当然懲戒処分などの対象、すなわち法律や命令に従わなければ処罰を受けるのは当然である。

教職員も一人の人間である以上、どの様な思想信条を抱こうとも、それが内心にとどまるものである限り、構わないであろう。しかしその思想信条に固執し、法律や規則を破って良いのであろうか。また教師のこのような有様を見て、児童生徒はどう考えるであらうか。「自分の思想信条に合わない法律や規則は、それ自体が間違っているのだ。だから守る必要がない。個人の思想や信条の方が優先するのだ」と考えるのではないだろうか。実際、教育委員会の通達にも従わず、また校長の職務命令を無視して国歌斉唱時に起立しない教職員の態度は、児童や生徒に身をもって「法律や規則を破れ」と教えていることと同じである。更にこの処分に対して一部の教職員組合が不当だとして抗議表明を行ったが、「注意されたら言い返せ」と言っているようなものである。これでは大人が幾ら「悪いことはしていきませんよ。法律やルールは守らなければ駄目ですよ」などと教えても説得力がなく、注意を受けたらすぐ逆ギレを起こし反抗する輩が増えてきた理由も得心がいく。

このように日の丸・君が代問題一つをとっても、ここに「思いやりの欠如」「公共心の欠如」「遵法精神の欠如」などという社会治安悪化の要因が潜んでいるのである。

第四章 社会の安全を取り戻すために

第一節 基本的道徳の欠如が根本原因

これまで見てきたように、戦後教育における異様なまでの個人の尊重と教育勅語や修身に代表される戦前道徳教育の完全否定が、今日における日本のゆがみを作り出したことは間違いない。戦前の教育においては、幼いころから道徳教育を重視したことは先に述べたとおりであるが、親兄弟や友人などを大切にし、他人への思いやりを忘れないことや、自分自身を厳しく律することなどを教えることすなわち「しつけ」により「個人」と「社会」が結びついた。また国家は国民が安定した社会生活を送るために必要なルール、すなわち法律を定めており、国民がその法律を遵守しまた法律に決められた義務を果たすことによって、国家から権利を保障され保護を受けるものであること、そして国民はその国家が繁栄するよう公益を考えて行動すべきこと、さらにその国家に一大事があれば身を賭して国を守らなければならないことを教えることにより「国家」と「社会」、「国家」と「個人」が結びついた。つまり戦前道徳教育により、「国家」「社会」「個人」がある意味バランス良く結びついていたのであった。

しかし、戦後教育において個人の尊重や自主性に重点を置き、また義務を果たすことよりも権利の主張や行使を重視した結果、「国家」「社会」「個人」の結びつきがもろくなってしまったのである。具体的には

個性や自主性を尊重するという名分の下、「しつけ」をないがしろにして甘やかした結果、多くの「個人主義」者を生み出す結果となってしまった。真の意味における「個人主義」とは李登輝氏がその著書『武士道』「解題」に述べているとおり「個々の人間が相手のことも思いやりながら調和のとれた社会生活を送るということ」であるが、戦後教育で生み出された個人主義は決してそのようなものではなく、「利己主義」「自己中心主義」と全く同義のものである。相手の立場に立って物事を考えることが出来ず、他人の迷惑を顧みない人間が増えた要因、そして自分さえよければ良く他人のために苦労することを馬鹿にする風潮が蔓延した要因、遵法精神が欠如した要因など、つまり倫理観の変化による社会治安悪化の一要因はここにあったのである。戦前文部省が昭和一二年に公刊した「国体の本義」によると「個人の創造性の涵養、個性の開発等を事とする教育は、動もすれば個人に偏し個人の恣意に流れ、延いては自由放任の教育に陥り、我が国教育の本質に適わざるものとなり易い」と個人主義を警戒していたが、ものの見事に的中したと言わざるを得ない。

第二章 伝統的日本人の倫理観等を取り戻す

現在のおかしくなった日本、ゆがんだ日本を元に戻すためにはどのようなようにしたらよいであろうか。

一言で言えば道徳教育の根本的見直ししかない。道徳教育を根本から見直し、伝統的日本人の倫理観等を取り戻すことがその解決の方策である。そもそも人間は易きに流れるものである。確かに個性の尊重も大事なものである。しかし荀子の性悪説ではないが、人間は小さいうちから「しつけ」によって基本的道徳を身につけさせ、正しい方向に導いてやらなければ、必ず誤った方向に流れていくものである。したがっ

て第一章で見たとおり、教育勅語に示された教育の理念は殊^{こと}道徳教育を重視するものである限り、現在においても決して間違っているものではないと考える。

ところが平成一二年五月一七日付朝日新聞の社説「森首相の適格性を疑う」では当時の森喜朗首相の「神の国発言」に絡んで次のように述べている。「その解決（教育改革）の手だてを、皇国史観と密接不可分だった教育勅語に求めるのは、いかにも時代錯誤の考え方だといわざるを得ない」と。だが「時代錯誤の考え方」と考えるところにこそ、問題点、そして解決の糸口が存在するのである。つまり教育勅語や伝統的な道徳教育を否定するその根底には「戦前日本の思想は全て悪いもの、間違っているもの」との偏見が垣間見られることは疑う余地がない。問題解決のためには、今こそ、この偏見を捨てるべきなのである。政治的な特定のイデオロギーに固執することなく、公平中正な目で日本の良き伝統良き文化を受け継いできたものは何かを見つめ直さなければならぬ時期にきているのである。それ故、決して「時代錯誤の考え方」などではないのである。誤解がないよう付言するが、私は必ずしも戦前の思想や道徳を全て正しいものと全面的に肯定しているわけではない。「正しいものは正しい」として受け入れ、それを活かしていくことが大切なのである。

また道徳教育は学校教育だけに任せておくべきものではない。各家庭、そして地域社会全体が一丸となつて行うべきものであると考える。昔は、大人は子供の過ちを見つけたら、たとえよその子供であつても注意したものである。しかし現在の日本ではどうであろうか。例えば電車内や病院の待合室などで、子供が騒ぎ人に迷惑をかけている状況を見ても、ほとんど誰も注意しない。それどころか当の親自身が全く

注意しない。これではいけない。子供は次の世代を担うものであり、その観点からすれば、子供の過ちを注意して正しい方向に導いてやることは、とりもなおさず「公益ヲ広メ」ということにつながるのではないだろうか。

「親の背中を見て子は育つ」の言葉のとおり、親とはそして大人とは子供から尊敬されるものでなければならぬ。そのためにも、今からでも遅くはない、我々大人自身がよき手本となるよう、自らを厳しく律し、道徳を實踐していかねばならない。そうすることによって、崩れかけた日本人の伝統的倫理観を取り戻し、「社会の安全」を取り戻すことが出来るのである。

跋

私が卒業した小学校には、背中に薪を背負い読書しながら歩く二宮金次郎（二宮尊徳）の像があった。昨年他界した私の父（昭和三年生まれ）は、私が小学生のころ、よく二宮金次郎の話をしてくれたものだった。親に孝を尽くし、日中は仕事をして家計を助け、その仕事の合間も夜も勉学に励み、その結果、世のため人のために尽くす立派な人物になったという話である。この話を通じて、父は私に親孝行の尊さ、勤勉や努力の大切さを教えてくれた。そして私が家の手伝いを言いつけられた際に「宿題が忙しい」等と言いつくと厳しく叱られたことを今でも思い出す。

父が尋常小学校時代に「修身」の授業で習った教えは、修身の授業がなくなっても、父からその子である私に受け継がれた。その教えは現代に通じるものであり、私の生き方に与えた影響は大きい。私もこの素晴らしい教えを是非我が子に教え、身につけさせたいと思う。

参考文献

- 『昭和天皇の学ばれた教育勅語』杉浦重剛 著 勉誠出版(株)
- 『別冊ジュリスト 教育判例百選(第三版)』有斐閣
- (本文引用の「国体の本義」については本書二二頁「教育勅語の意義と日本国憲法下における効力」から引用した)
- 『明治天皇とその時代』産経新聞社
- (同書中、大阪大学名誉教授加地伸行先生「教育勅語とは何か」を参考にさせていただきました)
- 『「武士道」解題』李 登輝 著 小学館
- 『行政法要論(全訂第三版)』原田尚彦 著 学陽書房
- 『小六法 平成一八年版』有斐閣
- 『法律学小辞典 第三版』有斐閣
- 『日本史事典 第二版』角川書店
- 『詳説日本史 改訂版』(一九八八年三月五日発行) 山川出版社
- 市販本『新しい歴史教科書(改訂版)』扶桑社
- 朝日新聞
- 産経新聞
- 毎日新聞
- 読売新聞

警察官としてできること

はじめに

社会の安全を守るために私が最も有効だと信じているのが、倫理観、道徳観に訴えかけ、常識を根本から変えてしまうことである。

私は警察官として、特に以前駐在所勤務をした際、このことに最も重点を置いた活動をしてきたので、

警察官（奈良県五條警察署）

渡邊 一浩（29）

まずは具体的な活動内容、それに対する効果について述べた後、改善策を考えていきたい。

第一章 私の駐在所勤務の際の活動内容及び効果

第一節 通報に対する倫理観を変える

「オートバイを盗まれた」「空き巣に入られた」等、犯罪行為が既に行われたあとで通報する方は多いのだが、「少年達が駅の駐輪場でドライバーを持ってバイクに何かしようとしている」「見かけない男の人が自転車で家の前を行ったり来たりしているので職務質問して欲しい」等、犯罪行為に該当するかどうか判断できない不審者の段階において通報してくる方は少ないように私は感じる。

しかし、不審者の段階で住民の方々が通報してくることが、いかに犯罪抑止や検挙にとって重要かを、私は警察官になって初めて理解した。

というのも、住民の方々が警察より地元の現状に詳しいことも多く、また、そこで過ごす時間も長いので、不審者・不審車両を発見する機会が多いからである。なんととっても、被疑者を逮捕する一番のきっかけは住民の方々からの通報なのだ。

ところが、住民の方々からすると、そんなことは知るよしもないし、「犯罪者かどうか分からない時点で警察に通報して、もし犯罪者じゃなかったら警察に悪いし・・・」「こんなことで警察に通報していいんだろうか。忙しいやろうし」

等という理由で通報しづらいとは思う。

だから、私は住民の方々が通報しやすい環境をつくっていった。

まず私は、親しみを持つてもらえるような、協力してもらえような、そんな駐在所だよりを毎月駐在所の管轄内全戸約六〇〇世帯に配布し、先程述べた内容のほか、

(一) 通報の意義

(二) 不審者の段階で通報することの大切さ

(三) 不審者の段階で通報しなかったらどうなるか

(四) 不審者・不審車両とは（具体的説明）

(五) よく発生する犯罪及び場所

等について詳しく説明した。

回覧板ではなく、全戸配布にこだわったのは、回覧板だとあまりゆっくり自分の手元に置いておけないので、せっかく一生懸命作成しても、住民の方々にしっかりと読んでもらえないと思ったからだ。何度も繰り返し読んでもらい、いざという時のために保存しておいて欲しかった。

その地域はこれまで駐在所だよりを配られたことがなかったらしく、

「ためになる」「親しみもてる」「今の駐在さんが、いったいどういう考えを持っているのかが分かる」等、沢山の人の言われた。

駐在所だよりを熟読して下さっている人と、そうでない人とは、態度が全然違う。だから、どの人が協

力的な人で、どの人が協力的でないかもすぐに分かる。駐在所だよりを読んでいる方との会話は全く尽きない。話したいことがたくさんある。相手からしても、話しかけやすいと思う。

また、地域の会合出席時や巡回連絡時においても、通報に関して説明し、

「治安は警察だけが守るものではなくて、警察と住民の方々が一緒になって守っていくものなのです。何かあればすぐに通報して下さい」と熱弁し、協力をお願いした。

勿論、パトロールも積極的に言い、毎朝できる限り学校の通学路に立つことで、自分の姿を見せることも意識した。

そうやって、「何かちょっとしたことでも通報しよう」「不審者の段階で警察に通報していいんだ」というように、住民の方々の意識を変えていった。

赴任してから一年もたたないうちに、効果は抜群に上がった。

どんどん役に立つ通報が増え、犯罪発生件数が年間約二〇件そこそこの地域であるのにもかかわらず、三面記事に載るほどの広域窃盗被疑者三名を大捕り物のすえ現行犯逮捕できたのはじめ、車上ねらい被疑者、建造物侵入被疑者、銃刀法違反被疑者などなど、これでもかというくらい逮捕することができた。

住民の方々のなんとか犯人を捕まえて欲しいという思い、こんなにしてくれるのかと驚くくらいしてもらった住民の方々からのご協力、私達警察官の素早い立ち上がりと組織的な行動……。これらが重なり合ったからこそ、シンクロシティと呼ばれる最高の偶然が当たり前のように起こったのだと思う。

犯人を逮捕する一番のきっかけは、住民の方々からの通報である。それなのに、通報の正しい知識を持

ちあわせている人が少ない。犯罪を減らしていくにはどうすればいいか。答えは明白だ。

正しい倫理観を持つためには、正しい知識が必要である。

なのに、そこに力を注いでいる警察官は、ほとんどいない。

第二節 交通違反取り締まりによって倫理観を変えていく

数々の被疑者逮捕、毎月の駐在所日より発行……。一年かけて、住民の方々とのよりよい関係もできてきた。

そこで、駐在所の管轄内でシートベルト等の切符を切る決意をした。

というのも、シートベルトは間違いなく自分の命を守るためにするもの。自分の命さえ大切に思えないような人が、他人に対して思いやりを持てるはずがない。そんな人が多くては、よりよい社会になんて絶対になるはずがないと思ったからだ。

しかしながら、「命を大切にしましょう」「他人に対して思いやりを持ちましょう」とか、そういうのは倫理上の話であって、命を大切にしなかったからといって、他人に対して思いやりを持たないからといって、法律に違反している訳ではないし、普通は強制力を行使することはできない。

そのような状況の中、命の大切さを訴えるような手法で、シートベルトを取り締まったら、少なからず命を大切に思ってもらえるきっかけを作れるのではないかと考えたのである。

その当時、残念ながら私の管轄する地域のシートベルト着用率はおせじにもいいとは言えず、ヘルメットをかぶらずに原付バイクに乗っている人も沢山いた。

そんな地域でいきなり切符を切りだしても、反感を買い、嫌われるだけで、何の効果も上がらないだろう、と考え、今までにないような手法で、三つの段階に分けて下準備をしてから、実行に移した。

まず最初の段階では、「住民の方々に親しみを持ってもらおう」とことに力を注いだ。「信頼関係」という土台なしには、どんな改革にもついてきてはくれないだろう、と思ったからだ。これに関しては、一年間かけて実行済みである。

そのような中、第二段階として、「シートベルトの大切さ」「命のかけがえのなさ」について、自分の主張を掲載した駐在所だよりを配布した。自分の考えをきちんと伝えておくことが大切だ、と考えたからである。

様々な警察の情報を特集してきたこれまでの駐在所だよりと違い、自分の主張を全面的に掲載した駐在所だよりは、それだけでもインパクトがあったように思う。

最終段階として、「取締りの予告」そして「噂を流すこと」に努めた。

まず、駐在所だよりで「五月一五日から、切符を切ります」と宣言し、同時に会う人会う人に片っ端から、そして会合などでも

「私も、切符を切りたくて切るわけではありません。

みなさんに命を大切にして欲しいから、事故に遭って悲しい思いをして欲しくないから、だからこそ切符を切るのです。

ですから、もしよかったら周りの人にも、

『駐在さん、切符切るらしいで』

『でもそれは命を大切にしたいかららしいで』
と言つて下さるとありがたいんです。

・・・でも、それでもやっぱり結果的には切符を切ってしまうことになると思います。

そうすれば、今度は『駐在さん、ホンマに切符切つてるらしいで』と言つて欲しいんです」等とお願いした。

そういう噂が広まることで、シートベルトに対する意識が地域ぐるみで高まり、取り締まりへの理解も得られ、少ない切符で最大の効果が上がると思つてのことである。

以上のような段階を経て取り締まりを実行したところ、

「駐在さん、駐在所だより見たよ。みんな結構シートベルトするようになってるよ。頑張りや」

「今までちよつとそこまで畑仕事に行くときなんかは正直なところシートベルトをしていなかったのですが、事故をなめている自分に気づき、シートベルトをするようになりました」

「どんどん取り締まって下さいね」

等の声を沢山聞くことができるようになった。切符を切つて嫌われるどころか、

「地域のことを本当に考えてくれていている駐在さんだ」と多くの方が肯定的にとらえて下さっていることを実感できた。

勿論、すべての人が私に賛同してくれたわけではない。でも、だからといってやめるべきなのだろうか。

私はそうは思わない。私は切符を切るのをやめなかった。

切符を切り始めて半年後、駐在所だよりで「軽微な犯罪を取り締まると治安がよくなる？」と題し、「破れ窓理論」について述べた。

「一九九四年に、アメリカ有数の犯罪多発都市であったニューヨークで、警察官の街頭パトロールを強化したほか、落書き・未成年者の喫煙・万引き等軽微な犯罪を徹底的に取り締まったところ、五年後には殺人や強盗といった凶悪事件が半分以下に減少しました。

これは『破れ窓理論』という犯罪学の理論を応用した例で、日本でも二〇〇一年に札幌中央署が採用し、北海道最大の歓楽街であるススキノで違法駐車に対する徹底的な取り締まりを実施したところ、路上駐車が以前に比べて三分の一以下になり、あわせて地域ボランティアとの協力による街頭パトロールなどの強化により、二年間で犯罪を一五%減少させることに成功しました。

『破れ窓理論』によると、治安悪化は

- (一) 軽微な犯罪が野放しにされる
- (二) 犯罪が起こりやすい環境になる
- (三) 住民の秩序がみだれ、治安維持に協力しなくなる
(マナー違反・ルール違反は当たり前)
- (四) さらに犯罪が起こりやすい環境になる
- (五) 凶悪犯罪を含めた犯罪が多発するようになる

という経過をたどるので、『(二) 犯罪が起こりやすい環境になる』のきつかけである軽微な犯罪を徹底的に取り締まることで、凶悪犯罪を含めた犯罪を抑止できると結論づけています。

つまり、シートベルトの取り締まりは、治安を良くすることにつながっているのです」

シートベルトをする人は、間違いなく増えた。

命の大切さに気づいた人も、間違いなく増えた。理論を実践してゆけば、倫理観は変えていける。

第三節 青少年の倫理観をはぐくむ

人生の目標を持っている人は少ない。でもそれは、人生の目標を持っている大人がまわりにいないからだと私は思う。倫理観も同じことだ。

正しい倫理観を持って、しかもそれを実行に移している人がまわりにいないから、正しい倫理観を持っていないのだ。

私には、警察官として、青少年に、みんなに言いたいことが山ほどあった。

そこで、「命のかけがえのなさ」「思いやり」「自分に負けない勇氣」をテーマにした、青少年向けの駐在所だよりを作成配布した。

警察官役の「コップ君」、そして青少年役の「いっ子」「ワリオ」「ノリッチ」のキャラクターをつくり、そのキャラクターに会話等をさせた。そうすることによって、特集できる内容の幅を広くできた。

また、一人一人の性格も細かく設定した。読者に「俺はノリッチに性格、似ているところがあるなあ」等と共感させることで、つつい読んでもしまうように引きこんでいく。

そして、どうしてそういう性格になったかという理由まで、毎号一人ずつ「キャラクター凶鑑」に載せた。「アイツはイヤな性格やけど、もしかして家庭でうまくいっていないのかなあ」等と、相手の奥底まで考えてあげられる大人になって欲しいから。そして、青少年がそういう性格になったのには、親の影響等も関係していますよ、という親に対するメッセージの意味合いもあった。

青少年にも、大人にも、好評だった。

そのような中、管轄内にある小学校の四年生四六名に、警察官の仕事について一時間ほど授業をする機会に恵まれた。担任の先生方と事前に何度も打ち合わせをし、当日は子供達による司会進行のもと、警察官の採用試験をやってみようということになり、例えば、目をつぶって両手を水平に上げ、片足立ちで三〇秒間立っていられるかどうか。また、腕立て伏せが何回できるか、といった試験をした。

これらの試験は、その人の能力を試すというよりも、目標に向かって努力できる人かどうかを試す試験であることを伝えた。

この他、子供達が事前に、保護者の方々に「シートベルトはしていますか？」等、交通ルールに関する意識調査を実施し、それを集計した結果やそれに対する意見発表、或いは、子供達が思い思いに作った全く新しい道路標識の発表、自分達の住んでいる町のどこが危険な場所かを書き込んだ「危険マップの発表」をしてもらった。

次に、先生にコップを触ってもらい、「先生の触ったコップはどっちだ？」クイズをやってみた。これは、指紋を採取することで分かるということを教えた。

最後に、「質問コーナー」というのがあり、子供達から、私が「警察官になったきつかけ」「警察官になって一番嬉しかったこと」等の質問があった。

一方、私の方からも、事前に子供達にアンケートに答えてもらっており、その内容は、

「大人になったとき、どういう世の中になっていて欲しい？」

そのためにあなたは今、何をしてる？

大人になったら何をする？」

というもので、これに対する答えは、様々だった。

そこで私は次のように言った。

「答えは一つではありません。こうやって考えることが始まりです。これからイヤなことや納得いかないことがあっても、諦めたり、文句を言うだけでは何も変わりません。

私は、警察官という答えを選びました。包丁を持った男と向き合ったこともあったし、犯人の車にひかれそうになったこともありました。これからもあると思います。逃げたくなくなることもあると思います。でも、リスクを伴ってでも、自分勝手にまわりに迷惑をかける人を許したくないから、自分のことが好きでいたいから、自分に正直に生きたいから、私は世の中を良くできるまで立ち向かっていきます！」

この国は、夢を見つるきつかけが少なすぎる。あまりにも見て見ぬふりをする人が多すぎる。

でも、警察官、看護師、ボランティア団体……。そういう方々がこんな風に、もっと自分の背中を、これからの未来を担っていく青少年に見せていくことで、倫理観は、世の中は変わっていくと私は信じている。

第二章 倫理観を変えていくためにはどうすればいいか

私が第一章で述べた活動には、全て駐在所日より、つまり「広報」が密接なつながりを持っている。

いかに素晴らしいことをしていても、「社会の倫理観までも変えてゆく」という視点で考えてゆくと、「広報」は欠かせない。

駐在所日よりを配布できたからこそ、私の駐在所の管轄内において倫理観まで変えてゆくことができたのである。

これが私の駐在所の管轄内だけではなく、県内全戸に配布できていたら、はたまた全国に配布できていたら…、もっと違う結果になっていたはずだ。

「倫理観、道徳観に訴えかけ、常識を根本から変えてしまうことで、社会の安全を守ろう」と考えている警察官は少ないように思う。

でも、少なくとも、実現可能だ。

自分の危険を冒してでも正義感を貫こうとしている警察官が、さらに世の中を良くするために、自分の体験談や倫理観、そして様々な情報を出版し、訴えていくことによって、絶対に多くの人の倫理観を変えてゆける、と私は確信している。

懸賞論文「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか」の応募要項

1 テーマ

「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」とする。なお、テーマ設定の趣旨は、別記のとおりであるが、応募に当たっては、論点を個別的な問題に絞り込み、テーマをそれに応じたものに適宜変更することとして差支えない。

2 応募資格

特に限定しない。

3 応募規定

- (1) 応募論文は、A4判四〇〇字詰め原稿用紙にワープロで打ったもの、又は黒インク、黒ボールペンで書いたもの及びA4判にワープロ印刷（三五字×三〇行、一二ポイント）したものに限り、
- (2) 原稿枚数は、原稿用紙に換算二〇枚以上三〇枚以下（統計、図、表は別）とし、必ず目次及び二、三枚程度の要約を付ける。
- (3) 応募論文の表紙には、次の事項を漏れなく明記する。
 - 住所（フリガナ、郵便番号、電話番号、FAX番号）
 - 氏名（フリガナ）
 - 年齢
 - 性別
 - 職業等（勤務先、役職名又は学校名、学部、学年等）
 - 論文のテーマ（個別的な論点に応じたテーマで可）
- (4) 応募論文は、未発表のものに限る。
- (5) 他の著書、論文を引用した場合は、その出典を明記する。
- (6) 応募論文の著作権は、財団法人公共政策調査会に帰属し、応募論文は、返却しない。

4 締切り

平成一八年九月一五日（金）（当日消印有効）

5 応募及び問合せ先

〒100-0931 東京都千代田区平河町二一八一ー一〇 平河町宮川ビル内

財団法人公共政策調査会

電話 〇三(三二六五)六二〇一 FAX 〇三(三二六五)六二〇六

6 発表及び表彰

- (1) 平成一八年一二月中の読売新聞に入選者名を発表し、併せて入選者には直接通知する。また、最優秀論文については、平成一九年一月中の読売新聞にその要旨を掲載する。
 - (2) 原則として、最優秀賞一編、優秀賞二編、佳作数編を決定し、入選者には、次により賞状及び副賞を贈呈する。
 - ・最優秀賞 一編 賞状及び副賞（二〇万円）
 - ・優秀賞 二編 賞状及び副賞（一〇万円）
 - ・佳作 数編 賞状及び副賞（五万円）
- なお、優秀作品には読売新聞社からも、読売新聞社賞が贈呈される。
- (3) 平成一九年一月中に授賞式を行う。

7 選考委員

- ・小野 正博（警察大学校警察政策研究センター所長）
- ・熊谷 一雄（株式会社日立製作所特命顧問）
- ・櫻井 敬子（学習院大学法学部教授）
- ・五阿弥宏安（読売新聞東京本社編集局社会部長）
- ・竹花 豊（警察庁生活安全局長）
- ・成田 頼明（横浜国立大学名誉教授）
- ・前田 雅英（首都大学東京都市教養学部学部長）

・山田 英雄（財団法人公共政策調査会理事長）

（五十音順、敬称略）

8 共 催

警察大学校警察政策研究センター

9 後 援

警察庁、読売新聞社

10 協 賛

財団法人社会安全研究財団

「別記」 テーマ設定の趣旨

多くの人々が最近の日本人のモラル崩壊現象を指摘している。これは成人による行動のみならず、子どもたちの規範意識の欠如にも及び、社会の安全を脅かすレベルに達していると言っても過言ではなからう。

動機不明な幼小児の殺害、企業拡大のためのなりふり構わぬ活動、技術の進展を逆手に取った詐欺・偽造事案、専門家等による功績・利益欲しさゆえのデータ捏造などが頻発しているほか、日常生活においても他人の迷惑を顧みない行動が多く見られるようになっていく。

こういったいわば「人の道」を外した行動に走る要因はどこにあるのか。江戸時代末期から明治初期に来日した外国人の記録には、日本人は庶民のレベルでも人を騙すような行動を慎み、極めて洗練された民族であるとして記されている。

いつから、何が原因で、現在のような社会に変わってきたのか。また、これを改める方策はあるのか。

この懸賞論文は、社会の安全と密接な関係があると思われる「日本人の倫理観」あるいは「道徳観」について、何が大きな要素になっているのか、また、それらの問題を改善するにはどのような策が考えられるのかについて、さまざまな切り口から論じた具体的な提言を募るものである。

懸賞論文「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか」応募者一覧

(氏名・職業・年齢・テーマ)

- 青木 松治(無職・73) 「二十一世紀・内憂外患とスーパー110番」
- 青木 優子(警察職員・42) 「守るべきもの」
- 青柳 毅(無職・68) 「日本社会の安全性と日本人の倫理観に対する提言」
- 朝比奈伊知郎(無職・35) 「社会の安全と日本人の倫理」
- 安達 俊治(会社員・57) 「町のおまわりさん」
- 雨宮 恵(アルバイト・27) 「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」
- 新井 剛(警察官・33) 「社会の安全と日本人の倫理をいかに考えるか」
 ↳性善説型社会から性悪説型社会への転換についての「考察」
- 井口 重夫(警察官・55) 「社会の安全と日本人の倫理」
- 池澤 清美(地方公務員・53) 「二十一世紀の日本」
- 石岡 資子(警察官・29) 「現代社会における倫理の低下とその原因」
- 伊藤 鈴香(警察官・38) 「成熟した大人へ〜コミュニケーションのすすめ」
- 岩井 良太(警察官・29) 「社会の安全と日本人の倫理観をいかに考えるか」
- 岩下 一幸(無職・67) 「社会の安全と日本人の倫理『これからの日本を考える』」
- 遠坂 和重(警察官・26) 「現代のモラルについて考える」
- 遠藤 健司(損保代理店業・49) 「社会と道徳の考察」
- 大平 直也(警察官・31) 「『学校教育と一体となった警察活動について』」

- 岡村志嘉子（公務員・46）
 岡村 直樹（文筆業・32）
 岡村 理江（ピアノ講師・34）
 桶谷 春子（主婦・43）
 織田美奈子（主婦・75）
 織田 礼二（警察官・44）
 掛川 順司（地方公務員・27）
 加藤 征男（無職・64）
 神馬せつを（自由業・58）
 菊地 進（薬種商の店員・57）
 木村 就一（警察官・33）
 木村 修介（警察官・27）
 工藤 克也（警察官・48）
 國方 卓（警察官・39）
 門田 幸治（警察官・55）
 栗山 隆治（自営業・42）
 見野 則幸（警察官）
 剣持美保子（警察官・25）

～日本におけるスクール・41リエゾン制度の導入について～

「社会の安全と日本人の倫理」～国の倫理と個人の倫理の向上を促すために～

「金にならないことに価値を」

「社会の安全と日本人の倫理」

「現代日本人の思考の原点とは」

「老年として言いたい」

「映画『ALWAYS 三丁目の夕日』から昭和時代に学ぶ道徳観」

「環境の変化に影響されない日本人の倫理観の構築を考える」

「少年犯罪の根幹をただす」

「移民の花嫁の体験から学ぶ多文化の共生」

「安全と倫理」関係性の復興」

「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」

「何故人は罪を犯すのか」自転車の傘差し運転にみる日本人の倫理観低下の背景」

「社会の安全と日本人の倫理」

「『感動する心』が明るい社会を造る」

「社会の安全と日本人の倫理」

「非難の国から感謝の国へ」

「『オラが街の安全』と『オラが街の倫理』

～『オラが街・41守り隊』の発隊とその成果～

「社会の安全と日本人の倫理観」

- 小西 正広 (事務吏員・37) 「社会の安全と日本人の倫理をしつけの面から考える」
- 小林 ルミ (警察官・26) 「現代版『むら』社会の実現」
- 近藤 正隆 (警察官・27) 「少年問題から考える日本人の倫理と社会の安全」
- 斎藤 重政 (警察官・51) 「地域コミュニケーションによる犯罪抑止施策と警察活動」
- 斉藤 芳正 (団体職員・58) 「昔に帰れ！」
- 酒井 雅彦 (国家公務員・52) 「『日本の儒教的倫理観の再発掘』 ～明治人の気骨から学ぶもの～」
- 佐藤 富二 (警察官・51) 「社会の安全と日本人の倫理」
- 佐藤 寿一 (自営業・52) 「現代社会とココロの犯罪～繁栄もまた犯罪の温床となる～」
- 鮫島 秀継 (無職・51) 「人間復興を指して」
- 篠田 耕治 (警察官・48) 「人間形成の原点は小学校教育に有り」
- 柴田 憲吾 (地方公務員・34) 「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか」
- 清水 晃吉 (無職・73) 「社会の安全と日本人の倫理をいかに考えるか」
- 下山 二男 (無職・73) 「安全な社会を構築するための日本人のモラル」
- 白石 登 (無職・76) 「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか」
- 菅原 智幸 (警察官・26) 「『社会の安全と日本人の倫理』をいかに考えるか」
- 杉原 善文 (36) 「何を、何故評価するのかしないのか」
- 杉本 涼 (警察官・26) 「『社会の安全と日本人の倫理観』をいかに考えるか」
- 鈴木 敬三 (公務員・26) 「社会の安全と日本人の倫理をいかに考えるか」
- 鈴木富貴子 (無職・55) 「倫理・41道徳観を正し、犯罪を減らす方法」
- 清宮 正人 (地方公務員・50) 「社会の安全と日本人の倫理」

- 関根 茂（無職・61）
「生き合いの事実」
- 関矢 孝治（警察官・58）
「日本人の倫理観の原点」
- 高野 敦（警察官・31）
「犯罪抑止社会への提言」
- 高野 敏寛（無職・69）
「社会の安全と日本人の倫理をいかに考えるか」
- 高橋 保美（警察官・28）
「社会の安全と日本の倫理を教育面から考える」
- 高橋 涉（会社員・57）
「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」
- 高山 秀幸（通訳翻訳官・44）
「岐路に立つ日本社会とあるべき倫理」二つの事案をめぐって」
- 滝石 裕二（高等学校教諭・53）
「日本社会の基礎となる倫理性をいかに形づくるか」
- 館野 典之（警察官・26）
「社会の安全と日本の倫理観について」
- 田中 康嗣（専門学校講師・53）
「『地域ぐるみ』がキーワード！」
- 玉浦逸世夫（無職・72）
「大学入試改革と教員採用に関する要望」
- 田村 禎宏（警察官・29）
「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」
- 徳澤 宏行（警察官・35）
「教育による犯罪抑止について」
- 登島 隆之（大学生・24）
「人権」すべてを腐敗させる魔語」
- 栃沢巳知夫（無職・77）
「少年事件の背景と倫理観の変化について」
- 富田 萬（自由業・63）
「安全を脅かすものに対して」
- 中川 祐一（塾講師・48）
「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」教育的観点からの「考察」
- 中村 雅也（自営業・64）
「哲学を基盤に」
- 中山 和正（地方公務員・56）
「多臓器不全的社会の再建についての「考察」
- 中山 雄司（警察官・25）
「社会の安全と日本人の倫理観について」

- 奈良 明 (横浜市交通安全協会職員・68) 「私は日本人である」
- 布川 進 (警察官・27) 「モラルは子ども時代に身につける」
- 野田 順也 (警察官・26) 「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」
- 橋本 和也 (無職・51) 「安全なんか要らない」〜安全と倫理をいかに考えるか〜
- 橋本 政喜 (警察官・51) 「社会の安全と日本人の倫理」〜日本人としての心〜
- 林 耕司 (無職・75) 「心の教育」で「倫理観」向上「治安」に貢献
- 星野 祐一 (警察官・31) 「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」
- 細田 重剛 (無職・72) 「ひとりひとりを大切にする社会」
- 真砂 威 (警察官・59) 「我が国の『かたち』をとりもどそう〜武道のすすめ〜
- 松田 修平 (放送大学生・49) 「形容詞で正す子どもの躰」
- 水上 正 (無職・73) 「日本的ルネッサンスを目ざして」
- 溝谷 和美 (警察官・34) 「動物虐待を追及すること」
- 宮川 和久 (警察官・26) 「歴史に見る日本人の倫理観」
- 三輪 邦夫 (警察官・55) 「社会の安全と日本人の倫理」
- 向田 絵里 (大学生・20) 「日本人の倫理観〜心の豊かさはどこへ〜」
- 最上 信宏 (警察官・26) 「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」
- 森公 明 「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」
- 柳澤 秀明 (公務員・53) 「相互関係性無考慮の現代自然科学思想がモラルを崩壊させる
- 山田 一郎 (無職・58) 「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」
- 〜先の戦争で日本が失ったもの〜

山田 嘉英（警察官・47）

「社会の安全と日本人の倫理」

山梨 貢（俳優・49）

「日本人の特異な才能が混迷を破る」

山本 功（警察官・41）

「社会の安全と日本人の道徳・41倫理をいかに考えるか」

湯口 澄一（無職・78）

「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」

横井 昭子（主婦・49）

「安全と倫理」

横倉 友裕（警察官・36）

「伝統的日本人の倫理観」を取り戻す」

横田 郁子（主婦・69）

「社会の安全と日本人の倫理」をいかに考えるか」

吉末 豊和（警察官・59）

「人倫を止揚するために」

渡邊 一浩（警察官・29）

「警察官としてできること」

渡邊 千春（無職・32）

「食が倫理を形成する〜現代型栄養失調の問題とその解決策〜」

（職業・年齢等は応募時のもの）

懸賞論文論文集

『社会の安全と日本人の倫理』

をいかに考えるか

平成一九年三月発行

発行 財団法人公共政策調査会

〒一〇二一〇〇九三

東京都千代田区平河町

二丁目八番一〇号

電話 〇三―三三六五―六二〇一

FAX 〇三―三三六五―六二〇六

印刷 中和印刷株式会社

〒一〇四一〇〇四一

東京都中央区入船

二丁目二番一四号

この懸賞論文募集事業及び、論文集は、
財団法人社会安全研究財団の助成により実
施し、製作されたものです。